

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Language survey in Turuoka city, Yamagata pref. :
After 20 years from the preceding survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001251

国立国語研究所報告 52

地域社会の言語生活

— 鶴岡における20年前との比較 —

国立国語研究所

1974

国立国語研究所報告 52

地域社会の言語生活

— 鶴岡における20年前との比較 —

国立国語研究所

1974

は し が き

国立国語研究所では、昭和25年度に山形県鶴岡市および附近の農村において言語生活の実態調査を試み、その結果を、国立国語研究所報告5『地域社会の言語生活——鶴岡における実態調査——』（昭和28年株式会社秀英出版刊）として発表した。

この調査は今から20年以上前のことであり、その後の社会の変化は非常に大きかったので、言語生活にもさまざまな変容があったと思われる。そこで、今回、再び鶴岡市において調査することを計画した。幸いに課題名「社会変化と言語生活の変容」（代表者岩淵悦太郎）として文部省科学研究費試験研究費の交付を受けることが出来、昭和46年度に鶴岡市において新しい調査を実施した。調査の主眼点を地域社会における方言の共通語化にしぼり、両回の調査の結果を比較対照したものがこの報告書である。

今回の調査も前回と同様、多くの所員が参加したほか、統計数理研究所はじめ東京大学新聞研究所その他の多数の参加を得て、共同で行った。この報告書は、参加者中の、国立国語研究所第一研究部長 野元菊雄、同地方言語研究室 江川清が大部分を執筆し、一部の執筆に東京大学新聞研究所助教授 鈴木裕久氏をわずらわした。

この種の調査は言うまでもなく、現地の方々の熱意ある協力がなければ完成しないものである。前回同様、今回も鶴岡市、同教育委員会の関係者の方々の非常なご協力をいただいた。また、被調査者の方々は、その中には20年を隔てて2回の調査にご協力願った方々もおられたが、いずれもお忙しいところ快く調査に応じて下さった。これらの厚意に支えられたこの調査の完結に当たり、一々氏名をあげることはしないが、関係各位に謹んでお礼を申し上げる。

昭和49年3月

国立国語研究所長 岩 淵 悦 太 郎

目 次

第I章 調査の目的と実施	21
1. 目的と意義	23
2. 方法	24
3. 調査の組織	26
4. 調査票	27
4.1 決定した調査票	27
4.2 調査票の説明	37
4.3 前回調査票との比較	42
5. 被調査者	44
5.1 サンプリング	44
5.2 調査地域	45
6. 調査の実施	47
6.1 現地調査の進行	47
6.2 本調査の実施	48
6.3 得られた被調査者	54
7. 調査不能者	54
7.1 継続調査の調査不能者	55
7.2 パネル調査の調査不能者	58
第II章 前回調査の概要	59
1. 目的	61
2. 実施	62
3. 結果の概要	63
3.1 個々の方言的特徴について	63
3.2 新語	67
3.3 共通語化の要因	68
第III章 継続調査の概要	71
1. 意義	73
2. 方法	74

3.	結果の概要	77
3.1	個々の項目ごとの結果	77
3.2	合計得点による分析	81
3.3	パターン分類による分析	84
第IV章	パネル研究の概要	89
1.	意義	91
2.	方法	91
3.	調査の実施と被調査者	92
3.1	調査の実施	92
3.2	被調査者	92
4.	結果の概要	95
4.1	今回調査の結果から見たパネル調査の被調査者	95
4.2	個々の項目の比較	95
4.3	項目ごとに合計した結果	97
4.4	各項目の総点による比較	98
4.5	個人ごとの追跡調査の結果	99
第V章	社会構造の変化	101
1.	変化の捉え方	103
2.	変化の記述	105
2.1	人口の変化	105
2.2	人口構成の変化	105
2.3	転入・転出	107
2.4	職業	108
2.5	教育(学歴)	110
2.6	コミュニケーション, 交通	110
第VI章	継続調査の結果1——個々の項目群	113
1.	この章以降の観点	115
2.	この章の構成	116
3.	音声	116
3.1	音声の差異と共通語化の程度	117

3.2	調査項目による共通語化の差異	120
3.3	性による共通語化の差異	123
3.4	年齢による共通語化の差異	123
3.5	学歴による共通語化の差異	127
3.6	その他	128
4.	アクセント	129
4.1	調査項目による共通語化の差異	129
4.2	性による共通語化の差異	130
4.3	年齢による共通語化の差異	130
4.4	学歴による共通語化の差異	132
5.	文法・語彙項目の整理方法とこの章での扱い	133
5.1	データ整理の方法	133
5.2	文法・語彙項目の問題点	133
6.	文法	135
6.1	動詞の活用に関するもの	136
6.2	人称代名詞に関するもの	138
6.3	格助詞に関するもの	139
6.4	接続助詞などに関するもの	140
6.5	助動詞に関するもの	142
6.6	敬語法に関するもの	143
7.	語彙	146
7.1	「いつも」の言い方	146
7.2	「るすばん」の言い方	147
7.3	「いらっしゃい」の言い方	147
7.4	「もう」の言い方	149
7.5	「おどろいた・びっくりした」の言い方	150
7.6	「はずかしい」の言い方	151
7.7	「コーデ」の使用	152
7.8	「あげる・やる」の言い方	153
7.9	「つらら」の言い方	154

8. 新語	155
9. その他の言語的項目	156
9.1 鶴岡弁に対する意見	157
9.2 鶴岡弁・東京弁に対するイメージ	158
9.3 場面によることばの使い分け	160
9.4 道きき	160
第七章 継続調査の結果2——合計点による分析	163
1. この章の構成	165
2. 両度の調査における音声得点の差異	165
2.1 音声得点の分布	165
2.2 性・年齢別の結果	166
2.3 同一年齢集団の20年間の共通語化の程度	168
2.4 学歴別の結果	169
3. 両度の調査におけるアクセント得点の差異	170
3.1 アクセント得点の分布	170
3.2 性・年齢別の結果	171
3.3 同一年齢集団の20年間の共通語化の程度	171
3.4 学歴別の結果	172
4. 音声・アクセントの共通語化に影響する要因の検討	172
4.1 言語形成期の居住地と両親・配偶者の出身地	172
4.2 職業別の結果	174
4.3 興味や関心の方向	175
4.4 鶴岡での生活や鶴岡弁に対する意見	176
4.5 行動空間の広さ	176
4.6 テレビへの接触	177
4.7 経済階層	178
4.8 その他	178
5. 各要因の比較	180
5.1 音声に及ぼす要因の比較	180
5.2 アクセントに及ぼす要因の比較	181

6.	文法と語彙に及ぼす要因	182
6.1	文法に及ぼす要因の比較	182
6.2	語彙に及ぼす要因の比較	184
第Ⅷ章	継続調査の結果3——パターン分類	185
1.	この章の立場	187
2.	この章の構成	189
3.	場面によることばの使い分け	189
3.1	パターン分類による結果	190
3.2	4場面を組みにした場合のパターン分類の結果	191
3.3	POSAによる共通語化のタイプ分け	193
3.4	各タイプの分析	196
4.	アクセント	199
4.1	今回調査のパターン分類による結果	199
4.2	前回調査のパターン分類による結果	202
4.3	5項目を組みにした場合のパターン分類の結果	204
4.4	POSAによる共通語化のタイプ分け	208
4.5	各タイプの分析	210
5.	音 声	217
5.1	両度の調査のパターン分類の第1軸について	221
5.2	今回調査のパターン分類による結果	221
5.3	前回調査のパターン分類による結果	224
5.4	POSAによる共通語化のタイプ分け	227
5.5	各タイプの分析	232
第Ⅸ章	パネル調査の結果	239
1.	今回調査から見たパネル調査の被調査者	241
2.	個々の項目	242
2.1	音声の項目	243
2.2	アクセントの項目	250
2.3	文法の項目	252
2.4	語彙の項目	255

3. 項目ごとに合計した結果	257
3.1 音 声	257
3.2 アクセント	259
3.3 文 法	260
3.4 語 彙	262
3.5 文法+語彙	263
4. 各項目の総点による比較	265
4.1 音 声	265
4.2 アクセント	269
4.3 文 法	271
5. 個人ごとの追跡調査	274
5.1 音 声	274
5.2 アクセント	275
5.3 文 法	276
5.4 語 彙	277
5.5 個人により一定の傾向があるか	278
5.6 調査員について	279
第X章 まとめ	283
1. 調査の結論	285
2. 調査への反省	289
3. 将来の調査へ	290
付 表	295
刺 激 図	313
索 引	319

図 表 目 次

Table I	1	音声調査項目の類別	39
	2	サンプリングとその結果	45
	3	町別被調査者・調査者	46
	4	調査の実施状況	48
	5	サンプル差替表	51
	6	調査員別調査進行表	51
	7	被調査者の性・年齢別調査所要時間	52
	8	性・年齢別調査への態度	53
	9	性・年齢別被調査者	54
	10	性別調査不能者（継続調査）	55
	11	調査日別調査不能者数	55
	12	調査不能者の年齢別不能理由	56
	13	調査員別調査不能理由	56
	14	調査員別・性・年齢別調査不能者数	57
	15	性別調査不能理由	57
	16	性・年齢・理由別調査不能者（パネル調査）	58
Table II	1	前回調査のアクセント得点	65
	2	「はい」の2問間の相関表	66
Table IV	1	パネル調査の実施	92
	2	被調査者の性・年齢別構成（パネル調査）	93
	3	被調査者の学歴の性・年齢別構成（パネル調査）	93
	4	被調査者の職業の性別構成（パネル調査）	94
	5	被調査者所属産業の性別構成（パネル調査）	94
	6	被調査者の職務内容の性別構成（パネル調査）	94
	7	被調査者の出身地・性別構成（パネル調査）	94
Table V	1	面積と人口	105
	2	年齢別人口（鶴岡市）	106
	3	両度の調査の被調査者年齢	106
	4	労働力状態（鶴岡市）	106
	5	鶴岡市の産業別人口	106

— 6	昭和45～46年における転入・転出	107
— 7	転入時期・前住地・性別人口	107
— 8	山形県の転入・転出率	107
— 9	被調査者の居住経歴	108
— 10	被調査者・両親・配偶者の出身地	108
— 11	被調査者の職業	109
— 12	被調査者の職業（産業分類）	109
— 13	被調査者の職業（職業分類）	109
— 14	中学生の上級学校進学状況（山形県）	110
— 15	鶴岡市の中学卒業者進学・就職状況	110
— 16	被調査者の学歴	110
— 17	TV普及状況	111
— 18	ラジオ普及状況	111
— 19	新聞購読部数	111
— 20	被調査者の新聞利用	111
— 21	被調査者の旅行	112
— 22	被調査者の東京との交流	112
— 23	自動車普及状況	112
Table VI — 1	エキとエントツ	122
— 2	イキとイト	122
— 3	エキとイキ	122
— 4	エキとイト	122
— 5	イキとエントツ	122
— 6	イトとエントツ	122
— 7	学歴別の音声の共通語化の程度	127
— 8	学歴別のアクセントの共通語化の程度	132
— 9	「おきる」の命令形	137
— 10	「する」の否定形	137
— 11	一人称複数接尾辞	138
— 12	二人称の言い方	139

—13	格助詞「を」	139
—14	格助詞「に」	139
—15	接続助詞「けれども」	140
—16	接続助詞「から」	141
—17	形容動詞の活用語尾「なら」	142
—18	助動詞「た」	142
—19	形容詞「強い」の連用形	143
—20	「書いたのか」の「書いた」の部分	144
—21	「書いたのか」の最後の疑問表現	145
—22	「書いたのか」の敬語表現	145
—23	「いつも」	147
—24	「るすばん」	148
—25	「いらっしゃい」	148
—26	「もう」	149
—27	「おどろいた・びっくりした」	151
—28	「はずかしい」	152
—29	「コーデ」の使用	153
—30	「あげる・やる」	154
—31	「つらら」	154
—32	「ボクシング」	155
—33	「乗車拒否」	155
—34	「ミニスカート」	156
—35	鶴岡弁に対する意見	158
—36	鶴岡の生活に対する意見	158
—37	鶴岡弁のイメージと鶴岡弁に対する意見	159
—38	意識と行動	161
Table VII—1		
	言語形成期の居住地と両親・配偶者の出身地別の音声・アクセント得点	173
—2	職業別の音声・アクセント得点	174
—3	関心や興味の方向別の音声・アクセント得点	175

	— 4	鶴岡での生活，鶴岡弁に対する意見別の音声・アクセント得点	176
	— 5	行動空間別の音声・アクセント得点	177
	— 6	テレビへの接触別の音声・アクセント得点	177
	— 7	階層別の音声・アクセント得点	178
	— 8	敬語，調査員による判定別の音声・アクセント得点	179
Table VIII	— 1	場面によることばの使い分けの各群の構成	197
	— 2	各群の被調査者の構成（アクセント）	211
	— 3	各群の被調査者の居住経歴（アクセント）	213
	— 4	各群の被調査者の全国志向・地域志向（アクセント）	213
	— 5	各群の被調査者の生活や鶴岡弁に対する意見（アクセント）	214
	— 6	各群の被調査者の東京との行き来・団体加入（アクセント）	214
	— 7	各群の被調査者のテレビ視聴時間（アクセント）	215
	— 8	各群の被調査者の話すことば（アクセント）	215
	— 9	アクセントの共通語化のタイプと要因との関係	216
	— 10	各群の被調査者の構成（音声）	233
	— 11	各群の被調査者の居住経歴（音声）	234
	— 12	各群の被調査者の全国志向・地域志向（音声）	235
	— 13	各群の被調査者の生活や鶴岡弁に対する意見（音声）	235
	— 14	各群の被調査者の東京との行き来・団体加入（音声）	236
	— 15	各群の被調査者のテレビ視聴時間（音声）	236
	— 16	各群の被調査者の話すことば（音声）	236
	— 17	音声の共通語化のタイプと要因との関係	237
Table IX	— 1	パネル・継続被調査者の音声類別共通語化	241
	— 2	エキとエントツ	242
	— 3	イキとイト	242
	— 4	エキとイト	242
	— 5	エキとイト	242

－ 6	イキとエントツ	242
－ 7	イトとエントツ	242
－ 8	項目別の前回と今回の比較（音声）	243
－ 9	性・年齢・学歴別・有声化項目	246
－ 10	性・年齢・学歴別・中舌II項目	248
－ 11	性・年齢・学歴別・i/e項目	249
－ 12	項目別の前回と今回の比較（アクセント）	250
－ 13	性・年齢・学歴別・アクセント項目	251
－ 14	項目別の前回と今回の比較（文法）	252
－ 15	性・年齢・学歴別・文法項目	253
－ 16	理論的傾向の有無（文法）	254
－ 17	項目別の前回と今回の比較（語彙）	255
－ 18	性・年齢・学歴別・語彙項目	256
－ 19	音声得点の比較（全体）	257
－ 20	音声得点の比較（性別）	258
－ 21	音声得点の比較（年齢別）	258
－ 22	音声得点の比較（学歴別）	258
－ 23	アクセント得点の比較（全体）	259
－ 24	アクセント得点の比較（性別）	259
－ 25	アクセント得点の比較（年齢別）	259
－ 26	アクセント得点の比較（学歴別）	260
－ 27	文法得点の比較（全体）	260
－ 28	文法得点の比較（性別）	260
－ 29	文法得点の比較（年齢別）	260
－ 30	文法得点の比較（学歴別）	261
－ 31	語彙得点の比較（全体）	262
－ 32	語彙得点の比較（性別）	262
－ 33	語彙得点の比較（年齢別）	263
－ 34	語彙得点の比較（学歴別）	263
－ 35	新語得点の比較（全体・性別）	263

－36	文法得点＋語彙得点の比較（全体）	264
－37	文法得点＋語彙得点の比較（性別）	264
－38	文法得点＋語彙得点の比較（年齢別）	264
－39	文法得点＋語彙得点の比較（学歴別）	264
－40	音声得点の段階別比較（全体・性別）	265
－41	上がったか，下がったか（音声）（性別）	266
－42	音声得点の段階別比較（年齢別）	266
－43	上がったか，下がったか（音声）（年齢別）	266
－44	上がったか，下がったか（音声）（職務内容別）	267
－45	音声得点の段階別比較（学歴別）	267
－46	上がったか，下がったか（音声）（学歴別）	267
－47	音声得点の段階別比較（出生地別）	268
－48	今回の段階別分布（音声）（出生地別）	268
－49	上がったか，下がったか（音声）（出生地別）	269
－50	上がったか，下がったか（音声）（居住経歴別）	269
－51	アクセント得点の段階別比較（全体・性別）	269
－52	上がったか，下がったか（アクセント）（全体・性別）	269
－53	アクセント得点の段階別比較（年齢別）	270
－54	上がったか，下がったか（アクセント）（年齢別）	270
－55	上がったか，下がったか（アクセント）（職務内容別）	270
－56	アクセント得点の段階別比較（学歴別）	271
－57	上がったか，下がったか（アクセント）（学歴別）	271
－58	上がったか，下がったか（アクセント）（出生地別）	271
－59	上がったか，下がったか（アクセント）（居住経歴別）	271
－60	文法得点の段階別比較（全体・性別）	271
－61	上がったか，下がったか（文法）（全体・性別）	272
－62	文法得点の段階別比較（年齢別）	272
－63	上がったか，下がったか（文法）（年齢別）	272
－64	上がったか，下がったか（文法）（職務内容別）	272
－65	文法得点の段階別比較（学歴別）	273

—66	今回の段階別分布（文法）（学歴別）	273
—67	上がったか、下がったか（文法）（学歴別）	273
—68	上がったか、下がったか（文法）（出生地別）	274
—69	上がったか、下がったか（文法）（居住経歴別）	274
—70	個人ごとの比較（音声）	274
—71	個人ごとの比較（アクセント）	275
—72	個人ごとの比較（文法）	276
—73	個人ごとの比較（語彙）	277
—74	「方—方」の多い人	278
—75	「共—共」の多い人	279
—76	「共—共」が四つの人について	280
—77	調査員による被調査者分類	281
—78	調査員の出身地別の結果	282
—79	調査員別音声得点	282
Fig. I—1	調査の実施状況	49
—2	サンプル差替図	50
Fig. V—1	町村合併の状況	104
Fig. VI—1	両度の調査における項目の関係	115
—2	音声の各項目に共通語で反応したものの比率	118
—3	音声の共通語形と方言形との対応	119
—4	年齢別共通語化曲線（唇音性Ⅰ）	124
—5	年齢別共通語化曲線（唇音性Ⅱ）	124
—6	年齢別共通語化曲線（口蓋化）	125
—7	年齢別共通語化曲線（有声化）	125
—8	年齢別共通語化曲線（鼻音化）	125
—9	年齢別共通語化曲線（中舌Ⅰ）	125
—10	年齢別共通語化曲線（中舌Ⅱ）	126
—11	年齢別共通語化曲線（i/eⅠ）	126

—12	年齢別共通語化曲線 (i/eII) ……………	126
—13	年齢曲線の変化の予想図 ……………	127
—14	アクセントの各項目に共通語で反応したものの比率 ……	129
—15	年齢別共通語化曲線 (「ネコ」のアクセント) ……………	131
—16	年齢別共通語化曲線 (「ハタ」のアクセント) ……………	131
—17	年齢別共通語化曲線 (「カラス」のアクセント) ……………	131
—18	年齢別共通語化曲線 (「セナカ」のアクセント) ……………	131
—19	年齢別共通語化曲線 (「ウチワ」のアクセント) ……………	131
—20	鶴岡弁・東京弁に対するイメージ ……………	159
—21	場面によることばの使い分け ……………	160
Fig. VII —1	両度の調査における音声得点の累積パーセント曲線 ……	166
—2	前回調査の音声得点の分布 ……………	167
—3	年齢別音声得点 ……………	167
—4	同一年齢集団の音声得点の20年間の変化 ……………	169
—5	学歴別音声得点 ……………	170
—6	両度の調査におけるアクセント得点の分布 ……………	170
—7	年齢別アクセント得点 ……………	171
—8	同一年齢集団のアクセント得点の20年間の変化 ……………	171
—9	学歴別アクセント得点 ……………	172
—10	テレビ視聴時間と年齢別の音声得点 ……………	178
—11	音声得点と各要因の平均値の広がり ……………	180
—12	アクセント得点と各要因の平均値の広がり ……………	181
—13	文法得点と各要因の平均値の広がり ……………	183
—14	語彙得点と各要因の平均値の広がり ……………	184
Fig. VIII —1	各場面で使われることばのパターン分類 (第1, 2軸) ……	190
—2	4場面を組みにした場合のパターンの分布 ……………	192
—3	ことばの使い分けのPOSA構造図 ……………	193
—4	各群の被調査者の年齢構成 ……………	197
—5	各群の被調査者の学歴構成 ……………	197
—6	アクセントのパターン分類 (第1, 2軸) (今回調査) ……	199

— 7	アクセントのパターン分類（第3, 4軸）（今回調査）	200
— 8	今回調査のアクセントパターンの分岐図	201
— 9	アクセントのパターン分類（第1, 2軸）（前回調査）	202
—10	アクセントのパターン分類（第3, 4軸）（前回調査）	203
—11	5項目を組みにした場合のパターンの分布（今回調査）	205
—12	5項目を組みにした場合のパターンの分布（前回調査）	206
—13	今回調査のアクセントのPOSA構造図	207
—14	前回調査のアクセントのPOSA構造図	208
—15	各群の被調査者の年齢構成（アクセント）	212
—16	各群の被調査者の学歴構成（アクセント）	212
—17	各音声項目のパターン分類（第1, 2軸）（今回調査）	218
—18	各音声項目のパターン分類（第1, 2軸）（前回調査）	219
—19	各音声項目のパターン分類（第2, 3軸）（今回調査）	220
—20	各音声項目のパターン分類（第4, 5軸）（今回調査）	222
—21	各音声項目のパターン分類（第2, 3軸）（前回調査）	225
—22	各音声項目のパターン分類（第4, 5軸）（前回調査）	226
—23	8項目のパターン分類（第1, 2軸）（今回調査）	228
—24	8項目を組みにした場合のパターンの分布	229
—25	音声のPOSA構造図	230
—26	音声のPOSA構造の部分図(1)	232
—27	音声のPOSA構造の部分図(2)	232
—28	各群の被調査者の年齢構成（音声）	234
—29	各群の被調査者の学歴構成（音声）	234
Fig. IX— 1	年齢別の音声・アクセント・文法得点の動き	261
— 2	学歴別の音声・アクセント・文法得点の動き	262
— 3	年齢・学歴別の文法得点+語彙得点の動き	264

第 I 章 調査の目的と実施

1. 目的と意義

近年人口動態の活潑化により、人口の、地方における過疎化、および都市周辺における過密化の現象がいちじるしい。国語の分野でもこのような社会の変化によっていちじるしい影響を受けているはずである。社会の変化に応じた国語の変化に関する研究については今までに見るべきものがないようである。この研究は、国立国語研究所と統計数理研究所との試験研究費による共同研究として実施した、白河市・鶴岡市での共通語化調査の実施後約20年になるのを契機に、それとの比較によって、この問題に迫っていこうとするものである。前の調査は、昭和24年に福島県白河市、昭和25年に山形県鶴岡市で実施した。この二つの調査はほぼ同じ目的で行われたものであり、鶴岡市での調査の方が方法論などでより洗練されていると認められるので、今回の比較のための調査は鶴岡市で実施することとした。

鶴岡市はもちろん過疎地帯の中にあるのであるが、市自身は多少人口減少傾向にはあっても、過疎というわけではない。附近の農村から人口を吸収しつつ、京浜地帯へ人口を供給しているという、人口移動の中継点といった趣きを呈している。これらについて詳しくは、第Ⅴ章で述べられるであろう。ともあれ、ここで比較の方法を練り上げて、いずれは取りあげるべき、大都市における言語生活の調査に資することができよう。

前回の調査が行われてから20年を経た今、上に述べた人口動態の活潑化だけでなく、いろいろの社会的変化が起こっていることは、統計資料を見なくても常識的に感じているところが多い。たとえば、教育水準はずっと上がったはずであるし、マスメディアも飛躍的に発達した。これらは、前回の調査の教えるところによれば、共通語化と関係が深いものであるので、言うまでもなくこの社会の諸変化は市民の言語生活に強い影響を及ぼしたであろう。われわれの研究費の課題名「社会変化と言語生活の変容」は、この社会変化によっての言語

生活の移り変わりを捉えようという、調査目的をあらわしたものである。

一方、社会的結合の基礎となるべき要因の一つ、共通語の普及の重要性は、いわゆる情報化社会が叫ばれるとともに、ますます大きくなってきた。幸いにも前の鶴岡市の調査は共通語化の調査なので、この20年間隔の比較をすることによって、国語および住民の言語生活の変遷および実態を正しく把握し、これにより共通語化の問題を、どのように進めるべきかの方策立案に資することができよう。

なお、20年前の被調査者を追跡してもう1回調査し、その間にその個人が共通語化の程度にどのような変化があったかを掴むこともやってみる。

国語学・言語学の面で、時間を隔てての動的な調査はあまり多くない。特にこのような大量の集団調査については皆無である。同一被調査者および同一地域社会の20年を隔てた調査により、個人および地域社会の言語状況の通時的変化がはじめて実証的・実的に捉えられるわけである。たとえば、共通語化などと年齢との関係は、調査時という時点における共時的なものとして捉えられており、老人は若者よりも方言を多く使う、などと言われていたが、今回は、これを通時的に捉えるわけで、20年というわずかの間隔とはいっても、人の一生における言語状態の変化の一面をはじめで大量的に捉えることができる。

2. 方 法

20年間の変化を見ることが最大眼目であるから、この観点から、前回調査で実施した調査項目はできるだけ今回も取り入れて、比較がなるべく多くの項目でできるように考えた。

比較といっても二つが考えられる。一つは、地域社会としての比較であり、一つは個人としての比較である。前者のためには、地域社会をよく代表するようにサンプリングをして、前回調査のサンプリング調査の結果と比較し、地域社会の言語の状況の変化を見るものである。そして、後者のためには、前回の

被調査者をできるだけ今回追跡して調査し、個人個人の20年間の比較をするものである。今回の報告書では、この両方について取り上げることになる。前者の調査を「継続調査」、後者の調査を「パネル調査」と称することにする。

普通はたとえば、1回の調査で年齢別の集計で、ある項目に対して15～19歳の者がX点を取り、35～39歳の者がX'点をとったとしても、これはその時点だけのものであって、20年後に今15～19歳でX点だったのが、35～39歳になった時X'点となるということを意味しない。共時的調査の結果は通時的に解釈できないのである。こういう意味で、大規模な通時的調査は全国でも今回が始めてで結果が注目されるが、なお理想的には、経年的調査をせめて5年間隔ぐらいで実施しておけばよかったと思う。

なお、前回調査では、鶴岡市のほかに、附近の農村として南方約6キロの東田川郡山添村をも調査対象にした。この村は今は町となっている。しかし、今回は、人手および経費の関係からこの地域での調査を省略した。

調査方法としては、まず共同研究であることがあげられる。大量の被調査者について調査するときはもちろん一人の研究者ではできにくい。

具体的な方法としては、地域社会の言語生活や言語行動の実態を調べるという目的のためには、自然科学的な実験はほとんど不可能であろう。ここでは、一般に社会科学的手法、とりわけ社会調査法といわれるものが主として使われることになる。社会調査の場合、調査対象者の範囲によって、「全数調査」「部分調査」「個別調査」に分けられるが、ここでは「部分調査」をとり、その「部分」を得るためにサンプリング法をとったことは、今までに述べたことからわかることと思う。

次に具体的なデータの得方は、調査票による面接調査法をとった。能率よく所要のデータを得るには、今のところ、観察法や自由面接法、あるいはテスト法よりも調査票によるのが便利である。調査票を使って調査する場合、面接調査法のほかにも、集合調査法、配票調査法、郵送調査法などが考えられるが、言語の微妙な聞き取りをすることを考えると、面接調査法がもっともすぐれているということができる。

3. 調査の組織

この調査は、前回調査と同様、科学研究費によるものである。昭和46年度科学研究費補助金試験研究(1)の研究課題「社会変化と言語生活の変容」(課題番号10023)として、100万円の交付を受けて実施した。

この研究の申請段階から研究代表者は、国立国語研究所長岩淵悦太郎であり、以下、言語班として、野元菊雄、飯豊毅一、徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、中村明、高田誠、江川清、村木新次郎(以上国立国語研究所)、南不二男(東京外国語大学)、社会班として、渡辺友左(国立国語研究所)、鈴木裕久(東京大学新聞研究所)、倉沢進(東京都立大学)、統計班として、林知己夫、西平重喜、鈴木達三、林文、高橋和子、平野秀子、大高道子、時永沙代子(以上統計数理研究所)が名を連ね、それぞれ分担して研究をした。そのほか、企画・実施に参加したのは、高田正治(国立国語研究所)、井上史雄、上野善道(以上東京大学文学部言語学科)、真田信治(東北大学文学部国語国文学科)である。

本調査で実際の面接調査に当たったのは以上のうち、野元、本堂、佐藤、高田(誠)、江川、中村、南、井上、上野、真田の10人で、そのほか高田(正)が本部要員として参加した。

調査集計・整理には、国立国語研究所の分担者野元菊雄、江川清の二人が主として当たり、統計数理研究所の、特に林知己夫、林文の二人の大きな助力を受けた。なお、別に国立国語研究所の研究補助員小林信子、堀江よし子がこれを助けたほか、臨時の手伝いとして日高貢一郎、田中ハル子が資料の整理に当たった。

4. 調査票

4.1 決定した調査票

今回の調査は、前回調査との比較を主な目的としているので、前回とほとんど同じ調査票を作成した。

まず、ここにその調査票をあげておく。

No.						
調査日	'72.3.	開始時刻	A.M. 時 分 P.M.	調査者		
性	男 女	現住所	町 丁目 番 号			
101. ~年生まれですね。	明 大 昭 年	明 大 昭 年				

1.1 うなずき	4.1 ソーダ
1.2 身振り	4.2 ンダ
2.1 ハイ	5.1 ソーデゴザイマス
2.2 ハー	5.2 ソーデガンス
2.3 エー	5.3 ンデガンス
3.1 ソー	6.1 ソーデス
3.2 ン	6.2 ンデス
3.3 アー	
7 つぎたし []
9 その他 []

a. ノー	b. チャ c. ノッシャ d. []

「7つぎたし」の類を答えた人には、更に念をおして「~年(つぎたし)ですね」と尋ねる。

102. ずっとここに在住ですか。

お生まれは？

そこからすぐこちらへいらっ
しゃったのですか？

時 期	場 所	用 件	
出生(地)			

103. あなたの今のお仕事は？

(勤め人の場合は)

本店(社)に勤めておられますか。

(支店の場合は)

本店はどこにありますか。

(本人が世帯主でない時)

世帯主の方のお仕事は？

うちのお仕事は？

本 人	専 業	本・支 (本店)	
	兼 業		
家 族	世帯主		
	家 庭		

104. 学校はどこまでおいでになりましたか。

1 なし	2 小	3 高小	3 新中	4 旧中	4 新高	5 旧高	6 専 門	7 大	9 〔 〕	0 N.A.		
その学校は何県 (何市)にありま したか。								1 卒	2 中	3 在	0 N.A.	
1 鶴岡 旧市内		2 庄内 (含鶴岡新市内)			3 山形県		9 県	0 N.A.				

105. お父さんのおく
にはどちらです
か。

お母さんのおく
には？

あなたの奥さ
ん(御主人)
のおくには？

父	1 鶴岡	2 庄内	3 山形県	9 県	0 N.A.	
	1 鶴岡	2 庄内	3 山形県	9 県	0 N.A.	
配	1 鶴岡	2 庄内	3 山形県	9 県	4 なし	0 N.A.

106. この半年間に遠くへおいでになったことがありますか。

秋田方面は？

新潟方面は？

山形方面は？
 東京方面は？
 関西方面は？
 そのほかには？

場 所	用 件	滞在日数	



201. 絵 口 クチ

1	tf	3	z	9	[]	
---	----	---	---	---	----------	--

202. 絵 髭 ヒゲ

1	ç	3	F	9	[]	
---	---	---	---	---	----------	--

203. 絵 背中 セナカ

1	s	3	ś, ç	9	[]	
1		3		9	[]	

204. 夏働くと背中からだらだら流れるものを何とおっしゃいますか。

汗 アセ

1	s	3	ś, ç	9	[]	
---	---	---	------	---	----------	--



205. 絵 蜂 ハチ

1	tf	3	z	9	[]	
---	----	---	---	---	----------	--

206. 絵 鳩 ハト

1	t	3	d	9	[]	
---	---	---	---	---	----------	--

207. 絵 猫 ネコ

1	k	3	g	9	[]	
1		3		9	[]	



208. 絵 蛇 ヘビ

1	x	3	F	9	[]	
---	---	---	---	---	----------	--

209. 絵 窓 マド

1	d	3	~d	9	[]	
---	---	---	----	---	----------	--

210. 絵 旗 ハタ

1	t	3	d	9	[]	
1		3		9	[]	

211. 絵 鈴 スズ

1	dz	3	~z	9	[]	
---	----	---	----	---	----------	--

212. 絵 帯 オビ

1 b	3 ~b	9 []	
-----	------	------------	--

213. 絵 靴 クツ

1 ts	3 z	9 []	
------	-----	------------	--

214. 絵 柿 カキ

1 k	3 g	9 []	
-----	-----	------------	--

215. 絵 松 マツ

1 ts	3 z	9 []	
------	-----	------------	--

216. 絵 西瓜 スイカ

1 k	3 gw, kw	9 []	
-----	----------	------------	--

217. 曜日のなまえについておたずねしますが、日曜日のつぎは月曜日、月曜日のつぎは何とおっしゃいますか。

火曜日 カヨウビ

1 k	3 kw	9 []	
-----	------	------------	--

218. 絵を見せて、97, 98, 99の次は何ですか。

百 ヒヤク

1 ç	3 F	9 []	
-----	-----	------------	--

219. 税金をとりたてる役所を何とおっしゃいますか。

税務署 ゼイムシヨ

1 dz	3 z	9 []	
------	-----	------------	--

220. 口からハーツとはくもの、これを何とおっしゃいますか。

息 イキ

1 i	3 è	7 i	9 []	
-----	-----	-----	------------	--

221. 絵 駅 エキ

1 e	3 è	7 i	9 []	
-----	-----	-----	------------	--

222. 絵 糸 イト

1 i	3 è	7 i	9 []	
-----	-----	-----	------------	--

223. 絵 煙突 エントツ

1 e	3 è	7 i	9 []	
-----	-----	-----	------------	--

224. 市でいちばん上の人を「市長」と言いますが、県でいちばん上の人を何とおっしゃいますか。

知事 チジ

1 i	3 i	9 []	
-----	-----	------------	--

225. 絵 地図 チズ

1 w	3 i	9 []	
-----	-----	------------	--

226. 絵 島 シマ

1 i	3 i	9 []	
-----	-----	------------	--

227. 絵 墨 スミ

1 w	3 i	9 []	
-----	-----	------------	--

228. 絵 鳥 カラス

1 w	3 i	9 []	
		9 []	

229. こちらの名産の小さいなすをつける辛い粉を何とおっしゃいますか。

辛子 カラシ

1 i	3 i	9 []	
-----	-----	------------	--

230. 絵 狐 キツネ

1 w	3 i	9 []	
-----	-----	------------	--

231. 絵 団扇 ウチワ

1 i	3 i	9 []	
		9 []	

241. 「あの人はいつも遅れてくる」という時「いつも」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 イツモ	2 ショッチュー	3 トース, トーシン	9 []	
-------	----------	-------------	------------	--

242. 「わたたくしが留守番をしています」という時、「留守番」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 ルスバン	2 ルスイ	3 ヨスリ	9 []	
--------	-------	-------	------------	--

243. 「どうぞこちらへいらっしゃい」といねいにいう時、「いらっしゃい」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 イラっしゃい	3 ゴザへ	4 ハイッテクネヘン	9 []	
----------	-------	------------	------------	--

244. 「くたびれたもう歩けない」という時の「もう」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 モー	3 アド	9 []	
------	------	------------	--

245. うしろから急にワッと大きい声をかけられた時の感じですが、「アッ、どうした」とおっしゃいますか。

1 オドロイタ	2 ビックリシタ	3 オボゲタ	4 ハトモタ	9 []	
---------	----------	--------	--------	------------	--

246. みんなの見ている前で失敗して、顔が赤くなるような感じをふつうどんなだとおっしゃいますか。

1 ハズカシイ	3 ショ(-)ス(-)	9 []	
---------	-------------	----------------------------	--

247. 相手からお金をとって物を渡すのは「売る」と言いますが、お金をとらないで物を「与える」という時には、ふつうどうするとおっしゃいますか。

1 クレル	3 クエル	4 ケル	9 []	
-------	-------	------	----------------------------	--

248. 絵 冬、軒先などにさがるコオリの棒です。これを何とおっしゃいますか。

1 ツララ	3 シガ, スガ	9 []	
-------	----------	----------------------------	--

249. 「このお菓子はコーデうめえちゃ」などのように「コーデ」という言葉をお使いになりますか。(使わないと答えた人には「きけばわかりますか」と尋ねる。)

1 使う	2 使わないが聞けばわかる	3 知らない	9 []	
------	---------------	--------	----------------------------	--

251. 絵 手に皮をはめてうちあうスポーツを何とおっしゃいますか。足でけっったりはしません。

1 ボクシング	2 拳闘	9 []	0 N.A.	
---------	------	----------------------------	--------	--

252. 東京などのタクシーで、夜中など運転手がお客を乗せるのを断わることがありますが、これを何とおっしゃいますか。

1 乗車拒否	9 []	0 N.A.	
--------	----------------------------	--------	--

253. 絵 近頃の若い女の人のほく、この丈の短いのは何とおっしゃいますか。

1 ミニ (スカート)	9 []	0 N.A.	
-------------	----------------------------	--------	--

261. こども(弟・妹)にむかって「朝寝坊をしないで早く起きろ」という時、ふつう何とおっしゃいますか。

1 オキロ	3 オキレ	9 []	
-------	-------	----------------------------	--

262. あなたが親しい友達にむかっていう時の言葉についていくつかお尋ねいたします。「わたくしたちもいっしょに行こう」という時、「わたくしたち」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 ~ダチ	2 ~ドモ	3 ~ガタ	9 []	
-------	-------	-------	----------------------------	--

263. では、「おもしろい映画だってね。いっしょに見に行かないか」という時、「見に行かないか」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 ミニ	3 ミサ	7 ミエ	9 []	
------	------	------	----------------------------	--

271. 尊敬している先生にむかっていう時の言葉についてお尋ねいたします。「この絵はあなたがかいたのか」と尋ねる時、ふつう何とおっしゃいますか。

オカキニ(シ)ナッタ	1	(1)	ノ(シ)デゴザイマスカ	
カカレタ	2	(2)	ノ(シ)デスカ	
オカキナリマシタ	3	(3)	ノ(シ)デガンスカ	
カカハリマシタ	4	(4)	ノ(ハ)ダカ	
カカシタ	5	(5)	ノカ	
カイタ	6			
9	[]	

301. 仮に日本中どこでも好きな所に住んでいいということになったら、あなたはどこに住んでみたいと思われませんか。

1	2	3	9	0	
鶴岡	庄内	山形県	県	なし	N.A.

302. 東京に親せきとかお知り合いとかがありますか。

(リスト)

1. 行き来をしている。2. 電話で話し合う。3. 文通をしている。4. つきあっていない。

1	2	3	4	5	9	0	
行き来	電話	文通	つきあわない	なし	[]	N.A.

303. あなたは1日にテレビをどのくらいごらんになりますか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
~0:30	~1:00	~1:30	~2:00	~2:30	~3:00	~3:30	~4:00	4:00~	N.A.	

304. ラジオはどうか。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
~0:30	~1:00	~1:30	~2:00	~2:30	~3:00	~3:30	~4:00	4:00~	N.A.	

305. ラジオやテレビのニュースでは庄内地方や鶴岡のことを取りあげたニュースと、東京や全国のニュースとでは、どちらが好きですか。

1	2	3	4	0	
鶴岡	全国	どちらでもない	聞かない	N.A.	

306. 新聞は毎日お読みですか。

1	2	3	0	
毎日	時々	読まない	N.A.	

307. 何新聞をお読みですか。

(全国紙と地方紙の両方をあげた者に対して) どちらを多く読みますか。

全国紙	朝日・毎日・読売・産経・日経・()		
地方紙	山形・荘内・()	その他 ()	

308. あなたは次の二つの意見のうち、どちらに賛成ですか。「どちらかといえば」という程度でも結構ですからお答え下さい。

(リスト)

1. 鶴岡には長い間につくりあげてきた生活の仕方(暮らし方)がある。これからもそれに従っていけばよい。
2. もっと新しい生活の仕方を積極的にとり入れて、生活をどんどん合理的にしてゆく必要がある。

2	1	0	
伝統	改変	N.A.	

309. お宅で家族の方たちといろいろお話をなさる時のことは鶴岡弁ですか。それとも標準語ですか。いろいろ混りますか。

1	2	3	0	
標	方	混	N.A.	

近所の顔見知りの方とお話なさる時は？

1	2	3	0	
標	方	混	N.A.	

鶴岡の人で顔見知りでない方もありでしょうか、そういう人とお話なさる時は？

1	2	3	0	
標	方	混	N.A.	

旅の人などにお話なさる時は？

1	2	3	0	
標	方	混	N.A.	

310. あなたは鶴岡弁についてどんなふうに感じますか。

(リスト)

1. 軽快だ 重苦しい どちらとも言えない
2. 深みがある 薄っぺらだ どちらとも言えない
3. 好きだ きらいだ どちらとも言えない

1	2	3	
軽快	重苦しい	どちらとも	
1	2	3	
深み	薄っぺら	どちらとも	
1	2	3	
好き	きらい	どちらとも	

それでは東京弁についてはどんなふうに感じますか。

(リスト)

上と同じ。

1	2	3	
軽快	重苦しい	どちらとも	
1	2	3	
深み	薄っぺら	どちらとも	
1	2	3	
好き	きらい	どちらとも	

311. あなたが入っていらっしゃる団体や組合といったものについてうかがいます。まず、スポーツやレクリエーション、趣味の会、文化団体に入っておられますか。
 (入っている場合) その団体の正式な名前を教えてください。
 その団体で役員をしておられますか。
 前には役員をしておられましたか。
 (役員をしている場合) どんな役ですか。

加入				
1	2	3	0	
役員 []	非役員	非加入	N.A.	

(社会人のみに)
 町内会や婦人会、
 青年団、PTAな
 どではどうですか。

加入				
1	2	3	0	
役員 []	非役員	非加入	N.A.	

(学生の中に)
 学校で何かの役員
 (委員) をしていま
 すか。

1	2	0	
役員 []	非役員	N.A.	

宗教的な団体や政
 治的な団体に入っ
 ておられますか。

加入				
1	2	3	0	
役員 []	非役員	非加入	N.A.	

今までおたずねし
 ましたもの以外の
 団体や組合で入っ
 ておられるものは
 ありますか。

加入				
1	2	3	0	
役員 []	非役員	非加入	N.A.	

312. 鶴岡弁について次のような意見があります。あなたはどちらの意見に賛成なさいますか。

1	2	0	
変更	保存	N.A.	

(リスト)

- 世の中が開けてきたのだから、もう鶴岡弁をしゃべっている時代ではない。鶴岡弁はできるだけなくしてしまった方がよい。
- 鶴岡弁は私たちの鶴岡の大事な文化遺産だから、できるだけ保存しておいた方がよい。

313. ここで行われているこの6種類の選挙の中で、あなたがいちばん関心をおもちなのはどれですか。

(リスト)

- 衆議院議員
- 参議院議員
- 山形県知事
- 県会議員
- 鶴岡市長
- 市会議員

1	2	3	4	5	6	0	
衆	参	知事	県会	市長	市会	N.A.	

314. あなたはどの政党を支持しておられますか。(二つ以上あげた時) どちらの政党をより強く支持しますか。(「支持なし」と答えた場合) それではどの政党に好感をもっておられますか。

1	2	3	4	5	6	7	0	
自民	社会	民社	公明	共産	[]	支持なし	N.A.	

315. 昔、士族でいらっしゃいましたか。

1	2	0	
士族	以外	N.A.	

316. あなたの家族の手取りの世帯収入はどれくらいですか。

(リスト)

- | | | |
|------------|--------------|--------------|
| 1. 49万円未満 | 4. 90~109万円 | 7. 150~199万円 |
| 2. 50~69万円 | 5. 110~129万円 | 8. 200~249万円 |
| 3. 70~89万円 | 6. 130~149万円 | 9. 250万円以上 |

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	
~49	50~	70~	90~	110~	130~	150~	200~	250~	N.A.	

317. どうもありがとうございました。～さんのお宅（～駅，市役所，郵便局）はどちらでしょうか。

1	2	3	
共(標)	方	混	

正しい 共通語	共通語だがどこ となくちがう	共通語が 混ざる	共通語を 話さない	共通語が 通じない	
	←	→	←	→	

1	2	3	4	
積極的	ふつう	消極的	拒否的	

終了 時刻	A.M.	時	分
	P.M.		

調査時間	分
------	---

4.2 調査票の説明

101. 生年を聞く。二重ワクの中は予め被調査者名簿によって書き込んでおき、この101でそれを確認する形で質問し、その答えを、調査という感じを比較

的薄くして、自然により近い形で得ようとしている。「つぎたし」とは、返事以外の言語反応があるものをいう。たとえば生年月日を言うものなど。点線の下は終助詞である。答えの最初のものに○印をつけて、その答えの順に矢印で結んでくるよう調査員に指示した。以下でも〔 〕の中は、自由に書き込むための場所である。

102～106はそれぞれフェイスシートとして普通とられるもので、106は行動空間の広さについて聞くものである。

201～231は、音声およびアクセントを調べるものである。「絵」とあるものは、絵を見せて、そのものの名を聞いたものである。そのとき使った絵は巻末に刺激図として示した。絵に画きにくいものはいわゆるナゾナゾ式の質問にした。たとえば204の如きである。そこで、注目点としたものは、たとえば、201でいえば、クちのチ、それも、子音部分であることを、この調査票は示している。被調査者の発音を聞きとって、ちかzかによって、どっちかにマルをつけた。第3の答であるときは9のあとの〔 〕の中に具体的に書いてくる。269までは、1または2と番号のついているものは共通語式の答えで、3以下は方言での答え、9はその他の答えを示している。たとえば203のセナカは、カタカナで書けば、セナカのセが、セと発音されるか、シェのように発音されるかを調べ、同時にアクセントが、東京式の平板であるか、鶴岡式の中高であるかを聞いているものである。以下質問ごとに念のため中心的問題その他をあげておく。

201, 205. ちの子音の有声・無声。kutsi, kuti などは9, kutʃi, kutsʃi は1。

202. ヒの子音の唇音性の有無。çége, fige などは9。

203, 204. セの子音の口蓋化の有無。いくらかでも口蓋化が認められたら3, finaka, çinaka などは9。204では, aʃi, açi などは9。

206, 207. 206ではト, 207ではコの子音の有声・無声。半有声のものも3。

208. への子音の唇音性の有無。

209, 211, 212. 209はド, 211はズ, 212はビの子音の前の鼻音性の有無。

213, 214, 215. 213, 215はツ, 214はキの子音の有声・無声。213では kutʃi のようなものは9。

216, 217はカの子音の唇音性の有無。216ではシーカは1, シーガは9。

218. ヒヤの子音の唇音性の有無。わたり音の有無は無視。

219. ゼの子音の口蓋化の有無。いくらかでも口蓋化が認められたら3，破擦音的か摩擦音的かは無視。ジームショのようなものは9。

220,222. 標準語的なイ [i] か，狭いエ [è] か，中舌的なイ [i̠] か。標準語的なエがあったら9，広め，ゆるめのイは7。

221,223. 標準語的なエ [e] か，狭いエ [è] か，中舌的なイ [i̠] か。前舌のイが出てきたら9。

224,226,229,231. 224はジ，226,229はシ，231はチの母音が前舌的か中舌的か。前者は標準語的，後者は方言的。母音に中舌的な性格が認められたら3，子音の如何，子音の前の鼻音性の有無などは無視。また母音が無声化しているかどうかも無視。231は u(d)giwa などがあったら1。

225,227,228,230. 225はズ，227，228はス，230はツの母音が標準語的なuまたは~~u~~か，方言的なi̠か。子音の如何，子音の前の鼻音性などは無視。母音が無声化しているかどうかも無視。230は ki(d)z~~ame~~ などがあったら1。

以上をまとめて，音声の調査項目は，その特徴によって，次の九つに類別する。この類別は後にもたびたび使うものである。

Table I - 1 音声調査項目の類別

音声の特徴	調	査	項	目						
唇音性 I	カ	ヨ	ビ	(217), スイカ (216)						
” II	ヒ	ゲ	(202), ヘ	ビ (208), ヒャク (218)						
口蓋化	ゼ	イ	ム	ショ (219), セ	ナカ (203), アセ (204)					
有聲化	マ	ツ	(215), カ	キ (214), ク	ツ (213), ハ	ト (206), ハ	タ (210), ハ	チ (205), ク	チ (201), ネ	コ (207)
鼻音化	オ	ビ	(212), マ	ド (209), ス	ズ (211)					
中舌 I	キ	ツ	ネ	(230), カ	ラス (228), ス	ミ (227), チ	ズ (225)			
” II	シ	マ	(226), ウ	チ	ワ (231), チ	ジ (224), カ	ラ	シ (229)		
i と e の区別 I	エ	ン	ト	ツ (223), エ	キ (221)					
” II	イ	ト	(222), イ	キ (220)						

以後「i と e の区別」を「i/e」と簡単にあらわすことにする。

241～249の九つは、語彙について聞くものである。248は絵を見せて答えてもらった。ここは選択肢をカタカナで示してある。細かい発音上の違いは無視した。

247と248とは前回調査にはなかったものである。前者は鶴岡方言の時代的変化が出そうなものとして、後者は方言形の多く出そうなものとして取り入れた。249は士族のことばと言われているものである。

251～253の三つは、いわゆる新語について共通語との相関をみるため聞いたものである。0という番号のN.A.はno answerで「無答」を示す。9のところには正答以外の答えを書いた。

261～269の九つは、文法についての質問項目である。有声化・無声化などの音声的な差異は無視する。記入欄で()で包まれた部分に対しては、被調査者の反応をできるだけ忠実に写す。261は「オキナサイ」という反応に対しては、「何度起こしてもなかなか起きないので少し強く言う時には？」のように質問する。両度の調査で質問文の違うものについては具体的には第Ⅵ章で述べる。

270は、101と同じことを、別のことで聞いている。この二つが同じ答えになるかどうかを見ようとしている。反応の記録のしかたも101と同じである。

271は敬語について試みに聞いたものである。これは、次の年の岡崎市の調査でも聞いている。両都市の敬語の違いが明らかとなるであろう。

なお、調査票に「サネグデ」など、ひらがなの「ね」などが使っている。これは、方言的な発音の母音 [e] など、エの広いものがあらわれていることを示す。

301以下は、フェイスシートに属するものや、社会的態度などを調べるものである。〈リスト〉とあるのは、文を書いたカードを見せて、それを読んだ上で答えてもらったものである。この〈リスト〉に書かれている文は、上の調査票の〈リスト〉と書いてあるあとにあげておいたが、実際の調査票そのものには書いてないものである。一つの問題でいろいろのことを見ようとしているものもあるが、主なねらいで分類すると次のようになる。

鶴岡への帰属意識が強いのか、それとも全国か……301, 305, 307, 313

東京との結びつき……302

マスコミュニケーションとの接触度……303, 304, 306, 307

伝統保持か改変か……308, 312, 314

方言か共通語か……309

方言や共通語に対する意識……310, 312,

地域社会とのかかわり……311

階層関係……311, 315, 316

301は、「暖かい所」などとあるときは欄外に書いてもらってあとで処理した。

302の質問の「東京」の範囲は、いわゆる首都圏を指すものとする。

303, 304でテレビやラジオを持っていない、と答えた場合はN.A.の下の余白に「ナシ」と記入する。

307の「その他」とは、赤旗や聖教新聞など購読者層が限られているものをさす。

310. 選択肢の詳しい意味内容は説明しない。たとえば、「軽快だ」の意味がわからない被調査者に、それが重苦しいの対語だということを教える程度に止めておく。

311. 同一カテゴリーの団体の二つ以上に加入している場合は、もし役員をしていれば、その役員をしている方の団体を採用して答える。

314. 「支持なし」と答えた場合は、7に◎印をつけ、調査票の質問を続ける。

315. 「わからない」と答えた場合は、記入欄の余白にそのことを記入する。

316. 家族の合計の手取り年収を問う。

317では、調査が終わったという安心感を被調査者に与えた上で、道をたずね、その答が共通語であるか方言であるかを調査員が判定するものである。

その下のワクは、調査全体の印象に従って判定し、その記入は、矢印の上、あるいはその中間に○印をつける。矢印は、その上に書いてあるものよりも、わずかに矢印の向いている方へ傾いていることを示す。

次のワクの「積極的」……というのは、被調査者の調査に対する態度である。調査の途中で態度が変わった場合は、その推移に従って矢印でつないで示す。

317以下は、被調査者と別れてから後に記入するものである。

4.3 前回調査票との比較

まず、前回の調査票にあって、今回の調査票にないものは、まず、言語そのもの以外では、前回調査票の番号で示せば次のとおりである。

10. 発音教育を受けたか。
11. そのあと発音に気をつけているかどうか。
16. きょうだいはあるか。長男（女）であるかどうか。
20. 映画は見るか。
21. 映画は日本のものと外国のものと、どちらに関心があるか。
27. 本を1か月にどのくらい読むか。
29. ラジオのニュースを1日に何回聞くか。

今回の調査票の300台のものは、一部を除いて、新しく加わったものである。302は「電話」というのを今回入れた。遠隔地との個人的コミュニケーションとして電話は今や欠かせないものとなっている。303のテレビはもちろん前回調査のときは存在していなかったが、これも国民の生活はこれなしには考えられないほど今は普及している。307に当たるものは前回も聞いているが、今回はずっと詳しく聞くことになった。309は前回調査と全く同じである。311は前回よりずっと詳しくなっている。315は前回でも聞いている。317も前回と同じである。

言語の方は、まず音声では、前回調査票の42「ショージ（障子）」を今回は取り上げなかった。ショーのところを [$\overset{w}{\text{ç}}\text{o:}$] のように発音するのが鶴岡方言の古い特徴となっているが、準備調査の結果でもあまり多くないことが明らかとなったし、調査もむずかしいものと思われたので取りあげないことにしたものである。したがって、今回の調査では、一つだけ数が減って、調査語数は31となった。そのため、今回の調査と比較するために、前回調査の結果はこの「ショージ」を除いて31として集計をやり直すことにした。

この31の提出順は、前回は同じ音声的特色のものは同じところに並べているが、今回は、あまり同じものをつづけると被調査者にその語の調査意図を察知されることも考えられるので、少し順を入れかえることにした。

語彙の項目では、今回の調査票の241～243はこの順で、このままの質問文で前回は質問した。244は、前回は、「おなかがいっぱいになった。もうたくさん

です」と言うとき「いらっしゃい」ということをふつう何とおっしゃいますか、と質問し、245は、「あんまり大きいので驚いた」と言うとき、「驚いた」ということをふつう何とおっしゃいますか、246は、「そんなことするのははずかしい」と言うとき、「はずかしい」ということをふつう何とおっしゃいますか、のように質問した。次の247、248は前回では調査しなかったものである。249は、「このおかしはずいぶん甘い」と言うとき、「ずいぶん」ということをふつう何とおっしゃいますか、と質問した。このように質問文を変えたのは、前回調査以後の「日本語地図」作成のための調査など数次の経験によってである。

前回調査票の番号で73～75は今回は調査しなかった。これをここにあげておく。

73. 「そこにすわっていらっしゃい」と言うとき、「すわって」ということをふつう何とおっしゃいますか。——方言形はネマッテ。

74. 「朝から晩まで野球ばかりしてはだめだ」と言うとき、「だめだ」ということをふつう何とおっしゃいますか。——方言形はヤチャガネ、ラチャガネ（ともに士族に多いという）。

75. 「うるさいからさわぐな」と言うとき、「さわぐな」ということを、ふつう何とおっしゃいますか。——方言形ホゴルナ。

251～253の3語は、いわゆる新語について聞いているから、もちろん前回の調査とは異なるものである。前回調査では、新語を示して、たとえば、「コンクール」ということばをお聞きになったことがありますか、のように聞いて、「正しく理解されている」「正しく理解されていない」「知らない」の三つに判定したが、今回の調査では、上のその他の語彙のナゾナゾ式と同じように質問した。前回は、76「コンクール」、77「六三制」、78「アルバイト」、79「鉄のカーテン」、80「アプレ・ゲール」の五つを聞いている。これらが新語であった時代の差を痛感する。

文法項目では、前回調査票での番号81～89は86を除いて、順序は違うがすべて今回の調査票でも採用した。今回取りやめた86は「すずめやら鳥やら……飛んでいる」の「やら」を聞くものであった。方言形はダガシ、デラである。これも準備調査の結果省いたのである。今回の調査で新しく加えたのは、269であ

る。

270は前回は、今回の「小学校時代の先生から」ではなくて「わたくしなどから」となっている。前回は、質問に入る前のものと全く同じとなって、その相関を見ようとしたのであるが、今回は、相手による違いを見ようとしているのである。

以上を合計すると、前回は今回も質問数は大きな差はないということになる。質問をなるべく対応するように数えると、前回の85に対して今回は81である。

5. 被調査者

以上の調査票による今回の面接調査は、前に述べたように、新しいサンプリングによって得た被調査者に対して行われた。

5.1 サンプリング

サンプリングは、昭和46年12月15日から17日までの三日間現地鶴岡市で行われた。実施に当たったのは、研究分担者のうち、統計数理研究所の西平、林(文)、時永の3人である。

鶴岡全市民全体のうち、調査対象とした15～69歳の昭和45年国勢調査による総数67,780人（全市民であれば95,128人）を母集団とし、その年齢別構成比によって、旧鶴岡市全体からサンプリングした。本来は旧鶴岡市内の市民数によるべきであるが、その統計資料がなかったので、年齢別構成比は、旧市内も全市と同じと考えたのである。

なお、被調査者は、調査員数・費用の関係から400としたのであるが、調査不能者を差換えて、所要の被調査者数を確保するために、少し余分にサンプリングしておいた。次のTable I-2のうちの「カードの枚数」というのはそれである。この中から被調査者数が400になるよう年齢別にサンプリングした。また、15～24歳の人数が多いので、前回の調査ではこのサンプルサイズを1/2とし

ている。1/2にする前のサンプル総数がn'の総計454である。したがって、集計のときは、この年齢層の結果はすべて倍にして計算した。これは調査の運用のためにとった手段であるが、パネル調査をしてみると、この若い年齢層が2回目の調査では移動の激しい年齢でもあるので社会の中堅層となりもっとも重要であるにかかわらず、所在の追求がむずかしく、結果として非常に少数しか調査できなかった。そこで、今後はこのように1/2にするのは不相当と判断し、次の岡崎調査からはこの方法はとらないことにした。

Table I-2 サンプルングとその結果

年齢	昭和45年国勢調査		サンプリング				
	実数	%	n'	n	男	女	カードの枚数
15~19	9,054	13.4	61	30	14	16	81
20~24	6,898	10.2	46	23	9	14	71
25~29	6,259	9.2	42	42	18	24	55
30~34	6,908	10.6	46	46	23	23	58
35~39	7,650	11.3	51	51	22	29	83
40~44	7,471	11.0	50	50	18	32	87
45~49	5,997	8.9	41	41	23	18	60
50~54	5,085	7.5	34	34	13	21	67
55~59	4,950	7.3	33	33	17	16	40
60~64	4,157	6.1	28	28	11	17	38
65~69	3,351	4.9	22	22	10	12	33
計	67,780	100.0	454	400	178	222	673

男女別は、n では男178 (44.5%)、女222 (55.5%)、カードの枚数では男305 (45.3%)、女368 (54.7%)であった。年齢別のところで、20~34歳が、35~39歳の層より少ないことは、この鶴岡市が大都市における青壮年労働者層の供給源になっていることを示すものであろう。これについては第V章を見よ。

5.2 調査地域

上記の400人を、指定した町から実際にサンプリングした。その町町の住民登録簿から、該当の年齢層15~69歳に当たるものを抜き出したのである。この今回調査の指定地域は、前回調査時代の町名を改めて、地番改訂をして新しい町名をつけ、またその区域も、旧町の区域と必ずしも一致していない。そのために、前回調査の地域と今回調査の地域とは一致しない部分がある。前回の調査では旧市内の調査地域は49の町に分かれているが、今回の調査では29に分かれ

Table I-3 町別被調査者・調査者

町名	被調査者数	調査者数	主な調査員の番号	旧町名
青柳町	6	1	7	八日町,新斎郡,柳田,稻生町
泉町	10	1	9	泉町,高畑町,馬場町
稻生町	15	2(14)	7	八日町,柳町,番田
最上畑町	18	4(15)	9	最上町,上畑町
家中新町	22	2(21)	5	鷹匠町,家中新町,馬場町,新屋敷町
三光町	13	2(12)	0	七日町,賀島町,銀町,桧物町,七軒町,島
山王町	19	2(18)	4	日和町,高町,与力町,荒町,鳥居町,宝町,高畑町,泉町
神明町	14	1	8	十日町,二百人町,十三軒町,天神町,新士町,島
昭和町	11	1	3	八日町,五日町,三日町,十日町,栄町,八坂町
新海町	19	1	5	新斎町,大海町,家中新町,新町,幸町,みどり町
末広町	15	3(13)	0	大宝寺,道形,寿町
大東町	20	1	3	天神町,八坂町,三日町,新士町,栄町,紙漉町
大宝寺町	10	2(9)	3	大宝寺
大宝寺町	24	3(22)	6	大宝寺,宝町,与力町
鳥居町	17	6(12)	1	大宝寺,与力町,鳥居町
新形町	9	2(8)	9	新形,大宝寺
錦町	6	1	9	大宝寺,錦町,最上町,新形
馬場町	5	1	8	馬場町,元曲師町
日吉町	13	2(12)	2	大宝寺,最上町,高畑町,日和町,宝町
双葉町	8	1	0	日枝,
文園町	4	1	4	日枝,島
本町1丁目	16	1	6	三日町,八間町,下肴町,五日町,十日町
本町2丁目	22	2(21)	7	十日町,二百人町,一日市町,七日町,南町,十三軒町
本町3丁目	18	4(14)	1	元曲師町,家中新町,上肴町,八日町
美原町	9	1	8	八日町,日枝
三和町	11	2(10)	2	南町,七軒町,十三軒町,島
陸町	15	4(14)	4	七日町,吉住町,南町,賀島町,七軒町,日枝,島
陽光町	15	3(13)	8	鍛冶町,幸町,八日町
若葉町	18	7(11)	2	最上町,新屋敷町,新形,高畑町,鷹匠町,泉町,若葉町,馬場町

ている。この今回調査の町名ごとの被調査者、その町の担当者の数、その町の区域の前回調査のときの町名を次のTable I-3に示す。調査者数のところで()内に示したのは、その町の担当者が複数の場合、一番多い調査者が担当した被調査者数である。

前回調査では旧市内といっても、農村地帯を主として、道形、みどり町、遠賀原、苗津などを調査地域から除外したが、今回の調査でも、みどり町、苗津町、日出町、千石町、道形町は除外した。ただ境界に出入りがあるので、前に述べたように地域は同一でない。

6. 調査の実施

6.1 現地調査の進行

現地での調査は次のような段取りで進行した。

1. 調査協力依頼——昭和46年9月27、28日——3人。現地で市当局、関係機関との連絡に当たり、利用できる統計・資料類を調べ、言語や社会変化の感触を得る。
2. 準備調査Ⅰ——昭和46年10月17～23日——2人。言語についての予備調査。言語体系について調査。
3. 準備調査Ⅱ——昭和46年10月27、28日——1人。社会変化について統計資料類を収集し、社会的態度に関する質問のための準備調査をした。
4. サンプリング——昭和46年12月15～17日——3人。
5. 予備調査——昭和47年2月21～23日——2人。できあがった調査票が妥当であるかどうかを、前回調査の被調査者へのパネル調査を実施しながら検討した。また、本調査を現地マスコミュニケーションを通じて宣伝するための依頼も行った。
6. 本調査——昭和47年3月6～15日——11人。これについては詳しくは下に述べる。実際の調査員は10人で、他の1人は調査本部に詰め、連絡などの役

目についた。

6.2 本調査の実施

調査員には、調査本部からの距離と日数などを考え、公平になるように町をいくつか指定して、その町に居住する被調査者を担当して調査することにした。

調査は3月6日に始まった。市民の協力は後にも述べるようにまず満足すべきものだったと思われる。なるべくトラブルなく調査に入れるように、予め被調査者には所長名の協力依頼のはがきを発送しておき、また新聞、ラジオ、テレビなどを利用して調査の趣旨目的の周知徹底に努めた。このうち特にNHK鶴岡放送局のローカルお知らせの時間の放送はかなり多くの人に見られており、調査の進行上非常に役立った。

本調査の進行状況は、Table I-4のとおりである。これを図に画くとFig. I-1になる。

Table I-4 調査の実施状況 (添字はパネル調査の被調査者数)

調査日 (3月)	調査員数		調査終了数		調査不能数		延べ訪問数		異なり訪問数	
	人	累積	件	累積	件	累積	回	累積	回	累積
6日(月)	10		66		9		170		128	
7日(火)	10	20	74	140	11	20	207	377	157	285
8日(水)	10	30	72	212	1	21	177	554	135	420
9日(木)	10	40	70	282	8	29	182	736	138	558
10日(金)	9	49	61	343	10 ₂	39 ₂	139	875	120	678
11日(土)	9	58	49	392	12 ₁	51 ₃	124	999	89	767
12日(日)	9	67	48	440	11 ₂	62 ₅	88	1087	73	840
13日(月)	7	74	22	462	2 ₁	64 ₆	38	1125	30	870
14日(火)	6	80	19	481	5 ₂	69 ₈	37	1162	28	898
15日(水)	5	85	12	493	7 ₇	76 ₁₅	20	1182	19	917

Table I-4 の「調査終了数」からの右の四つの欄はパネル調査の被調査者をも含んでいる。調査不能のものがあるので、493人の調査終了者は全体の86.6%に当たる。表からわかるように、何回も訪問しないと被調査者は捕捉できない場合がある。前回調査の記録はないが、感じとしては、被調査者ひとり当た

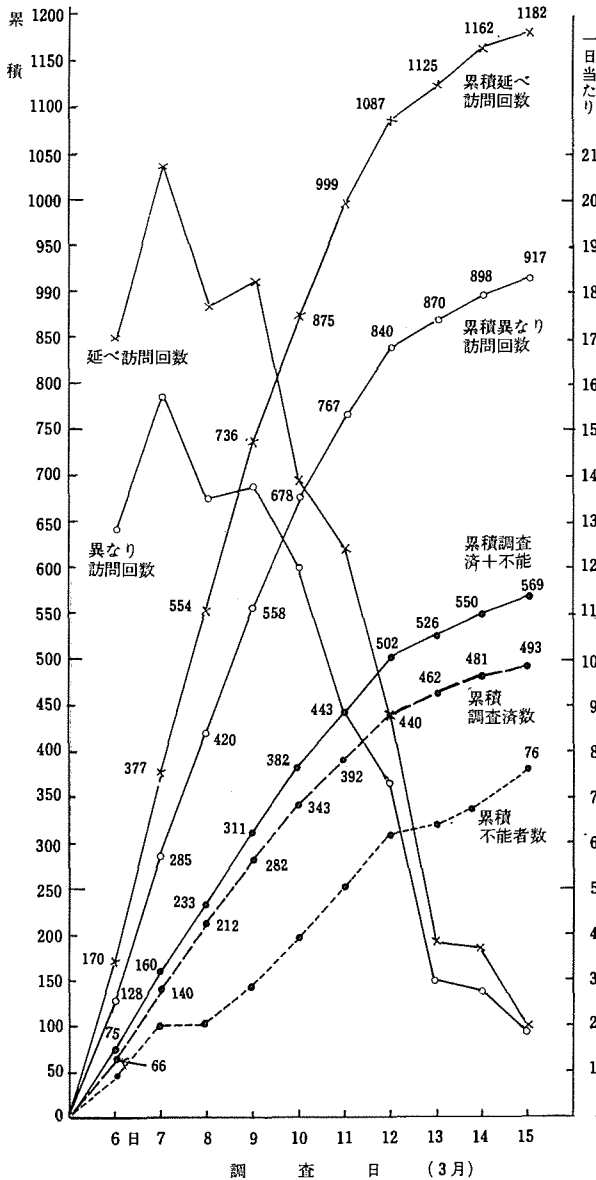


Fig. I - 1 調査の実施状況

りの訪問回数は今回の方が多いであろう。これは、第V章で述べる被調査者の社会的特性からも想像できる。つまり、今回は前回と比べて、主婦など昼間家庭にいる人の率が減少しているのである。1回で調査できた人は221人で、これは全調査終了数の44.8%にすぎない。1回で調査不能とわかった人53人を加えると、 $493人+76人=569$ 人に対して、48.2%となる。

Fig. I - 1 の右側のスケールは、1日当たりの(累積でない)訪問回数および、累積不能者数のためのものである。

調査不能者の分析は次節で試みるが、調査不能者がいろいろの理由で出たときは、予備のサンプルの中から、性が同じで年齢の一番

近い人を選んで、不能者と差替えて、これを被調査者とした。これを「差替サンプル」とする。前回調査の報告書では「代わりサンプル」と呼んでいたものである。このサンプルの差替えの調査の際の実際の作業について図示したものがFig. I-2である。

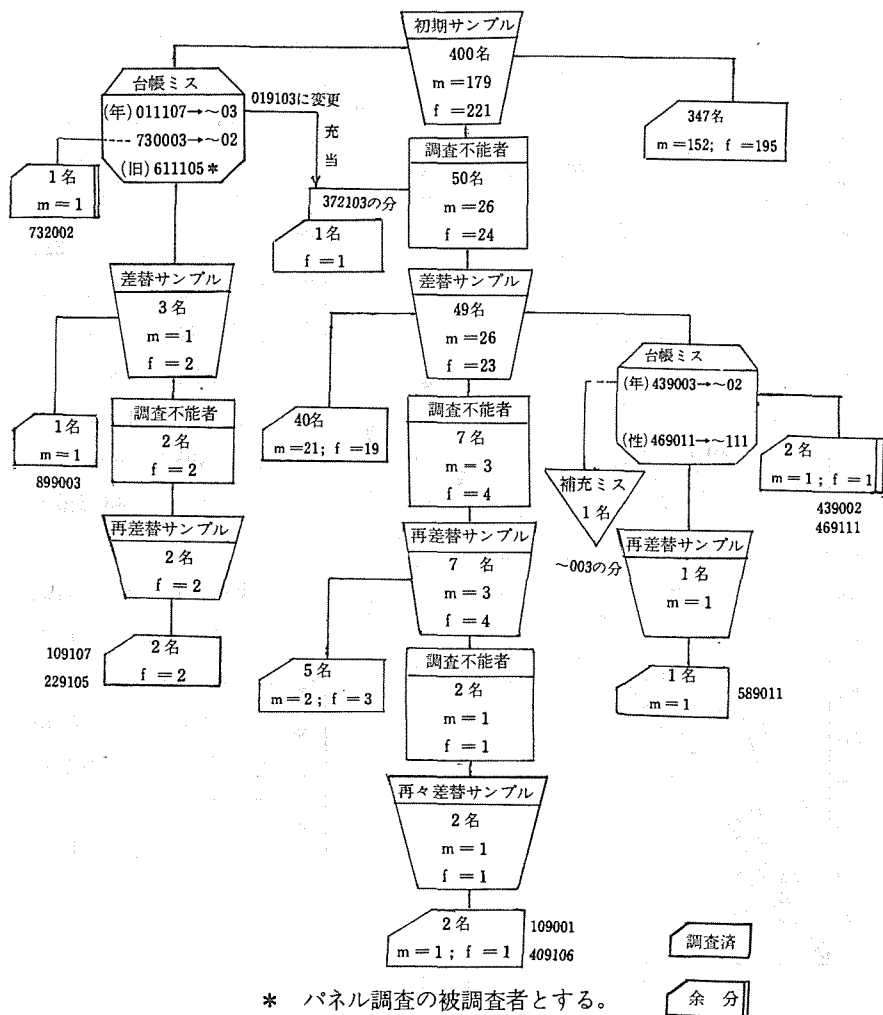


Fig. I-2 サンプル差替図

これを表の形にまとめると、Table I - 5 のようになる。

Table I - 5 サンプル差替表

	男		女		計		達成率
	調査済数	完了率	調査済数	完了率	調査済数	完了率	
初期サンプルから	153 (1)	85.5%	196	89.1%	349 (1)	87.5%	86.8%
差替サンプルから	23 (1)	88.5	20 (1)	76.9	43 (2)	82.7	10.7
再差替サンプルから	3	75.0	5	83.3	8	80.0	2.0
再再差替サンプルから	1	100.0	1	100.0	2	100.0	0.5
計	180 (2)	85.7	222	87.7	402 (3)	86.8	100.0

Table I - 5 の()内は余分に調査されたサンプル数であり、「達成率」とは全数402がどのグループからであるかを見るものである。

Table I - 6 調査員別調査進行表

調査者番号	調査日 (3月)										計
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
0	6	10	7	6	7	5	5	4	—	—	50 (9)
1	6	4	3	6	2	6	9	—	—	—	36 (9)
2	8	8	5	7	8	2	4	3	0	2	47 (10)
3	6	8	7	10	7	6	6	3	—	—	53 (10)
4	7	7	7	5	—	—	—	6	5	4	41 (3)
5	5	4	7	8	7	7	6	0	6	4	54 (11)
6	10	11	10	8	10	7	6	—	—	—	62 (16)
7	6	7	9	7	7	5	3	4	3	1	52 (8)
8	7	8	11	5	7	5	4	2	2	—	51 (9)
9	5	7	6	8	6	6	5	0	3	1	47 (6)
計	66	74	72	70	61	49	48	22	19	12	493 (91)

Fig. I - 2 では、m は男性、f は女性、6桁の数字は被調査者番号である。この6桁の数字で左から4桁目は、0は男性、1は女性、次の2桁は年齢のコードである。「台帳ミス」のところは、実際面接してみたなら、実は性が違ったり年齢が違ったりしたものである。それを(性)、(年)で示す。なお*印の被調査者は、調査の経過で、前回調査の被調査者であったことがわかった

ので、パネル調査の被調査者として扱うこととして継続調査の方は差替えた。

この結果、400のサンプルの実際上の過不足は次のとおりとなった。

まず、不足の方は1人で、年齢コード03 (25~29歳) であるべき男が差替の際の作業ミスで02 (20~24歳) を調査したものである。これに対して余分のものは、上の人が年齢コード02のところでは1人増加し、実際に行ったところ03

でなく02であったもの、男でなく女であったものはそれぞれ一応調査はすませたうえ差替えもしたためにそれぞれ1人増加し、計3人となっている。差引き2人増で、調査済みが402人である。この402人すべてを集計のとき使うこととする。

調査員別・調査日別の調査状況は次のTable I-6のとおりである。この表では、継続調査のための被調査者と、パネル調査のための被調査者とを合計したものである。計のところでパネルの方の数を()内に示す。

調査にどのくらいの時間を実際かけたかを集計してみると、Table I-7のようになる。

Table I-7 被調査者の性・年齢別調査所要時間 (%)

時間(分) 年齢・性	15 { 19	20 { 24	25 { 29	30 { 34	35 { 39	40 { 44	45 { 49	50 { 59	60分 以上	中央値 (分)
15~19	13.3	43.3	26.7	13.3	3.3					23.7
20~24	4.0	40.0	28.0	24.0				4.0		25.6
25~29	14.3	31.0	33.3	7.1	9.5		4.8			25.2
30~34	4.3	21.7	32.6	19.6	10.9	6.5	2.2		2.2	28.2
35~39	3.9	27.5	29.4	13.7	11.8	7.8	3.9		2.0	27.7
40~44	10.0	18.0	34.0	20.0	12.0	6.0				27.7
45~49	7.3	12.2	24.4	36.6	4.9	2.4	4.9	4.9	2.4	30.3
50~54	2.9	20.6	26.5	23.5	5.9	11.8	5.9	2.9		29.5
55~59		18.8	15.6	18.8	21.9	9.4	6.3	6.3	3.1	33.7
60~64		7.1	21.4	21.4	17.9	14.3	7.1	7.1	3.6	34.5
65~69		13.0	17.4	17.4	26.1	21.7	4.3			34.9
男	6.7	27.7	28.9	15.8	10.7	5.9	2.4	1.2	0.8	27.2
女	5.9	22.1	25.5	23.5	8.8	5.9	3.9	2.9	1.5	28.8
計	6.3	25.2	27.4	19.3	9.8	5.9	3.1	2.0	1.1	27.9

前回調査の調査時間は、10分台が38.0%、20分台が52.3%であったから、今回調査の10分台6.3%、20分台52.6%と比べれば、今回がずっと長くなっていると言えそうである。前回調査は調査時間が記入洩れで不明が2.8%あるのを含んでいるが、今回調査では不明はない。

今回調査が長いのは、前に述べたように、質問数では大差ないが、今回は社

会的態度について聞いたものが相当数あり、それがリストを提示したりして割に長い時間を要したことも原因がある。また、今回は各項目について「不明」という報告が非常に少ないことが指摘でき、調査員が質問の困難に逢着した際もあきらめずに努力して聞きとったためかと思われる。

前回調査（昭和25年11月13日から21日までの9日間で調査員7人）では調査員1人日当たりの被調査者数7.9人に対して今回調査では5.7人となっている。今回は本部の留守番をした日も数に入っているし、調査も上に述べたようにやりやすくなっているの、1日当たりの労力ではそう大きな差はないであろう。前回の調査では市役所の人や前日予告にまわるなどして在宅するようすすめたが、今回はそのようなこともなく、またそれが許される社会の事情ではないようである。

なお、男の被調査者の方が短く、若い方が短いという傾向が見られることも指摘しておく。

Table I-8 性・年齢別調査への態度()は%

年齢・性	積極的	ふつう	消極的	拒否的
15~19	14(23.3)	42(70.0)	4(6.7)	
20~24	16(32.0)	34(68.0)		
25~29	17(40.5)	21(50.0)	2(4.8)	2(4.8)
30~34	16(34.8)	28(60.9)	1(2.2)	1(2.2)
35~39	10(19.6)	38(74.5)	3(5.9)	
40~44	18(36.0)	31(62.0)	1(2.0)	
45~49	15(36.6)	25(61.0)	1(2.4)	
50~54	9(26.5)	24(70.6)	1(2.9)	
55~59	8(25.0)	23(71.9)	1(3.1)	
60~64	13(46.4)	11(39.3)	3(10.7)	1(3.6)
65~69	7(30.4)	11(47.8)	5(21.7)	
男	76(37.3)	122(59.8)	5(2.5)	1(0.5)
女	67(26.5)	166(65.6)	17(6.7)	3(1.2)
計	143(31.3)	288(63.0)	22(4.8)	4(0.9)

また、調査を受けているときの被調査者の態度を調査員の報告によってまとめると、Table I-8 のようになる。調査の終わりのところによって判定した。

40代、50代では、「消極的」以下が比較的少ないのに、60代ではこれが多くなる。やはり年をとると拒否的になるのであろう。

性別では女性の方が拒否的の方に傾く。女性の方が閉鎖的と言えるであろう。男性は積極的に協力する率が高くなる。このような結果ではあるが、全体として

見るならば、協力程度は満足すべきものと言ってよからう。

パネル調査の107人については、積極的45人(42.1%)、ふつう55人(51.4%)、消極的7人(6.5%)で、年齢層の高かったことを考えれば、よく協力してくれたと言うべきであろう。

6.3 得られた被調査者

以上のようにして調査することのできた被調査者を、年齢別・性別に表示するとTable I-9のようになる。

前に述べたように、24歳以下の層は実際に調べべき数の1/2しか調査しないので、集計のときは、このところを2倍して、総計457としている。上のこの章のTable I-7, 8 もそのようにしてある。

なお、被調査者の現住所による町別の集計はTable I-3 にあげてある。これは総数を402としたときのものである。

パネル調査の被調査者については、第IV章で述べることにする。

Table I-9

性・年齢別被調査者

年齢	実数	男	女
15~19	30	14	16
20~24	25	11	14
25~29	42	18	24
30~34	46	23	23
35~39	51	22	29
40~44	50	18	32
45~49	41	23	18
50~54	34	13	21
55~59	32	16	16
60~64	28	11	17
65~69	23	10	13
計	402	180	222

7. 調査不能者

このような調査で、いわゆる調査不能者が出ることは望ましくはないが、やむを得ない。不能者が出たときは、なるべく等質のものをもって補充することが望ましい。補充しないときよりも、した方が不能者が出たことによる偏りは少ないであろう。どちらにしても、調査しやすい方にやや傾くことは避けられないが。

7.1 継続調査の調査不能者

われわれの継続調査で、どのくらい不能者が出たかは、Table I-5 を裏返した形にすればわかるはずであるが、念のためまずそれをTable I-10 に示してみよう。

Table I-10 性別調査不能者（継続調査）

	男		女		計	
	不能者数	不能率	不能者数	不能率	不能者数	不能率
初期サンプルから	26	14.5%	24	10.9%	50	12.5%
差替サンプルから	3	11.1	6	24.0	9	17.3
再差替サンプルから	1	25.0	1	16.7	2	20.0
計	30	14.3	31	12.3	61	13.2

調査日ごとの不能者についての統計はTable I-11 のとおりである。

不能者の理由別の表をTable I-12としてあげておく。24歳以下は1/2であるという立場からすれば、不能者は継続調査の場合、合計67となる。以下の表で()内は女性である。

Table I-12の下は、それぞれ上が被調査者+調査不能者に対する比、下が、調査不能者全部に対する比である。

Table I-13は調査員別に見てみたものである。

「障害」というのは、精神身体に先天的な障害があることを調査員が確認したものである。「転出」は、サンプリングから、調査依頼のはがきが行くまでの間に別の土地へ転出したもの、「転居」ははがき受領後に転出したものである。「転勤」は家族はまだいるが、本人が転勤のためその住所にいないもので、

Table I-11 調査日別調査不能者数

日(3月)	継続調査サンプル			パネル調査 サンプル	総計
	男	女	計		
6日(月)	6	3	9		9
7日(火)	5	6	11		11
8日(水)		1	1		1
9日(木)	4	4	8		8
10日(金)	4	4	8	2	10
11日(土)	5	6	11	1	12
12日(日)	4	5	9	2	11
13日(月)		1	1	1	2
14日(火)	2	1	3	2	5
15日(水)				7	7
計	30	31	61	15	76

Table I -12 調査不能者の年齢別不能理由

年齢	病 氣			転 出			不 在				拒 否				計							
	病 氣	難 聽	障 害	計	転 出	転 居	転 勤	計	不 在	出 張	出 稼	旅 行	学 校	蒸 発		計	拒 否	多 忙	受 験	葬 儀	ケ ン カ	計
15~19					1		1(1)		1			2				1			1		4(1)	
20~24											1	1	2								2	
25~29	1		1(1)		1		1(1)		1(1)	1			2(1)		1(1)		1	1		3(1)	7(3)	
30~34	2		2(1)						2	1	1		4		1					1(1)	7(3)	
35~39	1		1(1)							1	1		2								3(1)	
40~44		3	3(3)						2(2)		2(2)	2	6(4)		2(2)	2(1)				4(3)	13(10)	
45~49	1		1							1			1(1)		1(1)	2				3(1)	5(2)	
50~54	3		3(3)		2(1)	1	3(1)				2		2(1)		1					1(1)	9(6)	
55~59	1		1(1)		1		1				1		1		2(1)	1				1(1)	7(3)	
60~64	1		1								1		1(1)							1(1)	4(2)	
65~69		2	2(1)																		2(1)	
計	10	2	3	15(11)	1	4	1	6(3)	6	2	2	10	1	2	23(8)	6	7	1	1	2	17(9)	61(31)
計	.022		.032				.013		.013		.022		.050		.013	.015				.037	.132	
	.164		.246				.098		.098		.164		.377		.098	.115				.279	1.000	
男			.019				.014				.029		.071		.019					.038	.143	
			.133				.100				.200		.500		.133					.267	1.000	
女	.028		.044				.012				.016		.032		.020					.036	.123	
	.226		.355				.097				.129		.258		.161					.290	1.000	

Table I -13 調査員別調査不能理由

調査員 番号	病 氣			転 出			不 在				拒 否				計						
	病 氣	難 聽	障 害	計	転 出	転 居	転 勤	計	不 在	出 張	出 稼	旅 行	学 校	蒸 発		計	拒 否	多 忙	受 験	葬 儀	ケ ン カ
0	1		1		1		1(1)		1			2			1(1)		1	1		3(1)	7(2)
1	1		1	2(2)							2(1)	1	1	4(1)		2				2	8(3)
2			1	1(1)					2				2			1				1(1)	4(2)
3					1		1					1	2		2					2(2)	5(2)
4	2		2(1)								2		2(1)								4(2)
5	2		1	3(3)							1		1(1)		2(2)			1		3(2)	7(6)
6									1		2(1)		3(1)		1			1(1)		2(1)	5(2)
7	1		1		1		1(1)		1(1)		1		2(1)		2(2)	1				3(2)	7(4)
8	1		1(1)		1(1)	1	2(1)				2		2(1)		1					1	6(3)
9	2(2)	2(1)	4(3)		1		1		2(2)			1	3(2)								8(5)

家族すべてのいない前二者とは違っている。「出稼」が「転勤」と違っているのは一時的かどうかという点である。「ケンカ」というのは、協力依頼に対して拒否的に出たため説得の段階で調査員とケンカをしてしまったため調査不能となったものである。「受験」「葬儀」はそのようなことのないときの調査なら応じてもらえる可能性があり、「不在」「出張」「旅行」などは、調査期間がそれらにぶつからなければこれも応じてもらえる可能性のあるものである。

次に Table I-14 として、調査員別・性・年齢別の不能者の数をあげておく。

Table I-14 調査員別・性・年齢別調査不能者数

調査員 性 年齢	男										計	女										計
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
15~19	2								1		3								1		1	
20~24				1						1	2											
25~29	1		1			1	1				4	1		1					1		3	
30~34		1	1	1					1		4				1	1				1	3	
35~39		1					1				2									1	1	
40~44		1						1		1	3	1	1	1		1	3	2		1	10	
45~49		1			1		1				3		1						1		2	
50~54	1			1					1		3	1		1		1			2	1	6	
55~59		1			1				1	1	4			1		1	1				3	
60~64	1										1						1				1	
65~69										1	1									1	1	

理由をもっと大きなワクにまとめて、男女間に差があるかどうかを Table I-15 によって χ^2 検定してみた。

自由度 2, $\chi^2=5.0001$, $P>0.05$ で違うという仮説を棄却できるので、調査不能の理由に、サンプルの性別による差はないといえる。

最終的な被調査者 402 に対して 61 は、その 15.2% に当たる。これは、前回調査の

被調査者 496 に対して不能者 55 の 11.1% に比べれば高くなったが、これはこの間

Table I-15 性別調査不能理由

	病気 障害	転出 不在	拒否	計
男	4	18	8	30
女	11	11	9	31
計	15	29	17	61

の鶴岡市の都市化とそれに伴う社会的条件の変化，たとえば家だけにいる主婦の減少など第V章で述べることの反映であろう。一般にこのような面接調査はだんだんむずかしくなっている。

7.2 パネル調査の調査不能者

Table I-16 性・年齢・理由別調査不能者
(パネル調査)

パネル調査の調査不

能者を理由を主として

見てみよう。()内は女
性。

継続調査の方に比べ
て病気の理由が多い

(24.6%に対して36.8

%)のは、年齢を考え

た場合やむを得ないと

ころであるが、拒否が

継続調査の方の「拒否」と「多忙」「ケンカ」とを合わせたものが全不能者に対して24.6%であったのに対して、26.3%とわずかながらこれも高かったのは残念であった。

後にも述べるように、パネル調査では、男59人、女67人、計126人に対して追跡調査をしたのであるが、以上の男10人、女9人、計19人が不能であり、不能率は男16.9%、女13.4%、計15.1%であった。いずれも継続調査 (Table I-12を見よ) よりも高いが、一つの原因は、被調査者が高年齢層であったことと思われる。また、パネル調査の方は、Table I-11で見ると、主として3月10日に開始したため、十分追跡する時間的余裕がなかったことも一原因であろうと考える。調査最終日にそれまで追跡していた7人が一挙に不能者となったことにもそれがあらわれている。また、差替がきかないため、差替によって、全体の不能率を下げることも不可能であったのである。ただし、35～49歳に1人も不能者が出なかったことも注意しておくべきであろう。

年齢	病気	旅行	死亡	拒否	葬儀	不明	計
50～54		1		2(1)		1(1)	4(3)
55～59	1(1)	1		2			4(1)
60～64	2(1)	1					3(1)
65～69	2(2)		1		1(1)		4(3)
70～74	1			1			2
75～79							
80～84	1						1
85～		1					1(1)
計	7(4)	4(2)	1	5(1)	1(1)	1(1)	19(9)

第Ⅱ章 前回調査の概要

1. 目 的

国民が地域社会において、どんな言語を、どのように使って生活しているかの実態を明らかにすることは、今後、国民の言語生活の改善と向上とを図る上に欠くことのできないことである。このように考えて、昭和24、25年の福島県白河市、山形県鶴岡市の調査は実施された。

特に、重点を置いたのは、地域社会の生活において、共通語がどれほど、またどのように行われているか、ということであった。第1年度の白河市の調査（昭和24年）では、このことに関しては、次のことが明らかになった。

1. 共通語化に関係の深い文化的条件は、学歴、父母の出身地、本人の生育地であると認められる。
 2. しかし、共通語化の度合いを決定する要因は、個々のものではなく、いくつかの要因が寄り集まったものと考えた方が、いっそう妥当である。
 3. いくつかの要因の寄り集まったものは、地域社会そのものの性格を形成するものであるから、これを考え合わせると、白河市民の共通語化の度合いは、市自身が城下町から近代都市へ移行すれば、おのずから高まるであろう。
 4. 共通語で話す場面は、知らない人や旅行者などの場面が高く、家庭の場面がもっとも低い。
 5. 無声化、ヒトシとの混同のような特徴は早く共通語へ移っていくが、イトエとの混同というような特徴はもっとも強く抵抗するようである。
- 以上の白河市で得られた結論が、他の小都市でも妥当するかどうか、第2年度の鶴岡市調査の目的である。

2. 実 施

白河市の調査は、市および付近の金山村^{かなやまむら}および五箇村^{ごかむら}を調査したのであるが、鶴岡市でもそれに合わせて、他に付近の東田川郡山添村^{やまぞえむら}をも調査した。しかし、今回の調査は鶴岡市旧市内に限った（山添村は昭和29年12月1日黒川村とともに新しく榊引村となり、榊引村は昭和41年12月1日榊引町^{くしひきょう}になっている）ので、前回についても鶴岡市だけを問題とする。

鶴岡市の調査（前回）は、次のようなものから成っている。

1. 共通語化の調査
2. パーソナリティの調査
3. マス・コミュニケーションの調査
4. 学校における共通語指導状態の調査

1の「共通語化の調査」は、白河市と同様、鶴岡市民の中から500人の被調査者をサンプルし、一定の調査票によって、ひとりひとり面接して調べた。昭和25年10月現在の、15歳から69歳のもの（明治15年から昭和11年までの間に生まれたもの）を母集団とし、この総数26,650と推定される母集団から二重サンプリングによって最終的に被調査者を決め、面接調査をした。調査は11月に行われた。

また、「共通語化の調査」の結果を吟味するために、特定の個人について1日の言語行動を観察、記録することを考えた。これは、白河市でも行った、「言語生活の24時間調査」である。これによって、面接によって得られた個人個人の共通語化の度合いが、この個人の言語生活全体の上でどのような意味を持つものであるかが明らかになるとともに、個人の言語生活上の種々の問題にある程度の見通しを得ることができた。

上に述べたように、前回の調査では、「言語生活の24時間調査」を加えれば、5種類の調査が行われたのであるが、今回の調査では、もっぱら「共通語化」

について、比較をすることを目的としたので、この報告ももっぱらこの観点でまとめる。それ故、ここでも、この観点から前回の調査の概要を述べるに止めることにする。

3. 結果の概要

3.1 個々の方言的特徴について

音声

音声については、次の方言的特徴が見られるかどうかを調査した。

1. 唇音性 I カヨービ, スイカ, (カヨービをクッヨービのように発音する)
2. " II ヒゲ, ハビ, ヒャク (ヒゲをフィゲのように発音する)
3. 口蓋化 ゼイムシヨ, セナカ, アセ (セナカをシェナカのように発音する)
4. 有声化 マツ, カキ, クツ, ハト, ハタ, ハチ, クチ, ネコ (マツをマツのように発音する)
5. 鼻音化 オビ, マド, スズ (オビをオンビのように発音する)
6. 中舌 I キツネ, カラス, スミ, チズ (カラスとカラシとを同じように発音する)
7. " II シマ, ウチワ, チジ, カラシ (うに発音する)
8. iとe I エントツ, エキ (エキとイキとを同じように発音する)
9. " II イト, イキ

以上のほか、次のような特色もあるが、調査はしなかった。

10. ハヤイをハエ (エは開いたe) のように発音する。
11. キタのキの子音は口蓋化がいちじるしく、摩擦音を伴ってkçとなる。
12. ユキをヨキ, キュウ(灸)をキョウのように発音する。

調査した1～9について、共通語化している順に並べると次のようである。

()内の数字は、100点満点としたときの共通語化点である。

1 (87.8) → 3 (68.4) → 4 (65.6) → 8 (58.7) → 6 (54.3) → 5 (46.1)
→ 9 (45.6) → 2 (44.8) → 7 (43.8)

前回調査では、実際に調査した、音声32項目について、共通語的発音で反応したとき1点を与えて、点数で各人の32点満点の共通語化点を出し、それを集計していろいろなグループ別に平均点などを算出し、社会的・文化的要因の共通語化に及ぼす影響力を見た。ここでは、それについては省略する。というのは、前回調査と今回調査の比較について扱う第Ⅶ章において、これらは必要に応じてあげることになるであろうから。

なお、前回調査では32項目であるが、今回調査では31項目しか質問していないため、以後の前回調査の数値はすべて今回調査と共通する31項目について集計しなおしてある。また、前回調査ではすべてについて、いわゆる「庄内グループ」508人を対象にして計算しているが、地域社会全体という観点からするならば、「非庄内グループ」をも加えて考えるべきであるので、以後は、今回調査はもちろん前回調査もすべて、「非庄内グループ」も加えて計算してある。さらに、前回調査での集計の誤りも訂正しているので、以後前回調査の結果の数値を引用する場合は、この報告書によられたい。このことは、音声だけではなく、すべてについても同様である。

アクセント

前回の報告書のⅢ2に述べてある鶴岡アクセントの中、東京アクセントと聴覚的に顕著で、かつ調査しやすい語として、次の5語について調査した。

1. 「猫」……東京で上下型、鶴岡で下上（起甲）型の語彙の代表
2. 「旗」……東京で下上（起）型、鶴岡で下下型の語彙の代表
3. 「烏」……東京で上下下型、鶴岡で下上下型の語彙の代表
4. 「団扇」……東京で下上下型、鶴岡で下下上（起甲）型の語彙の代表
5. 「背中」……東京で下上上（平）型、鶴岡で下上下型の語彙の代表

東京語と同じ型に反応した者の比率は付表に示すとおりである。

また、東京語と同じ型で反応したとき1点を与えて、5点満点で示すと、TableⅡ-1のようになる。

80%という大多数の人が東京アクセントと違う型（そのほとんどが鶴岡ア

Table II-1 前回調査のアクセント得点(%)

	5点	4点	3点	2点	1点	0点
庄内グループ	0.4	0.4	2.0	2.8	8.5	86.0
非庄内グループ	37.2	11.4	25.7	11.4	11.4	2.9
計	2.6	1.0	3.5	3.3	8.7	80.9

クセントの型)である。アクセントが直りにくいという、よくいわれていることがよくわかる、という結論を下している。

文法

前回の報告書Ⅲ3で述べてある鶴岡方言の文法的特色の中から、10の、日常よく使われ、調べやすいものを選んだ。

1. 動詞の活用の中から二つ……「起きろ」「勉強しないで」
2. 人称代名詞の中から一つ……「わたくしたち」
3. 格助詞の中から二つ……「見に行く」「すずめやら、鳥やら」
4. 接続助詞の中から三つ……「静かなら」「行くから」「行くけれども」
5. 助動詞の中から一つ……「強かったなあ」
6. 応答の語……「はい」

結果は次のようであった。ここでは、全被調査者に対する%の数値で示す。

「起きろ」→オキロ (19), オキレ (80), その他 (1)

「しない」→スナイ・スね (—) (63), サね (—) (36), その他 (1)

……「その他」の半数はセンであった。

「わたくしたち」→～たち, ～ドモ (49), ～ガタ (49), その他 (2)

「見に」→ミニ (55), ミサ (45), その他 (1)

「～やら」→～ヤラ・～ヤ・～ダノ (39), ～ダカス・～デラ (55), その他 (6) ……～ダカス・～デラの全部を100としたとき, ～ダカス (95), ～デラ (1), 両方 (5)となる。

「静かなら」→～ナラ (24), ～ダバ・～ダラ(バ) (71), その他 (5)

……「～やら」と同じように, ～ダバ・～ダラ(バ)の内訳を見ると, ～ダバ (91), ～ダラ(バ) (6), 両方 (3)

「行くから」→～カラ (37), ～サケ・～ハケ・～スケ (63), その他(0)
 ……～サケ・～ハケ・～スケの三つの間の関係は, ～サケ (61), ～ハケ(27),
 ～スケ (9), 三つとも (3)

「行くけれども」→～ケレドモ (23), ～ドモ (72), その他 (4)

「強かった」→ツヨカッタ (53), ツいえケ (44), その他 (3)

「応答の語」というのは, 調査票の項目7で, あらかじめわかっている資料
 を確かめるような形で, 「何年生まれですね」と生まれた年をたずね, その返
 事が, ソーデス, ハイのように, 共通語の形で発せられるか, ンダ, ンデガ
 ス, ソーデガンスのように, 方言の形で発せられるかを観察し, 項目90では「わ
 たくしなどから『あなたは～年生まれですね』と言われて『そうです』または
 『はい』と答えるとき, ふつう何とおっしゃいますか」と質問した。その結果
 はTable II-2 のようである。

Table II-2 「はい」の2問間の相関表

項目90 項目7	共通語形	方言形	計
共通語形	296	114	410
方言形	22	48	70
計	318	162	480

$$\chi^2 = 44.44 \text{ (自由度1)} \quad P < 0.001$$

この両者への答えは無関係であるという仮説は捨てられるのである。

語彙

特徴的な語について調べるために, 前回調査の報告書Ⅲ4.1で述べた「日常
 基本語彙」406語から, 方言形でもあらわれそうなもの10語を選んで調査語と
 した。その調査語と, それに対する反応形とをあげておこう。

1. 「いつも」→イツモ (88.2), トース (10.4), その他 (1.2), 不明
 (0.2)

2. 「いらっしゃい」→イラっしゃイ (67.9), ゴザへ (24.4), ハイッテ
 クネヘン (3.0), その他 (2.4), 不明 (2.4)

3. 「驚く」→オドロク (65.0), オボゲル (32.7), ハトモタ (1.8),

その他 (0.6)

4. 「騒ぐ」→サワグ (96.1), ホコル (2.4), その他 (0.6), 不明 (1.0)

5. 「ずいぶん」→ズイブン (93.5), コーデ (1.0), ズンデネ (0.4),
その他 (4.9), 不明 (0.2)

6. 「坐る」→スワル (88.0), ネマル (10.4), その他の方言形 (0.8),
その他の共通語形 (0.4), 不明 (0.4)

7. 「だめだ」→ダメダ (89.8); ヤジャガね (9.3), その他 (0.4),
不明 (0.6)

8. 「はずかしい」→ハズカシー (87.2), ショースー (10.3), カヌ (1.8)
その他 (0.8)

9. 「もう」→モー (68.9), アト (29.9), その他 (1.0), 不明 (0.2)

10. 「留守番」→ルスバン・ルスイ (79.3), ヨスリ (20.1), その他 (0.6)

以上, 「いらっしやい」「驚く」「もう」がもっとも方言形がよくあられ,
「騒ぐ」「ずいぶん」はもっとも方言形のあられない語であることがわかる。

なお, 語彙については, 「日常基本語彙」406語から221語を選んで, これ
が庄内地方で地理的にどのように分布しているか, 江戸時代の庄内語をあげて
いる『浜荻』所載の427語が現在の庄内地方でどのように残存しているか, の
調査もしたが, これは当面の共通語化とは直接の関係がないので, ここでは省
略するが, 簡単に言えば, 前者では, 221語の中, 85~90%は共通語形で答え,
方言形で答えているものも, 各地点とも同じ形で, 特定の地理的分布を示すも
のはごくわずかであり, 後者では, 調査地点27で平均して, 残存語数は20歳台
の男で191語, 60歳台の男は226語となり相当の差が見られ, 全地点で失われ
ているのが33語 (7.7%), 全地点で残っているのが18語 (4.2%)であった。
詳しくは前回の報告書を見られたい。

3.2 新語

共通語化の要因の一つとして, 新語を知っているかどうかを考えて, 新語の
問題として, 次の5語を調査語とした。

コンクール, アルバイト, 六三制, 鉄のカーテン, アプレ・ゲール

これらがどの程度理解されていたかについては、正確な数字は前回の報告書にも示されていない。これは今回調査と直接比較ができないので、今回の集計に当たっての前回調査の集計にも加えなかった。そこで、前回の報告書の図36から大体の点数を推定すると、次のようである。理解の度合いの高い順に並べる。

アルバイト（82～3）、六三制（68～9）、コンクール（62～3）、鉄のカーテン（48～9）、アプレ・ゲール（47～8）。

新語の理解を決定する要因としては、学歴が一番きいているようであり、次に年齢、新聞の利用、とつづいている。性では男性の方がどの語も理解度が高いが、その差はそれほど大きいものではない。アプレ・ゲールを除いた4語について、音声の点数との相関関係を見ると、その係数は0.42であった。

3.3 共通語化の要因

前回調査の報告書II 4によれば、次のようである。

共通語化の要因は、一つ一つ切り離して考えれば、

1. 年齢
2. 学歴
3. 新聞の利用
4. 居住状況

が目立つけれども、これらは決定的な要因とはならない。さらに、いくつかの要因を組み合わせて考えると、

1. 年齢×学歴
2. 学歴×新聞の利用
3. 年齢×言語関心×25歳までの居住状況
4. 年齢×発音教育×25歳までの居住状況
5. 学歴×発音教育×25歳までの居住状況

がいちじるしいものとして出てくる。しかし、これとても決定的な要因とはならない。いま、これらをまとめて、

1. 性×年齢

2. 学歴

3. マス・メディアの利用（新聞の利用×ラジオの利用×映画の利用×単行本を読む・読まない）

4. 居住状況（25歳までの居住状況×25歳以後の居住状況）

5. コミュニケーション（遠くへ行ったことがあるか×東京との行き来）

の五つの要因、あるいは要因群として、これらを束ねても、なお完全に決定的とはならない。推測の立場からは、重相関係数0.58の程度にしか決定できなかった。白河地域の調査では、重相関係数0.69であったが、決定的でない点には変わりがない。

前回調査の報告書は以上のように述べて、重相関係数が思うように上がらなかった原因として、心理的な要因を考慮しなかったことと、調査員間のずれがあったことを指摘している。心理的な要因については、共通語化を決定すべき有力なものがまだない現在、今回調査でも試みなかったのは残念である。調査員間のずれについては、なるべく少ないように努めた。前回の場合、ずれの大きかった二人の調査員の分を除いて計算すると、重相関係数は0.79まで上がり、かなり満足すべきものとなっていると述べている。この種の調査における調査員の質の向上、保持が大切なことを見るべきである。

なお、ここでは個々の要因について前回調査の結果をあげることはしなかった。それらは、両度の調査の比較のところ、第七章で必要に応じて言及する予定である。

第Ⅲ章 継続研究の概要

1. 意 義

すでに第 I 章でもこのことについては触れたが、この調査の意義は、継続して調査することによって言語や言語生活の動態を捉えるということにある。残念ながらここでは継続といっても、約20年の間隔を置いての2回の調査であるが、それでも1回ずつの調査ではわからないことが数多く明らかになった。

1回の調査の結果はあくまでも共時態での調査である。1回の調査で、青年、壮年、老年の言語はかくかくであると言っても、それはその時点でのことであって、必ずしもその青年が老年になるとき、今の老年層の人々と同じになることを意味しない。人の寿命といった比較的動物学的なものであっても、たとえば今の平均寿命がこれこれだからあと平均何年生きられる、ということは言えない。戦争・凶作、いやこういう寿命にとってのマイナス要素だけでなく、プラス要素もこれからどんなものが起こるか予測できないのである。まして、言語というものは社会そのものにかかわっているため、1回の調査ですべてわかったとは言えないのである。こういう点で、今までの言語研究には大きな欠落があったとは言えるであろう。

もちろん、ある個人の言語、言語生活の変遷を追跡調査したものがないとは言えない。たとえば作家の作品の年代順の分析などもこれに入るであろうが、これは一般人とは言えないであろう。また、特に幼児の言語発達の過程にはいくつかの調査がある。しかし、幼児期を過ぎると児童の言語量がいちじるしく増大するために、個人研究者の手では及ばなくなってくる。そこで、個人を対象とした追跡調査では、国立国語研究所の『小学生の言語能力の発達』とか、『中学生の漢字習得に関する研究』のようなものを限度としているようである。個人が学校というワクを外されると非常に捕捉しにくいので、それ以後個人を追跡調査したものはあまり見当たらない。

いうまでもなく、こうした個人個人の言語や言語生活の追跡的な調査は今後

必要であろう。しかし、これがにわかには実現不可能である現在、まずこのことを考えるためにも、この調査研究の意義は大きいであろう。

2. 方 法

このことについても第Ⅰ章で触れた。地域社会全体としての変容を見るために、前回調査同様サンプリングによって、地域をよく代表するように被調査者を選び、その結果で、鶴岡市という地域社会全体の20年間隔の変容を推定しようとしている。

比較をするためには、同じような調査票で調査しなければならない、と考えて今回の調査票を作ったことについては第Ⅰ章で既に述べた。

調査データはパンチカード化し、電子計算機によって集計作業を行った。国立国語研究所の電子計算機はこの集計の時期にはカード読み取りができなかったので、統計数理研究所の電子計算機によった。この点で、この調査研究グループのうち、統計数理研究所に属する人たちの努力は大きかった。

集計は大ざっぱに言って三つの部分から成る。

第1は、個々の調査項目ごとの集計である。これは、調査項目ごとの共通語で答えた比率の両調査についての個別的記述および比較から成っている。この結果については第Ⅵ章で触れるが、「音声」「アクセント」「文法」「語彙」「新語」のそれぞれについて述べる。

第2は、この五つの項目に属する各小項目を合計するという立場からの集計である。たとえば、音声については、31項目質問して、そのそれぞれが、共通語的発音で反応したか、方言的発音で反応したかを面接によって記録してきている。この前者に1点、後者に0点を与えて合計すれば、一つも共通語的に発音しなかった0点から、すべて共通語的に発音した31点まで得点が分布することになる。この得点を発音に関する共通語化をあらゆる指標と考えて使うことにしている。これは、前回調査のときとったものと同じ方法である。元来は、各

項目の全言語生活に対するウェイトによって数値を修正すべきであろうが、そのウェイト修正はなかなか困難なので、近似的にこの数値で共通語化をあらわすのである。

この第2の集計方法による結果は第七章に示してある。前回調査でも、共通語化を示す指標として発音で示される点だけを使っている。今回も、この発音とアクセントについてだけ総合の集計をし、文法・語彙・新語は、この観点からしても、共通語化の程度を必ずしも十分に反映しないと考えて省略した。発音については比較の数も多く、また重要なこの点についての発音の特徴を洩れなく調査しているのに対して、文法・語彙はそれぞれ龐大な体系のうちのごく一部だけを調査したために必ずしも共通語化を見るのには十分でない、と考えたからである。

また、前回はごく一部にしか使わなかったが、今回の集計ではこの発音の31項目をその音声的特徴によって九つの種類に分け、その種類に属する項目を総合することを試みた。しかし、この種類に属する項目の数は二つしかないものから八つあるものまであり、必ずしもその種類の重要性、あるいは発音現象全体への貢献度を反映していないから、取り扱いに当たってはその点に留意しなければならない。

第3はパターン分類やPOSAを使つての分析である。これは主として第八章で記述する。

パターン分類の数量化は、林知己夫のいわゆる「数量化理論第Ⅲ類」によるもので、詳しくは、林知己夫・樋口伊佐夫・駒沢勉『情報処理と統計数理』産業図書1970、三宅一郎『社会科学のための統計パッケージ』東洋経済新報社1973などを参照されたい。

パターン分類の数量化、略してパターン分類は、数量化理論第Ⅲ類と呼ばれる多変量解析の一つの方法である。多変量解析とは、「何らかの対象に対して多種の観測値からなる変数が与えられている場合、これらの変数を個々に独立させずに、変数間の相互の関連を考慮しながら、客観的な基準を与える分析」である。パターン分類の考え方は、似たものをなるべくまとめて、違ったものとの隔たりの程度をパターンにあらわそうとするものである。しかし、実

実際は、この場合回答のパターンはかなり複雑である。したがって、人の手によって似ているかどうかを識別するのはかなりむずかしい。また、これはいわゆる名人芸による主観的なものでなく、類似の程度を何らかの客観的な数値であらわした方がいい。この数学的なあらわし方の一つがここでいうパターン分類である。要するに、パターン分類とは、「それぞれの回答に数値を与えることによって、回答パターンを数量化し、これを用いて、質問に対する回答の類似性と、回答した人々の類似性の両面を描き出そうとする方法」である。

パターン分類では、パターンの構造を解析するに当たって、もっとも重要な構造から順次抽出される。抽出された順序に、第1軸、第2軸……第 n 軸とする。この場合第5軸まで出してあり、これを図示する場合、 ${}^1X \cdots {}^5X$ としてあらわす。

各軸に与えられる項目や被調査者の数値は相対的なもので、数値間の差は相対的意味での類似度を示す。この数値は理論的には $+\infty$ から $-\infty$ までの範囲をとるが、 $+$ や $-$ の符号は計算の途中で便宜的に与えられるもので、特別の意味はない。各軸で与えられた数値の総和は0となるように計算されている。

原点から大きく離れたところにプロットされたものは、その軸を特徴づけるものであり、原点近くのもの、その軸の性格を解釈の上では除外して考えた方がわかりやすい。いずれにせよその解釈に当たっては、これを適用する領域の常識とのつき合わせが必要である。

POSAは、Partial Order Scalogram Analysisの略で、「部分尺度解析法」と訳される。これは、林知己夫「人間の心を測る」(「数学セミナー」1971年12月号)、林知己夫・林文「態度数量化の一方法Ⅲ」(「統計数理研究所彙報」vol 20, No. 2. 1972)などに詳しい説明がある。

ここでは、たとえば、いくつかの項目について共通語形で答えたか方言形で答えたかを聞いたとして、全部共通語で反応したものと、全部方言で反応したものが両端にくることになる。1項目ずつ共通語化するとして、つまり1段階だけ共通語化するとして、どの順で全部が共通語化したものに至るかの筋道が考えられる。一つだけ違っているもの同志を線で結ぶと、一つの端から他の端へ一連のつながり(これを物差しとする)がいくつかできる。多くの場合、

左端と右端とを通るものとその中間を通るものとに分けられる。この場合、物差しは、その数項目による共通語化の過程を示していると解釈することができる。この作業をするとき、普通、頻度の多くないものは無視して考える。

このようにして作った図をいろいろに解釈していくのであるが、言語について適用した最初のものとして、江川清「多変量解析の社会言語学的調査への適用例」（国立国語研究所論集4『ことばの研究Ⅳ』）があるので、これについて見られたい。

以上のパターン分類も POSA もともに多くの変数の処理を必要とするので、電子計算機を利用しなければ不可能である。これらの方法が今回はじめて社会言語学的調査に使われたのもこのためである。なお、前回調査についても今回これを使ってみて比較した。いずれにせよ、実際の分析を見た方がよくわかると思われるので、第Ⅷ章を参照されたい。

3. 結果の概要

以上の方法により分析した結果は上にも述べたように、第Ⅵ～Ⅷ章で詳しくは述べるが、まず、ここで得られた結果のあらましを述べておくことにしよう。

3.1 個々の項目ごとの結果

ここでは、第Ⅵ章で述べることのあらましを述べる。

音声

音声では、個々の問題ごとと言うより、31の項目を九つの音声の特徴に類別したものについて述べよう。

まず、この九つの類の共通語化の程度の順は前回調査と今回調査とは大きな変動はなく、それぞれ20年間に共通語化が進んだが、その現在の共通語化にはいろいろの段階がある。たとえば、カを方言でクツと言っていたもの、セを方言でシェと言っていたものなどは共通語化はほぼ完成したのに対して、中舌Ⅱ

やイとエとの混同はまだ方言的発音が残っている。

共通語化の進んだものでは、音声的に一つの類別の中の項目間の差があまりない。これは、その音声が共通語化し安定したものである。逆に、共通語化の進んでいない類では、項目間のズレがいちじるしく、したがって不安定である。

「イキ（息）」と「エキ（駅）」、「カラス（鳥）」と「カラシ（辛子）」のように、共通語化の遅れている中舌、i/eなどの類の中でも、方言的な発音では同音語になるような組み合わせのある項目は、共通語化の度合いが特に低い。

音声の部類によって、年齢による差がほとんどない、全般的に共通語化の進んだ、唇音性Iや口蓋化のような「平板型」とでもいうべきものと、年齢が高くなるにつれて共通語化の度合いが低くなる「下降型」とでもいうべきものとに分けることができる。「下降型」の曲線を示すものでは、35～44歳を境に前後で相当大きな差がある。また、「平板型」と「下降型」とのほかに25～34歳ぐらいの年齢層が他の上下の年齢層よりも共通語化の程度の高い「凸型」とでもいう型が存在する。この「凸型」は、全体からすると共通語化の進んでいないものに見られるようである。このことからするならば、共通語化は、年齢から見ると「凸型」から「下降型」へ、さらに「下降型」から「平板型」へと進むようである。もちろん、「凸型」の前に全体として低い水準での「平板型」が存在したとは思われるが、前回調査にもこれはなかった。もしこの二つの「平板型」を区別するとすれば、共通語化が非常に進んだ方を「高原型」、非常に遅れているものを「平野型」とでも名づければいいであろう。

学歴別では、低学歴層と中・高学歴層との間に共通語化に差が見られるが、これはあるいは年齢の差を反映しているのではないかと思われる。

アクセント

アクセントの共通語化は、上の音声の共通語化に比べると大変遅れている。今後かなり長期間かからないと共通語化しないであろう。その中でも調査した2、3音節語の中では、3音節語の方が遅れているのは、型のバリエーションが多いことに原因があらう。頭高の語の方が共通語化しやすいようである。

アクセントの共通語化には性はあまり関係ないようである。年齢別では、ア

クセントの共通語化の段階は大ざっぱにいて、「凸型」から「下降型」への移行期にあるようである。学歴の差は多少は反映しており、低学歴層と中学歴層との間に大きな差が見られる。

文法や語彙の項目では、かえって方言化したと見られることがあるが、この原因については、第Ⅶ、Ⅸ章で考察することにする。ただ、これは、文法や語彙について鶴岡市の現実を忠実に反映しているかどうかには多少の疑問なしとしない。一つの目安として見るべきものであろう。

文法

「起きる」の命令形と「する」の否定形では、前者が方言形が多く出たのに対して、後者は共通語形で答えたものが多かった。

一人称の複数で複数を示す接尾辞に「カタ」を使う人は半数以上いる。

「お前を」「君を」に当たる言い方では、「お前」「君」の部分にも、「を」に当たる部分にも方言形は60%以上見られた。

「見に行く」の「に」を「サ」と言うのは、庄内の方言の特色であるが、半数以上に見られるものの前項よりも少なかった。

「行くけれども」の「けれども」, 「行くから」の「から」も、左に挙げた共通語形は30%内外の人が使っているにすぎない。

「静かなら」の「なら」という活用語尾は、前項よりも方言形の答えが多い。

「強かったなあ」と過去を回想する言い方で、共通語形で答えたのは40%強であった。

「この絵はあなたを書いたのか」の「書いたのか」の部分についての分析をその次にしてみた。「書いた」のところは「カイタ」が圧倒的に多く、「お～になる」「～れる」などの共通語形はあまりなかったが、前者は22%程度であって割に高かった。この地方での「れる・られる敬語」の人気のなさを示しているのであろうか。疑問をあらわすには「デスク」が一番多かった。この言い方をていねいな段階に三つに分けてまとめると、一番ていねいな段階は28.2%、普通の段階52.5%、ていねいでない段階14.4%のようになる。

語彙

語彙では9項目を調査した。うち2項目は今回だけの調査である。

「いつも」や「るすばん」に当たる固有の鶴岡方言は非常に減りつつあるようである。両者とも方言語形は若い方では廃語となっているから、いずれ鶴岡方言から消え去るのではないかと思われる。

「いらっしゃい」に当たる方言形は、年齢で34歳以下と35歳以上とでは方言の出方がかなり違っている。もちろん後者に多く現われる。この項目は答えの種類が多いので、比較してもどのくらいの信頼性があるかわからず、語形ごとの前回調査の結果は表示しなかった。

「もう」は今までと違って、逆に若い方に方言形の多いものである。「アト」「アド」が方言形であるが、同じ副詞に意味は違うが「あと」があるので、あるいは若い人は方言であることに気がつかないのかも知れない。前回調査より方言化した。

「おどろいた・びっくりした」の方言形、「オボゲタ」「ハトモタ」は、前者は前回より減り、後者は前回より増えたこと、同じ共通語形「オドロイタ」「ビックリシタ」は同様前者は前回より減り、後者は前回より増えたことが注目されるが、この理由はむずかしい。

「はずかしい」についても、方言形「ショースー」「ショス」はごくわずかである。

「ずいぶん」という意味の「コーデ」を使うかどうかを今回は聞いた。この語を知らない、とする人は若いほど多くなっているから、いずれ忘れ去られる語であろう。

「あげる・やる」をどう言うか、「つらら」をどう言うかは今回調査で初めて聞く項目である。前者に対する方言形「クレル」は共通語にも同じ語形があるため、意味としては方言的であるにもかかわらず、まだ相当程度残っているようである。後者に対する「シガ」はかつては相当強固であったが、今や急速に減退しつつある語形のようなものである。

新語

今回調査では「ボクシング」「乗車拒否」「ミニスカート」の3語を調査しているが、事柄の性質上、前回調査との比較はできないので、個々の結果については第Ⅶ章に述べることにし、ここでは触れないでおく。

鶴岡弁に対する意見

鶴岡弁を保存すべしとする意見は、低年齢、高学歴の人に支持されており、これらの人はまた、伝統的な生活様式を改変すべしとする意見を持っているから、この2点については「改変」と「保存」との意見の傾向は正反対だと言える。

鶴岡弁・東京弁に対するイメージ

軽快で一重苦しい、の組み合わせでは、東京弁が前者、鶴岡弁が後者、深みがある一薄っぺらだ、の組み合わせでは、鶴岡弁が前者、東京弁が後者である傾向が強いのは鶴岡における一般的なイメージを代表するものであろう。結局として、好きかきらいかとなると、若い方で鶴岡弁が好きが多くなるのに対して、特に25歳以上では差がなくなるが、傾向として老人の方が東京弁にわずかに傾いているようである。

前項との相関では、鶴岡弁にいいイメージを持つものは、鶴岡弁を保存すべきとする傾向が強いことがわかった。

場面によることばの使い分け

家族に対するとき、隣人に対するとき、顔見知りでない鶴岡市民に対するとき、旅の人に対するとき、共通語を使うか、方言を使うかを聞くと、この順にだんだん共通語が多くなるようで、隣人と一般市民との間に大きな段落がある。前回調査と比較すると、一般市民、旅の人に共通語を使うと答えた人が非常に多くなった。

調査が終わったと被調査者が思った段階で調査員が被調査者に道を聞いている。調査員、つまり旅の人へのことばが、今の調査の場面で旅の人に共通語を使うか方言を使うかの答えと、すなわち被調査者の言語使用についての意識と実際とが一致するかというと、一致する度合いが強いことが明らかとなった。

3.2 合計得点による分析

ここでは、第七章で述べることのあらましを述べる。

主として、音声とアクセントについて、前者の31項目、後者の5項目が共通語で反応した場合1項目に1点を与えるというようにして、「音声得点」「ア

アクセント得点」を被調査者各人に与え、それぞれの社会的な要因によってグループを作り、それぞれのグループ間の比較をするとともに20年間の違いを見ようとする。

音声得点の差異

この得点のいろいろな分布からして、前回調査から今回調査までの20年間に、相当程度共通語化が進んだことは明らかである。点数にすると、31点満点中、前回の17.7点から今回の25.8点と約8点上がっている。

年齢別に見ると、前回調査では、25～35歳をピークに両側が低くなっていたが、今回調査では調査年齢の限りでは若いほど共通語化しており、この点で構造が変わったようである。若い層は今回調査の場合上限近くまで共通語化しているから、近い将来には鶴岡市民の音声は共通語のそれとあまり変わらなくなるであろう。

同一年齢集団の20年間の比較をしてみると、35歳までは若いほど強い傾向はあるが、共通語化しているようである。それ故、いわゆる「言語形成期」を過ぎてもその人の言語は変化しうるのではないかと思われる。

学歴の共通語化の要因としての力は前回より弱くなったようである。

アクセント得点の差異

アクセントは音声に比べて共通語化の程度はいちじるしく遅れているが、それでも共通語化の道は歩み始めたようである。

年齢別に見ると、前回調査では25～34歳がピークをなしていたが、今回調査では20～24歳の層がピークとなり前回より少し若い方に山がずれたような形をなしている。

音声・アクセントの共通語化に影響する要因

性・年齢・学歴の間では、今回調査の結果では、年齢が要因として一番きいており、学歴がそれに次ぐ。この点前回調査より学歴の力は弱くなっている。性は前回調査ほどの差もなくなり、今回調査ではほとんど共通語化に影響を及ぼしていない。

まず被調査者本人の言語形成期における居住経歴が、庄内地方に傾いているものよりそうでないものの方が共通語化していると言える。前回調査ではこれ

が要因としてかなりきいていたのに比べれば、影響力はかなり弱まったようである。

両親や配偶者の出身地との関係では、いずれも音声よりアクセントの方が強く影響しているようであるが、両親のうちでは、母親の影響の方が父親よりも大きい。この父親と母親の影響の差は前回調査ではあまり違わなかったものであり、また、前は音声得点ではあまり影響はないと報告されている。今回調査の場合、母親よりも配偶者の出身地の方が影響力が強い。前回調査では配偶者の出身地による分析はしていない。

職業は学歴よりも更に、共通語化への影響力は弱い、と言えそうである。これは前回調査と同じ傾向である。

被調査者の興味や関心の対象が、鶴岡や庄内地方の内にあるか外にあるかでは、外にある、つまり全国志向の方が共通語化していると言えるようである。これに相当する前回調査の結果も、質問は違うが、同じような傾向を示している。

鶴岡での生活のやり方は改変すべきだとする意見を持つものと保存すべきだとの意見を持つものとの間には共通語化にはあまり差がないようであるが、鶴岡弁に対する意見として、保存したいとする意見の人の方が、できるだけなくしたいとする意見の人よりも共通語化している。

生活空間の広さと共通語化は、予想されるような傾向を示すことが多いが、差はそれほど大きくなく、共通語化を決定する要因としてはあまり重要ではないようである。この点は前回調査よりさらに弱くなったが、これは第Ⅴ章で述べるように市民一般の生活空間の全般的広がりが進んだ傾向と関係があるろう。

テレビの視聴時間では、その短い人の方が長い人より共通語化している。これはテレビはむしろ特に壮年以上では有職者は見ることができなのに対して、無職のものが見ていることに関係があるろう。若い人ではテレビを長く見るかどうかは共通語化にはあまり関係はない。

世帯の手取年収と共通語化の程度とはあまり関係がない。

共通語化の要因ではないが、敬語の使い方や、旅の人に話すことば、調査員に対することば、調査全体からの判定と共通語化の程度との関係は相当高い。調査員へのことばが共通語であるかどうかと高い関係があることから、音声お

よびアクセントを指標とした共通語化の程度が被調査者の実際の言語生活をよく反映していると言えるであろう。

各要因の比較

音声に及ぼす要因でもっとも強いのは年齢で、これに次ぐのが学歴・職業である。性は要因としてほとんどきいていない。前回調査で強い要因であった居住経歴や両親の出身地は今回調査では音声の共通語化への影響力を弱めたようである。

アクセントに及ぼす要因も、音声と同様に、年齢・学歴・職業が強い。性はまったくきいていない。音声では目立たなかった、居住経歴・両親の出身地が要因として重要なものとなっている。このようなものが強くきいていることは、アクセントが一度身についたらあまり変化しないことを示しているようである。

文法と語彙に及ぼす要因

文法は、上の音声やアクセントとは大分違っている。すなわち、学歴が強くきいてはいるが、年齢はそれほどきいていない。すなわち、文法の共通語化は知識に深く関係しているのではないかと思われる。居住経歴や両親の出身地も強く影響している。これらは、共通語化のまだ進んでいないものには強い影響を及ぼしていると言えるようである。

語彙の方では、年齢・学歴がもっとも大きな要因となっており、性は要因としてあまりきいていない。居住経歴・両親の出身地も強く影響しており、また、全国志向型かどうかもきいている。

3.3 パターン分類による分析

ここでは、第Ⅷ章で述べることのあらましを述べる。

場面によることばの使い分け

家族同士（「家族」と略する）、近所の顔見知りの人（「隣人」）、鶴岡の顔見知りでない人（「市民」）、および旅の人（「旅人」）に対して共通語を使って話すか方言を使って話すかの内省を被調査者に聞いて得た答えを使っての分析である。この結果わかったことは次のとおりである。

(1) 方言社会の人がまず方言でないことばを使い始める相手はこの四つの場

面では「旅人」である。

(2) 「家族」へのことばがもっとも共通語化が遅れる。

(3) だんだん共通語化するタイプには2種類がある。一つは、共通語化しやすい順(「旅人」→「市民」→「隣人」→「家族」)にだんだん共通語と方言とが混ざることばとなって、一度全部が混ざる状況になったのち、また共通語化しやすいものから順に共通語となるものである。もう一つは、共通語化しやすい場面で方言から混ざるとなりさらに共通語となって共通語化を完成した上で、次の場面を同様に共通語化していくものである。

(4) そのほかに、「家族」「隣人」に方言で、「市民」「旅人」に共通語で、というように完全に分けているグループが存在する。

(5) 完全に共通語化していると見られる被調査者は、この分析にかかったものの7.0%であり、正反対の完全に方言的な被調査者は同じく20.5%である。前者には男性が多く、後者には女性が多い。後者には低学歴のものが多い。年齢別では、前者が25～34歳を頂点とする凸型を示すのに対して、後者は高年齢層になるほど多くなる。前者は言語形成期を庄内以外で過ごし、給与生活者・工具が多く、後者は言語形成期を庄内で過ごし、無職・パートのものが多い。この方言的なものは、鶴岡の伝統を守って生活し、鶴岡弁もできるだけ保存したいと考えている。

(6) (3)で述べた第1のグループの人は、学歴の高いものが多い。庄内地方以外で言語形成期を送り、給与生活者や工具として働いている。

(7) (3)で述べたもう一つのグループの人は、若い人で高学歴のものに多い。言語形成期は庄内地方で過ごし、給与生活者と学生に多い。生活の仕方は合理化を志向するが、鶴岡弁は守ってほしいと考えている。

(8) (4)で述べたグループは若い人で高学歴、言語形成期は庄内地方で過ごしたもので学生が多い。(7)で述べたものと似ていると言えよう。

アクセント

アクセントについてパターン分類をして考察した結果は次のとおりである。

(1) 5項目の共通語化の順序問題では、今回調査では、共通語化に二つの主なグループが存在する。第1のグループは「ハタ」または「セナカ」が他の項

目より早く共通語化し、「ウチワ」の共通語化がもっとも遅れるものである。第2のグループは「ネコ」「カラス」および「ウチワ」が先に共通語化し、「ハタ」「セナカ」の共通語化が遅れるものである。

(2) これをもう少し詳しく見ると、前回調査では、(A)「ハタ」および「ネコ」→「セナカ」→「カラス」→「ウチワ」の順に共通語化するものと、(B)「カラス」→「ウチワ」→「ネコ」→「ハタ」および「セナカ」の順に共通語化するものとに大別される。

(3) 今回調査では、(A)「セナカ」→「ハタ」→「ネコ」→「カラス」→「ウチワ」の順のグループ、(B)「ネコ」→「カラス」→「ウチワ」→「ハタ」→「セナカ」の順のグループ、(C)「ハタ」→「ネコ」→「カラス」と来て、最後に「セナカ」に行くものと「ウチワ」に行くものとに分れるグループの三つに大別される。

(4) このように、前回と今回の路線が少し違う理由については現在のところ今後の課題とせざるを得ない。

(5) (3)であげなかったグループのうちの一つは全部を方言で答えたもののグループである。このグループは全部の40.0%を占める。このグループを構成するものは、庄内生まれ庄内育ちで年齢は高く学歴は低い。商店主や工場経営者でなければ無職・パートのものが多い。地域のことに関心が深く、将来住みたいところとしては鶴岡や庄内を希望している。

(6) やはり(3)であげなかったグループの他の一つは共通語化の進んだグループで、9.2%を占めている。このグループは、年齢は低く、学歴は中程度が多い。出身地や居住経歴は非庄内的で、学生が多く、パートは少ない。ふだんから共通語で話しており、全国志向で、将来住みたいところでは庄内以外をあげる。団体に加入し役員をしているものが多い。テレビ視聴時間は短い。

(7) (3)で述べた(A)の路線を通るものは、7.0%を占める。年齢では35～44歳が多い。学歴は低もしくは中学歴で、居住経歴は庄内的。東京との交流は少なく、地域志向型で、方言をよく使う。女性が多く、主婦が多い。団体には加わっていないし、伝統を重んずる。

(8) (3)で述べた(B)の道を通るものは、16.8%を占める。男性が多く、若い方

が多い。中学歴のものに多いが比較的学歴は高い。学生が多く、商店主やパートが少ない。関心は全国志向型で、東京との交流では電話や手紙を使うものが多い。ふだんのことばは共通語で、テレビの視聴時間は長い。

(9) (3)の(C)をとるもので、16.0%を占める。年齢では、若い層と老人が多いという凹型である。学生が多く、関心は全国志向型で、団体には加入していない。

(10) 「ネコ」と「カラス」との二つのパターンは類似している。すなわち、反応は類似している。

音声

音声については項目数が多いので、整理がむずかしいが、パターン分類に基づく POSA 分析の結果の主な点は次のとおりである。

(1) 音声の共通語化の経路にはかなり異質な二つのタイプがある。

(2) 一つは、口蓋化、唇音性 II を始めとし、鼻音化、有声化の項目から始まり、中舌 I, II, i/e I がこれに続き、最後に i/e II が共通語化するものである。

(3) もう一つは、口蓋化、有声化を始めとし、中舌 I, i/e I の項目から始まり、i/e II が次で、最後に唇音性 II や鼻音化が共通語化するものである。

(4) 共通語化のいちじるしいグループの特性は、低年齢・高学歴で、居住経歴でも庄内地方以外で生活したものが多い。職業では学生が多く、商店主・工場経営者あるいは無職が少ない。関心は全国志向、鶴岡での生活は改変した方がいいと考えているが、一方、鶴岡弁はできるだけ保存したいとする意見が強い。もちろんふだんのことばは共通語が多い。

(5) 共通語化の遅れているグループは上と逆に高年齢・低学歴・庄内育ちが多く、地域志向型であり、伝統的な鶴岡の生活を守りたいと考えている。鶴岡弁に対してはあまりいちじるしい意見の方向はない。職業は無職が多い。

(6) (2)で述べたグループのうち共通語化の進んだ方の半分(他の共通語化の遅れた方については(5)で一括して述べた)は、25~34歳の層のものもも多い。学歴では特にこれといった特徴は見られない。職業別では主婦、パートが多く、学生が少ない。居住経歴では非庄内グループが多いにもかかわらず、

地域志向型のものが多い。また、鶴岡弁はなくすことに賛成しているが、本人のふだんのことばは共通語と方言とを混ぜて使っている。団体などには加入していない人が多い。

(7)(3)で述べた経路を通して共通語化するグループのうち、共通語化が進んでいる方のグループは、15～24歳のもは皆無である。そして25歳以上のものでは、どの年齢層が多いということはない。居住経歴、興味や関心の方向でも特徴はない。しかし、学歴は高いものが多い。職業では給与生活者が多く、無職・学生が少ない。一般的にふだん共通語で話しており、鶴岡弁はなくす方向の意見に賛成している。他方、生活の仕方は鶴岡での伝統に従う方がいいと考えている。

以上で音声の分析を終わる。

パターン分類を、場面によることばの使い分け、アクセントの共通語化、音声の共通語化の3方面に適用してみた。この順に容易であり、また成功したように思う。これからの方向としては、これらの新しい分析方法をどのような調査デザインをすることによってうまく使うか、ということを考えるべきであろう。

第IV章 パネル研究の概要

1. 意義

継続研究は、地域社会の継続的比較を目的としている。これに対して、パネル調査は個人の追跡調査とすることができる。この点で、第Ⅲ章の1.意義で述べたような、これから必要となる個人の言語や言語生活の追跡調査のうちの一つである、とすることができる。ただ間隔が20年であるから、完全な追跡調査とは言えない。しかし、言語関係では成人について行った数少ない調査ということになる。ここにこの調査の意義がある。パネル調査の被調査者は、今や地域社会の縮図というわけにはいかないから、この調査で地域のことを言うことはできない。

2. 方法

パネル調査では、まず、前回調査の被調査者を見つけ出すことが重要である。この被調査者探しには、鶴岡市立図書館長（当時）の南波三雄氏がその知識を傾けて当たって下さったため、前回調査の被調査者508人のうち126人（24.8%）の所在が明らかとなった。約1/4であって、これはほぼ満足すべき数であるといえよう。

508人から126人を除いた382人については、内131人は心当たりの住民票を調べた結果も不明だったもの、10人については確実に死亡しており、1人については確実に転出していた。

この126人について、継続調査と全く同じ調査をしたわけである。そして、126人の前回の調査票を抜き出して今回の観点から集計しなおし、すべての項目に

ついて前回との対応がつけられるようにしてある。

ここでは、言語のすべての項目に関して、前回と今回が共通語形で答えたか、方言形で答えたかを、性・年齢・学歴別に集計した。また、音声・アクセント・文法・語彙については、合計点について、前回と今回との比較をした。これらについては、概略をこの章の後ろで、詳細を第Ⅸ章で述べる。

3. 調査の実施と被調査者

3.1 調査の実施

パネル調査の被調査者に対しては2回に分けて調査を実施した。1回目は、予備調査のときであって、期間は3日間、調査員2人であるが、この調査に専念したのではない。2回目は、本調査の内、後の方の7日間を主としている。調査員は10人であり、これは本調査を主体にして、その間に入れたという感じであった。調査員ごとの被調査者数はTable I-6に示してある。調査日ごとでは、3月6日1人、8日1人、9日22人、10日30人、11日14人、12日10人、13日4人、14日6人、15日3人計91人である。あと2月の予備調査で、21日5人、22日11人、調査員番号6が10人、同7が6人であった。

これをまとめるとTable IV-1のようになる。

Table IV-1 パネル調査の実施

	本調査済	予備調査済	計	不能	合計
男	40	9	49	10	59
女	51	7	58	9	67
計	91	16	107	19	126

3.2 被調査者

以上のようにして得られた被調査者107人についていくつかの社会的集団ごとに見てみよう。

Table IV-2 被調査者の性・年齢別構成（パネル調査）

	35～ 39	40～ 44	45～ 49	50～ 54	55～ 59	60～ 64	65～ 69	70～ 74	75～ 79	80～ 84
男	3	2	8	5	11	8	6	4	2	0
女	2	1	7	4	10	14	9	5	5	1
計	5	3	15	9	21	22	15	9	7	1
%	4.7	2.8	14.0	8.4	19.6	20.6	14.0	8.4	6.5	0.9

年齢の低い方で非常に少ないことがはっきりしている。既に述べたように、前回の調査で15～24歳の層のサンプルサイズが1/2になっていることが大きく響いている。

Table IV-3 被調査者の学歴の性・年齢別構成（パネル調査）

学歴別に見るとTable IV-3のようになる。このパネル調査では被調査者の数が少ないので、学歴なしから新制中卒業までを「低学歴」、旧制中学・新制高校の段階を「中学歴」、それ以上を「高学歴」というように3段階に分けることにする。

	性		年 齢			計
	男	女	35～54	55～69	70～	
低学歴	32	30	17	35	10	62
中学歴	11	24	12	17	6	35
高学歴	6	4	3	6	1	10
計	49	58	32	58	17	107

年齢では55～69歳の方が35～54歳より少し高いことが注目される。これは、前回調査後教育を終えて高学歴を得たものは別の土地へ移った可能性が高いのに対して、当時の学歴とそのまま同じである層は安定しているためであろう。このようなこともあるので、パネル調査の被調査者は必ずしも地域特性をそのまま代表していないと考え、1/2であった今の35～44歳の被調査者を2倍して集計するというをしない。パネル調査は、地域の実態を知るためのものではなく、個人個人の変化ということに視点を置くものであるからである。

現在の職業、産業分類などによる被調査者特性はTable IV-4～6のとおりである。

Table IV-4 被調査者の職業の性別構成 (パネル調査)

	給与 生活者	商店・ 工場主	工員・ 運転手	日雇・ パート	農業	主婦	無職
男	17	16	3	4	2		7
女	3	8	1	2		13	31
計	20	24	4	6	2	13	38
%	18.7	22.4	3.7	5.6	1.9	12.1	35.5

Table IV-5 被調査者所属産業の性別構成 (パネル調査)

	主婦・ 無職	農林漁	建設	製造	卸・ 小売	金融・ 不動産	運輸・ 通信	電気・ガ ス・水道	サー ビス	公務
男	7	2	5	5	15	1	3		8	3
女	44			1	8				5	
計	51	2	5	6	23	1	3	0	13	3
%	47.7	1.9	4.7	5.6	21.5	0.9	2.8	0.0	12.1	2.8

Table IV-6 被調査者の職務内容の性別構成 (パネル調査)

	主婦・ 無職	専門的 技術的	管理的	事務	販売	農林漁	運輸 通信	技能工・ 単純労働者	保 安	サー ビス	業
男	7	8	5	5	13	2		8			1
女	44	3			8			1			2
計	51	11	5	5	21	2	0	9	0		3
%	47.7	10.3	4.7	4.7	19.6	1.9	0.0	8.4	0.0		2.8

出身地別ではTable IV-7のようになっている。

その他の居住経歴では、
4～12歳を鶴岡を含んだ庄
内で生活したものが合計93
人(86.9%)、13～25歳で、
庄内以外で生活した年数が
0を含んで2年未満のもの

Table IV-7 被調査者の出身地・性別構成 (パネル調査)

	鶴岡	庄内	山形県	東北	外国	その他
男	30	13	2	2		2
女	33	19	2		1	3
計	63	32	4	2	1	5
%	58.9	29.9	3.7	1.9	0.9	4.7

が、合計72人（67.3%）にのぼっている。さすがに、継続調査の被調査者に比べると、鶴岡を含んだ庄内との結びつきははるかに強固である。

4. 結果の概要

パネル調査の結果については、第IX章に詳しいが、ここで、その概要を述べておこう。

4.1 今回調査の結果から見たパネル調査の被調査者

継続調査の結果に比べると、今回の場合、パネル調査の被調査者の方が共通語化の点で、いろいろな音声項目ですべて遅れている。これは、パネル調査の被調査者がずっと年齢的に上に傾いているので当然であろう。音声の類別による共通語化の順序でも継続調査の方と大きな違いはない。

4.2 個々の項目の比較

音声

唇音性の共通語化の発展はいちじるしい。このことは継続調査の結果と同様であって、この面の共通語化は鶴岡市ではほとんど完成した、と言っていいであろう。口蓋化も方言から共通語への進化がはなはだしかった。

有声化では、中舌の音を含む語を除くと比較的安定している。

鼻音化の項目も共通語化が急テンポで進行中である。有声化より現時点では遅れているが、すぐ追い越すのではないかと思われる。

中舌的な発音では共通語の [w] に比べて [i] の方が共通語化しにくいことがここでも明らかである。両方とも共通語化の程度は遅れている。i と e とが関係している i/e でも、[e] よりも [i] の方が共通語化していないから、鶴岡市方言として問題になるのは中舌の方とも合わせて、[i] であることが明らかである。i/e は共通語化の程度も遅く、いちじるしく不安定なようである。

i/e で、「エントツ」の共通語化が今回かえって退化し、他の項目との差がちぢまったが、「エントツ」「イト」の方が共通語化が進み、「エキ」「イキ」がそれほどでもないのは、方言的発音の結果、同音語になる組み合わせであることにも関係していよう。

アクセント

継続調査の方とまったく同じように、アクセントの共通語化は非常に遅れている。「ネコ」および「カラス」という、2, 3音節語中それぞれ頭高のものがトップを占めているのは偶然ではないであろう。アクセントについては、頭高に発音すれば共通語らしい発音になる、と認識している人が東北人の中にいることにも関係ありそうである。

2音節と3音節とを比べると、2音節の方が共通語化しやすい。これは、2音節の方が型のバラエティが少ないからかと思われる。

前回と比べて、共通語化の程度にばらつきが見え始めたのは、前回調査ではほとんど共通語化が始まっていなかったのが、共通語化へ向かって歩み始めたことを示すものであろう。

同じ調査語でも、音声の方での20年間の共通語化の進展とアクセントの方でのそれとは必ずしも関係はないようである。

文法

継続調査でも文法は共通語化はかえって退歩しているが、パネル調査でもその傾向があり、むしろ継続調査よりもその傾向ははなはだしい。

なぜ退歩したかの理由はむずかしいが、第一に、この20年間に調査員のようなよそから来た人にそう心の緊張なく会えるようになったので、無理に共通語を出すようなこともなくなったためであろう。また、被調査者の一種のサービス精神によるのではないかとも考えられる。

語彙

語彙は、前回に比べると、共通語化したもの、その逆のものありで、あまり安定していない。継続調査と同様、急激に忘れられていく俚言と、そうでないものがある。語彙も、文法のところと同じような理由が働いた結果、方言化したものもあるであろう。

4.3 項目ごとに合計した結果

音声

もちろん今回調査の方が音声得点は上がっている。しかし、その上がり方は継続調査には及ばない。これは、両調査の被調査者の年齢構成が反映したものである。

パネル調査の音声得点は、女性が20年の間に大変共通語化したことを示しているが、これは継続調査の結果とは必ずしも一致しない。高い年齢層で共通語化が進んだのではないかと想像される。と言っても、年齢別に見たときは、老人層はあまり共通語化しないのは、基本的には継続調査の結果と同じである。

学歴では、前回の得点について、2種類の分析をした。すなわち、前回調査当時の学歴と今の学歴とである。高学歴が、二つの学歴で一番差が大きく、現在の学歴によるものが共通語化が遅れているのは、当時の高学歴は本当のエリートであったのが、今はそうでもないことによるのであろう。

アクセント

アクセントでは継続調査では共通語化への動きが始まったと考えられたのに、パネル調査では依然として非常に方言的な段階にあると言えそうである。これも被調査者の年齢構成が理由となっているであろう。70歳以上は共通語化しなかった。

性別では女性に変化ないのに対して、男性の共通語化が少し進んだが、この理由についてはわからない。

学歴では低学歴のものが共通語化の動きという点では大きく、学歴の差はその結果ちぢまった。

文法

項目ごとのところでも見たように、文法得点は今回の方が低くなっている。性別に今回の下がった傾向には差がない。年齢では若いほど得点が低くなるという傾向が見られた。これは前に述べた、共通語を話す人と会うのになれたことや、サービス精神が年齢と関係あることを示している。学歴別では特別の傾向がこの文法に見られるわけではない。

語彙

語彙は文法ほどではないが、共通語化が点数の上では20年間にわずかながら退化した。性別では、男性の方がこの方言化により貢献しているようである。年齢別では70歳以上の老人だけが共通語化し、他の年齢層と違っている。学歴別には20年間の変化に関しては特別の傾向は出ない。

第Ⅸ章ではこのあとに新語、および、文法得点+語彙得点について述べてあるが、ここでは省略する。ただ、文法得点+語彙得点では、年齢よりも学歴がよくきいているようで、この点は他のものと傾向が違っているようである。

4.4 各項目の総点による比較

ここでは、各人について各項目の合計点を出し、それを前回、今回の両度の調査で比較してそれを合計してみよう。

音声

女性の方が共通語化は進んだということがこういう整理をしたところではわずかながら言えるようである。年齢別では若い方が共通語化した傾向がやや認められる。被調査者の仕事の職務内容別では、販売業者の共通語化が目立っている。

学歴別ではもちろん低い方が共通語化が遅れているのではあるが、前回より上がったか下がったか（共通語化したかその反対か）という観点から見ると、学歴が高いほど安定していて移ることが少ないという傾向が認められる。

アクセント

全体としては音声よりは少ないが、前回よりわずかに共通語化したことがここにもあらわれている。性では、男性の方が女性よりも少し上がったようである。逆に言えば、女性の方が少し安定している。

年齢別に見ると、高齢になるほど安定している。安定という聞こえはいいが、変わらないということである。職務内容別では、専門的・技術的および販売業が共通語化した。上がったか下がったかについては、学歴別には一定の傾向は見られない。

文法

全体として、方言化したことがこの整理方法でもあらわれている。この下が

り方に関しては性差はそれほどあらわれていない。

年齢別に見ると、年齢の下がるほど方言化していることがここでは明らかである。学歴別では上がり下がり傾向については一定のものはないが、学歴の高い方が共通語化していることは確かである。

4.5 個人ごとの追跡調査の結果

音声以下の各項目で、非常に共通語化した、あるいは逆に方言化した人について、それがどんな人であるかを調べてみることを考えた。そのはじめに、各項目で、一貫して非常に共通語的または方言的であった人をも含めて集計してみた。

音声

一貫して（というのは両度の調査とも）共通語的だったものは女性に多い。今回方言的となったものは年齢の高い方に傾き、一貫して方言的だったものは低学歴に傾いている。一貫して共通語的だったのは高学歴の人であって、ここでは学歴は相当要因としてきいているようである。

アクセント

アクセントでは、あまり共通語化が進んでいないので、いろいろな動きのパラエティを捉えることが困難である。そこで、一貫して共通語的だった人を主として拾い出してみた。こういう人たちに性差はなかったが、年齢では若い方に、学歴では高い方に傾いており常識的な結論が出た。音声よりも学歴の力は少し弱いようである。

人数は少ないが、アクセントで今回が非常に方言的となった人、3人を抜き出したところすべて男性・中学歴であった。この逆に共通語化のいちじるしかった人は男女各1人、両方中学歴でここには差はない。中学歴の人の動きがはげしいようであるが、これは偶然であるかも知れない。この章の4.4のところでは学歴には一定の傾向はなかったのである。

文法

方言から共通語に移ったもの、その反対のものは、年齢別では若い方に多いようであった。学歴では低学歴の人は一部は共通語化し一部は方言化するとい

う二面があることがわかる。

語彙

共通語で安定しているのは女性が多い。また学歴では高い方に共通語で安定しているものが多い。今回で方言化したのは年齢で若い方に多かった。方言のまま前回と変わらなかったのは学歴では低い方であると同時に、また今回共通語化したのも低学歴に多かった。このように見ていくと、このような整理方法をとるところでは、相当学歴は強い力を持っているようである。

個人により一定の傾向があるか

一つの項目、たとえば音声で、今回共通語に多く変わった、あるいは方言に多く変わった人は、他の項目、文法・語彙などでもそういう傾向があるかという、それはあまり強くはないようである。

前回も今回も方言で反応した項目の多かったのは、女性・高年齢・低学歴で、これは第Ⅷ章で述べるPOSAによる分析と似ている。

一方、前回も今回も共通語で反応した項目の多かったのは、女性・低年齢・高学歴となっている。この分析では女性が両極に出ていることになる。また、当然ながら、共通語で安定しているものは、居住経歴で非庄内がすべてであるが、鶴岡弁については保存すべしという意見である。

なお、第Ⅸ章では、このあとで調査員誤差についての吟味をしているが、ここでは、それはパネル調査の結果を材料とはしているが、結果そのものではないので省略することにする。

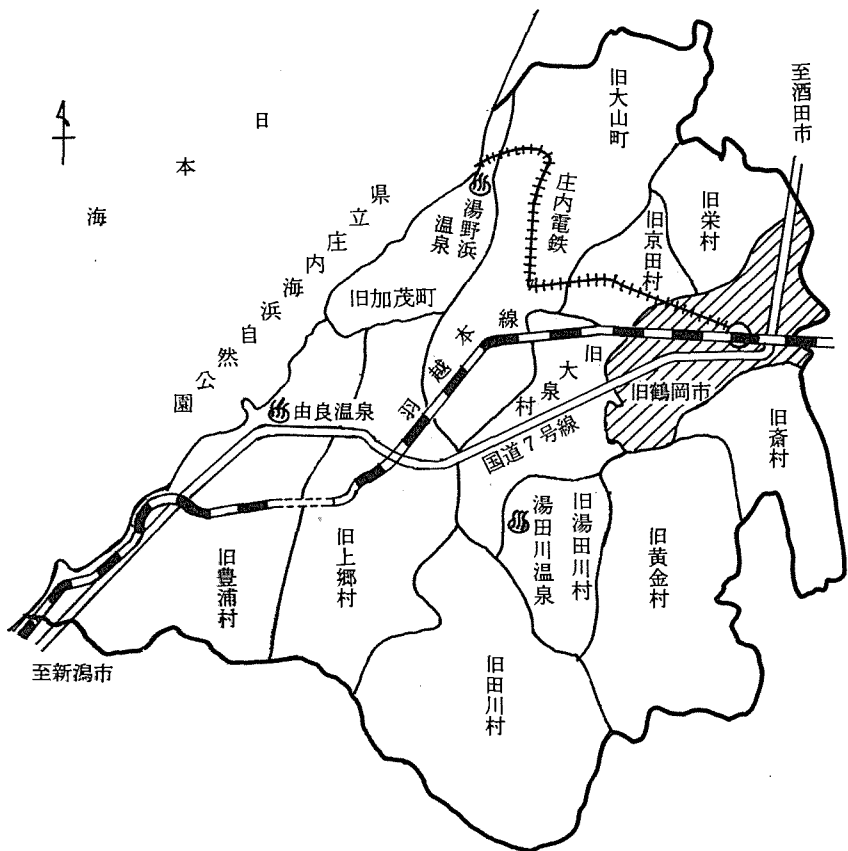
第V章 社会構造の変化

1. 変化の捉え方

人々の言語には、彼らが生活している社会の構造の変化が大きな影響を及ぼすであろう。たとえば、ある地域が、交通・通信手段の進歩によって従来の孤立した状態を脱し、言語習慣が異なる他の地域と頻繁に接触するようになれば、そこに生活している人々の言語は当然変化していくであろう。あるいは、ある地域の教育水準が上昇し、豊かな語彙を持った人々が増えれば、その地域の言語はやはり変化するであろう。

われわれが行った鶴岡市の共通語化の程度に関する調査においても、このことは当然考慮されなければならない。鶴岡市に居住する人々の言語がこの20年間に何らかのかたちで共通語化してきたとすれば、鶴岡市の社会構造の変化がその原因の一つであることはまず間違いなからう。

そこでこの章では、「前回調査」が行われた昭和25年と「今回調査」が行われた昭和47年のあいだで、鶴岡市の社会構造がどのように変化したかを統計データを通じて概観することにする。社会構造を捉えるために用い得る指標は非常に多いが、ここでは、われわれの当面の目的にてらして、人々の言語生活に影響を与えるであろうと推測されるものに限定した。そのために用いる統計データのソースは、①主として『山形県統計書』あるいは『山形県統計年鑑』などに収録されている統計資料、および、②前回調査と今回調査の被調査者特性などの集計結果、の2種類である。（鶴岡市の特性を表すデータはこれらのほかにもあるが、すべて2回の調査いずれかの調査時点のものに限られており、20年間の変化を捉えるために用いることは残念ながらできない。）なお、町村合併等により、前回調査の時点での鶴岡市と今回調査の時点での鶴岡市では範囲が異なっているから、厳密に考えれば、両時点での統計資料を比較することはできないはずである。今回調査時点の統計資料から前回調査時点における鶴岡市に対応する部分を分離することができなかつたためそのまま比較している



旧市域

昭和30年4月以降合併地域

区分	合併年月日
齋村・黄金村・湯田川村・大泉村・京田村・栄村	昭和30年4月1日
加茂町・豊浦村・上郷村・田川村	昭和30年7月29日
大山町	昭和38年9月1日

Fig. V-1 町村合併の状況

が、その点十分留意する必要がある。

2. 変化の記述

2.1 人口の変化

Fig. V-1 に示したとおり、鶴岡市は、昭和30年4月、7月、昭和38年9月の3次にわたる町村合併により、面積は約14倍になった。それによって当然、人口、人口密度にも大きな変化が生じている。Table V-1 に、両度の調査時点前後のそれらの変化を県内の他の諸都市と比較して示しておいた。(もっとも、この表を見ると、県内の都市の中での鶴岡市の相対的な大きさはあまり変化していないようである。面積の増大はかなりいちじるしいが、人口、人口密度は両度の調査時点とも他の諸都市の平均的な位置にある。)

Table V-1 面積と人口

	昭和25年10月1日			昭和47年10月1日		
	面積 (km ²)	人口 (人)	人口密度 (人/km ²)	面積 (km ²)	人口 (人)	人口密度 (人/km ²)
鶴岡市	16.97	44018	2593	234.77	94425	402.2
山形市	36.49	104891	2875	381.58	209026	547.8
米沢市	18.48	55008	2977	548.89	92619	168.7
酒田市	27.83	54291	1951	173.76	95487	550.0
新庄市	111.24	31140	279	224.18	41905	187.0
山形県全体	9326.41	1357347	146	9325.32	1214021	130.2

2.2 人口構成の変化

人口の変化は、絶対数、密度だけにとどまるものではなく、構成にも及んでいる。年齢別人口構成 (Table V-2) では若年層の減少と高年層の増加 (2回の調査の被調査者の年齢別構成比は、それを反映して多少異なっている。これ

については Table V-3参照), 労働力状態 (Table V-4) では女性の就業率の増加, 産業別人口構成 (Table V-5) では, 第1次産業の減少と第2次産業, 第3次産業の増加 (昭和25年は町村合併以前であるから, 第1次産業が少ないのは当然である), という全国的な傾向とほぼ一致した傾向が見られる。

Table V-2 年齢別人口 (鶴岡市) Table V-3 両度の調査の被調査者年齢 (%)

年齢	昭和25年	昭和46年	年齢	前回調査	今回調査	昭和45年 国勢調査
0~9	10,144 (23.0%)	14,598 (15.4%)	15~19	18.1	13.1	13.4
10~19	9,088 (20.6)	16,881 (17.8)	20~24	10.2	10.9	10.2
20~29	7,400 (16.8)	12,849 (13.5)	25~34	22.6	19.3	19.8
30~39	5,772 (13.1)	14,245 (15.0)	35~44	19.7	22.1	22.3
40~49	4,889 (11.1)	13,900 (14.6)	45~54	14.8	16.3	16.4
50~59	3,492 (7.9)	10,126 (10.7)	55~69	14.5	18.1	18.3
60~	3,233 (7.3)	12,285 (12.9)	全体	557人 (100.0)	457人 (100.0)	
総数	44,018 (100.0)	94,884 (100.0)				

Table V-4 労働力状態 (鶴岡市)

	昭和25年	昭和46年
総数	13,675 (100%)	33,220 (100%)
就業者	10,638 (77.8)	26,558 (79.9)
失業者	319 (2.3)	409 (1.2)
非労働力人口	2,718 (19.9)	6,253 (18.8)
女	16,721 (100%)	38,948 (100%)
就業者	6,414 (38.4)	21,699 (55.7)
失業者	184 (1.1)	250 (0.6)
非労働力人口	10,123 (60.5)	16,999 (43.6)

注) 昭和25年は14歳以上, 昭和46年は15歳以上

Table V-5 鶴岡市の産業別人口

年次	総数	第1次産業	第2次産業	第3次産業
昭和25年	17,052 (100%)	1,727 (10.1)	5,339 (31.3)	9,976 (58.6)
昭和35年	43,598 (100%)	14,541 (33.3)	8,640 (19.9)	20,417 (46.8)
昭和40年	45,362 (100%)	12,024 (26.5)	10,679 (23.5)	22,659 (50.0)
昭和45年	48,257 (100%)	10,926 (22.6)	11,883 (24.6)	25,448 (52.8)

2.3 転入・転出

人口に関する統計データのうち、言語変化にもっとも関係があると思われるものは、住民基本台帳にもとづく人口移動の記録であろう。Table V-6 は、今回の調査実施まで2年間における鶴岡市の転入・転出者数を示したものである。

Table V-6 昭和45～46年における転入・転出

	転 入		転 出		人 口
	県内から	県外から	県内へ	県外へ	
昭和45年	1,889人	1,961人	1,320人	3,323人	95,128人
昭和46年	1,957人	1,983人	1,515人	3,786人	94,884人

またTable V-7は、昭和45年における鶴岡市住民の前住地を示したものである。鶴岡市を含めて山形県の転出入率は全国平均と比べると決して高いとは言えない(Table V-8参照)が、それでも毎年かなりの人数が県外から入って、現在の鶴岡市にはかなりの人数の“移住者”が存在している。また、両度の調査の結果によれば、居住経歴 (Table V-9) では26歳以上の層でずっと東北に居住しているというものが多少増えているほかは大きな差はないが、出身地が鶴岡市であるものの比率が、本人、父、母のいずれにおいても10%前後減っており (Table V-10) , 鶴岡市以外の地域から移住してきたものが増えていることを示している。このような状況は、おそらく、鶴岡市に住む人々の言語に影響を与えている

Table V-7 転入時期、前住地・性別人口
[鶴岡市 昭和45年]

転入の時期 前 住 地	総 数	男	女
総 数	95,136人	44,896人	50,240人
出生時から	35,977	20,755	15,222
昭和34年以前	25,227	8,689	16,538
昭和35～39	9,389	3,945	5,444
昭和40.1～44.9	16,819	7,778	9,041
自市区町村内	11,560	5,158	6,402
県内他市町村	3,588	1,738	1,850
他 県	1,666	879	787
国 外	5	3	2
昭和44.10以降	7,579	3,716	3,863
自市区町村内	4,448	2,083	2,365
県内他市町村	1,947	1,015	932
他 県	1,179	615	564
国 外	5	3	2

Table V-8 山形県の転入・転出率

		自府県内の 市区町村間 転 出 入	他府県 からの 転 入	他府県 への 転 出
		昭和 45年	全 国 山形県	3.9 % 1.7 %
昭和 46年	全 国 山形県	3.93% 1.81%	4.08% 1.95%	4.08% 3.20%

であろうと推測される。といっても、鶴岡市以外の庄内の人を加えれば減少はそれほど大きくない。昭和27年の7月から12月までの数字では、転入が県内から313人、県外から179人、転出が県内へ155人、県外へ258人だったのと比べると人口の動態はかなり活潑になってきたようである。これらの表から、鶴岡市は県内や庄内からの人口吸収の一中心地であるとともに、県外（おそらく京浜中心）への人口供給地ともなっているようである。

Table V-9 被調査者の居住経歴(%)

年齢	居住経歴	前回調査	今回調査
4～12歳	ずっと庄内	87.2	84.9
	庄内以外にもいたことがある	12.7	15.3
13～25歳	庄内以外2年未満	66.7	69.9
	庄内以外2年以上	33.3	31.1
25歳～	ずっと東北	47.0	59.3
	東北生活1/2以上	7.6	3.3
	東北生活1/2未満	13.2	11.8
	25歳以下の被調査者	32.2	25.6
全 体		577 (100.0)	457 (100.0)

Table V-10 被調査者・両親・配偶者の出身地 (%)

	出身地	前回調査	今回調査
被 査 者	鶴 岡 市	59.3	49.7
	庄内地方	28.2	33.3
	東北地方	4.7	7.2
	そ の 他	7.8	9.9
父	鶴 岡 市	46.1	36.3
	庄内地方	40.6	48.4
	東北地方	7.0	9.2
	そ の 他	6.4	6.1
母	鶴 岡 市	39.5	31.7
	庄内地方	47.0	52.1
	東北地方	7.9	7.0
	そ の 他	5.5	9.2
配偶者	鶴 岡 市	30.8	34.4
	庄内地方	24.1	26.5
	東北地方	5.4	6.8
	そ の 他 配偶者なし	4.8 34.8	4.8 27.6
全 体		577人 (100.0)	457人 (100.0)

注. 前回調査の「東北地方」には新潟県を含む。

2.4 職 業

人口構成の変化の項で触れたとおり、第1次産業従事者の減少と第2次産業、第3次産業従事者の増大という一般的傾向が鶴岡市においても見られる(Table V-5)。また、前回の調査と今回の調査の被調査者の職業を比較してみると、

Table V-11 被調査者の職業

	前回調査	今回調査
給与生活者	18.9%	43.8%
商店主・工場主	12.1	10.3
工員・運転手等	14.4	4.4
日雇・パート	2.3	3.9
農業	2.3	0.4
主婦	27.0	13.3
学生	11.8	12.0
無職	10.9	11.8
全体	577 (100.0)	457 (100.0)

今回の調査では給与生活者が非常に増え、主婦と工員が減っていることが目立つ (Table V-11参照)。主婦でも職業を持つ人が増えたため、調査は前回調査に比べて不在が多く困難となった。工員が減ったのは、鶴岡市内の工場に閉鎖・廃業などがあったためであろう。産業分類 (Table V-12) では、サービス業の若干の増加と、主婦、学生、無職の減少が見られる。職業は知的水準などとも強い関連があり、言語に及ぼすその

影響は簡単には検出できないが、どのような仕事についているかによってその人の生活の大きな部分が決まってくることは明らかであり、職務内容はもちろん、仕事を通じての対人接触の量と質、行動範囲の広狭などが言語に大きな影響を与えているであろうことは十分予想される。しかし、第Ⅶ章で述べるように、共通語化については職業に関係のある他の社会的要因の方がむしろ職業に影響を及ぼしたものと推定された。

Table V-12 被調査者の職業 (産業分類)

	前回調査	今回調査
農・林・漁業	2.8%	0.9%
建設業	2.3	3.5
製造業	14.4	10.1
卸売・小売業	10.7	14.9
金融・保険・不動産	0.7	4.2
運輸・通信業	3.8	6.6
電気・ガス・水道	0.3	0.7
サービス業	10.4	18.8
公務員	2.8	3.3
主婦・学生・無職・不明	51.8	37.2
全体	577人 (100.0)	457人 (100.0)

Table V-13 被調査者の職業 (職業分類)

	前回調査	今回調査
専門的・技術的職業	5.9%	9.8%
管理的職業	0.3	5.5
事務	9.7	14.7
販売	11.1	13.3
農林漁業	2.4	0.7
運輸通信	1.4	2.2
技能工・単純労働者	15.6	12.5
保安・サービス業	2.8	1.3
サービス業	0.5	2.8
主婦・学生・無職	50.3	37.2
全体	577人 (100.0)	457人 (100.0)

2.5 教育（学歴）

教育水準は明らかに上昇していると考えてよいであろう。Table V-14 に山形県における中学生の上級学校進学状況を示したが、義務教育以上の教育を受けるものの比率が、34%から78%へと大きく上昇してい

Table V-14 中学生の上級学校進学状況（山形県）

昭和25年度	昭和46年度
34.3%	78.2%

Table V-15 鶴岡市の中学卒業生進学・就職状況

	昭和46年			昭和47年		
	計	男	女	計	男	女
総数	3,542 (100.0)	1,805 (100.0)	1,737 (100.0)	3,383 (100.0)	1,667 (100.0)	1,716 (100.0)
進学希望者数	3,045 (86.0)	1,513 (83.8)	1,532 (88.2)	2,971 (87.8)	1,464 (87.8)	1,507 (87.8)
就職希望者数	447 (12.6)	242 (13.4)	205 (11.8)	412 (12.2)	203 (12.2)	209 (12.2)
公共職業訓練所入所希望者数	50 (1.4)	50 (2.8)	—			

る。Table V-15 は、鶴岡市で昭和46年3月および47年3月に卒業する中学生について調査したデータである。鶴岡市では近年実に85%以上の中学生が上級学校へ進学していることがわかる。このような教育水準上昇の傾向は、両度の調査の結果にも如実に現われている。Table V-16から、小学校卒は激減し、高校、大学卒がいちじるしく増えていることがわ

Table V-16 被調査者の学歴（%）

	前回調査	今回調査
学歴なし	4.1	0.2
小学校卒	25.1	9.8
高小・新中卒	39.3	37.8
旧中・新高卒	27.1	42.2
旧高専大・新大卒	4.3	9.8
全体	577人 (100.0)	457人 (100.0)

かる。一般には学校教育は言語に関する知識を増大させるであろうし、共通語に接触するチャンスをも増す可能性があるから、このような教育水準の向上は言語変化の原因の一つとなっているであろう。

2.6 コミュニケーション、交通

この20年間におけるコミュニケーション状況の変化は非常に大きなもので、昭和25年当時とは比較にならないほどである。ことにTVという強力なマス・メディアの出現とその100%近い普及がコミュニケーションのあり方を一変させたことは衆知のとおりである。

TVだけでなく、各種のコミュニケーションが拡大、増加しており、それらが言語の変化に大きな影響を与えたことは明らかであろう。データで見ると、鶴岡市のTVの普及率（世帯当たり）は95%（Table V-17）、ラジオは山形県全体で130%以上（Table V-18）と一家に1台以上普及している。なお、新聞についてはTable V-19~20があるが、このようなマス・メディアの増大とともに（Table V-20によると、新聞利用はあまり変化はなかったようで、むしろ利用しなくなった方に傾いているが、これは電波媒体の増大からの影響であろう。）パーソナル・コミュニケーションとか交通も広がっている。両度の調査で旅行の様子と、東京との交流のしかたを見ると、昭和25年では半年間に旅行をしたことが無いものは67%もあったが、昭和46年では50%に減っている。公用旅行の比率は両度の調査で同じ結果を示しているが、私用

Table V-17 TV普及状況 (%)

	昭和47年 3月31日
鶴岡市	94.9
山形市	86.5
米沢市	86.6
酒田市	93.2
新庄市	89.9
山形県平均	92.1

Table V-18 ラジオ普及状況 (%)

	昭和25年	昭和46年 (カーラジオ除く)
鶴岡市	71.7	
山形市	68.9	
米沢市	48.1	
酒田市	67.8	
新庄市	47.6	
山形県平均	54.9	136.6

Table V-19 新聞講読部数

	昭和25年	昭和46年	
		朝刊	夕刊
鶴岡市	17,539	27,487	12,145
山形市	34,159	66,834	31,777
米沢市	19,524	25,038	10,862
酒田市	18,224	25,351	10,629
新庄市	8,366	10,807	4,684

Table V-20 被調査者の新聞利用 (%)

	前回調査	今回調査
いつも読む	82.1	75.3
読んだり読まなかったり	8.7	17.9
読まない	6.1	6.6
不明・無答	3.1	0.2
全体	577人 (100.0)	457人 (100.0)

旅行は倍増している (Table V-21)。また、東京との交流も20年前に比べると多くなっている (Table V-22)。そして車の普及率も昭和25年とは比較にならないくらい高くなっており (Table V-23)、個人の行動空間はかなり拡大しているものと予想される。これらのコミュニケーションのうち、マスコミは共通語を用いたものであり、行動空間の拡大は共通語に接触するチャンスを増加させると思われるので、いずれも共通語化には大きな影響を与える要因と言えよう。

Table V-23 自動車普及状況
(1両当たり人口)

	昭和25年	昭和47.3.31
鶴岡市		5.5
山形市		5.4
米沢市		5.7
酒田市		4.2
新庄市		5.2
山形県平均	415.7	5.0

Table V-21 被調査者の旅行 (%)

	前回調査	今回調査	
なし	66.7	49.5	
あり	私用	16.5	31.3
	公用	14.9	14.4
	公・私両方	1.7	4.8
全体	577人 (100.0)	457人 (100.0)	

Table V-22 被調査者の東京との交流 (%)

	前回調査	今回調査
行き来・文通・電話している	24.4	60.0
電話・文通だけ	} 26.3	} 23.6 {
文通だけ		
知り合いなし・つき合わない	44.9	10.3
無答	4.3	16.4
全体	577人 (100.0)	457人 (100.0)

注. 電話を含めるのは今回調査だけ。

第Ⅵ章 継続調査の結果 1

——個々の項目群——

1. この章以降の観点

第I章で述べたように、音声・アクセント・文法・語彙および新語の理解の五つの言語使用の側面から、鶴岡市における共通語の浸透の実態を調査した。今回の調査は昭和25年度に同地で実施された調査（前回調査）から約20年経過した今日、共通語化がどの程度進んだかを知ることの主たる目的がある。したがって、今回調査で用いられた項目の多くは前回調査と同じであるが、調査時期によって異ならざるを得ない「新語」の諸項目は言うまでもなく、ほかにも両度の調査で重なり合わない項目もいくつか見られる。両度の調査間の項目の関係はFig. VI-1のように図示し得る。図でAは前回調査と今回調査とでまったく同じ項目の集団を意味している。aは項目そのものは同一であるが、質問

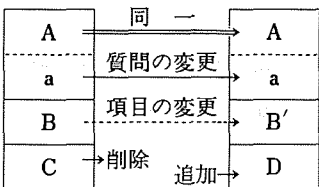


Fig. VI-1 両度の調査における項目の関係

の方法が両度の調査で異なるものである——語彙にいくつか見られる。B, B'は「新語」のように各項目の上位概念は同一であるが項目そのものが両度の調査で異なるものである。Cは前回調査で取りあげられたが今回調査から割愛された項目。DはCとは逆に、今回調査で新しく加えられた項目——CおよびDは文法・語彙項目にもいくつか見られるが、大部分は社会的・文化的側面を知るための項目である。この章以降では両度の調査結果の比較に重点をおくという立場から、Aおよびaの項目を中心に見ていく。その中で、B'あるいはDについても簡単にふれてみたい。

この章からの三つの章で「サンプリングに基づく継続調査」の結果を示す。まず最初に、五つの言語使用に関する側面を中心に、各項目の調査結果を個別に概観する。次の第七章では音声およびアクセントについて、それらを一つの合成指標にまとめ、指標と他の変数との関係から、共通語化に影響を及ぼす要

因を吟味する。第Ⅷ章では、多変量解析の一手法である「パターン分類」やPOSAの手法を使って、言語の構造や方言から共通語への変化の様相を探る試みをしてみたい。なお、「継続調査」と併行して実施された「パネル調査」の結果については最後の第Ⅸ章でまとめて記述することにしたい。

2. この章の構成

この章では、音声・アクセント・文法・語彙および新語の理解の五つの側面の個々の項目の調査結果を一つずつ見ていく。さらに、鶴岡弁に対する意見やイメージなどの調査結果についてもふれたい。ここでの分析は、性・年齢および学歴別の範囲にとどめ、より詳細な吟味は次章以降にゆずることにする。

被調査者の年齢は15歳から69歳にわたっている。この章ではそれを次の六つの年齢階層に区分する——()内の数値は左が今回調査の被調査者数、右が前回調査のそれである。

- (1) 15～19歳 (60,98) (2) 20～24歳 (50,64) (3) 25～34歳 (88,130)
(4) 35～44歳 (101,118) (5) 45～54歳 (75,84) (6) 55～69歳 (83,83)

また、被調査者の学歴は次の3段階に区分する。

- (1) 低学歴——義務教育終了段階以下 (219,283) (2) 中学歴——新制高校終了相当以下 (193,169) (3) 高学歴——短大終了以上 (45,25)

なお、在学学生は終了と同じ扱いにした。すなわち、高校生は高校終了に含め中学歴、大学生は高学歴とした。

3. 音 声

前回調査で取りあげられた32項目のうち、「ショウジ (障子)」を除く31項目

が今回の調査でも採用された。この31項目について、両度の調査時点のそれぞれで共通語の音声で反応した被調査者の百分率、すなわち共通語化の程度の差を比較したグラフがFig. VI-2である。Fig. VI-2は31の項目をI章で示した九つの音声（特徴）ごとにまとめて配置されている。同一の音声では、左から、今回調査の共通語の程度が高い項目の順に並べられている。この図で、各音声の計の欄の百分率は、それぞれの音声に属する項目——たとえば、唇音性Iでは「カヨウビ（火曜日）」と「スイカ（西瓜）」の2項目——の平均の値である。1項目ずつの性・年齢および学歴別の結果はアクセントのそれと同じく巻末の「附表」に示してあるので、特に必要な場合を除いては、九つの音声（特徴）ごとを一括して述べることにする。

3.1 音声の差異と共通語化の程度

Fig. VI-2から、共通語化の程度の高さの順位は、前回調査では、
唇音性I (81.5), 口蓋化 (68.1), 有声化 (66.0), i/e I (58.4), 中舌I (54.9)
i/e II (45.8), 唇音性II (45.1), 鼻音化 (44.6), 中舌II (43.5)

の順であった。それが今回調査では、

唇音性I (98.0), 口蓋化 (94.2), 有声化 (86.8), 唇音性II (85.2), 中舌I (84.1)
鼻音化 (80.4), i/e I (77.7), i/e II (73.3), 中舌II (66.9)

の順序に変わっている——下線を施した音声は両度の調査で順位に変動のないものである。このことからの主な結果は次のとおりである。

(1) 両度の調査で唇音性IIとi/e Iおよび鼻音化とi/e IIの順序が入れ変わったほかは、ほぼ同じような順位で共通語化している。

(2) どの音声でも前回から今回調査にかけての約20年間に共通語化が進んでいる。

(3) 特に、唇音性Iと口蓋化は現在では共通語化がほぼ完成したと見ることができる。

(4) 他方、中舌IIやi/eのI, IIなどは現在でも相当方言的な音声が残っていると見えよう。

唇音性や口蓋化などで共通語化が進み、中舌やi/eで遅れている最大の理由

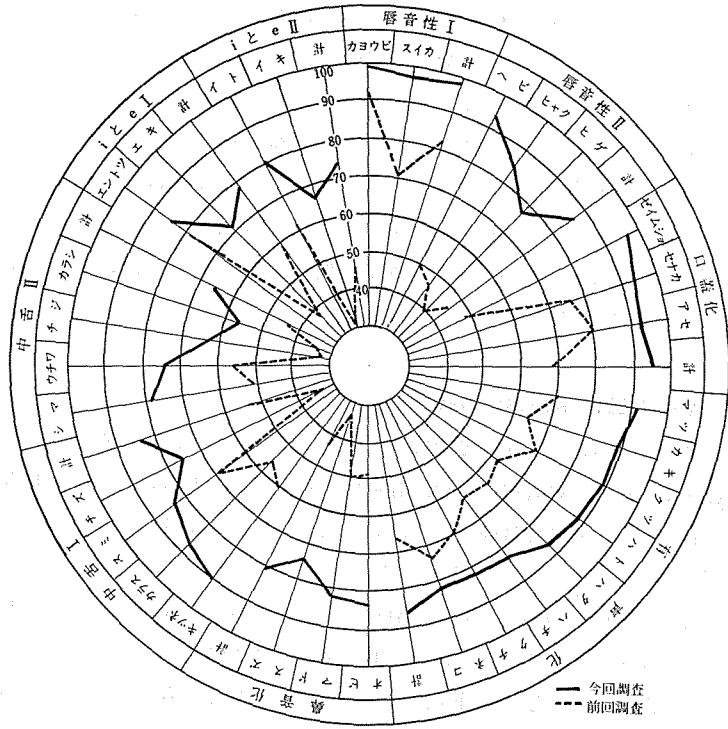


Fig. VI-2 音声の各項目に共通語で反応したものの比率

は、それぞれの音声の共通語形と鶴岡方言形との対応関係の相違にあると思われる。調査対象となった九つの音声の対応関係はFig. VI-3のように三つの種類に分けられる。

(A)のグループに相当する音声は唇音性Iである。鶴岡方言では唇音化する音声 kw のほかに共通語と同じ k の二つの音声が存在している。これに対応する共通語の音声は k だけである。このような場合、方言の音声を共通語の音声に直そうとすると、一方の音声 kw を捨て、既に持っていた別の音声 k だけを使用すればよい。新しい音声を学習しなくてもよいという点で、この種の音声の共通語化が容易である。それが唇音性Iの共通語化を促進させている原因であると思われる。

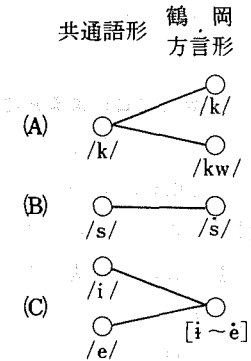


Fig. VI-3 音声の共通語形と方言形との対応

(B)のグループは共通語形と方言形とが1対1に対応するグループであり、口蓋化、有声化、唇音性II、鼻音化がそれに当たる。共通語形と方言形が異なることから新しく共通語の音声を学習する必要がある。この点で(A)のグループの音声よりも不利だと言える。ところが、一度共通語の音声を学習しさえすれば、以後共通語の音声をを用いるのに障害はない。前回調査で下位にあった唇音性IIや鼻音化が今回調査でかなりの程度まで共通語の音声に変わってきており、また口蓋化がほとんどの被調査者の間で共通語の音声になっているのはこのためであろう。

最後の(C)のグループは前二者とは異なってかなりやっかいなことになる。すなわち、共通語形と方言形とが2対1の対応を示すものである（中舌および i/e が相当）。i/e を例に説明しよう。共通語では「イキ（息）」と「エキ（駅）」はそれぞれ [i(ki)], [e(ki)] と区別して発音されている。ところが鶴岡方言では「イキ」も「エキ」も [i(gi)] あるいは [é(gi)] と発音される。言い換えれば、鶴岡方言ではこの二つの単語は同音語であり、共通語では別の音声の語である。このような場合、共通語で発音しようとするとき、i を i あるいは e のいずれの音声に変えればよいかという点で混乱が生じやすく、ときとして

逆の音声になりかねない。このことが、中舌や i/e の共通語化を他の音声よりも遅らせている理由であると思われる。(C)のグループについては次の 3.2 でより細かく吟味する。

3.2 調査項目による共通語化の差異

Fig. VI-2 をもう一度見よう。同一の音声のものでも、項目によって共通語化の程度に差の見られる項目と差の小さい項目とがある。それらを整理し、項目間の差の出た理由を検討しよう。

(1) 両度の調査で項目間の共通語化の程度にあまり差異の見られない音声は有声化だけである。有声化は他の音声の項目より多い(8項目)にもかかわらず、項目間の差が小さい。この音声はいわゆる「ズーズー弁」の中核をなすものだと言われている。それが、ほぼ一様の割合で共通語化しているのは非常に興味深い現象だと言えよう。

(2) 唇音性 I、口蓋化および鼻音化の三つの音声的特徴では前回調査では項目間の共通語化の程度に開きがある項目が見られたが、今回調査ではその差がほとんどなくなっている。

(3) (1)および(2)の音声は前項で見たように共通語化が他より進んでいる音声である。共通語化が進んでいる音声で項目間の差が小さいということは、これらの音声が量的な意味での共通語化をなしているとともに、内容的に安定した音声となっているということができよう。すなわち、全体としてある程度共通語化が進んだ音声では、その音声を含む他の語を発音する場合でも発音上のエレが小さいと言える。

(4) 前回調査で唇音性 I の「カヨウビ」の共通語化は92.5%であり、「スイカ」は70.4%であった。この差は一つには「カヨウビ」がやや公式的な語であるのに対し、「スイカ」が日常語であるという語の位相の相違に起因していると考えられる。すなわち、「カヨウビ」は初めから共通語の [k] の音声で発音される割合が高かったのではなかろうか。また、「スイカ」が「カヨウビ」より共通語化が遅れている別の理由として、この語の問題としている部分は語末の音節であり、この音節はしばしば方言で [kaN] と発音される (15.6%)

こともあげられる。

(5) 口蓋化では「ゼイムシヨ(税務署)」の音声が前回調査で他の「セナカ(背中)」や「アセ(汗)」よりも共通語化が遅れていた(共通語化の程度は、ゼイムシヨ48.5%, セナカ75.9%, アセ79.9%)。「ゼイムシヨ」は「カヨウビ」同様公式的な語であり、共通語化が他より高いことが予想されるにもかかわらず、その程度がいちじるしく低い。その理由を前回調査の報告書では、この語の問題となる部分が他より長い音節で構成されているからであると推測しているが、今回の調査結果で他の2項目との間にほとんど差が見られなくなっているところから、これは必ずしも適切な解釈だとは言えないかのように思われる。「ゼイムシヨ」は公式的な語ではあるが、前回調査当時では日常の言語生活の中で用いられる頻度が極端に少ないため、いざそれを実際に共通語の音声で発音しようとする場合に困難さの度合いが高かったのではなかろうか。—「ゼイムシヨ」が長音節「ゼイ」を持つことが、困難さをより一層高めたことは予想される。

(6) 鼻音化では「スズ(鈴)」が「オビ(帯)」や「マド(窓)」より共通語化の程度が劣っていた(それぞれ、24.0%, 42.0%, 45.2%)。これは前記の前回調査の報告書の中で指摘されているように「スズ」の音声は「ス」と「ズ」の二つの類音語で構成されているからであろう。

(7) 唇音性IIでは両度の調査とも「ヒゲ(髭)」が他の「へビ(蛇)」や「ヒャク(百)」よりも共通語化が劣っている。その理由も前回調査の報告書で示されている解釈が妥当であろう。すなわち、「ヒゲ」の $[\Phi\zeta i]$ の音声は鶴岡方言では両唇音と同時に硬口蓋音の両方で同時に摩擦する音 $[\Phi\zeta]$ と $[i]$ とで構成されており、したがって、他の唇音性IIの音声とは異なって子音と母音との双方を同時に矯正する必要があることから、他の音声より共通語化が遅れる傾向にあると言えよう。

(8) 中舌および*i/e*は他の音声に比べて項目間のズレがいちじるしい。この二つの音声は全般的に共通語化が遅れているものである。

(9) (3)および(8)から総合して言えることは、共通語化の程度の高い音声はそれ自体安定しており、その音声を含む単語間の発音のユレが小さいのに対し、

共通語化が遅れている音声では項目ごとの共通語化の程度の差が大きい——つまり、不安定である、と言えよう。

(10) i/e Iで「エキ」の共通語化は前回調査で38.6%，今回調査で72.0%であり、「エントツ（煙突）」（前回78.2，今回83.4）に対して非常に劣っている。

(11) また，i/e IIでは「イキ」が「イト（糸）」よりも劣っている（前回調査は30.3%対61.2%，今回調査は65.9%対80.7%）。

(12) 「エキ」と「イキ」とは前項で述べたように，鶴岡方言で同音語となっているものである。i/e の4項目を2項目ずつ組みにし，同一の被調査者がそれぞれの音声で反応したかを見てみよう。今回調査の結果がTable VI-1～6に示されている。たとえばTableでe，iは共通語の音声で反応したものであり，é，îは方言の音声による反応であることを示す。これらのTableから，

Table VI-1 エキとエントツ

エントツ エキ	e	é	計
e	322	7	329
é, î	59	69	128
計	381	76	457

Table VI-2 イキとイト

イト イキ	i	i, é	計
i	290	11	301
i, é	79	77	156
計	369	88	457

Table VI-3 エキとイキ

イキ エキ	i	i, é	計
e	272	57	329
é, î	29	99	128
計	301	156	457

Table VI-4 エキとイト

イト エキ	i	i, é	計
e	301	28	369
é, î	68	60	88
計	369	88	457

Table VI-5 イキとエントツ

エントツ イキ	e	é	計
i	288	13	301
i, é	93	63	156
計	381	76	457

Table VI-6 イトとエントツ

エントツ イト	e	é	計
i	341	28	369
i, é	40	48	88
計	381	76	457

「エキ」と「イキ」の組み合わせの場合がもっとも共通語化が低い(59.5%), すなわち「エキ」と「イキ」とでともに共通語の音声で発音し分けるのが困難であることがわかる。

(13) 同様に、中舌においても「カラス」と「カラシ」あるいは「チズ」と「チジ」のように同音語の関係になっている項目の共通語化の程度は他の項目よりも低い。

(14) なお、「エントツ」の共通語化の程度は前回調査の78.2%に対し、今回調査は83.4%であり、両度の調査間の差は他の30の項目に比べていちじるしく小さい。この項目の共通語化が遅々として進まなかったという現象には調査法の問題や種々の理由が考えられるが、第IX章で検討することにしよう。

3.3 性による共通語化の差異

一般的に女性の方が男性よりも(統計的に)共通語化の高い音声がいくつか見られるが、その逆のケースは見られない。性による差の見られた音声は前回調査では唇音性II, 有声化, i/eのI, IIおよび中舌IIの五つの音声の部類であった。今回調査では唇音性II, 有声化, i/e Iの三つの音声の部類に差が見られている。これらの音声でなぜ女性の方が共通語化しているかについての理由は明らかでない。しかし、第VII章で述べるように31の項目を全体として見るかぎりでは性による共通語化の差は見られない。

3.4 年齢による共通語化の差異

年齢の音声の共通語化に与える影響は非常に大きい。各音声の共通語化の程度を年齢階層別に示したものがFig. VI-4からVI-12である。これらの図から全般的に言える主な結果は次のとおりである。

(1) 一般的に、若い年齢層のものは高年齢層のものよりも共通語化している。この傾向は今回調査に顕著である。

(2) 今回調査では、共通語化が100%に近い、唇音性Iおよび口蓋化のように年齢差のほとんど見られない、いわば「平板型」の年齢曲線をなす音声の部類と年齢が高くなるにつれて共通語化の程度が減少する「下降型」の曲線を示す

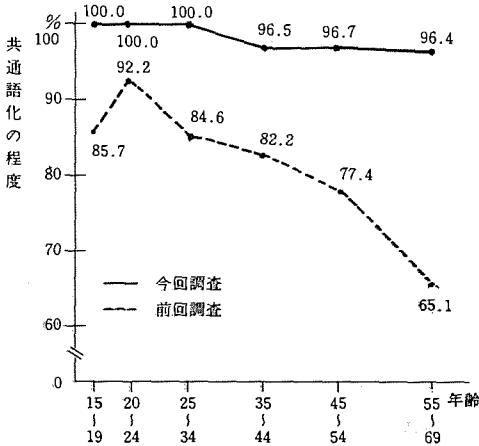


Fig. VI-4 年齢別共通語化曲線（唇音性 I）

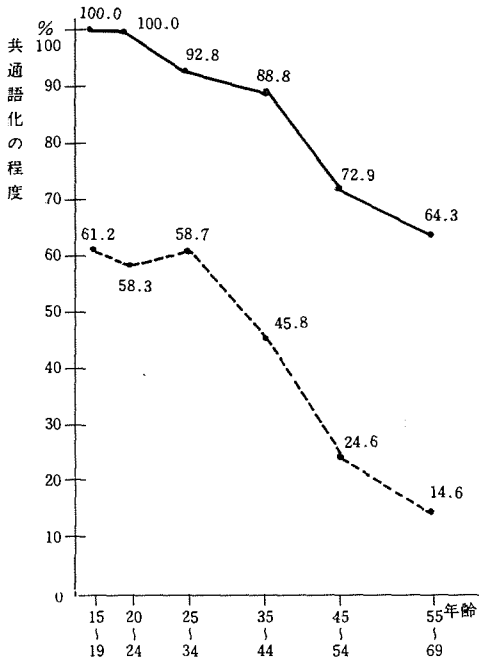


Fig. VI-5 年齢別共通語化曲線（唇音性 II）

音声の部類との二つのタイプが見られる。

(3) 「下降型」の曲線を示す音声では35~44歳を境に前後の年齢層で共通語化の程度の差が急激に広がる。

(4) 一方、前回調査では「平板型」の曲線をなす音声は見られない代わりに25~34歳ぐらいの年齢層が他の年齢層よりも共通語化の程度が高く、その年齢層の前後で次第に低くなる「凸型」の曲線を示す音声が見られる。「凸型」のタイプをなす音声は鼻音化・有声化・中舌である。他の音声は何らかの意味で「下降型」の曲線と見なされる。

(5) 両度の調査を比較してみれば、前回調査で「凸型」であった音声は今回調査では「下降型」に変わっている。「凸型」から「下降型」への移行は若い年齢層の共通語化がいちじるしいことを意味する。

(6) また、前回調査で「下降型」であった音声のうち、全体としての共通語化の程度が高かった唇音性 I と口蓋化の二つの音声の部類は今回調査では「平

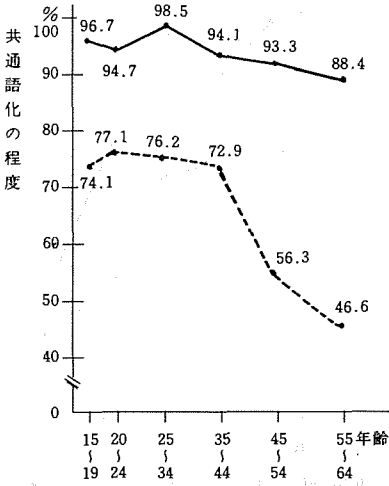


Fig. VI-6 年齢別共通語化曲線
(口蓋化)

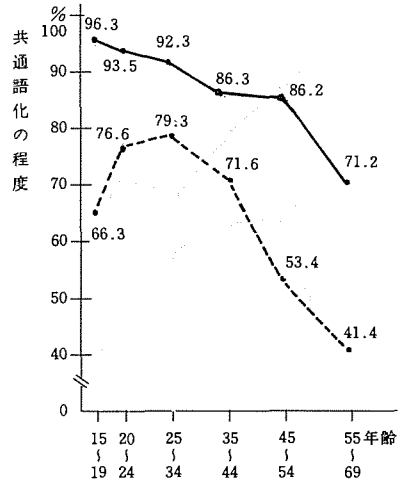


Fig. VI-7 年齢別共通語化曲線
(有声化)

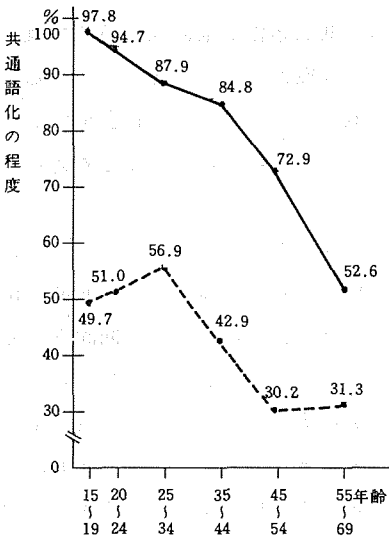


Fig. VI-8 年齢別共通語化曲線
(鼻音化)

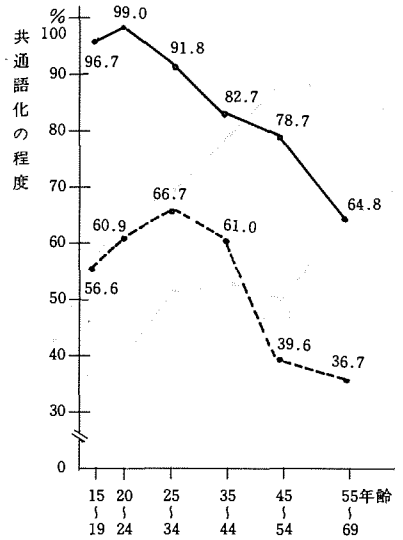


Fig. VI-9 年齢別共通語化曲線
(中舌 I)

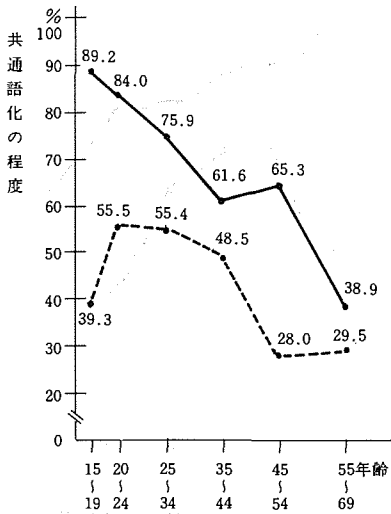


Fig. VI-10 年齢別共通語化曲線
(中舌II)

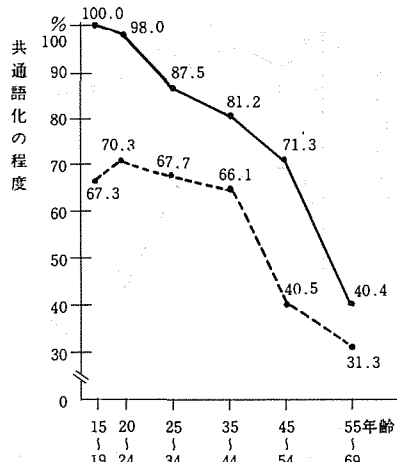


Fig. VI-11 年齢別共通語化曲線
(i/e I)

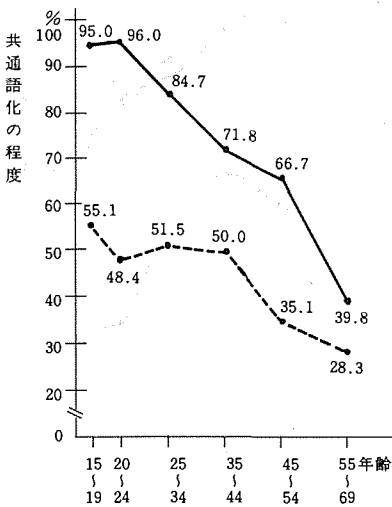


Fig. VI-12 年齢別共通語化曲線
(i/e II)

板型」に変化している。この変化は若い年齢層の共通語化が前回調査時点で既に上限の100%近くであって、この年齢層が年を取ることによって、社会全体が共通語化したことの反映であると考えられる。

(7) 前回調査で「下降型」であった音声の部類のうち、全体としての共通語化の程度の低い音声の部類は今回調査でもやはり「下降型」の曲線をなしている。

(8) (5)(6)(7)から共通語化の程度の年齢曲線は全体としての共通語化の進展に対応してFig. VI-13のように変化する事が予想される。図では省略したが第1段階の前にもどの年齢層でもほとんどが方言を用いている段階——方言社会があり、

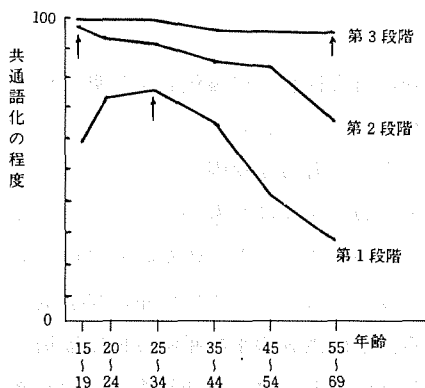


Fig. VI-13 年齢曲線の変化の予想図

第3段階の後にはすべての人々が共通語を使用する段階が考えられる。どの年齢層から共通語化するかということでは、図に矢印で示したように、方言社会から第1段階に移行する場合には25~34歳を中心とする年齢層がいちじるしい。第1段階から第2段階への移行では低年齢層の共通語化に特徴があり、第3段階で高年齢層の共通語化が進む。第1段階から第2段階への移行は社会的・文化的環境の変化に依存していると思われる。これについては第七章で述べよう。

3.5 学歴による共通語化の差異

学歴別に各音声の共通語化の程度を示した表がTable VI-7である。この表は次のことを示している。

Table VI-7 学歴別の音声の共通語化の程度

	前回調査			今回調査		
	低学歴	中学歴	高学歴	低学歴	中学歴	高学歴
唇音性 I	77.4	89.6	86.0	95.8	99.5	100.0
II	38.3	56.2	73.3	75.7	92.8	88.2
口蓋化	62.2	78.1	90.7	91.9	95.1	97.4
有声化	58.9	80.0	81.0	77.6	93.1	94.1
鼻音化	37.1	57.8	70.7	70.9	87.1	86.9
中舌 I	47.5	68.8	75.0	69.8	93.8	96.1
II	33.1	63.5	69.0	46.4	80.6	84.3
i/e I	52.5	71.0	64.0	62.7	88.5	87.3
II	41.1	54.1	60.0	54.8	86.2	87.3
人数	383	169	25	189	217	51

(1) 今回調査の唇音性 I や口蓋化のようにほぼ共通語化が完成したと見られる音声の部類を除いては、低学歴層と中・高学歴層との間で共通語化の程度に

大きな差が見られる。

(2) 中学歴層と高学歴層とでは前回調査の唇音性II、口蓋化および鼻音化で差が見られる程度で、他の音声ではあまり差がないと言える。

(3) これらのことから学歴は共通語化を支える有力な要因の一つをなしている——特に義務教育までのものとそれ以上の教育を受けたものとは——と見られるが実際は年齢の要因の反映かも知れない。このことを確かめるには学歴と年齢とをクロスして集計し直せばよいわけであるが、ここでは単に学歴別の被調査者の平均年齢を比較するにとどめる。前回調査の平均年齢は低学歴層で37.5歳、中学歴層で32.1歳、高学歴層で40.6歳であった。今回調査ではそれぞれ、45.3歳、31.9歳、39.5歳である。低学歴層と中学歴層の年齢の差は前回調査で5.4歳、今回調査では実に13.4歳の開きがある。学歴よりも年齢の要因の方が共通語化の程度を規定しているという疑いが強いと言える。しかし、高学歴層が中学歴層よりも高年齢であるにもかかわらず共通語化が進んでいる音声がが多いということから、学歴の要因も関与しているとは言えよう。

3.6 その他

音声で前項までで述べなかつたいくつかの点にふれよう。

(1) Fig. VI-4 に示した唇音性 I の今回調査の年齢別の曲線は興味ある事実を示しているように思われる。この曲線で25~34歳の年齢層を含めそれより若い年齢層は方言で反応したものは皆無である。一方、それよりも高年齢層は、数が少ないとはいっても方言の音声で反応しているものがある。両者の差異は戦後の教育で育った世代と戦前の教育を受けた世代との違いであると言えよう。すなわち、現代かなづかいが実施される前は書きことばの上でもしばしばこの音声の語を「クウエ(ヨ)ウビ」とか「スイクウ」などと書き、「カモメ(鷗)」や「カミナリ(雷)」「メダカ(目高)」などとは書き分けていたという教育の面が影響されていると考えられる。糸魚川や長岡などで行われた調査でも同様の結果が報告されている。

(2) Fig. VI-3 で(B)で示した中の鼻音化は比較的共通語化が遅れている。これは次のように考えられる。すなわち、共通語形のたとえば [t] に対して方

言語形として [d] があるのが有声化であるが、これに対して、共通語形の [d] に対して方言語形として [˜d] がある。この後者の共通語化は、前者の共通語化に遅れているので、一時期 [d] について、これが共通語形なのか方言語形なのかという混乱が起きるのではないか。それぞれでは、Bのタイプで1対1で対応するが、相乗作用の結果、共通語形の [d] のからんだ、[˜d] という鼻音化音が共通語化するのが遅れたものであろう。

4. アクセント

アクセントの5項目は両度の調査でまったく同じである。2音節語から2項目、3音節語から3項目が選ばれている。調査項目の共通語のアクセントと方言のアクセントとの型の相違については第I章で述べたのでここでは省略する。

Fig. VI-14は両度の調査における各アクセントの共通語化の程度を示した比較図である。また、2音節、3音節の百分率は3.と同様2音節語、3音節語の共通語化の割合の平均の値である。

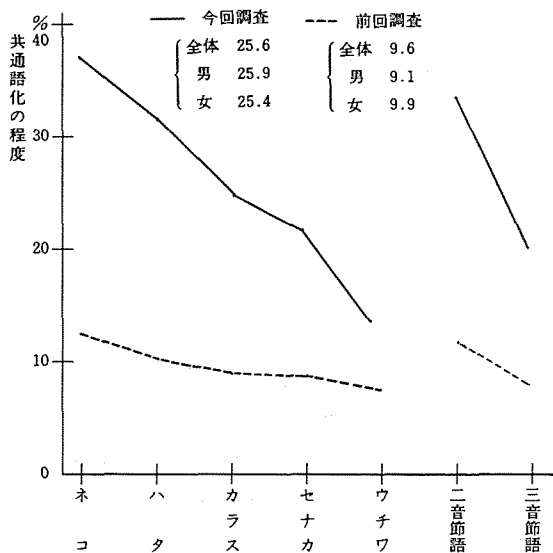


Fig. VI-14 アクセントの各項目に共通語で反応したものの比率

4.1 調査項目による共通語化の差異

アクセントの共通語化の程度の順位は両度の調査とも、ネコ(12.3, 37.0), ハタ(10.2, 31.3), カラス(9.2, 24.7), セナカ(9.0, 21.2), ウチワ(7.1, 13.8)

の順である——()内の左の数値は前回調査, 右は今回調査の結果である。

(1) どのアクセントでも前回より今回の方が共通語化している。

(2) しかし, アクセントの共通語化は音声のそれに比べて非常に劣っている。このことは一般に, ことばの変容では音声よりもアクセントの方が遅れると言われていることと一致している。

(3) 今回の調査で「ネコ」と「ハタ」の2音節語が相対的に共通語化しているのに対し, 3音節語はあまり共通語化していない。2音節語より3音節語の方がアクセントの型のバリエーションが多いことが関係しているのであろう。

(4) また, 2音節語の中では「ネコ」が, 3音節語の中では「カラス」が他の語より共通語化の程度が高い。これは「ネコ」や「カラス」が共通語のアクセントで頭高であるからと思われる。

(5) 図には示さなかったが, 「セナカ」と「ウチワ」との間で今回調査の結果, 共通語化の程度に差が見られる(21.2%対13.8%)が, 鶴岡方言のアクセントで反応した被調査者の比率はほとんど変わらない(77.0%対78.3%)。これは「ウチワ」の場合に $\overline{\text{ウチワ}}$ (3.5%) とか $\overline{\text{ウチワ}}$ (2.2%) など鶴岡方言でのアクセントの型と異なる反応が多く見られていることによっている。

4.2 性による共通語化の差異

アクセントの5項目では性による共通語化の程度にはほとんど差が見られない。差が見られたのは今回調査における「ネコ」と「セナカ」だけであり, 前者は42.2%対32.8%で男性が, 後者は16.7%対24.9%で女性の方が共通語化の程度が高い。

4.3 年齢による共通語化の差異

各項目の年齢別の共通語化の曲線がFig. VI-15~19である。

(1) 全般的に見ると, 両度の調査とも「凸型」の年齢曲線を描いている。前

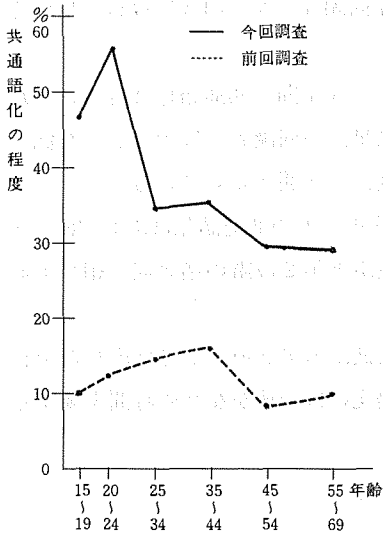


Fig. VI-15 年齢別共通語化曲線
 (「ネコ」のアクセント)

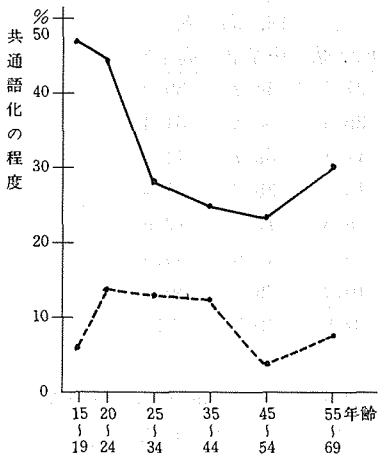


Fig. VI-16 年齢別共通語化曲線
 (「ハタ」のアクセント)

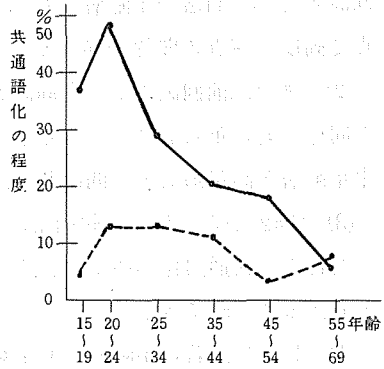


Fig. VI-17 年齢別共通語化曲線
 (「カラス」のアクセント)

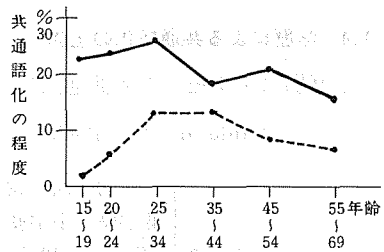


Fig. VI-18 年齢別共通語化曲線
 (「セナカ」のアクセント)

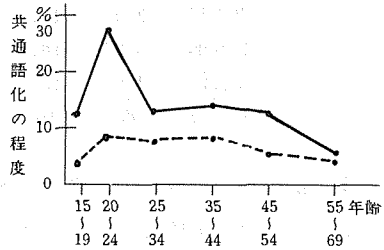


Fig. VI-19 年齢別共通語化曲線
 (「ウチワ」のアクセント)

回調査で35～44歳の年齢層にあった頂点が今回調査で20～24歳に移行している点で両度の調査の曲線が異なる。

(2) また、前回調査から今回調査にかけての20年間の共通語化は音声のそれと同様に若い年齢層にいちじるしい。その結果、前回調査では少なかった低・中年齢層と高年齢層との間に共通語化の程度に差が開き始めている。

(3) (1)(2)から、現在の鶴岡市におけるアクセントの共通語化は3.4の(8)で述べた音声の共通語化の段階で言えば、第1段階と第2段階の過渡期に相当すると考えることができよう。

(4) しかし、若い年齢層でも半数以上が共通語のアクセントで反応した項目が見られないことからアクセントの共通語化には今後かなりの時間を要すると予想される。

4.4 学歴による共通語化の差異

学歴別にアクセントの共通語化の程度を示したのがTable VI-8である。

Table VI-8 学歴別のアクセントの共通語化の程度(%)

	前 回 調 査			今 回 調 査		
	低学歴	中学歴	高学歴	低学歴	中学歴	高学歴
ネ コ	7.6	19.5	36.0	27.5	44.7	39.2
ハ タ	6.0	17.2	28.0	25.4	36.4	31.4
カラス	5.2	16.6	20.0	11.1	32.7	41.2
セナカ	5.2	14.8	28.0	13.2	25.8	31.4
ウチワ	3.4	13.6	20.0	6.3	19.4	17.6
2音節	6.8	18.3	32.0	26.5	40.6	35.3
3音節	4.6	15.0	22.7	10.2	26.0	30.1
人 数	383	169	25	189	217	51

(1) 前回調査ではどのアクセントも学歴の上昇に伴って共通語化の程度が高くなっていった。全体としての共通語化がきわめて低い段階では知識の反映としての学歴の共通語化に与える影響は大きいと言えよう。

(2) 今回調査でも学歴の差は見られるが、もっとも大きな差は低学歴層と中学歴層との間に見られる。中学歴層と高学歴層との間では2音節語では差が見

られない—— 数値の上ではむしろ高学歴層の方が劣っている。3音節語では「ウチワ」を除いては中学歴層よりも高学歴層の方が共通語化が進んでいる。

5. 文法・語彙項目の整理方法とこの章での扱い

5.1 データ整理の方法

文法および語彙項目における被調査者の回答は音声やアクセントに比べてバラエティがある。集計作業に電子計算機を利用するということから、手集計の場合以上にカテゴリーの数を整理する必要がある。そこで次の原則によってデータを整理した。

(A) 回答が単に音声的に異なるに過ぎないものは一つのカテゴリーにまとめる。たとえば「オキル」の命令形を見る項目で「オキレ」とその [ki] が有声化して [okire] [ogire] となった「オギレ」は特に区別しない。

(B) 語形上の差異が小さいと判断し得る回答は特に区別しない。たとえば「イツデモ」「イツモ」は「イツモ」の変異形と見なし同一回答として処理した。

(C) その他、特定の観点を定め、その観点外の情報は必要最少限にとどめた。たとえば、「この絵はあなたが書いたのか」ということを尊敬している先生に尋ねるときどう言うかを質問した項目では「書いたのか」の部分の敬語に着目し、「アナタ」と言うか「センセイ」と言うかの相手に対する呼称の部分は省略した。

(D) このような原則を適用してもまとめきれない回答の種類が多い項目もいくつか見られた。これらについては重要と考えられるカテゴリー以外は一括して「その他」とした。「その他」の回答は必要に応じて手集計で処理することにした。

5.2 文法・語彙項目の問題点

文法・語彙の個々の項目の結果を示す前に、これらの項目のいくつかの問題

点を示しておこう。

問題点の一つは音声に対して、語彙・文法の項目では共通語形での回答の比率が小さいことにある。一般に、言語の変容は語彙の面でいちじるしく、文法、音声が続いて、アクセントがもっとも遅れると言われている。音声とアクセントとの関係は調査結果でも通説を反映している。ところが、文法や語彙が音声よりも方言での回答が多くなっており、定説と矛盾する結果となっている。この理由として、次のことが指摘される。

(A) 音声・アクセントと文法・語彙とでは調査の観点が異なっている。すなわち、前者では被調査者の共通語使用能力に重点がおかれているのに対し、文法・語彙では使用の実態に力点が置かれている。この違いが音声・アクセントと文法・語彙との結果につながっていると言える。

第2の問題点は文法および語彙項目の内部にある。前回調査から今回調査までの20年間にこの面でも随分共通語化したと予想される。しかし、調査結果を見ると、両度の調査で共通語形での回答の割合が同程度の項目があり、さらには今回調査で前回調査を下まわった項目も多く見られる。言いかえれば、ほとんど共通語化が進まなかったものや、またむしろ方言化したものがあることになる。このような事態は常識では考えられない。なぜ、このような結果が生じたかを検討する必要がある。

(B) 一つには調査法上の問題が考えられる。すなわち、両度の調査で、文法・語彙項目のそれぞれの使用状況の規定のニュアンスに若干の差がある。ともに、日常の言語生活でどの語形を用いるかを質問したのであるが、今回調査では前回以上に「親しい友達に向かって言うときのことば」で答えることを被調査者に要求している。このことが前回よりも今回の方が方言の語形で答えるものが増えたことの一つの理由であろう。

(C) また、調査時期が被調査者の調査に対する回答の態度に影響しているとも考えられる。すなわち、前回調査の昭和25年ごろの鶴岡市では第V章でふれたように人々の行動空間は非常に限られており、見知らない人との接触は少なかった。そのような状態のときに、東京から調査員がやってきて、ことばについていろいろ質問された場合、できるだけ知識として知っている共通語で答えよ

うとしたであろう。このことは前回調査で高学歴層ほど共通語形で答えていることや鶴岡の人で共通語を「いいことば」という表現をする人が少なくないことからもうかがわれる。それが現在では知らない人に対しても身構えることなく、かなりざっくばらんに応待するようになってきている。その結果今回調査では必ずしも共通語形で答えなければ、という心理的圧力が働いていないということが考えられる。この解釈が正しいならばむしろ今回調査の方が言語生活の実態に近いと言える。

(D)ところが、今回の調査の被調査者の回答は実際以上に方言で答えたと思われる面もある。彼らは折角東京から鶴岡のことばを調べにやってきたのだから、できるだけ土地のことばを教えてやろう、というサービス精神から方言形で答えようとした被調査者がいたと考えられる。調査中にこのように感じられた被調査者がときどき見られた。

文法・語彙で共通語での回答が今回調査で減少していることについてはこれらの理由のほかにもいろいろのことが考えられるが、どれが主たる原因かは明らかではない。おそらく、種々の理由が絡み合ってこのような結果になったのであろう。

文法および語彙については両度の調査間の差異を論じてもしかたがない。一往両度の調査結果を対照させた表を示すが、前回調査の結果は参考資料にとどめ、今回調査の結果だけを分析の対象とする——今回調査の結果も鶴岡市での言語生活の完全な反映としてではなく、一つの目安として考えていただきたい。

6. 文 法

文法的特徴を知るために今回調査では日常の言語生活によく現われることばから11の項目が選ばれている。項目の内訳は次のとおりである（両度の調査で共通するのは9項目）。

(A) 動詞の活用に関するもの：2項目

(B) 人称代名詞に関するもの：2項目（前回調査は1項目。今回調査で新しく加えられた1項目は、人称代名詞と同時に(C)の格助詞をも調べる項目である）

(C) 格助詞に関するもの：1項目（前は2項目）

(D) 接続助詞に関するものなど：3項目

(E) 助動詞に関するもの：1項目（これは同時に形容詞の活用をも調べる項目である）

(F) 敬語法に関するもの：1項目（前はなし）

(G) 応答の語：1項目

このうち、(G)の応答の語は手集計によっているため、集計作業が遅れているので、この報告書から割愛する。以下、(A)から(F)の順に結果を示す。Table VI-9~22の数値は今回調査の結果であり、()内の数値は前回調査の結果である。

6.1 動詞の活用に関するもの

動詞の活用では「起きる」の命令形と「する」の否定形の二つが対象となっている。

「起きる」の命令形には共通語形の「オキロ」の他に、鶴岡地方では「オキレ」の形が見られる。調査結果はTable VI-9に示すとおりである。「その他」の大部分（全体の8.5%）はていねいな命令形の「オキナサイ(ヨ)」である。これは男性では2.0%しか見られないのに対して、女性では13.8%が「オキナサイ(ヨ)」で回答している。女性には「オキロ」の形の命令形で答えることに心理的な抵抗があるからこの表現で答えるものが多いのであろう。また、低学歴層が高学歴層より多く「オキレ」を用いている。15~19歳の層に「オキレ」の多いのは社会生活で、まだ「オキレ」が方言であることに気がついていないのではなかろうか。年齢別でこのような分布をする項目は他にもある。

「する」の否定形では共通語形の「シナイデ」に対し、鶴岡では「サねグデ」の形が見られる。結果はTable VI-10のとおりである。表では「シナクテ」は「シナイデ」に、「サねデ」「サナクテ」などは「サねグデ」に含めた。「その他」には「センデ」「セーヘン」などの回答が見られる。この語では「オキロ」

Table VI-9 「おきる」の命令形

	人 数	オキロ	オキレ	その他
全 体	457(577)	17.5(19.9)	72.6(73.7)	9.8(6.5)
男	204(243)	30.4(26.7)	67.6(72.8)	2.0(0.4)
女	253(334)	7.1(15.0)	76.7(74.3)	16.2(10.8)
15～19歳	60(98)	13.3(8.2)	83.3(89.8)	3.3(2.0)
20～24歳	50(64)	28.0(21.9)	60.0(71.9)	12.0(0.0)
25～34歳	88(130)	21.6(23.9)	69.3(68.5)	9.1(7.7)
35～44歳	101(118)	13.9(25.4)	76.2(65.3)	9.9(8.5)
45～54歳	75(84)	17.3(17.9)	70.7(75.0)	12.0(7.2)
55～69歳	83(83)	14.5(20.5)	73.5(74.0)	12.1(4.8)
低学歴	189(383)	11.6(16.2)	77.8(78.9)	10.1(5.0)
中学歴	217(169)	20.7(23.1)	70.0(66.3)	9.2(10.6)
高学歴	51(25)	25.5(56.0)	64.7(44.0)	9.8(0.0)

Table VI-10 「する」の否定形

	人 数	シナイデ	サねグデ	その他
全 体	457(577)	70.0(66.6)	22.9(32.4)	7.0(1.1)
男	204(243)	68.1(65.1)	25.0(33.7)	6.9(1.2)
女	253(334)	71.5(67.7)	21.3(31.4)	7.1(0.9)
15～19歳	60(98)	83.3(77.5)	13.3(22.4)	3.3(0.0)
20～24歳	50(64)	72.0(65.6)	12.0(34.4)	16.0(0.0)
25～34歳	88(130)	79.6(69.3)	13.6(31.1)	6.8(0.8)
35～44歳	101(118)	66.4(69.5)	26.7(28.8)	6.9(1.7)
45～54歳	75(84)	65.4(65.5)	28.0(33.4)	6.7(1.2)
55～69歳	83(83)	57.8(47.0)	37.4(50.6)	4.8(2.4)
低学歴	189(383)	65.1(61.1)	29.6(38.1)	5.3(0.8)
中学歴	217(169)	72.8(76.9)	18.0(22.5)	9.2(0.6)
高学歴	51(25)	76.5(80.0)	19.6(12.0)	3.9(8.0)

の結果と異なって「シナイデ」系の共通語を使うとするものが方言形の「サねグデ」などよりも圧倒的に多いことに特徴がある（70.0%対22.9%）。また、若い年齢層ほど共通語の形を多く使うと答えている。学歴別では「オキレ」と同様、低学歴層は「サねグデ」を多く用いている。

6.2 人称代名詞に関するもの

人称代名詞では一人称の複数形の接尾辞と二人称とが対象になっている。

一人称複数の語尾は鶴岡方言では「～ガタ」が使われる。共通語の感覚では「～ガタ」は「アナタガタ」のように目上の二人称の複数を表わす要素である。Table VI-11が調査結果である。「その他」には「ミンナ(デ、イコーヨ)」や「ワレワレ」などの形や「オラダ」の形が見られる。女性の方が男性よりも、また低年齢層の方が「～ガタ」を多く用いて青・壮年層になってしばらく少なくなり、また高年齢になると増加している。若い方の多いのは「オキレ」と同じく、これが方言形であることに気がつかず、友人の間で多く使われるものであるからであろう。

二人称は今回調査で新たに加えられた項目である。ここでは人称代名詞として「アナタ」「キミ」などをを使うか「オめー」「オメハン」などをを使うかという観点とともに、格助詞「を」についても見ている。格助詞「を」に相当する部分は「オ」のほかに、方言形では「トコ」「コト」および「バ」の形がある。さらに、「を」に当たる部分を欠く形も見られる——たとえば、「(センセーガ)アンタ、(ホメテイタヨ)」など。人称代名詞の面からの結果がTable VI-12であり、格助詞の結果がTable VI-13である。「その他」には相手の名前を呼ぶ、

Table VI-11 一人称複数の接尾辞

	人 数	～ タ チ	～ ド モ	～ ガ タ	そ の 他
全 体	457(577)	38.1(52.3)	0.7(1.2)	53.6(44.7)	7.9(1.8)
男	204(243)	44.6(53.9)	1.0(1.2)	41.2(42.8)	13.2(2.0)
女	253(334)	32.8(51.2)	0.4(1.2)	63.6(46.1)	3.2(1.5)
15～19歳	60(98)	26.7(51.0)	0.0(0.0)	70.0(49.0)	3.3(0.0)
20～24歳	50(64)	40.0(56.3)	0.0(0.0)	56.0(43.8)	4.0(0.0)
25～34歳	88(130)	34.1(58.5)	1.1(0.8)	59.1(37.7)	1.1(3.1)
35～44歳	101(118)	42.6(58.5)	0.0(2.5)	46.5(36.4)	10.9(2.5)
45～54歳	75(84)	46.7(41.7)	0.0(1.2)	44.0(56.0)	9.3(1.2)
55～69歳	83(83)	36.1(43.4)	2.4(2.4)	51.8(51.8)	9.6(2.4)
低 学 歴	189(383)	36.5(46.7)	0.5(1.0)	57.1(49.9)	5.9(2.5)
中 学 歴	217(169)	37.3(60.4)	0.5(1.8)	53.9(37.3)	8.3(0.5)
高 学 歴	51(25)	47.1(84.0)	2.0(0.0)	39.2(16.0)	11.8(0.0)

Table VI-12 二人称の言い方

	人数	アナタ キミ	オメー	その他
全 体	457	34.8	60.2	5.0
男	204	17.7	77.9	4.4
女	253	48.6	45.9	5.5
15～19歳	60	23.3	70.0	6.7
20～24歳	50	28.0	56.0	16.0
25～34歳	88	35.2	61.4	3.4
35～44歳	101	43.6	49.5	6.9
45～54歳	75	44.0	56.0	0.0
55～69歳	83	27.7	71.1	1.2

Table VI-13 格助詞「を」

	人数	～オ	～コト	格助詞 を	その他
全 体	457	28.0	63.0	5.3	3.7
男	204	32.4	62.3	4.4	1.0
女	253	24.5	63.6	5.9	5.9
15～19歳	60	23.3	71.7	0.0	5.0
20～24歳	50	36.0	44.0	4.0	16.0
25～34歳	88	31.8	54.6	10.2	3.4
35～44歳	101	29.7	67.3	2.0	1.0
45～54歳	75	28.0	62.7	9.3	0.0
55～69歳	83	20.5	72.3	4.8	2.4

のほかに、人称代名詞の面では「ワ(ア)」, 格助詞の面では「～タッチ」などが見られる。全体としては「オメー」または「～トコ」「～コト」が「アナタ」「キミ」あるいは「～オ」より多い。また、女性は男性より「オメー」を使う割合が低い。年齢別では二人称、格助詞とも一番若い年齢層(15～19歳)と一番年上の年齢層(55～69歳)がもっとも多く方言の形を使うと答えている。この理由も「～ガタ」と同じであろう。

6.3 格助詞に関するもの

Table VI-14 格助詞「に」

	人 数	ニ	サ	その他
全 体	457(577)	46.4(57.5)	52.5(41.8)	1.1(0.7)
男	204(243)	47.1(58.8)	51.0(39.9)	2.0(1.2)
女	253(334)	45.8(56.6)	53.8(43.1)	0.4(0.3)
15～19歳	60(98)	36.7(51.0)	63.3(49.0)	0.0(0.0)
20～24歳	50(64)	56.0(59.4)	44.0(40.6)	0.0(0.0)
25～34歳	88(130)	46.6(64.6)	52.3(34.6)	0.8(0.8)
35～44歳	101(118)	47.5(63.6)	52.5(34.8)	1.6(1.6)
45～54歳	75(84)	49.3(48.8)	49.3(51.2)	0.0(0.0)
55～69歳	83(83)	43.4(53.0)	53.0(45.8)	3.6(1.2)
低学歴	189(383)	40.2(54.3)	58.2(44.9)	1.6(0.8)
中学歴	217(169)	47.0(60.9)	52.1(38.5)	0.9(0.6)
高学歴	51(25)	66.7(84.0)	33.3(16.0)	0.0(0.0)

格助詞では前項の「オ」のほかに「(見)に(行く)」の「に」が対象となっている。鶴岡の方言では「ニ」を「サ」と言うことが多い (Table VI-14)。

「その他」の中には「(ミ)エ」などがある。前項の「オ」と同様に、15～19歳の年齢層が他より多く、20～24の年齢層がもっとも少なく「～サ」を使うと答えている。学歴では高学歴になるに従って「～サ」の使用が減少するという点で他と変わらない。

前回調査では「スズメヤラ、カラスヤラ」の並列を表わす助詞 (方言では、「～ダカス」「～デラ」) の言い方について調査したが今回調査では省かれている。

6.4 接続助詞などに関するもの

接続助詞では「(行く)けれども」, 「(行く)から」の二つが対象となっているが, 「(静か)なら」も条件を表わしているのでここでまとめておく。

「(行く)けれども」は鶴岡では「(イク)ドモ」の形で表現される。調査結果は Table VI-15 に示されるとおりである。「その他」には「(イク)ガ」「(イク)サケ」などが含まれている。女性が男性よりも「～ドモ」を多く用いている。15～19歳の年齢層が他より「～ドモ」を使う割合が高い。また、学歴の上昇に

Table VI-15 接続助詞「けれども」

	人 数	～ケ(レ)ド(モ)	～ドモ	そ の 他
全 体	457(577)	29.1(29.1)	66.7(66.4)	4.1(4.5)
男	204(243)	37.7(29.6)	58.3(65.0)	3.9(5.3)
女	253(334)	22.1(28.7)	73.5(67.4)	4.4(3.9)
15～19歳	60(98)	16.7(20.4)	83.3(79.6)	0.0(0.0)
20～24歳	50(64)	32.0(34.4)	64.0(65.6)	4.0(0.0)
25～34歳	88(130)	30.7(33.9)	64.8(57.7)	4.6(8.5)
35～44歳	101(118)	29.7(33.9)	66.3(60.2)	4.0(5.9)
45～54歳	75(84)	38.7(22.6)	61.3(70.2)	0.0(7.2)
55～69歳	83(83)	25.3(27.7)	63.9(69.9)	10.8(2.4)
低学歴	189(383)	24.3(24.0)	72.0(72.1)	4.0(3.9)
中学歴	217(169)	28.1(37.9)	67.7(56.8)	4.2(5.3)
高学歴	51(25)	51.0(48.0)	43.1(44.0)	5.9(8.0)

伴って「～ドモ」の言い方が減少し、「～ケレドモ」が増えている。

「(行く)から」のように理由を表わす助詞の場合は、鶴岡方言では「～サケ」「～ハケ」あるいは「～スケ」などが見られる。それぞれの使用の比率が Table VI-16 である。「その他」には助詞を伴わない形——「オレモイク、…」あるいは関西方言からきた「～サカイ」などが見られるがその数は少ない。全般的に方言の形が多く使われている。方言形の中では「～サケ」がもっとも多く、「～スケ」はほとんど見られない。若い年齢層に方言形で答えるものが多い。また、高学歴層の半数以上は共通語の「～カラ」を使っている。

Table VI-16 接続助詞「から」

	人 数	～カラ	～サケ	～スケ	～ハケ	その他
全 体	457(577)	33.5(42.8)	48.8(35.9)	1.5(5.0)	15.3(15.1)	0.9(1.2)
男	204(243)	37.7(49.4)	47.5(32.9)	1.0(4.1)	13.2(11.9)	0.5(1.6)
女	253(334)	30.0(38.0)	49.8(38.0)	2.0(5.7)	17.0(17.4)	1.2(0.9)
15～19歳	60(98)	23.3(26.5)	53.3(55.1)	10.0(4.1)	13.3(12.2)	0.0(2.0)
20～24歳	50(64)	28.0(37.5)	68.0(28.1)	0.0(9.4)	4.0(25.0)	0.0(0.0)
25～34歳	88(130)	34.1(51.5)	52.3(30.0)	0.0(4.6)	13.6(13.8)	0.0(0.0)
35～44歳	101(118)	36.6(53.4)	43.6(29.7)	0.0(3.4)	18.8(11.9)	0.0(1.7)
45～55歳	75(84)	40.0(34.5)	42.7(41.7)	1.0(6.0)	14.7(17.9)	2.7(0.0)
55～69歳	83(83)	33.7(45.8)	42.2(31.3)	0.0(4.8)	21.7(14.5)	2.4(3.6)
低学歴	189(383)	32.8(38.4)	45.0(39.2)	0.5(5.7)	20.1(15.7)	1.6(1.0)
中学歴	217(169)	29.0(48.5)	55.3(30.8)	1.8(3.6)	13.4(15.4)	0.5(1.8)
高学歴	51(25)	54.9(72.0)	35.3(20.0)	3.9(4.0)	5.9(4.0)	0.0(0.0)

共通語の「静かなら」に当たる言い方の活用語尾は、鶴岡の固有方言では「～ダバ」「～ダラバ」や「～ダド」と表現する。調査の結果は Table VI-17 に示されるとおりである。表では共通語形の中に「～ダッター」の形を含めた（「～ナラ」の形は全体で12.7%、「～ダッター」は2.8%である）。方言形の「～ダバ」「～ダラバ」「～ダド」も一括した（それぞれ、74.4%、3.5%、5.3%）。なお「その他」には「～ニナレバ」などの形が含まれている。「～ダ(ラ)バ」の形は高学歴層と他との間に差が見られるが、低学歴層と中学歴層とでは差がない。また、年齢でも、25～34歳が他よりやや「～ダ(ラ)バ」の比率が少な

Table VI-17 形容動詞の活用語尾「なら」

	人 数	～ナラ	～ダ(ラ)バ	そ の 他
全 体	457(577)	15.5(28.8)	83.2(67.5)	1.3(3.7)
男	204(243)	19.1(31.6)	80.4(65.8)	0.5(2.6)
女	253(334)	12.7(26.7)	85.4(68.6)	1.9(4.7)
15～19歳	60(98)	13.4(18.4)	86.6(77.5)	0.0(9.1)
20～24歳	50(64)	16.0(28.2)	84.0(71.9)	0.0(0.0)
25～34歳	88(130)	20.5(36.2)	77.3(59.2)	2.2(4.6)
35～44歳	101(118)	14.9(39.8)	84.2(57.7)	0.9(2.4)
45～54歳	75(84)	16.0(15.5)	81.3(77.5)	2.7(7.0)
55～69歳	83(83)	12.1(27.7)	85.5(68.7)	2.4(3.6)
低学歴	189(383)	9.5(23.7)	88.4(70.8)	2.1(5.5)
中学歴	217(169)	17.1(36.1)	82.0(57.4)	0.9(6.5)
高学歴	51(25)	31.4(56.0)	68.7(36.0)	0.0(8.0)

いようであるがあまり大きな差は見られない。

以上三つのどれを見ても、方言形の方が共通語の形より圧倒的に多いが、高学歴層は半数以上が共通語形を使うと答えている。

6.5 助動詞に関するもの

Table VI-18 助動詞「た」

	人 数	～タ	～ケ	そ の 他
全 体	457(577)	41.8(54.8)	54.1(39.4)	4.1(5.8)
男	204(243)	50.5(61.3)	43.2(35.7)	6.3(3.0)
女	253(334)	34.8(50.0)	62.9(41.9)	2.3(8.1)
15～19歳	60(98)	30.0(34.7)	70.0(61.2)	0.0(4.1)
20～24歳	50(64)	32.0(46.9)	68.0(53.1)	0.0(0.0)
25～34歳	88(130)	45.5(60.8)	51.2(34.6)	3.3(4.6)
35～44歳	101(118)	42.6(61.9)	52.5(32.3)	4.9(5.8)
45～54歳	75(84)	42.7(59.5)	50.6(28.5)	6.7(12.0)
55～69歳	83(83)	50.6(60.2)	41.0(31.3)	8.4(8.5)
低学歴	189(383)	37.0(52.0)	55.0(41.0)	8.0(7.0)
中学歴	217(169)	39.2(58.6)	59.0(37.3)	1.8(4.1)
高学歴	51(25)	70.6(72.0)	29.4(28.0)	0.0(0.0)

「あの人はずいぶん相撲が強かったなあ」と過去のことを回想する言い方に「～ケ」がある。「～ケ」を用いるか否かから整理したのがTable VI-18である。また形容詞「強い」の連用形の面から見たのがTable VI-19である。表で「その他」は「ツヨイノー」や「ツヨグテアッタ」などのほかに、「ツイモンダケノー」「ツヨカッチュノー」などが含まれている。後者はそれぞれ「～ケ」「ツヨカッ」に含める必要があるが作業上の理由でそうしなかった。

助動詞、形容詞の活用のだちらの場合でも女性の方が男性よりも方言形を多く使っている。また、年齢別では低年齢層が方言を使うとする割合が高い。学歴では低学歴と中学歴とでは差がなく、高学歴層は他より方言を使うものが少ない。

Table VI-19 形容詞「強い」の連用形

	人 数	ツヨカッ	ツイエツ	そ の 他
全 体	457(577)	42.9(56.2)	53.0(38.0)	4.1(5.8)
男	204(243)	51.0(62.5)	42.7(34.5)	6.3(3.0)
女	253(334)	36.4(51.5)	61.3(40.4)	2.3(8.1)
15～19歳	60(98)	30.0(38.8)	70.0(57.1)	0.0(4.1)
20～24歳	50(64)	32.0(46.9)	68.0(53.1)	0.0(0.0)
25～34歳	88(130)	50.1(63.1)	46.6(32.3)	3.3(4.6)
35～44歳	101(118)	42.6(62.8)	52.5(31.4)	4.9(5.8)
45～54歳	75(84)	42.7(59.5)	50.6(28.5)	6.7(12.0)
55～69歳	83(83)	51.8(60.2)	39.8(31.3)	8.4(8.5)
低学歴	189(383)	37.5(53.0)	54.5(40.0)	8.0(7.0)
中学歴	217(169)	40.6(60.4)	57.6(35.5)	1.8(4.1)
高学歴	51(25)	72.6(76.0)	27.4(24.0)	0.0(0.0)

6.6 敬語法に関するもの

尊敬している先生に向かって言うときのことばについてお尋ねいたします。

「この絵はあなたが書いたのか」と尋ねるとき、ふつつ何とおっしゃいますか

という問に対する被調査者の回答から、その人の敬語の程度を見ようとしたものである。これは鶴岡市の調査の翌年に実施された愛知県岡崎市での敬語意識

および敬語行動のプロジェクトに結ぶものの一つとして、今回調査で新たに加えられた項目である。この項目の整理に当たっては「書いたのか」の部分だけを分析対象とした。さらに、コード化の便宜上、「書いた」と「(の)か」の二つの部分に分割した。Table VI-20は前部分「カイト」の表現を、Table VI-21は後部分「カ」、すなわち疑問表現を示したものである。

前部分を見ると「カイト」の形が圧倒的に多く(66.3%)。「オカキナツタ」がこれに続く(22.1%)。この二つの形で全体の約9割を占めている。性・年齢・学歴のどのグループについても同じことが言える。「カイト」と「オカキナツタ」のそれぞれの比率を見れば、学歴が高いものほど「カイト」が減り、「オカキナツタ」の形が増える。また、性別では「オカキナツタ」の形は男性より女性に多く用いられている。

後部分では「デスカ」がもっとも多い(74.0%)。性では女性が、年齢では若い層が、学歴では高い層が「デスカ」を多く用いる傾向がある。一方、「デスカ」を使う割合が他より低いグループでは「ダカ」が多く用いられている。後部分でも前部分の「カイト」と「オカキナツタ」との関係と同じく、「デスカ」と「ダカ」との合計がどのグループでもほぼ一定になっている。なお、「ダカ」は「ガンスカ」とともに鶴岡地方の方言の言い方である——前者は町方の、

Table VI-20 「書いたのか」の「書いた」の部分

	人 数	オカキニ ナツタ	カカレタ	オカキ ナリ マシタ	カカシタ	カキマシタ	カイト	その他
全 体	457	22.1	3.1	1.1	0.9	1.5	66.3	5.0
男	204	16.7	2.9	1.5	0.5	1.5	73.5	3.4
女	253	26.5	3.2	0.8	1.2	1.6	60.5	6.3
15～19歳	60	26.7	3.3	0.0	0.0	3.3	60.0	6.7
20～24歳	50	24.0	8.0	0.0	0.0	0.0	60.0	8.0
25～34歳	88	22.7	2.3	1.1	1.1	3.4	65.9	3.4
35～44歳	101	18.8	3.0	2.0	1.0	0.0	70.3	5.0
45～54歳	75	20.0	2.7	2.7	0.0	0.0	70.7	4.0
55～69歳	83	22.9	1.2	0.0	2.4	2.4	66.3	4.8
低 学 歴	189	9.0	0.5	1.1	1.1	2.1	81.5	4.8
中 学 歴	217	28.1	6.0	0.5	0.9	1.4	57.6	5.5
高 学 歴	51	45.1	0.0	3.9	0.0	0.0	47.1	3.9

Table VI-21 「書いたのか」の最後の疑問表現

	人数	ゴザイ マスク	ガンスカ	ショーカ	デスカ	ダカ	カカ	その他
全体	457	0.4	1.8	1.8	74.0	10.3	7.0	4.8
男	204	0.0	0.0	2.9	69.6	14.7	9.3	3.4
女	253	0.8	3.2	0.8	77.5	6.7	5.1	5.9
15～19歳	60	0.0	0.0	0.0	83.3	3.3	6.7	6.7
20～24歳	50	0.0	0.0	4.0	84.0	4.0	0.0	8.0
25～34歳	88	0.0	1.1	1.1	80.7	6.8	8.0	2.3
35～44歳	101	0.0	0.0	2.0	72.3	10.9	9.9	5.0
45～54歳	75	1.3	4.0	2.7	65.3	16.0	6.7	4.0
55～69歳	83	1.2	4.8	1.2	63.9	16.9	7.2	4.8
低学歴	189	0.5	3.2	1.6	61.9	16.9	11.1	4.8
中学歴	217	0.5	0.9	1.8	82.5	6.0	3.2	5.1
高学歴	51	0.0	0.0	0.2	82.4	3.9	7.8	3.9

後者は御家禄（士族）のことばと言われている。

前部分と後部分とを合わせて「カイトノカ」の敬語表現全体を見てみよう。それがTable VI-22である。約半数が「カイトノデスカ」と答えている。これに続いて多いのが「オカキニナッタノデスカ」である。全般的に見るとといねいな敬語が少ないようである。これは調査の仮空の場面に対する回答であり、「カイトノカ」などのまったく敬語を使わない発語が見られるが、実際の場面ではもっと敬語

Table VI-22 「書いたのか」の敬語表現

人数(%)		段階
224(49.0)	カイトノデスカ	2
95(20.8)	オカキニナッタノデスカ	1
45(9.8)	カイトノダカ	3
22(4.8)	その他	
21(4.6)	カイトノカ	3
14(3.1)	カカレタノデスカ	1
6(1.3)	カイトノデショーカ	2
5(1.1)	カイトノデガンスカ	1
	カキマシタノカ	2
3(0.7)	オカキナリマシタノカ	1
2(0.4)	オカキニナッタノデガンスカ	1
	カカシタノデスカ	1
	カイトノデゴザイマスク	1
	カキマシタノデスカ	1
	オカキニナッタノカ	2
1(0.2)	オカキニナッタノデショーカ	1
	オカキナリマシタノデスカ	1
	オカキニナリマシタクデショーカ	1
	カカハッタノデガンスカ	1

を使っているのではなからうか。なお、表の「段階」は敬語のていねいさの程度を示すものであり、数字の小さいほどていねいな表現である。段階の判定は敬語形式が二つ以上含まれるものを1、一つのを2、ま

オカキニナツタノダカ	2
カカシタノダカ	2
カカシタノカ	2

段階	人数 (%)
1	129(28.2)
2	240(52.5)
3	66(14.4)
その他	22(4.8)

たく含まれないものを3とした。それぞれの段階の人数を表の下段に示した。

「その他」には「オカキニナツタノジャンイデスカ」のようなていねいな表現から「カイトナノ」などの表現まで含まれている。

敬語の段階と共通語化の程度については第七章で簡単にふれよう。

7. 語彙

日常語彙から9項目が選ばれた(前回調査は10項目)。このうち、2項目は今回調査で新たに加えられた項目である。また、残りのうちの4項目は前回と今回とで質問の仕方が異なっている。初めに両度の調査で同じ質問で調べた三つの項目(「いつも」、「るすばん」、「いらっしゃい」)を、次いで質問法に変更のあった四つの項目(「もう」、「おどろいた」、「はずかしい」、「コーデ」)を、最後に新たに加えられた二つの項目(「あげる」、「つらら」)を取りあげる。なお、この章の5.で述べたように両度の調査結果を表に示すが、分析の対象は今回調査の結果だけに限定する。

7.1 「いつも」の言い方

「いつも遅れてくる」の「いつも」に当たる鶴岡方言は「トース」「トーション」などである。調査の結果がTable VI-23に示されている。この表では「イ

ツモ」の中には「ショツチュー」(全体で7.9%)が含まれている。また、「ヨク」とか「カナラズ」などのように意味のズレが見られるものは「その他」として処理されている。

性・年齢・学歴のどのグループを見ても方言形の「トース」はほとんど見られない。特に15～19歳の若い年齢層は全員共通語形の「イツモ」を使うと答えている。

Table VI-23 「いつも」

	人 数	イツモ	トース	その他
全 体	457(577)	93.7(88.2)	4.4(8.8)	2.0(3.0)
男	204(243)	93.7(87.7)	4.4(8.6)	2.0(3.7)
女	253(334)	93.6(88.6)	4.3(9.0)	2.0(2.4)
15～19歳	60(98)	100.0(91.8)	0.0(8.2)	0.0(0.0)
20～24歳	50(64)	92.0(93.8)	4.0(3.1)	4.0(3.1)
25～34歳	88(130)	92.1(93.0)	3.4(5.4)	4.6(1.5)
35～44歳	101(118)	96.0(86.5)	4.0(10.2)	0.0(3.4)
45～54歳	75(84)	94.6(87.4)	5.3(14.3)	0.0(3.6)
55～69歳	83(83)	87.9(80.7)	8.4(12.1)	3.6(7.2)
低学歴	189(383)	92.0(86.4)	6.4(10.2)	1.6(3.4)
中学歴	217(169)	94.5(91.1)	3.2(7.1)	2.3(1.8)
高学歴	51(25)	94.1(100.0)	2.0(0.0)	3.9(0.0)

7.2 「るすばん」の言い方

「るすばん」の鶴岡方言は「ヨスリ」という。このほか「カラス」という語形があると言われているが調査結果には見られない。

調査結果 (Table VI-24) を見ると前項の「いつも」と同様に方言の語形(ヨスリ)はほとんど見られない。「ルスバン」と「ルスイ」とを比較すると「ルスバン」の方が優勢であるが、高年齢層のものでは「ルスイ」の語形で答えるものがかなり見られる。なお、表中の「その他」の多くは、単に「ルス」と答えるか「ルスする」などの回答である。

7.3 「いらっしゃい」の言い方

Table VI-24 「るすばん」

	人 数	ルスバン	ルスイ	ヨスリ	その他
全 体	457(577)	80.7(53.9)	11.8(21.0)	2.8(17.9)	4.6(7.3)
男	204(243)	79.4(53.1)	12.3(24.3)	2.9(12.8)	5.4(9.9)
女	253(334)	81.8(54.5)	11.5(18.6)	2.8(21.6)	4.0(5.4)
15～19歳	60(98)	100.0(59.2)	0.0(18.4)	0.0(14.3)	0.0(8.2)
20～24歳	50(64)	92.0(59.4)	4.0(34.4)	0.0(3.1)	4.0(3.1)
25～34歳	88(130)	85.2(58.5)	9.1(16.2)	1.1(16.9)	4.6(8.5)
35～44歳	101(118)	75.3(52.5)	12.9(21.2)	5.9(18.6)	5.9(7.6)
45～54歳	75(84)	80.0(47.6)	13.3(25.2)	1.3(23.8)	5.3(3.6)
55～69歳	83(83)	62.7(44.6)	25.3(16.9)	6.0(27.7)	6.0(10.8)
低学歴	189(383)	76.7(48.0)	11.1(19.3)	4.8(24.8)	7.4(7.8)
中学歴	217(169)	84.8(65.1)	11.2(23.7)	1.8(4.1)	2.2(7.1)
高学歴	51(25)	78.4(68.0)	17.7(28.0)	0.0(4.0)	3.9(0.0)

この項目は「こちらへいらっしゃい」と言うときの「いらっしゃい」の部分
を共通語形で言うか、方言の「ゴザへ」「ハイッテクネヘン」などで言うか
を見るものである。共通語の言い方でもいろいろある。Table VI-25に示した語
形だけでも多様である。「ゴザへ」「ハイッテクネヘン」の方言の形はあまり見
られない。また、34歳以下と35歳以上とで方言の語形の出方が異なっている。
すなわち、34歳以下では方言形はまったく見られないが35歳を越えると年齢が

Table VI-25 「いらっしゃい」

	人 数	イラッ シャイ	キテク ダサイ	オイデ クダサイ	ゴザへ	ハイッテ クネヘン	その他
全 体	457	43.3	12.0	9.6	3.5	1.8	29.8
男	204	43.6	15.7	8.8	1.0	1.5	29.4
女	253	43.1	9.1	10.3	5.5	2.0	30.0
15～19歳	60	50.0	21.7	0.0	0.0	0.0	28.3
20～24歳	50	38.0	12.0	12.0	0.0	0.0	38.0
25～34歳	88	45.5	14.8	13.6	0.0	0.0	26.1
35～44歳	101	42.6	9.9	9.9	2.0	2.0	10.7
45～54歳	75	46.7	16.0	9.3	5.3	5.3	17.3
55～69歳	83	37.3	1.2	10.8	12.0	2.4	25.3

上昇するにつれて方言形が増えている。性別では男性はほとんど方言を使わないが、女性は方言で答えるものはいくらか見られる（7.5%）。このことから（クロス集計をしなければ断定的なことは言えないが）高年齢の女性はかなり方言の形を使っているものと思われる。

表で「その他」が約30%見られる。その主な内訳を見ると次のとおりである。

- (1)「コイ」「キナサイ」などていねいでない表現（10.7%——全体を100とした時の%、以下同じ）
- (2)「ドーズ」とか「ドーズ、コチラエ」など、「イラッシャイ」の部分を省略すると答えるもの（5.0%）
- (3)「ゴザツテクネヘン」「キテクネヘン」などの方言的な回答（3.9%）
- (4)その他、「アガツテクダサイ」などの言い方

7.4 「もう」の言い方

以下の4項目は両度の調査で質問の方法が異なっている。この項目の両度の調査における質問文は次のとおりである。

前回調査：「おなががいっぱいになった。もうたくさんです」と言うとき、
「もう」ということをふつう何とおっしゃいますか

Table VI-26 「もう」

	人 数	モ	ー	ア	ド	そ の 他
全 体	457(577)	44.9(70.4)	52.3(28.4)	2.9(1.2)		
男	204(243)	51.5(71.2)	48.0(28.0)	0.5(0.8)		
女	253(334)	39.5(69.8)	55.7(28.7)	4.8(1.5)		
15~19歳	60(98)	33.3(53.1)	66.7(44.9)	0.0(2.0)		
20~24歳	50(64)	44.0(71.9)	52.0(25.0)	4.0(3.1)		
25~34歳	88(130)	39.8(76.9)	59.1(23.1)	1.1(0.0)		
35~44歳	101(118)	43.6(74.6)	53.5(23.7)	3.0(1.8)		
45~54歳	75(84)	58.7(72.6)	37.3(26.2)	4.0(1.2)		
55~69歳	83(83)	48.2(71.1)	47.0(28.9)	4.8(0.0)		
低学歴	189(383)	45.5(69.5)	49.7(29.0)	4.8(1.5)		
中学歴	217(169)	40.1(70.4)	58.1(29.0)	1.8(0.6)		
高学歴	51(25)	62.7(84.0)	37.3(16.0)	0.0(0.0)		

今回調査：「くたびれた。もう歩けない」と言うときの「もう」ということをふつう何とおっしゃいますか

鶴岡方言では共通語の「もう」を「アト」「アド」と言う。Table VI-26が調査の結果である。前項までの三つの語とは異なって、方言形（アド）がかなり多く使われている（全体の52.3%）。性別では女性が、年齢では若い層が、学歴では低・中学歴層がそれぞれ他に比べて方言形を多く使うと答えている。また、前回調査より今回調査の方が方言形を答える割合が高い。これは質問文を変えたことが関係しているのか、あるいは5.2で述べたことによっているのであろう。共通語の副詞に意味は違うが「あと」という語があるので、若い層で方言とは気がついていないことも原因となっている可能性がある。なお、「その他」には「トツテモ」「トテモ」などの語形が含まれている。

7.5 「おどろいた・びっくりした」の言い方

両度の調査の質問文は次のとおりである。

前回調査：「あんまり大きいので驚いた」と言うとき、「驚いた」ということをふつう何とおっしゃいますか

今回調査：うしろから急にワッと大きな声をかけられたときの感じですが、「アッ、どうした」とおっしゃいますか

前回調査は「翻訳式」の質問であり、今回調査は『日本語地図』のための調査と同じ質問文として「なぞなぞ式」となっている。鶴岡方言では「オドロイタ」と言うときに「オボゲタ」「ハトモタ」などが使われる。調査結果（Table VI-27）から、方言の形はあまり多くない——特に、低年齢層や高学年層で——ことがわかる。方言の語形では「オボゲタ」が「ハトモタ」より多い。また、共通語の語形では「ビックリシタ」が圧倒的に多く見られる。なお、なぞなぞ式の質問はある種の被調査者にとってはむずかしいようであり、調査者が求める語形がなかなか出ないで、結局、「アッ」とか「オーッ」あるいは「ナンダヤ」としか答えない被調査者がいた。共通語形「オドロイタ」方言形「オボゲタ」は前回より減り、共通語形「ビックリシタ」方言形「ハトモタ」は前回より増えたのはおもしろい。「ハトモタ」は「はっと思った」と関係づけて共通

語形的な意識があり、「オドロイタ」より「ビックリシタ」の方が話しことば的であることと関係があるかも知れないが、質問文を変えたのではっきり理由を論ずることはできない。

Table VI-27 「おどろいた・びっくりした」

	人 数	オドロイタ	ビックリシタ	オボケタ	ハトモタ	そ の 他
全 体	457(577)	8.5(25.8)	70.2(35.4)	11.6(25.0)	5.9(1.6)	3.7(12.3)
男	204(243)	11.3(31.7)	63.7(29.6)	11.8(26.7)	8.8(1.2)	4.4(10.7)
女	253(334)	6.3(21.6)	75.5(39.5)	11.5(23.7)	3.6(1.8)	3.2(13.5)
15～19歳	60(98)	10.0(20.4)	83.3(53.1)	0.0(8.2)	3.3(2.0)	3.3(16.3)
20～24歳	50(64)	0.0(31.3)	96.0(43.8)	0.0(12.5)	0.0(0.0)	4.0(12.5)
25～34歳	88(130)	4.6(27.7)	80.7(42.3)	6.8(23.1)	3.4(2.3)	4.5(4.6)
35～44歳	101(118)	10.9(25.4)	62.4(35.6)	13.9(28.8)	7.9(1.7)	5.0(8.5)
45～54歳	75(84)	16.0(23.8)	58.7(23.8)	14.7(38.1)	10.7(1.2)	0.0(13.1)
55～69歳	83(83)	7.2(27.7)	54.2(8.4)	26.5(38.6)	7.2(1.2)	4.8(24.1)
低学歴	189(383)	8.5(23.5)	60.9(30.8)	18.0(27.7)	10.1(2.3)	2.6(15.2)
中学歴	217(169)	7.8(27.2)	77.0(46.7)	8.3(19.5)	2.8(0.0)	4.1(6.5)
高学歴	51(25)	11.8(52.0)	76.5(28.0)	2.0(20.0)	3.9(0.0)	5.9(0.0)

7.6 「はずかしい」の言い方

この項目も「おどろいた・びっくりした」同様、今回は翻訳式、今回はなぞなぞ式の質問がなされた。

前回調査：「そんなことするのははずかしい」と言うとき「はずかしい」ということをふつう何とおっしゃいますか

今回調査：みんなの見ている前で失敗して、顔が赤くなるような感じをふつうどんなだとおっしゃいますか

「はずかしい」の方言形は「ショースー」あるいは「ショス」などである。Table VI-28から、方言形はほとんど使われない(5.9%)ことがわかる。性・年齢ではどのグループでも大きな差は見られない。高学歴層では方言の「ショースー」を使うと答える被調査者は皆無である。

「その他」には前項の「おどろいた・びっくりした」と同様、「オーミステイク」「シマッタ」「コマッタ」などの予想外の回答が見られる。

Table VI-28 「はずかしい」

	人 数	ハズカシイ	ショーサー	その 他
全 体	457(577)	92.1(86.8)	5.9(10.2)	5.1(3.0)
男	204(243)	89.2(88.0)	3.2(9.9)	2.1(2.1)
女	253(334)	94.5(86.0)	4.4(10.5)	3.6(3.5)
15～19歳	60(98)	96.7(83.7)	3.3(14.3)	0.0(2.0)
20～24歳	50(64)	92.0(90.6)	8.0(9.4)	0.0(0.0)
25～34歳	88(130)	92.1(83.1)	3.4(11.5)	4.6(5.4)
35～44歳	101(118)	92.1(91.5)	5.0(5.9)	3.0(2.5)
45～54歳	75(84)	89.3(88.1)	4.0(9.3)	6.6(4.0)
55～69歳	83(83)	91.6(85.5)	3.6(12.1)	4.8(2.4)
低学歴	189(383)	93.1(86.9)	3.2(9.4)	3.7(3.4)
中学歴	217(169)	89.4(85.2)	6.5(13.0)	4.1(1.8)
高学歴	51(25)	100.0(96.0)	0.0(4.0)	0.0(0.0)

7.7 「コーデ」の使用

この項目は両度の調査で質問のしかたが非常に異なっている。

前回調査：「このおかしはずいぶん甘い」と言うとき、「ずいぶん」ということをふつう何とおっしゃいますか

今回調査：「コーデ うまい」などのように「コーデ」ということばをお使いになりますか（使わないと答えた人には「きけばわかりますか」と尋ねる）

前回調査では翻訳式の質問から「ズイブン」と言うか「コーデ」と言うかを調べようとしているが、今回調査では「コーデ」という方言形を知っているかどうかの問題になっている。今回調査の結果がTable VI-29である。

「コーデ」を使うとするものが13.1%であり、他は使わないと答えている。また、知っているかどうかでは知っているものが89.0%であり、まったく知らないものが21.0%いる。性ではあまり差は見られない。年齢では高年齢層は他よりも「コーデ」を使うと答える割合が高い。また、若い年齢層や高学歴層ではこのことばを知らないとするものが他より多い。

この語は両度の調査法が違い、また答え方も違うため、パネル調査でも両度の

の調査の共通項目とは認めず、その観点からの集計はとりやめた。

Table VI-29 「コーデ」の使用

	人 数	使	う	使わ	ないが「知らない」
				き	げばわかる
全 体	457	13.1		65.9	21.0
男	204	14.7		62.7	22.5
女	253	11.9		68.4	19.8
15～19歳	60	6.7		60.0	33.3
20～24歳	50	0.0		76.0	24.0
25～34歳	88	8.0		68.2	23.9
35～44歳	101	11.9		65.3	22.8
45～54歳	75	18.7		66.7	14.7
55～69歳	83	27.7		61.4	10.8
低 学 歴	189	17.5		65.6	16.9
中 学 歴	217	9.7		68.7	21.7
高 学 歴	51	11.8		54.9	33.3

7.8 「あげる・やる」の言い方

この項目と次の「つらら」は今回調査で新たに加えられた項目である。共通語の「あげる・やる」に相当する鶴岡方言は「クレル」「クエル」「ケル」などである。Table VI-30が調査結果の表である。表の「クレテヤル」は共通語の語形（「やる」よりは多少意味が狭いと考えられるが）か方言の「クレル」からの派生かの判断が困難な語である。

共通語形の「アゲル・ヤル」と方言形の「クレル」との割合は全体としてはほぼ同程度である。方言形を多く使うと答えるものは、性別では男性、年齢では高年齢層、学歴では低学歴層である。反対に、女性、低年齢層、高学歴層は共通語形を使っている。また、共通語の「アゲル」と「ヤル」との割合は全体では29.8%対12.5%で「アゲル」が多い。性では男性は19.1%対15.2%、女性は38.3%対10.3%で女性は「アゲル」を使う割合が男性よりも高い。方言の語形では「クレル」(26.5%)、「クエル」(15.1%)、「ケル」(11.2%)の順に使われている。性・年齢のどのグループでもほぼ同じようになっている。

Table VI-30 「あげる・やる」

	人 数	アゲル・ヤル	クレル	クレテヤル	そ の 他
全 体	457	43.3	52.7	2.4	1.5
男	204	34.8	59.3	3.9	2.0
女	253	50.2	47.4	1.2	1.2
15～19歳	60	56.7	40.0	0.0	3.3
20～24歳	50	48.0	44.0	8.0	0.0
25～34歳	88	43.2	54.5	1.1	1.1
35～44歳	101	43.6	52.5	2.0	2.0
45～54歳	75	40.0	54.7	2.7	2.7
55～69歳	83	33.7	63.9	0.0	2.4
低 学 歴	189	33.9	61.4	2.6	2.1
中 学 歴	217	46.5	49.3	2.8	1.4
高 学 歴	51	64.7	35.3	0.0	0.0

7.9 「つらら」の言い方

「つらら」のことを鶴岡地方では「シガ」「スガ」などと言う。Table VI-31に示されるように全体の約4分の1が方言形を使うと答えている。性による差はない。年齢・学歴では高年齢層、高学歴層がそれぞれ他よりも方言の語形を

Table VI-31 「つらら」

	人 数	ツララ	シガ	そ の 他
全 体	457	72.4	24.3	3.3
男	204	70.6	26.0	3.4
女	253	73.9	22.9	3.2
15～19歳	60	100.0	0.0	0.0
20～24歳	50	92.0	8.0	0.0
25～34歳	88	81.8	17.0	1.1
35～44歳	101	63.4	35.6	1.0
45～54歳	75	73.3	21.3	5.3
55～69歳	83	41.0	48.2	10.8
低 学 歴	189	57.7	36.0	6.3
中 学 歴	217	82.0	17.1	0.9
高 学 歴	51	86.3	11.8	2.0

使う割合が高い。なお、「タルゴ（『日本言語地図』によれば庄内や秋田南部の海岸地方の方言）」や「コオリ」などは「その他」として処理した。

8. 新 語

今回調査では次の3語を新語の調査項目とした。

ボクシング、乗車拒否、ミニスカート

このうち、「ボクシング」は「ボクシング」と言うか「拳闘」と言うかを、他の2項目はそのことばを使っているかどうかを見ようとするものである。それぞれについての調査結果がTable VI-32~34に示されている。

「ボクシング」では「拳闘」と言うものは高年齢層の一部を除いてはほとんど見られない。「その他」の回答には「レスリング」「ラグビー」などの他のスポーツ名をあげたものや「ボクシング」と「レスリング」との混淆によると思われる「ボスリング」などが見られる。

「乗車拒否」は3項目の中で知らないと答える割合がもっとも多い(31.3%)。

Table VI-32 「ボクシング」

	人数	ボク シング	拳闘	その他
全 体	457	91.2	3.7	5.0
男	204	92.6	5.4	2.0
女	253	90.1	2.4	7.5
15~19歳	60	100.0	0.0	0.0
20~24歳	50	100.0	0.0	0.0
25~34歳	88	97.7	0.0	2.3
35~44歳	101	95.0	1.0	4.0
45~54歳	75	86.7	10.7	2.7
55~69歳	83	72.3	9.6	18.1
低学歴	189	85.7	4.2	10.1
中学歴	217	94.5	3.7	1.8
高学歴	51	98.0	2.0	0.0

Table VI-33 「乗車拒否」

	人数	乗車拒否	拒否	その他	「知 らない」
全 体	457	60.0	5.5	3.3	31.3
男	204	71.6	6.9	2.0	19.6
女	253	50.6	4.3	4.3	40.7
15~19歳	60	63.3	6.7	0.0	30.0
20~24歳	50	88.0	0.0	4.0	8.0
25~34歳	88	72.7	5.7	4.5	18.2
35~44歳	101	56.4	5.0	4.0	34.7
45~54歳	75	61.3	6.7	2.7	29.3
55~69歳	83	30.1	7.2	4.8	57.8
低学歴	189	35.4	7.9	2.6	54.0
中学歴	217	75.6	3.7	4.1	16.6
高学歴	51	84.3	3.9	2.0	9.8

正しく「乗車拒否」と答えた被調査者は全体の6割である。女性、高年齢層、低学歴層は知らないものが多い。調査当時の鶴岡市では乗車拒否そのものが見られなかったからであろう。なお、「拒否」という回答(5.5%)はその他に含めるべきであろうが、乗車拒否ということばを新聞やテレビで見たり、他人から聞いたことがあることの現われと考えて「その他」とは別にして示した。「ストライキ」「ボイコット」などは「その他」とした。

「ミニスカート」は90%以上が知っている——高年齢層、低学歴層にこのことばを知らないものはいくらか見られるが、「ミニ」と言うか「ミニスカート」と言うかでは「ミニスカート」が圧倒的に多い。なお、「その他」には「ミニスタイル」とか「ショートパンツ」などが見られた。

ここで取りあげられた三つの項目を新語と呼んでよいのかどうかという点では疑問だと言えるかも

Table VI-34 「ミニスカート」

	人数	ミニスカート	ミニ	その他	【知らない】
全 体	457	79.9	13.6	3.9	3.5
男	204	82.8	11.3	3.9	3.4
女	253	77.5	15.4	4.0	3.6
15～19歳	60	90.0	6.7	3.3	0.0
20～24歳	50	88.0	12.0	0.0	0.0
25～34歳	88	88.6	8.0	2.3	1.1
35～44歳	101	76.2	20.8	1.0	2.0
45～54歳	75	84.0	12.0	2.7	1.3
55～69歳	83	59.0	18.1	8.4	14.5
低学歴	189	73.0	14.8	4.8	7.4
中学歴	217	83.9	12.9	2.3	0.9
高学歴	51	88.2	11.8	0.0	0.0

知れない。適切な項目を選択するには事前調査に力を注がなければならないが、われわれの調査では音声・アクセントなどの20年間の変化を見るのが主目的であったこと、またこの項目の選定のための事前調査をする予算を捻出する余裕がなかったことなどから事前調査の段階は省略した。

9. その他の言語的項目

以上のほかに、ことばに直接関係がある項目がいくつか見られる。

(A) 鶴岡弁に対する意見(今回調査だけ)

- (B) 鶴岡弁・東京弁に対するイメージ（今回調査だけ）
- (C) 場面によることばの使い分け
- (D) 道さき

以下、順を追って結果を簡単に示そう。

9.1 鶴岡弁に対する意見

第 I 章でもあげたが、「鶴岡弁について次のような意見があります。あなたはどちらの意見に賛成なさいですか」と言って、次のリストを示し被調査者にどちらかを選択することを求めたものである。

1. 世の中が開けてきたのだから、もう鶴岡弁をしゃべっている時代ではない。鶴岡弁はできるだけなくしてしまった方がよい。
2. 鶴岡弁は私たちの鶴岡の大事な文化遺産だから、できるだけ保存しておいた方がよい。

1の意見を「改変」、2の意見を「保存」と呼ぶことにする。調査の結果は、Table VI-35に示すとおりである。

市民全体では鶴岡弁を保存すべきであるとする意見が約3分の2で、なくすという意見より優勢である。保存の意見は男性よりも女性に、高年齢層より低年齢層に、低学歴層より高学歴層に多い。性を除いて、音声やアクセントで共通語化しているグループが保存の意見に賛成し、遅れているグループが改変を求めている点で興味深い結果であると言えよう。

また、ことばの問題とは別に鶴岡での伝統的な生活様式を保存すべきか、それとも改変すべきかが質問されている。Table VI-36に見られるように、改変すべきであるとする意見の持ち主が圧倒的に多い。またこの意見は、性では男性に、学歴では高学歴層に高い支持を得ている。年齢では55～69歳の年齢層で改変を求めるものが少ないことを除けば、他の年齢層は同じような割合で改変すべきであるとする意見が多い。

これらから鶴岡弁に対する意見と一般の生活様式に対する意見とでは正反対の傾向となっていることがわかる。なお、出生地によるそれぞれの意見の構成にはほとんど差は見られない。表中の「その他」は「どちらとも言えない」お

Table VI-35 鶴岡弁に対する意見

	人数	改変	保存	その他
全 体	457	27.2	68.1	4.6
男	204	32.8	60.8	6.4
女	253	22.9	73.9	3.2
15～19歳	60	16.7	76.7	6.7
20～24歳	50	12.0	84.0	4.0
25～34歳	88	28.4	65.9	5.7
35～44歳	101	23.8	72.3	4.0
45～54歳	75	34.7	61.3	4.0
55～69歳	83	41.0	55.4	3.6
低 学 歴	189	32.8	64.0	3.1
中 学 歴	217	24.4	70.0	5.6
高 学 歴	51	19.6	74.5	5.9
庄内生まれ	379	26.1	69.1	4.8
庄内以外 の生まれ	78	33.3	62.8	3.9

Table VI-36 鶴岡での生活に対する意見

	人数	改変	保存	その他
全 体	457	76.6	20.1	3.2
男	204	78.9	19.1	2.0
女	253	74.7	20.9	4.4
15～19歳	60	73.3	26.7	0.0
20～24歳	50	80.0	20.0	0.0
25～34歳	88	80.7	15.9	3.4
35～44歳	101	84.2	12.9	3.0
45～54歳	75	82.7	14.7	2.7
55～69歳	83	57.8	33.7	8.4
低 学 歴	189	74.6	21.7	3.7
中 学 歴	217	77.4	20.3	2.3
高 学 歴	51	80.4	13.7	5.9
庄内生まれ	379	76.8	20.1	3.2
庄内以外 の生まれ	78	75.6	20.5	3.9

よびD.K.を加えたものである。

9.2 鶴岡弁・東京弁に対するイメージ

鶴岡弁および東京弁のそれぞれにどのようなイメージを持っているかを調査した。調査時間の制約上、イメージの内容を次の三つに制限した。

軽快だ——重苦しい 深みがある——薄っぺらだ 好きだ——きらいだ

この3対の形容詞・形容動詞のうち一般的に見て好ましい方（対の左側）に1点を、好ましくない方（右側）に-1点を与え、その平均点数を性・年齢・学歴別に示したのがFig. VI-20である（「どちらとも言えない」の回答は0点とした）。鶴岡では「鶴岡弁は重苦しいが深みがある。東京弁は反対に軽快であるが薄っぺらである」とするイメージが強いようである。15～19歳の年齢層の軽快か重苦しいかのイメージを除いては鶴岡弁と東京弁に対する感覚的レベルのイメージは対照的である。一方、好ききらいの感情の側面では若い年齢層でわずかの差が見られるほかは、鶴岡弁に対しても東京弁に対しても同程度に好きだと答えている。

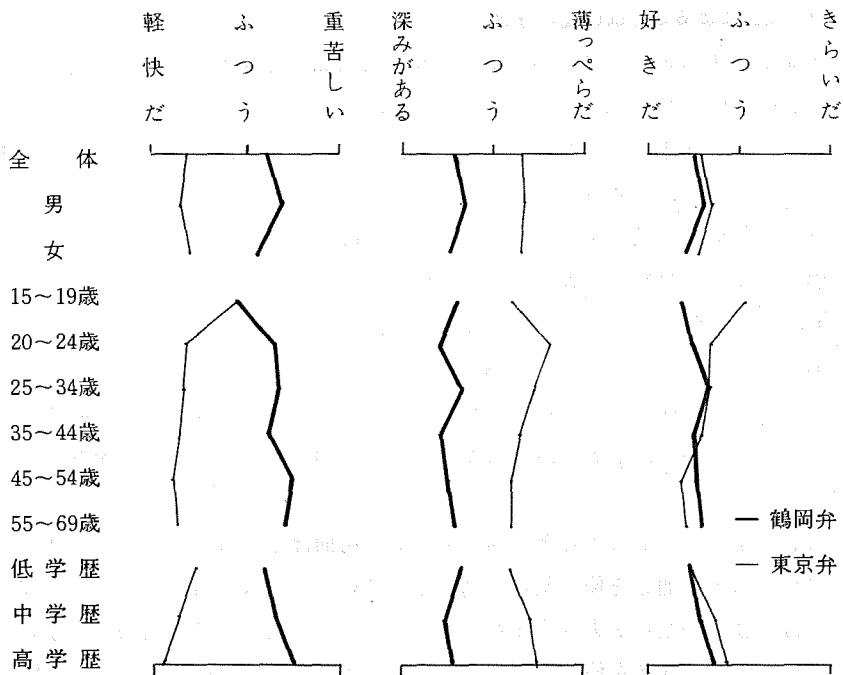


Fig. VI-20 鶴岡弁・東京弁に対するイメージ

鶴岡弁についての三つのイメージを合算して上と同じようにして点数を与え、その点数を 9.1 で見た鶴岡弁に対する意見（「その他」の意見は除いた）との関係を見たのが Table VI-37 である。表は鶴岡弁のイメージをよしとするもの

Table VI-37 鶴岡弁のイメージと 鶴岡弁に対する意見

イメージの点数 意見	-3~0	1~3	計
改 変	73	52	125
保 存	102	209	311
計	175	261	436

は鶴岡弁を保存すべきだとし、その反対のものは改めるべきだという意見が多いことを意味している。一方、東京弁についてのイメージと鶴岡弁の保存・改変の意見ではイメージのよいものは改変を、そうでないものは保存を求める意見が多い傾向が見られている（結果の表は除く）。

$$\chi^2 = 24.325 \quad P < 0.001$$

9.3 場面によることばの使い分け

共通語と方言のように二つ以上の異なった言語が存在する社会では場面によって、また話の相手によってことばを使い分けることがある。そこで、次の四つの場面（話し相手）で、共通語を使うか、方言を使うか、あるいは両者が混ざるかを被調査者に内省させた。

- (A) 家族同士で話をするとき（「対家族」と呼ぶことにする）
- (B) 近所の顔見知りの人と話をするとき（「対隣人」）
- (C) 鶴岡の町の人で顔見知りでない人と話をするとき（「対市民」）
- (D) 旅の人に話をするとき（「対旅人」）

この四つの場面のそれぞれで使われることばの割合を前回調査と今回調査とを対照させたのがFig. VI-21である。実線は今回調査、破線は前回調査の結果である。

これによると両度の調査とも図の上にある場面ほど方言を使うものが多く、下にいくほど共通語を使う割合が高くなっている。隣人と市民の場面との間のことばの使用の割合が大きく変わっている。また、両度の調査結果では家族や隣人の場面で共通語を使うと答える割合には差が見られない（方言だけを使うとする割合では差がある）が、市民や旅人に共通語で話すというものが今回調査ではいちじるしく増加している。

使い分けの問題は第八章でもう一度取りあげて説明するので、ここではこれ以上分析を加えないでおく。

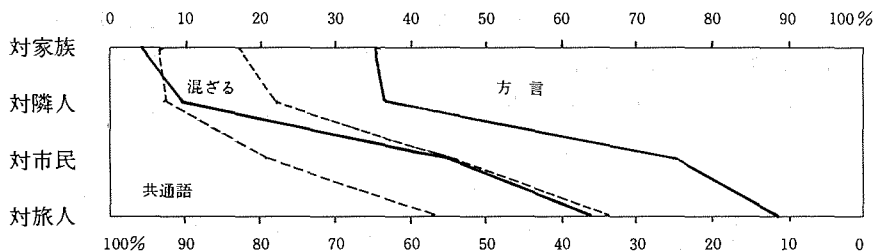


Fig. VI-21 場面によることばの使い分け ——— 今回調査 --- 前回調査

9.4 道きき

面接調査の一連の質問が全部終わった（と、被調査者が思った）時点で、
「～さんのお宅はどちらでしょうか」

という質問をして、被調査者が教えてくれることばが共通語か方言かを調査員が判定した（これを「道きき」と名づけておく）。道ききのねらいは調査という一種の緊張状態から解放されたときに、当人の本当の言語行動が現われやすいという点にある。これと前項で見た旅人に対して話をするときに使うことばとの関係を見れば、その人の実際の行動とあることばを使うという意識とのズレを調べることができると考えられる。両者の関係を示したのがTable VI-38である。

この表は、旅人に共通語で話すと答えた人は、実際の場面（道きき）でも共通語で話し、方言で話すと答えた人は実際にも方言で話すということを示している。このことから、被調査者の意識と行動との間にはほとんどズレがないと言える。

Table VI-38 意識と行動

道きき 旅人		意識と行動			計
		共通語	混ざる	方言	
共通語	148	114	30	292	
混ざる	19	66	29	114	
方言	5	18	28	51	
計	172	198	87	457	

$$\chi^2 = 93.319 \quad P < 0.001$$

第Ⅶ章 継続調査の結果 2
——合計点による分析——

1. この章の構成

前章では一つ一つの項目を取りあげてきた。この第VII章では両度の調査間の共通語化の程度を比較するための指標を作成し、その指標を用いていくつかの分析をする。指標は音声・アクセントあるいは文法・語彙・新語などについて作成することができるが、ここでは音声とアクセントとを中心に取りあげることにする。第VI章でも見たように、文法・語彙・新語の各側面は両度の調査結果を直接比較することに多少の難点があると言えるからである。

次のような操作によって作成されたものを共通語化の指標としよう。すなわち、31の音声項目あるいはアクセントの5項目のうち、被調査者が共通語で反応した項目の総数をもってそれぞれの指標とする。音声の指標を「音声得点」、アクセントのそれを「アクセント得点」と名づけることにする。音声得点は0点から31点、アクセント得点は0点から5点の間に分布し、得点が異なるものほど共通語化していると言える。

この章では初めに音声得点およびアクセント得点について両度の調査の全般的な差異（全体・性・年齢および学歴）を示し、その後、他の変数と各得点との関係から共通語化に影響を及ぼす要因を探ってみたい。なお、後者については今回調査だけの結果を示す（前回調査については第II章あるいは前回の報告書を参照されたい）。最後に、文法および語彙の共通語化の程度と要因との関係を簡単に示す。

2. 両度の調査における音声得点の差異

2.1 音声得点の分布

Fig. VII-1は前回調査と今回調査とのそれぞれの音声得点の累積百分率曲線である。この図から一見して、両度の調査結果の分布が非常に異なっていることがわかって。すなわち、前回調査の音声得点の分布はFig. VII-2のように得点をいくつかの段階にまとめればほぼ正規分布をなしているが、今回調査のそれはJ字型の分布となっている。正規分布からJ字型への分布の移行は、前回調査から今回調査までの約20年間の鶴岡市での共通語化が急速に進んだことを物語っている。なお、Fig. VII-1~2の基礎になった数値は巻末の「付表」に示されている。

2.2 性・年齢別の結果

Fig. VII-3は両度の調査の結果を年齢階層別に比較したものである。この図から得られる主な結果は次のとおりである。なお、Fig. VII-3のもとになった数値は巻末の「付表」に示されている。

(1) 音声得点の全体の平均は前回調査の17.7点から今回調査の25.8点と約8点上昇している。

(2) 性別の結果では男性が16.7点から25.2点、女性が18.4点から26.2点とそれぞれ8点前後上昇している。

(3) 年齢別では両度の調査とも年齢と音声得点とは逆比例している。言いかえ

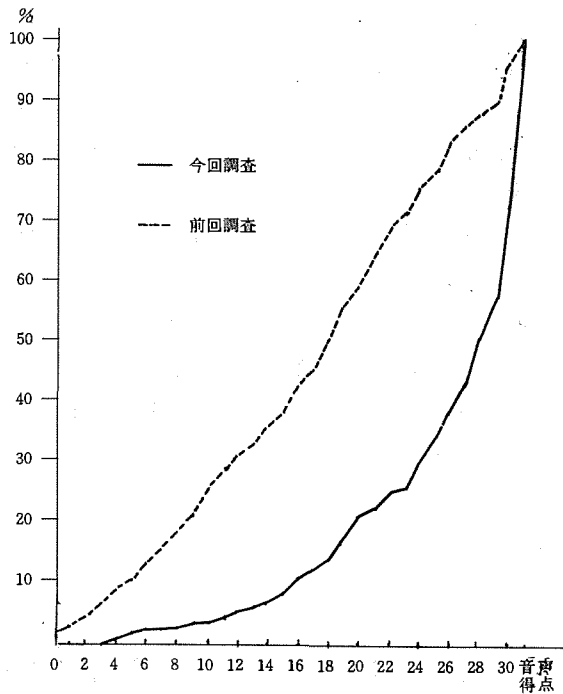


Fig. VII-1 両度の調査における音声得点の累積パーセント曲線

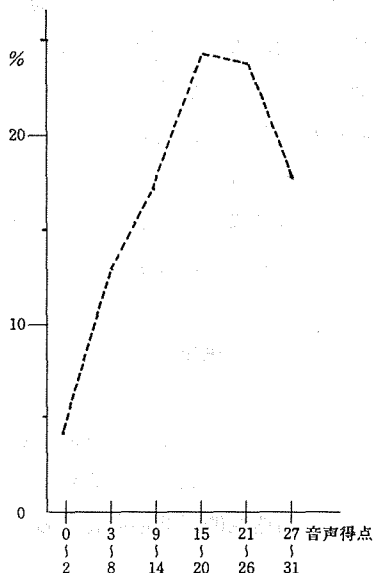


Fig. VII-2 前回調査の
音声得点の分布

れば、年齢の若いものほど共通語化しており、高年齢になるほど共通語化の程度は低くなっている。

(4) この傾向は今回調査では特に顕著であるが、前回調査では若い年齢層の間では若干様相が異なっている。前回調査の結果は25歳から34歳を頂点とする放物線に近くなっている。すなわち、この年齢層のものの共通語化がもっとも進んでおり、それからの隔たりが大きくなるにつれて共通語化の程度が次第に減少している。これは第VI章で述べたように前回調査のいくつかの個々の音声でも見られた現象である。

(5) 前回調査で25歳から34歳の年齢層の共通語化がもっとも進んでいた理由の一つとして、この年齢層が他よりも社会的活動により多く参与していることが考えられる。前回調査の行われた昭和25年ごろの社会では第V章で示されているように、マスコミはあまり発達しておらず、人々の話しことばによるコミ

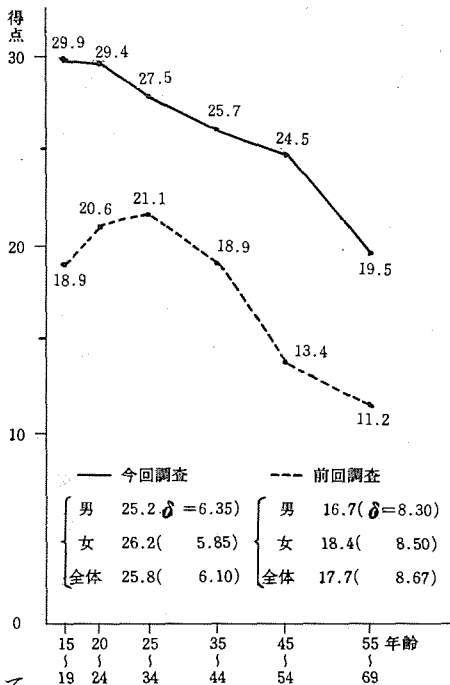


Fig. VII-3 年齢別音声得点

コミュニケーションの大部分はパーソナルなものであった。その上、人々の行動空間も狭かった。このような状況にあっては、社会活動に参加する機会の多いものは見知らぬ人々との接触の機会も多く、共通語化しやすい要素を多分にかけていたと思われる。このことが前回調査で25歳から34歳の年齢層の共通語化の程度を他よりも高くしていたのであろう。ところが現在はテレビなどを通じ、また社会全体の行動空間の拡大に伴い人々の言語刺激に接する機会が均等に増加したので、以前では共通語化に大きなウエイトを占めていた社会活動の大小といったことがあまり重要な変数ではなくなってきたと言える。そのことが今回調査でより若い年齢層ほど共通語化の程度が高いという現象を引き起こしたと考えられる。

(6) すなわち、他の言語現象と同様若いほど他からの、この場合共通語の影響を受けやすい状態に社会全体が変わったのであろう。共通語化した人が家庭を営めば、その子どもは共通語化しやすく、かくて加速度的に共通語化するのであろう。

(7) 今回調査の若い年齢層の共通語化がほぼ上限近くになっていることから考えると、近い将来には鶴岡市民の音声はほとんど共通語のそれに変わっていくことが予想される。

2.3 同一年齢集団の20年間の共通語化の程度

前回調査で15歳から19歳であったものはそれから約20年を経た今回調査では35歳から39歳の年齢集団に属している。同じ年齢のものがこの20年間にどの程度共通語化したかを見るために、Fig. VII-3を整理し直したのがFig. VII-4である。図は前回調査当時の被調査者の年齢を基準に構成されている。図の一点破線は両度の調査における同一年齢集団の共通語化の程度の差、つまりある年齢層が20年間にどの程度共通語化したかを示すものである。

(1) Fig. VII-4でわかるように、どの年齢層でもこの20年間に多かれ少なかれ共通語化が進んでいる。

(2) 図の一点破線は右下がりの直線をなしている。このことから、ある時点での被調査者の年齢とその後の共通語化とは密接な関係があることがわかる。

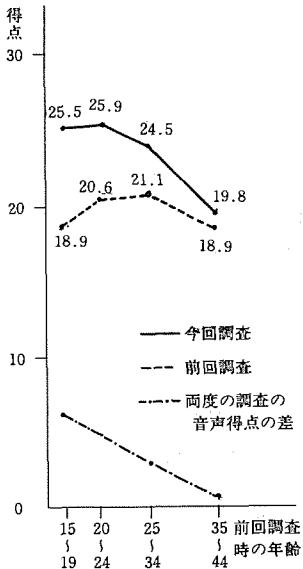


Fig. VII-4 同一年齢集団の音声得点の20年間の変化

(3) 年齢の高かったものはその後の社会変化にもかかわらず、それまでに獲得された程度以上には共通語化しにくい。35歳を過ぎればまったく変化しないとさえ言えよう。

(4) 反対に、若い年齢層ではまだ共通語化が進む可能性を秘めていると言える。

(5) 個人の言語体系が確立される時期を「言語形成期」と呼び、通常5歳ごろから12, 13歳ごろがこれに当たると言われている。この時期を過ぎれば単語の使用などで若干の変化はあっても個人の音声やアクセントの体系はほとんど変化しないと言われている。これは、前回調査の結果などから導かれた仮定であった。しかし、Fig. VII-4の結果は、言語形成期を過ぎたと言われる年齢層でもなお共通語化が進んでいることを示している。このことは言語形成期の仮定について上限の延長など検討の余地があることを示唆していると考えられる。

2.4 学歴別の結果

Fig. VII-5は両度の調査の学歴別の結果である。

前回調査では学歴が上昇するに伴って、音声得点も上昇している。今回調査では低学歴層と中・高学歴層との間では音声得点に差が見られるが、中学歴層と高学歴層とはまったく差がないと言ってもよい。これは第VI章の3.5で述べたように、前回調査ではある程度有力であった学歴の要因が、今回調査ではあまりきいておらず（特に中・高学歴間で）むしろ、年齢の要因の方がより強く働いていることの反映だと言えよう。

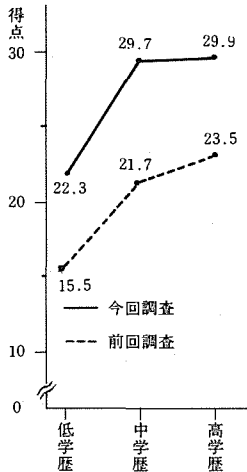


Fig. VII-5 学歴別音声得点

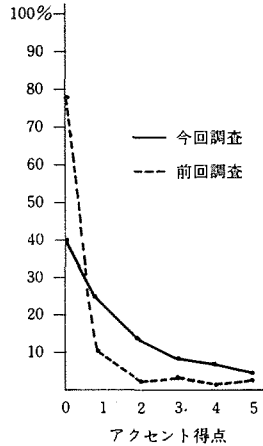


Fig. VII-6 両度の調査におけるアクセント得点の分布

3. 両度の調査におけるアクセント得点の差異

3.1 アクセント得点の分布

両度の調査におけるアクセント得点の分布がFig. VII-6である。両度の調査ともに得点の低いもののがもっとも多く、得点が増えるにつれて被調査者の割合が減少している。これはFig. VII-1の音声得点とは異質な分布を示している。このことからアクセントの共通語化は音声に比べて非常に遅れていることがわかってい。しかし、前回調査ではアクセント得点が0点であったもの（すべてに方言のアクセントで反応するもの）が78.0%もいたのに対し、今回調査では40.0%と半減していることから、この20年間にアクセントの面でもようやく共通語化し始めたとは言えるであろう。

3.2 性・年齢別の結果

Fig. VII-7は両度の調査の年齢別の結果である。

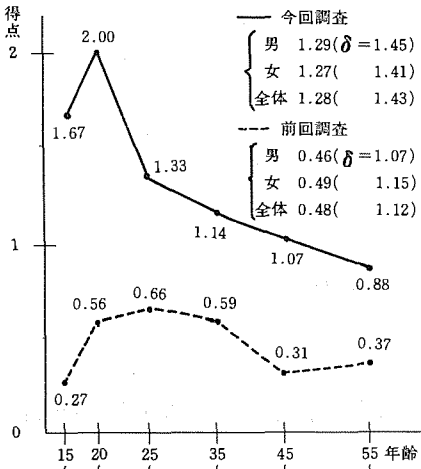


Fig. VII-7 年齢別アクセント得点

の共通語化が多少遅れていることを除けば音声の場合とよく似た曲線をなしている。

(5) このように若い層に移行していて、これがもっと全体が共通語化したときは、さらに若い方に移り、音声と同じ分布の型を示すようになるのではあるまいか。

3.3 同一年齢集団の20年間の共通語化の程度

2.3と同じ操作をして作ったものがFig. VII-8である。ここでも音声の場合と同様若い年齢層のもののはかなりの程度共通語化が進んでおり、年齢の高い層での共通語化の進展の程度は少ないという結果

(1) アクセント得点の全体の平均は前回調査の0.48点から1.28点と0.8点上昇している。この差は音声得点に比べて小さいと言えよう。

(2) 男性では0.46点から1.29点と、女性は0.49点から1.27点とそれぞれ同程度上昇している。

(3) 年齢別に見ると、前回調査では音声同様25歳から35歳の年齢層の共通語化がもっとも進んでいた。

(4) それが今回調査では共通語化の頂点が20歳から25歳に移行している。これよりも若い15歳から19歳の年齢層

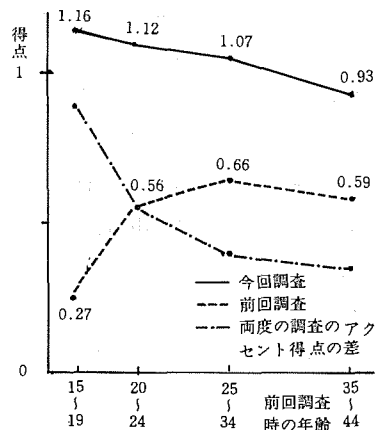


Fig. VII-8 同一年齢集団のアクセント得点の20年間の変化

が見られている。

3.4 学歴別の結果

Fig. VII-9は両度の調査の学歴別の結果である。前回調査で学歴の上昇に伴ってアクセント得点も上昇していたものが、今回調査では中学歴層と高学歴層とでは差が認められなくなっている。この現象は音声の場合とまったく同じである。

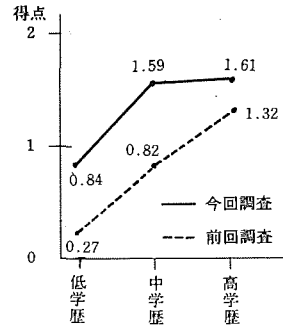


Fig. VII-9 学歴別アクセント得点

4. 音声・アクセントの共通語化に影響する要因の検討

2および3で見てきた、性・年齢・学歴別の結果から、これらのうちで共通語化の程度にもっとも強く関与する要因は年齢であることがわかった。これに次ぐのは学歴であるが、今回調査の結果では中学歴以上の階層を区別する要因としては有効ではなくなっている。また、性の要因は共通語化を支えるものとしてはほとんど効果がないと言える。

これらの要因以外に人々の共通語化の程度に影響すると思われるいくつかの要因を検討してみよう。今回調査における諸要因と音声およびアクセント得点の平均点の関係がTable VII-1~8あるいはFig. VII-10に示されている。表中の記号<はカテゴリー間の共通語化の平均点数に30%水準以下で傾向差が見られることを、<は0.5%以下で統計的な有意差が認められることを示している。差の検定は上下位分析(χ^2 検定)によっている。

4.1 言語形成期の居住地と両親・配偶者の出身地

被調査者の言語形成期(ここでは4歳から12歳)の居住形態によって次の二つのグループに分けて、それぞれのグループにおける音声・アクセントの共通

語化の程度を比較したのがTable VII-1の上段である。言語形成期に庄内地方以外で生活した期間が4年未満のものを「庄内グループ」、4年以上のものを「非庄内グループ」とすれば、Table VII-1から非庄内グループの方が音声・アクセントのどちらも共通語化の点数は高いと言える。

Table VII-1の2段目以下は被調査者の両親および配偶者の出身地を庄内地方とそれ以外とに分けたときの結果である。音声得点と両親の出身地との関係では、母親の出身地が庄内地方であるかどうかによって差が見られるが、父親の出身地では差が見られない。一方、アクセントの共通語化では両親の出身地とも庄内地方以外のものの方が共通語化の程度は高い。また、配偶者の出身地について見ると、音声・アクセントともに非庄内出身の方が共通語化の点数が高い。Table VII-1全体を通して見ると、本人の居住経歴および両親・配偶者の出身地の影響はアクセントの場合にはかなり強く見られるが、音声ではあまり強くないと言える。なお、これらは、ただ居住経歴や出身地だけの問題だけでなく、それらが生み出す社会的な差の反映であることはもちろんで、これはこの要因だけのことではない。

Table VII-1 言語形成期の居住地と両親・配偶者の出身地別の音声・アクセント得点

		人 数	音 声 得 点		アクセント得点	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差
4～12歳の時期 に庄内地方以外 で生活した期間	4年未満	398	25.5	6.22	1.17	1.39
	4年以上	59	27.4	4.90	2.02	1.51
父親の出身地	庄 内	387	25.6	6.15	1.18	1.41
	非 庄 内	70	26.5	5.77	1.84	1.39
母親の出身地	庄 内	383	25.6	6.15	1.14	1.40
	非 庄 内	74	26.6	5.76	1.96	1.38
配偶者の出身地	庄 内	278	24.1	6.46	1.16	1.34
	非 庄 内	53	27.1	5.13	1.40	1.38

4.2 職業別の結果

被調査者の職業と共通語化の程度との関係を示したのがTable VII-2である。

Table VII-2 職業別の音声・アクセント得点

	人数	音声得点		アクセント得点	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
給与生活者	200	26.3	5.61	1.37	1.44
職 商店主・工場経営者	47	22.0	7.62	0.96	1.38
業 工員・運転手	20	26.5	5.08	1.50	1.66
日雇・パート	18	23.3	6.49	0.39	0.59
主婦	61	27.3	4.11	1.23	1.32
(1) 学生	55	30.1	1.49	1.67	1.54
無職	54	21.9	6.64	1.15	1.33
専門的・技術的職業	45	27.0	5.53	1.44	1.54
職 管理的職業	25	25.2	5.38	1.32	1.29
事務	67	26.6	5.80	1.40	1.57
業 販売	61	25.6	6.22	1.30	1.33
技能工・単純労働者	57	23.3	6.69	1.04	1.39
(2) サービス業	13	21.7	6.33	0.38	0.49
その他	19	24.7	6.92	1.11	1.43

注. 職業(1)では農業の2名は表から除いてある。

職業(2)では主婦・学生・無職は省いた。

職業(1)では学生の共通語化がもっとも進んでいる。これに次ぐのが、主婦、工員・運転手、給与生活者のグループである。これらのグループは平均年齢が比較的低いものばかりである。(それぞれ、18.1, 41.6, 30.0, 38.8歳)。他方、共通語化が遅れているのは無職、日雇・パートおよび商店主・工場経営者のグループであり、これらの平均年齢は高い(それぞれ、51.0, 43.1, 47.3歳)。共通語化の進んだグループと遅れたグループとに平均年齢において開きが大きいところから、Table VII-2の職業(1)の結果は職業による差異よりも年齢の差異がきいていると考えるべきであろう。

職業(2)は総理府の職業分類の大分類を基にしたグループ分けであり、職業(1)の中の主婦・学生・無職は表から除かれている。ここでは専門的・技術的職業に従事するもののグループがもっとも共通語化の程度が高い。これに次ぐのが

事務従事者、販売従事者などである。反対に共通語化が遅れているのはサービス業、技能工・単純労働従事者および管理的職業従事者のグループである。技能工・単純労働者の平均年齢が低いということを除けば、共通語化の進んだグループは年齢の低いものが多く、遅れたグループの年齢は高いという関係がここでも成立している。

したがって、職業の要因は第V章で述べた予想にもかかわらず、共通語化の程度にはほとんど関係がないと言える。学歴との関係も、たとえば職業(2)でも、高学歴のもの多そうな専門・技術的職業が共通語化が進んでいる反面、やはり高学歴が期待される管理的職業のものの共通語化が低いので、あまり関係がなさそうである。管理的職業のものの年齢が高い方が強く影響しているのである。

4.3 興味や関心の方向

被調査者の興味や関心の対象が鶴岡や庄内地方の内にある（地域志向）か外にある（全国志向）かによってグループ分けしたときの結果がTable VII-3である。この表から、全般的な傾向として全国志向型のグループの方が地域志向

Table VII-3 関心や興味の方向別の音声・アクセント得点

	人 数	音 声 得 点		アクセント得点	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
301 庄 内 住みたいところ	201	24.4	6.90	1.07	1.31
庄内以外	256	26.8	5.14	1.43	1.50
305 庄内の報道 ニュースの関心	145	24.7	6.75	1.05	1.37
全国の報道	259	26.4	5.61	1.44	1.49
307 地 方 紙 主 購 読 新 聞	144	24.5	6.32	1.10	1.28
全 国 紙	277	26.9	5.52	1.45	1.52
313 県政・市政 関心のある選挙	287	25.1	6.35	1.00	1.32
国政の選挙	142	27.2	5.17	1.75	1.50

型のグループよりも共通語化していると言える。

4.4 鶴岡での生活や鶴岡弁に対する意見

4.3 とほぼ同じ観点からの調査項目であるが、それを直接的に質問したのが第Ⅶ章の9.1で取りあげた項目である。Table Ⅶ-4から、鶴岡での生活はもっと新しい生活のやり方を取り入れる（改変する）べきであるという意見のグループと鶴岡の伝統的な生活を重んずべきであるとするグループでは音声やアクセントの共通語化の程度にはあまり差がないことがわかる。また、鶴岡弁はできるだけなくす方向に持っていく方がよいとするグループとできるだけ保存したいと考えているグループとでは、後者の方が共通語化の程度が高いと言える。若い人にかえって保存すべきであるとするものが多いようである。

Table Ⅶ-4 鶴岡での生活、鶴岡弁に対する意見別の音声・アクセント得点

		人 数	音 声 得 点		アクセント得点	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差
308 鶴岡での生活	改 変 す る	350	26.1	5.79	1.26	1.44
	伝 統 を 守 る	94	25.1	6.74	1.38	1.44
312 鶴 岡 弁	できるだけなくす	125	24.5	6.06	1.20	1.32
	できるだけ保存する	319	26.4	5.87	1.32	1.45

4.5 行動空間の広さ

被調査者の行動空間の広狭と共通語化との関係を見たのがTable Ⅶ-5である。東京の知人や親せきとの交流の程度は前回調査ではかなり目立った要因の一つであったが、今回調査では統計的な意味での差は見られないようになっている。半年間の旅行の日数では5日以上旅行したグループは日数の少ないグループより共通語化の程度が高い（音声得点で、0日と5日以上との間に0.5%水準で有意差が見られる）。また、団体や組合への参加の程度では、団体に加入し役員をしている（あるいは、役員をしていた）ものが役員をしたことがないものよりもアクセント得点で高い以外には差が認められない。

全般的に見ると、行動空間が広い狭いということは、共通語化の要因として

はあまり重要だとは言えないようである。

Table VII-5 行動空間別の音声・アクセント得点

		人 数	音 声 得 点		アクセント得点	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差
302	行き来している 東京の知人や親 せきとのつきあ い	274	25.9	6.03	1.37	1.48
	行き来はしていないが 電話や文通はしている	108	25.8	6.17	1.17	1.37
	つき合いなし	75	25.1	6.19	1.12	1.29
106	0 日	226	25.0	6.23	1.18	1.40
半年間に旅行し た日数	1～4 日	110	26.1	5.95	1.00	1.24
	5 日以上	121	26.8	5.81	1.73	1.53
					^	
311	役員をしている	109	26.6	5.32	1.60	1.61
団体や組合への 参加	団体に入っているが 役員はしていない	134	25.4	6.26	1.11	1.45
	団体に入っていない	214	25.6	6.33	1.22	1.28
					∇	

4.6 テレビへの接触

1日にテレビを見る時間の長さで共通語化の程度との関係 (Table VII-6) では、視聴時間の短いグループほど共通語化の得点が高くなっている。常識的には、マスコミ接触量の多いものほど共通語化しやすいと考えられよう (前回調査の結果はそのようになっていた)。してみると、Table VII-6 の結果はどう考えるべきであろうか。テレビ視聴時間の短い (150分未満) のものと長い (241分以上) のものと2グループを年齢別に集計し直した結果がFig. VII-10である。この図を見ると、視聴時間の長短どちらのグループでも年齢の上昇に

Table VII-6 テレビへの接触別の音声・アクセント得点

		人 数	音 声 得 点		アクセント得点	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差
303	150分未満	158	27.1	4.98	1.51	1.50
一日当たりの テレビ視聴時間	151～240分	170	26.0	6.06	1.19	1.48
	241分以上	129	23.8	6.86	1.12	1.23
					∇	

伴って音声得点が低くなっており、双方の得点間の隔たりが大きくなっている。このことから、年齢の低い方ではテレビを見る時間が長いか短いかは共通語化の程度とはあまり関係がないが、35歳以上の年齢層ではこの要因がかなりきいていると言えよう。しかし、35歳以上の人ではテレビをあまり見ない方が共通語化するのではなく、むしろ見る時間が職業的な関係から制約されていることが原因であると考えられるべきであろう。すなわち、視聴時間の短いグループは日中は勤めに出ているものが多く、長いグループは無職のものが多く、ことがFig. VII-10の結果に反映しているのであろう。

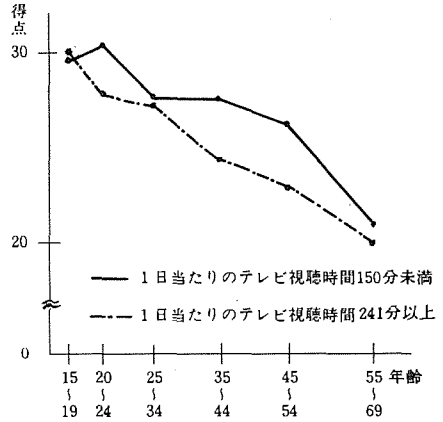


Fig. VII-10 テレビ視聴時間と年齢別の音声得点

4.7 経済階層

経済階層を見るために、世帯の手取年収が調査されている。Table VII-7に示されるように経済階層は共通語化の程度とあまり関係はない。昔士族であったかどうかも、それほど大きな関係はない。

Table VII-7 階層別の音声・アクセント得点

	人数	音声得点		アクセント得点	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
315 士族	85	26.9	4.98	1.49	1.49
昔、士族だったか 士族以外	372	25.5	6.30	1.23	1.41
316 90万未満	145	25.3	6.11	1.14	1.43
世帯の手取年収	91~150万	26.4	5.98	1.26	1.30
	151万以上	125	25.9	5.96	1.54

4.8 その他

Table VII-8は共通語化の要因を示すものではないが、共通語化の程度との関連を見るという意味で取りあげた。表の最上段の敬語の段階は第VI章の6.6で示したものである。

敬語の段階ではていねいな敬語形式を取るものほど音声・アクセントとともに共通語化の得点は高い。また、旅人に話すことば（被調査者の内省）、道ききおよび調査全体からの判定のどちらの場合でも共通語を話すと答えたもの（あるいは、判定されたもの）の共通語化の得点は高い。「道きき」は調査員への日常的な話であるが、これと共通語化の得点との関係が強いのは、音声あるいはアクセント得点を指標とした共通語化の程度がよく実際を反映しているということを示すものではあるまいか。

なお、音声得点とアクセント得点の相関は $r = 0.29$ である。

Table VII-8 敬語、調査員による判定別の音声・アクセント得点

		人 数	音 声 得 点		アクセント得点	
			平均	標準偏差	平均	標準偏差
271 尊敬している先生 に対することばの 敬語の段階	1 (ていねい)	129	27.8	4.97	1.93	1.59
	2 (ふつう)	240	25.9	5.70	1.16	1.35
	3 (らんぼう)	66	20.9	6.62	0.61	0.98
309	共 通 語	292	27.0	5.09	1.53	1.53
旅の人に話す ことば	混 ぎ る	114	24.8	6.48	0.82	1.06
	方 言	51	21.0	7.63	0.82	1.18
317	共 通 語	172	28.7	3.23	1.99	1.60
道 き き	混 ぎ る	198	25.9	5.65	0.92	1.19
	方 言	87	19.7	6.90	0.70	0.92
317	正しい共通語	62	29.8	1.66	2.44	1.71
調査全体からの 判定	共通語だがどこ となくちがう	171	28.0	3.72	1.57	1.44
	共通語が混ざる	204	23.5	6.52	0.75	1.04
	共通語を話さない	20	16.4	7.56	0.65	1.78

5. 各要因の比較

今まで取りあげてきた各要因のうち、どれが強く影響しているであろうか。強く影響する要因はその要因内のカテゴリー間の共通語化の平均得点の差を大きくするという仮定のもとに、平均値の最大と最小のものとの差、すなわち範囲を示したのがFig. VII-11および12である。図で棒線の長い（範囲の広い）要因は共通語化に強く影響するものであると考えられる。ただし、このような操作ではカテゴリー数が多いほど範囲は大きくなりやすいことを考慮しておかねばならない。

5.1 音声に及ぼす要因の比較

Fig. VII-11は音声得点と各要因との関係を示したものである。

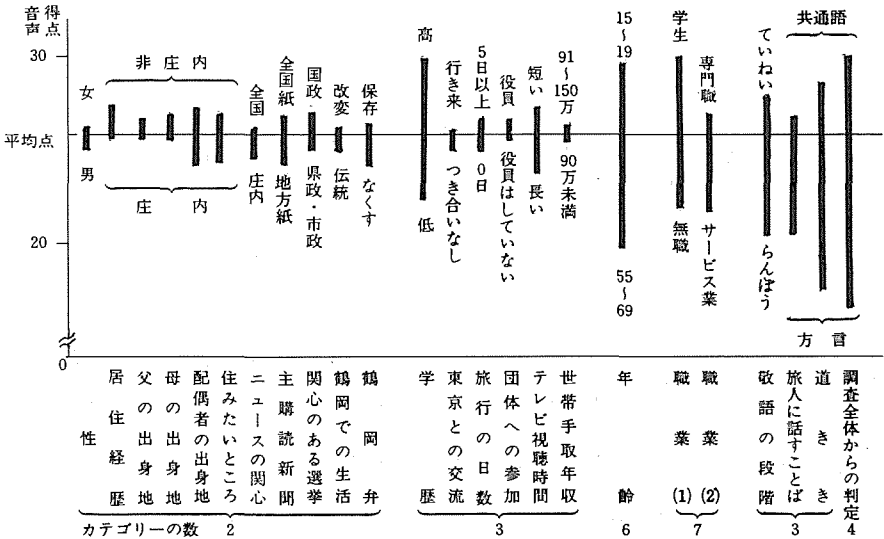


Fig. VII-11 音声得点と各要因の平均値の広がり

- (1) もっとも強く働いているのは年齢の要因である。
- (2) これに続くのが、学歴・職業である。
- (3) 性の要因はほとんど関係しないと言える。
- (4) 前回調査で強い要因であった居住経歴や両親の出身地は今回調査では影響力が小さくなっている。
- (5) このほか、配偶者の出身地、興味や関心の方向（ニュースの関心・主購読新聞・関心のある選挙）などが多少関係していると言える。

5.2 アクセントに及ぼす要因の比較

アクセント得点と各要因との関係のしかたがFig.VII-12に示されている。

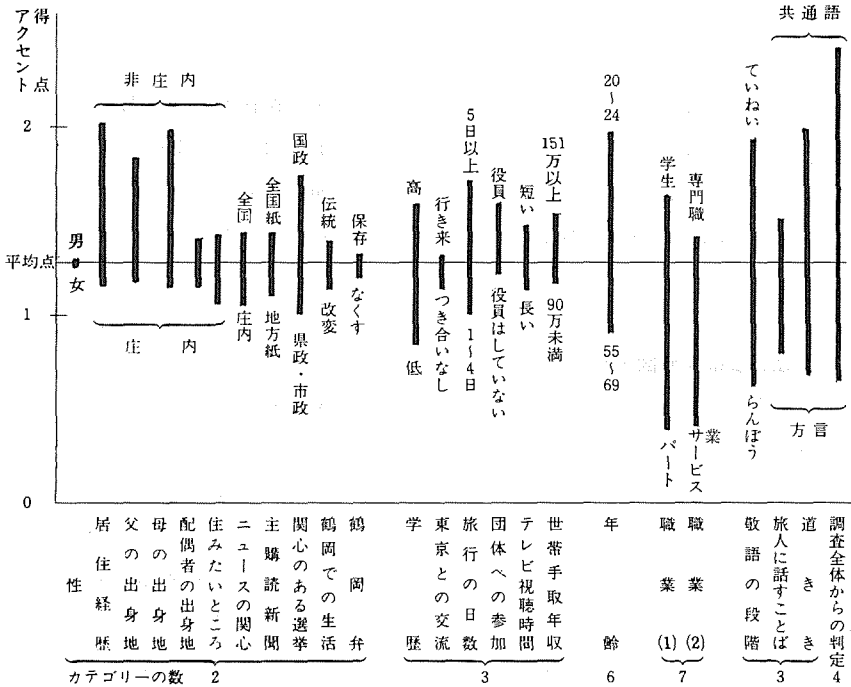


Fig. VII-12 アクセント得点と各要因の平均値の広がり

- (1) ここでも年齢・学歴・職業は強い要因だと言える。

(2) 性の要因はまったくきいていない。

(3) 音声ではあまり目立たなかった居住経歴・両親の出身地はアクセントの共通語化では重要は要因となっている。このような履歴的な要因が依然として作用しているということは一度身につけたアクセントの体系は容易には変化しないことを示唆していると言えよう。

(4) このほか、関心のある選挙、旅行の日数なども目立つ要因の一つとなっている。

6. 文法と語彙に及ぼす要因

文法および語彙の共通語化の得点を音声得点と同じ操作を加えて作成し、これらの得点と各要因との関係を前項にならって図示したものがFig. VII-13および14である。文法得点は調査票（第I章参照）の問題番号261から269の9項目を対象に、語彙得点は問題番号241から248の8項目を対象として算出されている。

6.1 文法に及ぼす要因の比較

文法得点の全体の平均は9点満点で3.20点（標準偏差2.65）である。Fig. VII-13からの主な結果は次のとおりである。

(1) 音声・アクセントで有力であった年齢は文法ではあまり強い要因ではない。

(2) その反面、学歴の要因が強く働いている。してみると共通語の形での文法形式を使えるかどうかは知識的な側面が強いということになるのか。

(3) 音声・アクセントではほとんど影響を及ぼさなかった性の要因がここではかなり強く作用している。

(4) もっとも顕著な要因は居住経歴、両親の出身地である。この要因はアクセントの共通語化でも働いていたものである。文法もアクセント同様、全体と

しての共通語化が遅れている。共通語化が進んでいない状況のもとではこれらの要因が大きく関与するのではなかろうか。前回調査ではこれらが音声でもきいていたことを想起すべきである。

(5) このほか職業、鶴岡弁に対する意見、テレビ視聴時間、住みたいところなどが目立つ要因となっている。

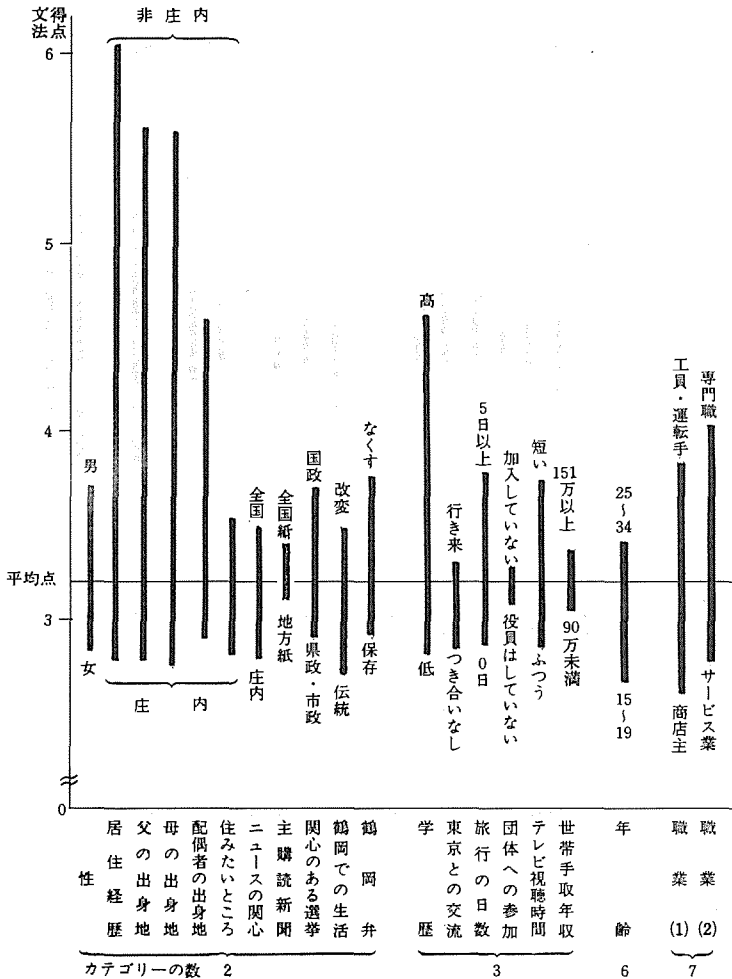


Fig. VII-13 文法得点と各要因の平均値の広がり

6.2 語彙に及ぼす要因の比較

語彙得点の全体の平均は8点満点中5.59点（標準偏差1.55）である。語彙得点と共通語化の要因との関係はFig. VII-14に示すとおりである。

- (1) 年齢・学歴・職業はもっとも大きな要因である。
- (2) 性の要因はあまり関与していない。
- (3) 居住経歴、両親の出身地なども目立つ要因となっている。
- (4) このほか、選挙の関心、住みたいところなど全国志向型か地域志向型かの要因も目立っている。

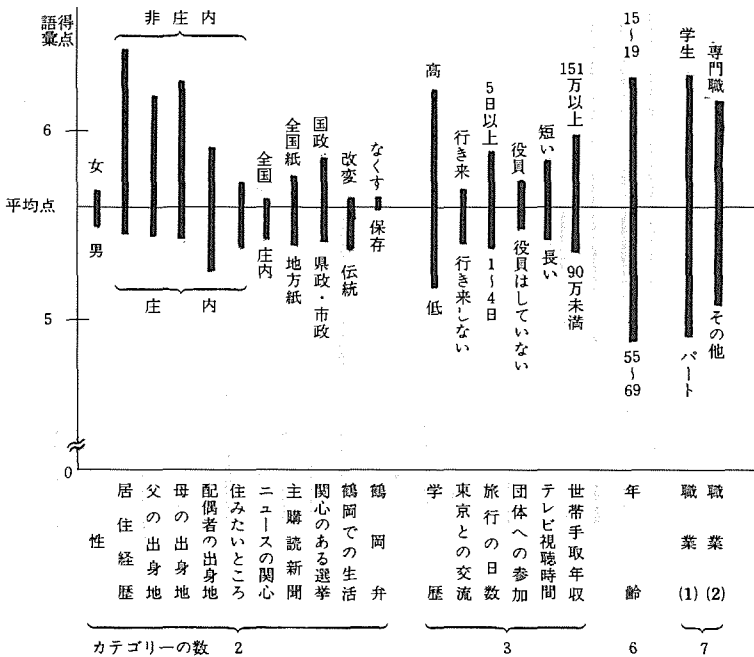


Fig. VII-14 語彙得点と各要因の平均値の広がり

第Ⅷ章 継続調査の結果 3
——パターン分類——

1. この章の立場

前の第Ⅶ章では音声得点やアクセント得点のような合成指標を考え、それと他の属性との関連を見てきた。その結果から、20年間の共通語化の様子やそれを支える要因などがある程度明らかになった。そこでは、たとえば「音声の共通語化の平均点数は男性の25.2に対して女性は26.2である。性間には統計的な意味では差は見られない。また、学歴では……」といった方向から分析されている。すなわち、性・学歴あるいは特定の意見の持ち主といった何らかの基準で構成された（統計的）集団のそれぞれがどの程度共通語化しているかを見ようとするものである。また、そこでは一度の操作では一つか二つの数少ない変量だけが分析対象となっている——音声得点は31項目で構成されているのであるから多数の変量を扱っているように見えるかも知れないが、実際は音声得点という一つの合成指標だけを処理しているに過ぎない。

第Ⅵ、Ⅶ章とは視点を変え、この章ではできるだけ多数の変量（属性）を同時に取り出して分析を（つまり、多変量解析を）行うという立場をとる。多変量解析を行うことの利点はいろいろあるが、われわれのデータにこれを適用する主な目的は次のとおりである。

(A) いくつかの項目を取り出して分析し、項目相互の類似・非類似の程度を客観的な数値として示す。言いかえれば、それらの項目の構造を明らかにすることである。たとえば、第Ⅵ章では31の音声項目を唇音性Ⅰとか口蓋化とかの九つの音声に分類し、その分類に従ってデータを見てきたが、この分類は音声学の立場からの構造化の一例だと言える。しかし、この場合、各音声相互の構造はほとんど考慮されていない。数学的な解析法に基づいてこの種の構造化をはかることを試みる。

(B) 同じことを被調査者のグループ分けについても試みる。被調査者のグループ分けは第Ⅵ、Ⅶ章で試みたように性・年齢などの個人的変数あるいは関心

の方向などの社会的変数を同じくするものを集めることによって行われることが多い。このような形で構成された集団間の差を調べたとしても、はっきりした特徴を見出せない場合もある。たとえば、性・学歴が同じ人々でも意見や意識までが同じとは限らない。そこで逆に、多数の項目を質問したときに、同じような回答をする人々をまとめて一つの集団とし、異質な回答をする人々と区別し、それぞれの集団に属する人々の特性を調べるという方向が考えられる。

(C) また、方言から共通語への変化がどの部分から起こり、どの順序で進んでいくかを追ってみる。変化の経路を探ろうというわけである。第Ⅶ章で見た音声の共通語化の程度の数値から見れば、唇音性 I → 口蓋化 → 有声化 → ……の順序で共通語化が進んでいくことが当然予想されよう。これは鶴岡市民全体の平均的なコースではあろうが、これとは別の順序で共通語化していく人々の集団がいくつか存在していると考えられる。

(D) 共通語化の経路にいくつかの種類が見られるとすれば、それぞれの経路をとる人々はどのような属性を持っているかを考えてみる。

以上に述べたそれぞれの目的は分離したものではなく、同じことを別のことで述べたに過ぎない。多変量解析の方法として、共同研究者の一員でもある統計数理研究所の林知己夫の開発による数量化理論第Ⅲ類を用いる。これは「パターン分類の数量化」と呼ばれているものである（以下では単に「パターン分類」と呼ぶ）。パターン分類は外的基準を持たない場合の属性のデータを解析するための手法であり、通常の言語データの処理に適していると思われる。また、パターン分類の結果を利用してPOSA（部分尺度解析）を行う。

パターン分類およびPOSAの基本的な考え方は第Ⅲ章の2.でふれられているのでここでは省略するが、要するにパターン分類は「それぞれの回答に数値を与えることによって回答パターンを数量化し、これを用いて、質問に対する回答の類似性と、回答した人々の類似性の両面を描き出そうとする方法」であり、POSAは人の意見や態度を測るモノサシの作成を目指すものである。

2. この章の構成

第VI章で述べたいろいろの言語的項目のうちから、パターン分類やPOSAに適していると思われる次の三つの側面を取りあげる。

- (A) 場面によることばの使い分け：ここでは今回調査のデータだけに言及する。これを特に取りあげた理由は「使い分け」の問題は比較的単純な構造をなしているためパターン分類の結果やPOSAの構造化を具体的に説明する例として適しているからである。なお、この項の記述はこの章の筆者、江川清が国立国語研究所論集4『ことばの研究4』に発表したものと重複する部分が多い（『ことばの研究』での発表は第VI章および第VII章のような分析法とこの章でとる分析法の双方から得られる知見の差を示すためのものである）。
- (B) アクセント：両度の調査データを用いてパターン分類を行い、それらの構造の相違を示す。次に、今回調査についてPOSAによって得られた共通語化のいくつかのタイプのそれぞれに属する被調査者の特性を吟味する。
- (C) 音声：(A)および(B)よりも複雑な構造を有する音声についてパターン分類を適用し、言語研究におけるこの技法を適用することの可能性を検討する。なお、今回調査のパターン分類の結果は筆者ら（野元・江川）が国立国語研究所報告51『電子計算機による国語研究VI』に「パターン分類による音声の分析」という標題で発表したものと重複部分がある。

3. 場面によることばの使い分け

第VI章の9.3で述べたように、家族同士（「家族」と略する）、近所の顔見知

りの人（隣人）、鶴岡の顔見知りでない人（市民）および旅の人（旅人）のそれぞれと話す場面で共通語を使うか、方言を使うか、あるいはそれらが混ざるかを被調査者の内省によって答えてもらったのが「場面によることばの使い分け」の調査である。この4場面ではどの順序で共通語化が進むか、また共通語化の経路の種類とそれぞれの経路を歩む人はどんな人であるかを問題とする。

3.1 パターン分類による結果

Fig. VIII-1 がパターン分類の結果である。図の家族・隣人・市民・旅人は場面を、+・-・0の記号はその場面で使うことばの種類を示している。+は共通語、-は方言、0はそれらが混ざることばを使うという意味である。たとえば、図の左下方の家族(+)は家族同士の場面で共通語で話すとする回答を意味する。

パターン分類は回答（あるいは被調査者）の傾向の類似したものを近くに、異質なものを遠くにおくように数学的に操作する方法である。

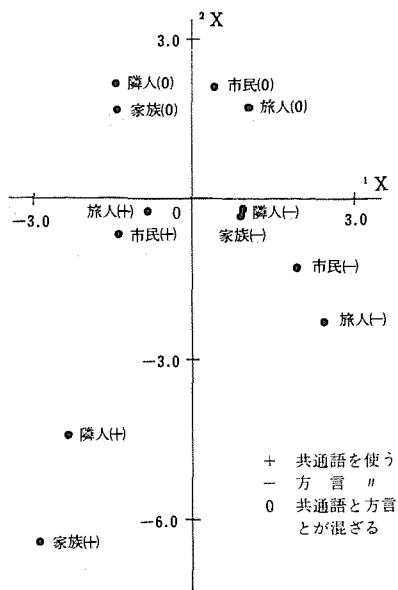


Fig. VIII-1 各場面で使われることばのパターン分類(第1, 2軸)

Fig. VIII-1を見ると、第4象限（原点の右下）の旅人(-)と市民(-)とが比較的近くにある。これは旅人に方言で話すとする回答と市民に方言で話すとする回答とが類似している——旅人に方言で話す人は市民にも方言で話す人が多い——ことを物語っている。また、この二つは隣人(-)、家族(-)の回答と近い位置にある。他方、隣人(+), 家族(+)あるいは隣人⁽⁰⁾, 家族⁽⁰⁾との距離は遠い。すなわち、旅人や市民に方言で話す人は隣人や市民にも方言を使う傾向は強いが、隣人

や旅人に共通語あるいは混ざることばで話すことはほとんどない。同じような見方をすればそれぞれの回答の距離の遠近から傾向を知ることができ、また四つの場面にそれぞれでどの種のことばを使うかの傾向を見ることもできる。この点については後に詳しく見るとして、ここでは各回答を分離する軸の意味を考えてみよう。

第1軸 (1X) では、どの場面を見ても共通語を用いるという回答が負の領域に、方言を用いるという回答が正領域に布置している。また、混ざるとする回答では、隣人・家族の場面が共通語を使うとする回答と同じ負領域に、市民、旅人の場面が方言と同じ正領域に分かれている。第VI章で見たように、市民や旅人の場面の方が共通語化しやすく、隣人・家族が共通語化しにくいということから考えれば、家族や隣人にでも混ざることばを使う (= 方言を使わない) とする人々の回答は市民や旅人に混ざる (= 共通語を使わない) 回答よりも共通語寄りであると言えよう。このように考えれば、第1軸は方言使用(傾向)と共通語使用(傾向)とを分離していると言えよう。

第2軸 (2X) ではことばが混ざる⁽⁰⁾という回答が全場面で正の領域に、共通語⁽⁺⁾あるいは方言⁽⁻⁾のどちらか一方の反応が負の値をとっている。このことから、第2軸はことばが混ざる場合とそうでない場合とを区分する軸であると考えられる。

第3軸以下には積極的な意味が認められなかった。これは「場面によることばの使い分け」という現象が単純な構造をなしているからであろう。

3.2 4 場面を組みにした場合のパターン分類の結果

四つの場面のそれぞれで使われることばを組みにしてパターン分類を行った結果がFig. VIII-2である。図で-----はすべての場面で方言を使うもののグループであり、++++は共通語ばかりを使うグループである。記号(の位置)は左から、家族・隣人・市民・旅人に話す場面を示している。

Fig. VIII-2の回答パターンを見ると最左端にすべての場面に共通語で話すとする++++の回答パターンがあり、最右端に方言ばかり話す-----のパターンが見られる。また、中間のパターンは左寄りのものほど+が多く、右寄り

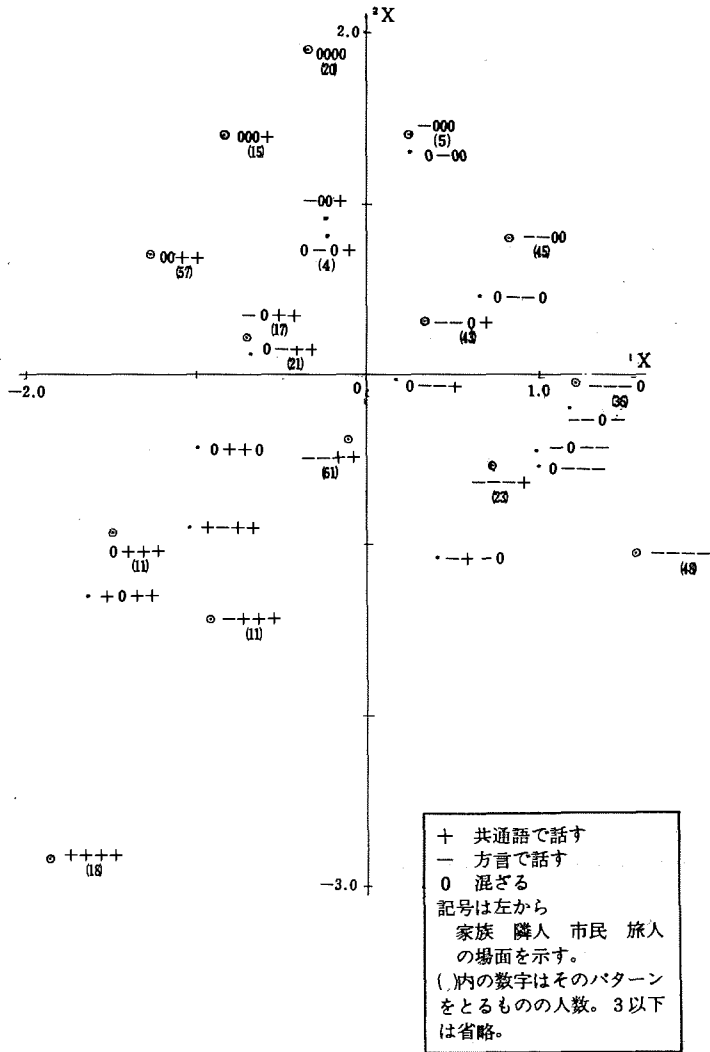


Fig. VIII-2 4場面を組みにした場合のパターンの分布

は-が多い。すなわち、左寄りのものほど共通語化が進んでいる。第VII章で行ったような共通語化の点数を算出して、それとパターン分類の第1軸の数値と比べた場合、左寄りのパターンほど共通語化の点数が高くなっている。

3.3 POSAによる共通語化のタイプ分け

Fig. VIII-2 でパターンが右から左の方向に共通語化していることをあらわしているが、これは第1軸だけに注目した場合のことである。第2軸との関係を見れば各パターンにおける-が0へ、あるいは0が+へと変化するしかたに少なくとも二つのタイプ

があるように思われる。パターンの変化の様子を見るために、POSAの手法を用いた。それがFig. VIII-3に示される構造図である。記号の意味はパターン分類の場合と同じである。

POSAを行うのは多くのパターンの関係をできる限り単純な形に構造化して示すことにある。したがって、頻度が極端に小さいものはPOSAの対象から除

外する必要がある。また、頻度が高いとしても、それが構造の単純化を妨げるパターンである場合には省いた方がいい。このようにいくつかのパターンを省いて構造化するわけであるから、できあがったPOSA構造におけるパターンの再現率が問題になる。パターンの再現率とはPOSAの対象となったパターンの頻度の合計の全頻度に対する割合である。この場合は対象となった延べ410(異

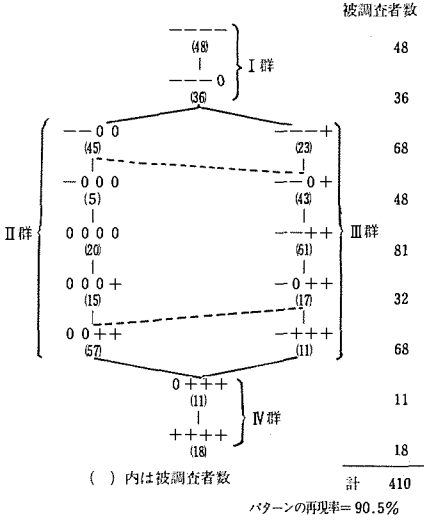


Fig. VIII-3 ことばの使い分けの POSA 構造図

なり14)を全数453(異なり27)を母数とするときの百分率(90.5%)である。90%以上の再現率を得たということは大成功だと言えよう。なお、POSAに描かれたパターンはFig.VIII-2で⊙で示されたパターンである。

Fig.VIII-3を見てみよう。図では線で結ばれている各パターンは一つのモノサシを構成し、線で結ばれないパターンは同じモノサシを構成しないことになる。さらに、直接線で結ばれた二つのパターンは上に図示されたものより下のものの方が1段階だけ共通語に近くなるように作成されている。パターンを結ぶ線の数に比例して共通語化の程度が異なる。POSAからの主な結果は次のとおりである。

(1) 図の最上段の二つのパターンは1本の線だけで結ばれている。すなわち、-----から一段階共通語化したパターンは-----0だけである。言いかえれば、すべての場面で方言で話すパターンからは旅人に混ざり、他では方言を使うパターンだけに移行する。このことから、共通語化する場合には旅人に対する場面が他の三つの場面より早く共通語化の方向に変化しやすいということが言えよう。

(2) 最下段の二つのパターン(0+++と++++)も1本の線だけで結ばれている。これは他のすべての場面で共通語化した後に家族に話すことが共通語に変わることを示している。すなわち、家族に対する場面の共通語化がもっとも遅れると言える。

(3) 同様の観点から図全体を見れば、旅人に対する場面から共通語化し始め、市民・隣人の場面がこれに続き、最後に家族の場面が共通語化することがわかる。

(4) -----0から0+++へ到る過程は図の左端を通る線と右端を通る線とに大別されている。この2本の線はそれぞれ別のモノサシを構成することになる。それぞれのモノサシは場面による共通語化の過程を示していると解釈することができよう。

(5) 左端の線で結ばれているパターンの前半は、

(----- → -----0) → --00 → -000 → 0000

となっている。この変化は右の記号から順次-が0に変わっていることに特徴

がある。また、後半は

0000 → 000+ → 00++ → (0+++ → +++++)

となっており、前半と同じように右の方から順次0が+に変化している。パターンを結ぶ線全体から見れば、左端のパターンはすべての場面で方言を使う状態(-----)から、共通語化しやすい場面の順に(すなわち、右から)逐次1段階ずつ共通語化に向かい、いったんすべての場面で混ざる状態(0000)に達する。その後、同様に共通語化しやすい場面から共通語化が完成していく姿を表わしている。このタイプの共通語化の過程は「場面平均的共通語化」とでも言えようか。なお、このタイプに属するパターンはFig.VIII-2で第2軸の正領域に布置するものである。第2軸の意味はことばが混ざるものとそうでないものとを区別するものであった。

(6) 右端の線で結ばれるパターンは、

(----- → ----0) → ----+ → --0+ → --++ →
-0++ → -++++ → (0+++ → +++++)

となっている。共通語化しやすい場面から共通語化が進んでいるのは(5)のタイプと同じである。これと異なる点は、共通語化しやすい場面で方言の使用(-)から混ざる(0)を経て、その場面での共通語化が完成した(+)+上で、次に共通語化しやすい場面が同様の順で変化する。すなわち、特定の場面での共通語化が完成するまでは他の場面でのことばの変化に影響を及ぼさないということである。このタイプの変化は「場面中心的共通語化」とでも言えようか

(7) このほかに、

…… (--00) → 0-00 → 0-0+ → 0-++ → +-++ →
+0++ → (++++)

のように隣人が家族の場面より共通語化が遅れるタイプも見られるようであるが、これに属する被調査者の数は少ないのでここでは取りあげないでおく。

(8) なお、Fig.VIII-3で破線で結ばれた二組のパターンが見られる。すなわち、--00から--0+への変化と、-0++から00++への変化とである。これは親しい関係にある家族や隣人に話す場合と見知らぬ市民や旅人に話す場合とで使うことばを完全に区別しようとしているグループの存在を示して

いる。このケースの変化を記せば、

(----- → ----0) → --00 → --0+ → --++ →
-0++ → 00++ → (0+++ → +++)

となる。この種の共通語化がもっとも一般的であると考えられるが、ここでは深く検討することはしないでおく。

3.4 各タイプの分析

場面による共通語化には大きく二つのタイプがあることがわかった。それらは、

場面平均的共通語化、および場面中心的共通語化であった。これらのそれぞれに属する被調査者の属性をいくつかの観点からながめてみよう。

被調査者を次の五つにグループ分けする。

I群：Fig. VIII-3の最上段の二つのパターンに属する被調査者。これはほとんどの場面で方言で話すもの

II群：場面平均的共通語化のタイプに属する被調査者

III群：場面中心的共通語化のタイプの被調査者

IV群：Fig. VIII-3の最下段の二つのパターンに属する、ほぼ共通語化が完成した被調査者

V群：以上のどの群にも属さない（つまり、POSAに示されなかったパターンを持つ）被調査者のグループ

(1) 五つの群のそれぞれを構成する被調査者の割合は、完全に共通語化していると見られるIV群は6.4%であり、これを正反対のI群は18.5%である。残りの約¾のものは何らかの基準で場面によってことばを使い分けている（II群は31.3%、III群は34.2%、V群は9.5%）。

(2) 性別では、II、IV群で男性が（理論値より）多く、I群で女性が多い。III、V群ではどちらが多いとも言えない（Table VIII-1）。

(3) 群ごとの音声の共通語化の点数（「音声得点」—第七章の1.参照）はI群 21.3点 < V群 (25:8点)、II群 (26.2点)、III群 (27.3点)、IV群 (27.4点) であ

Table VIII-1 場面によることばの使い分けの各群の構成

	I 群	II 群	III 群	IV 群	V 群	計
男	29<(37.5)	74>(63.3)	65 (69.1)	17>(12.9)	17 (19.2)	202
女	55>(46.5)	68<(78.7)	90 (85.2)	12<(16.1)	26 (23.8)	251
全体	84	142	155	29	43	453

注. ()内の数値は理論値

>は30%水準以下で傾向差が認められたもの

る。I群が音声の共通語化が劣っている以外には、他の四つの群の間ではほとんど差が見られない。(<は1%水準で有意差が認められたことを示す)。

(4) 年齢別に各群を構成する被調査者の割合を示したのがFig. VIII-4である。各群でそれに属する被調査者の数が異なっているので、この図では%の大きさを判断するのではなく、それぞれの群ごとに曲線の型からどの年齢層のものが多いかを見なければならぬ(次のFig. VIII-5も同様である)。I、V群とIII

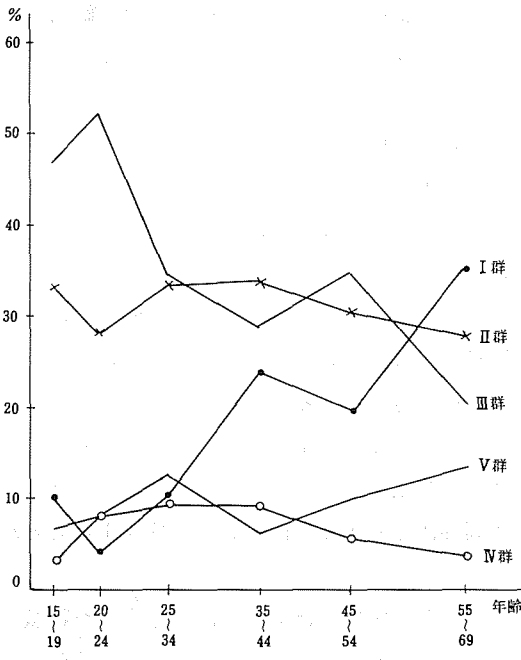


Fig. VIII-4 各群の被調査者の年齢構成

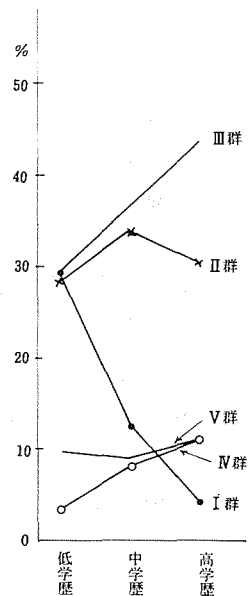


Fig. VIII-5 各群の被調査者の学歴構成

群とは対照的な曲線を示している。すなわち、I、V群が高年齢になるに従ってカーブが上昇しているのに対し、III群は下降している。言いかえれば、I、V群は高年齢層に多く、III群は低年齢層に多いと言える。IV群は25～34歳を頂点とする凸型の曲線を描いている。II群も凸型の曲線になっているかに見えるが、これはほとんど年齢差がないと言った方がいいと思われる。

(5) 学歴別 (Fig. VIII-5) ではI群で低学歴層が多く、他の群は高学歴のものが多く。

(6) 以上のほか、居住経歴や職業あるいは第VI章の9.1で見た鶴岡での生活のしかたや鶴岡弁に対する意見の傾向と各群の構成との関係を見ているが、細かい結果は『ことばの研究4』を見ていただくとしてそれらを総合し、各群の特徴をスケッチ風に示そう。

(7) I群は高年齢、低学歴のものが多く。また、4歳から12歳の、いわゆる言語形成期の大部分を庄内地方で過ごしたものに多い。職業では無職、パートのものに多く見られる。給与生活者は少ない。この群の被調査者は鶴岡の伝統を守って生活し、鶴岡弁もできるだけ保存したいと考えている。なお、性別では女性が多い。

(8) II群には年齢的な特徴は見られないが、学歴の高いものが多く。庄内地方以外で言語形成期を送っており、工具として働いている。生活のしかたについての意見ではあまり特徴はないが鶴岡弁はなくした方がいいと考えているものが多い。性別では男性が多い。

(9) III群は低年齢で高学歴のものに多い。言語形成期を庄内地方で過ごした。職業では学生に多く、主婦、無職などは少ない。生活のしかたは合理化した方がいいが、鶴岡弁は守っていききたいと考えている。

(10) IV群は25歳から34歳前後のものに多い。学歴は高い。言語形成期を庄内地方以外で生活している。職業は給与生活者に多い。生活のしかたではこれといった特徴は見られないが、鶴岡弁はなくする方向の意見に賛成するものが多い。

(11) V群は年齢は高い傾向にあるが、学歴ではあまりはっきりした特徴は見られない。言語形成期をはじめ種々の属性についても特に目立った特徴は見ら

れない。この群はPOSAに示されなかったいろいろのパターンを持つ被調査者を合わせた群であった。このことがこの群の性格をあいまいにしたと考えられる。

4. アクセント

前項でパターン分類およびPOSAを適用することによって、共通語化の過程やタイプを明らかにすることができた。また、共通語化のあるタイプに属する被調査者はどのような属性を持つ人であるかもある程度わかった。同じ手法でアクセントについて分析してみよう。

4.1 今回調査のパターン分類による結果

五つの項目のパターン分類の結果がFig. VIII-6, VIII-7に示されている。Fig. VIII-6は今回調査の第1軸および第2軸を示したものである。図の中でカタカナ書きのものは、それで共通語のアクセントでの反応を、ひらがなは方言のアクセントでの反応を示している（以下の図でも同様）。第1軸を見ると、負の

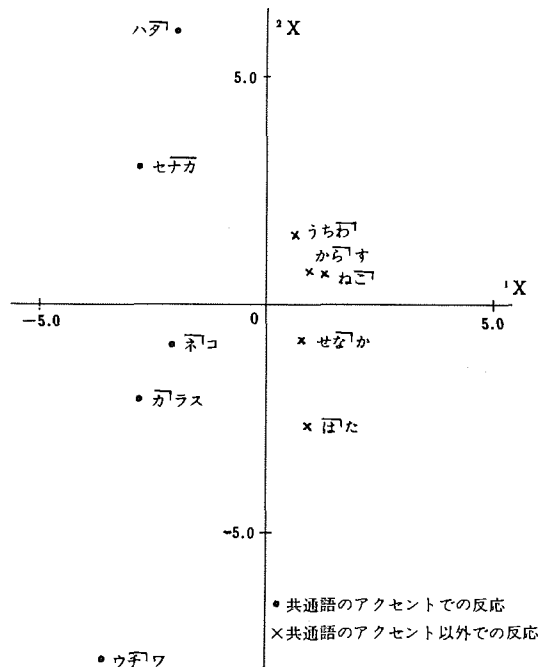


Fig. VIII-6 アクセントのパターン分類 (第1, 2軸) (今回調査)

領域に共通語が、正の領域に方言が布置している。このことから第1軸は方言と共通語とを分ける軸であると言える。第1軸と第2軸とを同時に見ると、「ハタ」、「セナカ」(=共通語による反応)と「はた」「せなか」(=方言による反応)とは原点を中心に対称的な位置にある。「ネコ」「カラス」「ウチワ」でも同様の関係

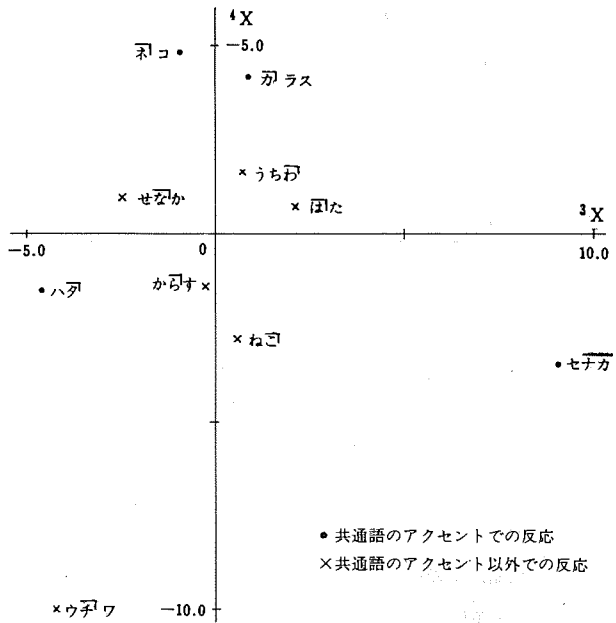


Fig. VII-7 アクセントのパターン分類 (第3, 4軸) (今回調査)

になっている。また、共通語の各反応に対して方言の反応は原点近くに集中している。これは方言による反応の方が頻度が高いことに関係している。そこでアクセントについては原則として、分布の範囲が広い共通語の反応を中心にみていくことにする。

第2軸では「ハタ」と「セナカ」が正領域に、他が負領域に位置している。「ハタ」「セナカ」は語の中にアクセントの下がり目がないものであり、他は頭高あるいは中高のものであって、語の中にアクセントの下がり目があるものである。したがって、第2軸は語の中にアクセントの下がり目があるものとそうでないものを区別する軸であると考えられる。また、「ネコ」と「カラス」(これはともに頭高)が非常に近くにある。すなわち、この二つの単語のアクセントでの反応のパターンは類似度が大きいと言える。

次にFig.VIII-7を見てみよう。第3軸と第4軸とを図示したものである。第2軸で比較的近くにあった「セナカ」と「ハタ」が第3軸で大きく分離してい

る。と言うよりは、「セナカ」が他の4項目と分離したと言った方がいい。「セナカ」は共通語で、平板型またはアクセント核のないものであるから、第3軸は平板型とその他とを分ける軸であると言える。

第4軸は「ネコ」「カラス」とそれ以外とに分かれている。したがって、この軸は頭高の型とそれ以外とを区別する軸であろう。第1軸と第2軸とで近くにあった「ネコ」と「カラス」はこの軸でも分離していない。この二つの単語のアクセントの型の反応傾向はきわめて類似したものであると言える。すなわち、「ネコ」に共通語のアクセントで反応するものは「カラス」にも共通語で反応することが多いことを示している。

なお、図は省略するが第5軸になって始めて「ネコ」と「カラス」の二つが正負の領域に分かれる。第2軸から第5軸にかけての各項目の分離の状況を図示すればFig.VIII-8のようになる。第2軸でまず、語の中に下がり目のないアクセントを持つ「ハタ」と「セナカ」との二つが他と分かれる。これらの二つは第3軸で分離する。一方、「ネコ」「カラス」「ウチワ」は第4軸で頭高の「ネコ」「カラス」とそうでない「ウチワ」とに分かれる。最後（第5軸）に「ネコ」と「カラス」とが分離する。

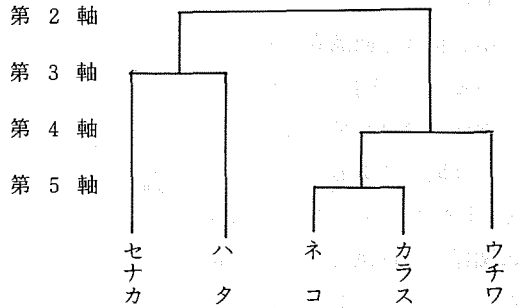


Fig.VIII-8 今回調査のアクセントパターンの分岐図

また、方言のアクセントのタイプとしては、調査語では下上下型の「カラス」「セナカ」、起甲型と言われる「ウチワ」「ネコ」、下下型の「ハタ」の三分けられよう。最後の「ハタ」では、多かった非共通語形は「ハタ」であり、これを方言形とした。以上のものはパターン分類の図の方言の方の分布にはどうも反映していないようである。おそらく共通語形・非共通語形という分け方をしたためであって、鶴岡方言形かどうかで分類すれば別のパターンが現われたであろう。

4.2 前回調査のパターン分類による結果

Fig. VIII-9は前回調査のパターン分類の第1軸と第2軸との結果である。ここでは方言での反応は今回調査の場合 (Fig. VIII-6) よりも狭い範囲に集中している。これは今回調査より前回調査の方が方言での反応が多かった (つまり, 共通語化していなかった) からである。第1軸はやはり方言と共通語とを区分する軸であると言える。

第2軸は今回調査と異なっている。「ハタ」と「ウチワ」が両極に分岐しているという点では同じであるが, 「セナカ」「ネコ」「カラス」の三つの関係が今回調査の結果と異なっている。すなわち, 今回調査で近い位置にあった「ネコ」と「カラス」とがこの図では分離し, それぞれ「セナカ」と「ウチワ」の近くに布置している。このような両度の調査の差異が何に基づいて生じたかは今後の検討課題とし, 第3軸と第4軸とを見てみよう (Fig. VIII-10)。

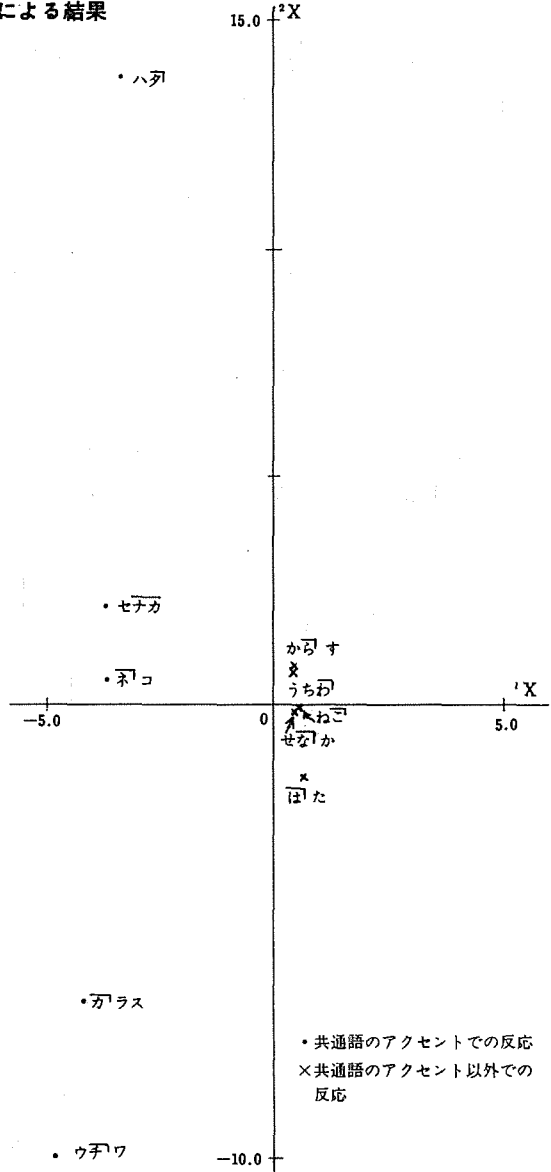


Fig. VIII-9 アクセントのパターン分類 (第1, 2軸) (前回調査)

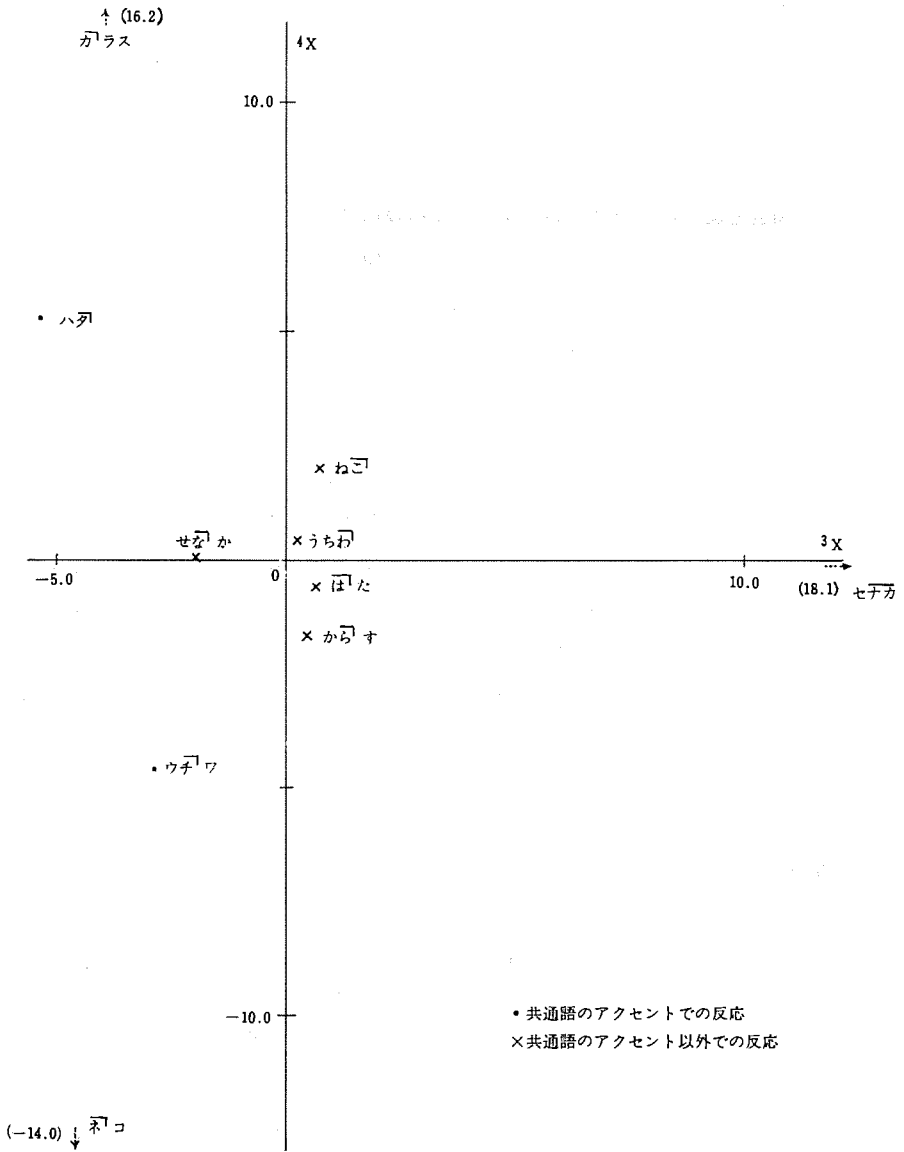


Fig. VIII-10 アクセントのパターン分類 (第3, 4軸) (前回調査)

第3軸は今回調査同様、「セナカ」と他とを区別する軸であろう。

第4軸では「カラス」が正領域の、「ネコ」が負領域の一番端にある。ここでも「ネコ」と「カラス」は異なったパターンとなっている。また、第2軸で「カラス」と接近していた「ウチワ」がこの軸で分離している。

4.3 5項目を組みにした場合のパターン分類の結果

5項目に対する反応を総合してパターン分類を行った。Fig.VIII-11は今回調査の結果（第1軸と第2軸）である。図の記号の+は共通語、-は方言のアクセントでの反応である。記号の位置は左から「セナカ」「ハタ」「ネコ」「カラス」「ウチワ」を示す（以下同じ）。

初めに、パターン分類の第1軸——方言と共通語とを区別する軸であった——の数値とアクセント得点との関係を見てみよう。Fig.VIII-11に示されている29種のパターンをアクセント得点を同じくするものと異にするものとの境界線で区分すると、その境界線は図に示されるような5本の縦線となっている。すなわち、パターン分類の第1軸の数値とアクセント得点とはうまく対応していると言える。パターン分類の数値は反応のパターンの関係を考慮しながら、各パターンに与えられた数値であるから、この数値はウェイトづきの共通語化の得点と考えることができる。これと各項目を単純に加算して作成したアクセント得点とが対応しているから、共通語化の程度だけを問題にする場合に第七章のようにアクセント得点で比較しても問題はないことがわかる。

Fig.VIII-6で第1軸は方言（傾向）と共通語（傾向）とを区別する軸であった。また、第2軸は語の中にアクセントの下がり目のないもの（ハタ、セナカ）と他とを区別する軸であった。Fig.VIII-11でも同じである。第2軸の意味はFig.VIII-11の方がより明確である。図で実線で囲まれたA、Bの二つの集合を見てみよう。集合Aでは「ハタ」あるいは「セナカ」が他の項目より早く共通語化し、「ウチワ」の共通語化がもっとも遅れるグループである。他方、集合Bでは「ネコ」「カラス」および「ウチワ」が先に共通語化し、「ハタ」「セナカ」の共通語化が遅れている。このことから、アクセントの共通語化の経路には集合Aと集合Bのような少なくとも二通りの方向があることがわかる。

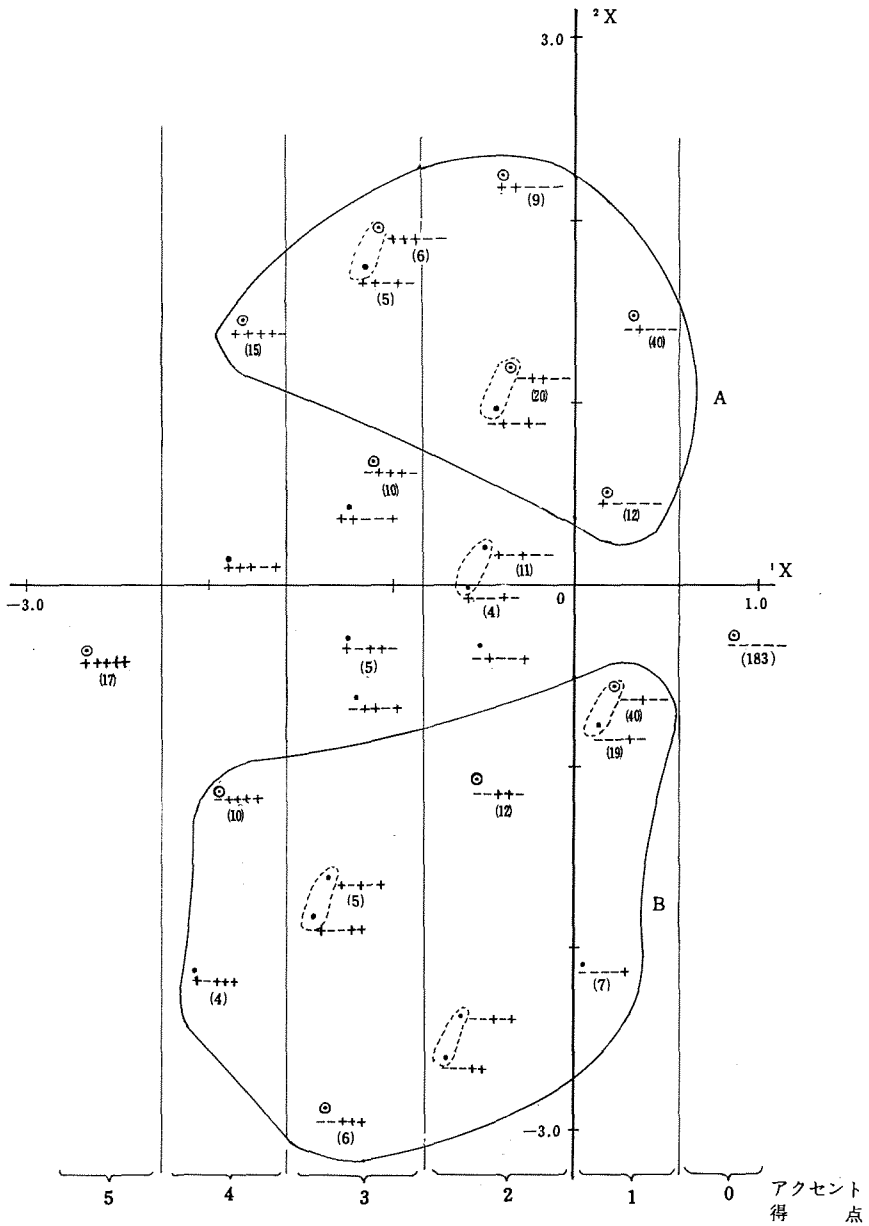


Fig. VII-11 5項目を組みにした場合のパターンの分布(今回調査)

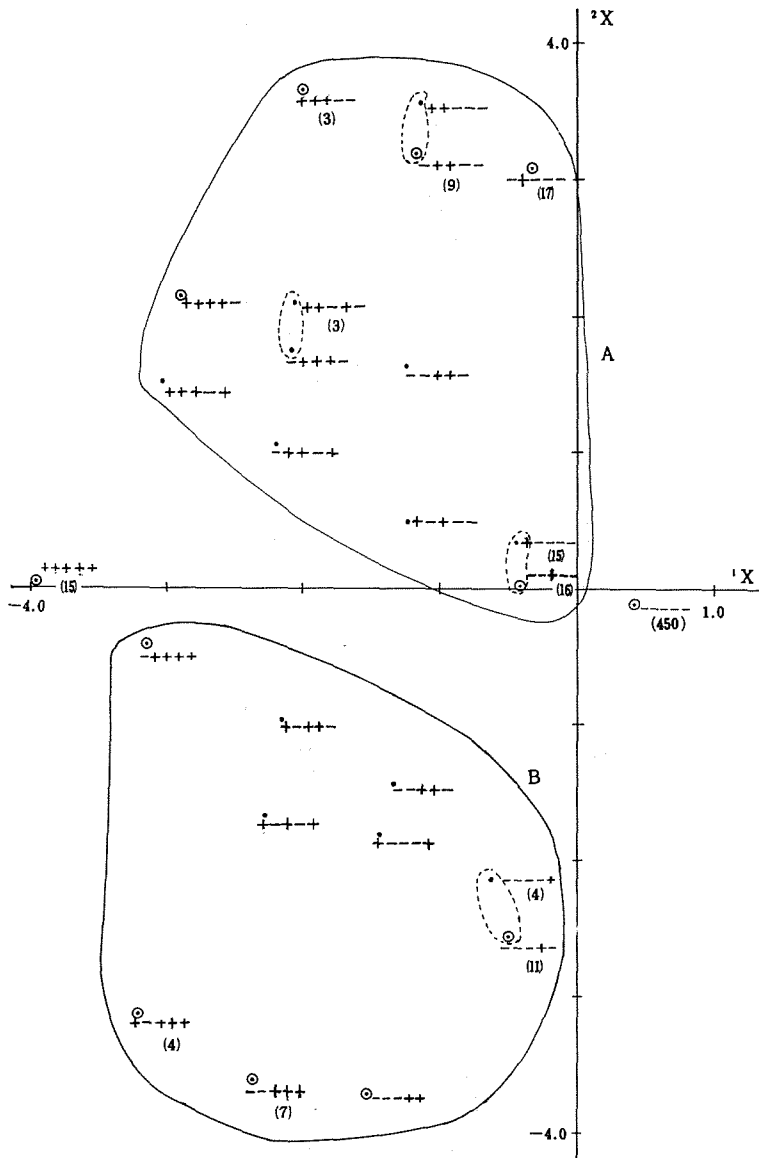


Fig. VIII-12 5項目を組みにした場合のパターンの分布
(前回調査)

また、図で破線で囲まれた6組のパターン（距離の近いパターン）には共通した特徴が見られる。たとえば、左上方の+++--と+-+--+との二つのパターンは、3番目と4番目（すなわち、「ネコ」と「カラス」）との正負の記号が反対になっているほかは同じ符号をとっている。他の破線で囲まれたパターンでも同じ関係になっている。前項で見た今回調査の各項目ごとの反応のパターン分類でも「ネコ」と「カラス」に対する反応パターンは第1軸から第4軸にかけて分離せずにもいつも近い位置にあった。この二つの項目への反応は非常に類似したものであるとすることができる。

Fig. VIII-12は前回調査の結果（第1軸と第2軸）である。ここでも、パターンが二つの集合に分かれている。集合Aは「ハタ」「セナカ」「ネコ」が他より早く共通語化するパターンである。集合Bは残りの「カラス」「ウチワ」から共通語化が始まるパターンである。また、パターンの集合Aの中の破線で囲まれたパターンは「セナカ」と「ネコ」の符号が逆となっているほかは同じ方向の反応がなされているものである。集合Bの破線内のパターンは「カラス」と「ウチワ」の符号が逆になっているパターンである。これらはともに第2軸（Fig.

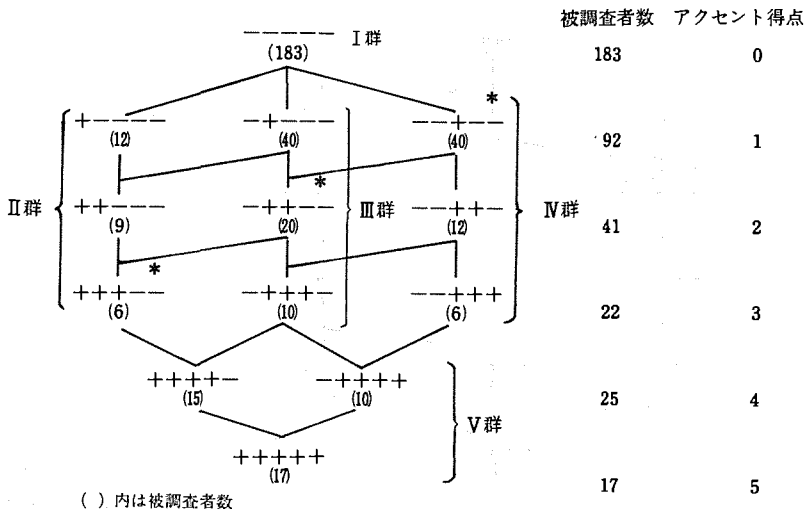


Fig. VIII-13 今回調査のアクセントのPOSA構造図

VIII-9) までに分離しなかったものである。

4.4 POSAによる共通語化のタイプ分け

Fig.VIII-11およびVIII-12からPOSAを描いてみよう (Fig.VIII-13~14)。それぞれの図で⊙で示されたパターンを拾ってPOSAの構造図を描いた。選択の基準は3.で述べた「場面によることばの使い分け」に準じているが、ここではさらに次の条件によった。一つはFig.VIII-11およびVIII-12で破線で囲まれたパターンの中からは頻度の高い方のパターンだけを採用したことである (POSAの図では採用されたパターンの右肩に*印をつけておいた)。また、前回調査の場合は頻度の低いいくつかのパターンを採用した。前回調査ではすべての項目に方言のアクセントで反応した——アクセント得点が0のもの78%を占めているため、他のパターンの頻度が全体的に低くなったからである。

今回調査のPOSA構造図がFig.VIII-13であり、前回調査のそれがFig.VIII-14である。両度の調査の結果を比較しながら見てみよう。

(1) POSA構造図におけるパターンの再現率は前回調査では93.2%、今回調

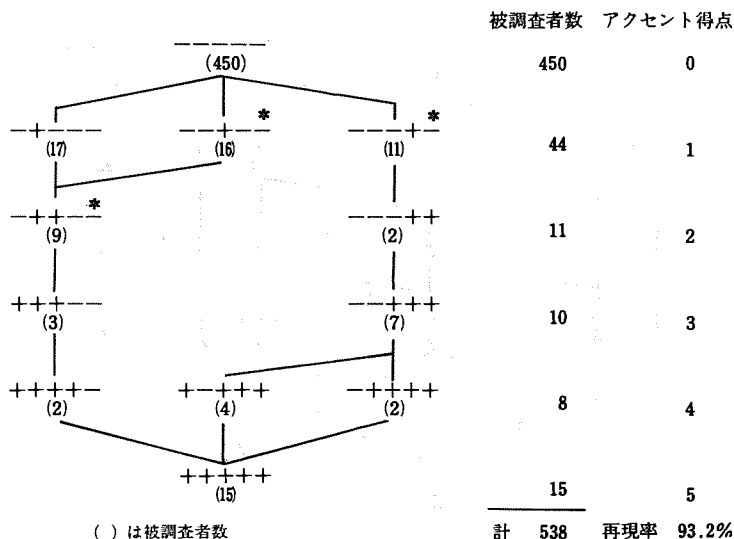


Fig. VIII-14 前回調査のアクセントのPOSA構造図

査では83.2%である。POSAに示されたパターンの種類は前回調査の12種類に対して今回調査は13種類であり、この点ではほとんど差がない。それにもかかわらず前回の方が再現率が高いのはアクセント得点0のものが占める比率に大幅な差があるからである（前回78.0%、今回40.0%）。

(2) また、図で*印をつけたパターンは類似パターンが存在するものの一方だけを採択したものである。捨てられた方のパターンの延べの合計は前回は20、今回が27であり、それぞれ全体の3.5%、5.9%に当たる。

(3) 前回調査では、各項目の共通語化の順序はFig. VIII-14から明らかなように次の二通りの経路に分けられる。一つは図の左側の線を通るものである。これは一連の記号の左の三つ（すなわち、項目「セナカ」「ハタ」「ネコ」）が先に共通語化し、その後「カラス」「ウチワ」の順に共通語化する経路をとるものである。初めに共通語に変わる三つの項目では「セナカ」が多少遅いが、「ハタ」と「ネコ」ではどちらが早く共通語化するかは明らかでない。すなわち、第1の経路は、

ハタおよびネコ → セナカ → カラス → ウチワ

の順序で共通語化が進む。二つ目の経路は図の右側の線をとるものであり、記号の右の二つから共通語化が始まっている。その順序は次のとおりである。

カラス → ウチワ → ネコ → ハタおよびセナカ

(4) 今回調査では経路が若干複雑になっている（Fig. VIII-13）。それを大別すれば、図の左側の線上のものと、真中の線上、右端の線上のものとの三つのタイプに分かれる。左側のものは左の項目から順に共通語化していくものである。すなわち、

セナカ → ハタ → ネコ → カラス → ウチワ

の順になっている。右側の線を通るタイプは左の3項目、すなわち、「ネコ」「カラス」「ウチワ」の順に共通語化が進むタイプである。これに続いて「ハタ」が共通語に変わり、最後に「セナカ」のアクセントが共通語になる。真中のタイプは縦線で結ばれたものだけを見れば、

ハタ → ネコ → カラス ← $\begin{matrix} \text{セナカ} \\ \text{ウチワ} \end{matrix}$

の順序で共通語化している。ハタとネコの順序を入れ変えればそれぞれのアク

セントで全体として共通語の反応の割合の高さの順序と一致する。「ハタ」と「ネコ」とで共通語化している－＋＋－のパターンへ達する線は「ハタ」だけが共通語である－＋＋－のほかに共通語での反応が「ネコ」だけである図の右上の－＋＋－のパターンが見られる。したがって、このパターンから出発すると考えれば真中の系統は共通語化しやすいものから共通語に変化するタイプと言えよう。これは「場面によることばの使い分け」と類似している。

(5) 両度の調査で共通語化の順序に差異が見られているのは何故であろうか。これについては今後の検討課題であると言えよう。

(6) 前回調査のPOSA構造図の左側にある各パターンは、前項のパターン分類 (Fig. VIII-12) で第2軸の正領域に布置しているものばかりである。他方右側の各パターンは負領域に布置している。したがって、前回調査で共通語化のタイプを見る場合には、パターン分類の第2軸の数値を問題にすればいいとも言える。

(7) 今回調査の方でも、POSA構造図の右側線上のパターンはパターン分類 (Fig. VIII-11) の第2軸の負の領域に点存している。左側と真中のそれぞれのパターンは正領域に見られる。図には示さなかったが第3軸を見ると、この軸では真中のパターンは右側のパターンと一緒に負の領域に存在し、左側の各パターンだけが正領域に分布している。このことから、今回調査の結果から各タイプに属する人々の属性を見ようとするには第2軸、第3軸の数値を同時に考慮するか、あるいは別個の集計をしなければならない。

4.5 各タイプの分析

前回調査の共通語化の経路には大きく二つのタイプがあった。今回調査では構造がやや複雑になり、少なくとも三つの経路が見られている。ここでは今回調査に限定し、それぞれの経路をとる被調査者の属性を検討してみよう。

Fig. VIII-13に記したように被調査者を反応パターンによって次の六つのグループに分ける。

I群：すべての項目に方言のアクセントで反応した被調査者

II群：Fig. VIII-13のPOSA構造図の左側の線を通る三つのパターンのどれ

かを持つ被調査者および++++（*印のついた++++と反応傾向が酷似したパターン）を持つ被調査者のグループ

III群：POSA図の中央の線上のパターンに属す（-+-+-のパターンを含む）被調査者のグループ

IV群：POSA図の右端のパターン（----+を含む）の被調査者のグループ

V群：POSA図の最下段の三つのパターン，すなわち，ほぼ共通語化が完成したと見られる被調査者のグループ

VI群：以上のどれにも属さないパターンをとる被調査者のグループ

各群の属性を示す図表がTable VIII-2～8 および，Fig.VIII-15～16に示されている。以下，順を追って見ていこう。

(1) これらの6群の被調査者の構成はTable VIII-2に示されている。I群からVI群の全体の被調査者の割合は，それぞれ40.0%，7.0%，16.0%，16.8%，9.2%および10.9%である。まったく共通語による反応が見られないI群とほぼ共通語化が完成されたと思えるV群とで全体の約半数を占めている。

Table VIII-2 各群の被調査者の構成（アクセント）

	I 群	II 群	III 群	IV 群	V 群	VI 群	計
男	82(81.7)	10<(14.3)	33(32.6)	41>(34.4)	20(18.7)	18<(22.3)	204
女	101(101.3)	22>(17.7)	40(40.4)	36<(42.6)	22(23.3)	32>(27.7)	253
全体	183	32	73	77	42	50	457

注（）内の数値は理論値

<は実測値と理論値の間に30%水準以下での差が認められたことを示す

(2) I群とV群とを除く他の群についてアクセント得点の平均を見ると，次のとおりである。

IV群(1.31) < III群(1.59)，II群(1.97)，VI群(2.40)（III群 < VI群）

(3) 性別の構成ではIV群で男性が（理論値より）多く，II群およびVI群で女性が多い傾向がうかがわれるが，他の群では全体の性別構成とほとんど異ならない。

(4) 年齢別に各群の構成を見てみよう（Fig.VIII-15）。I群とV群とは対照的な曲線を示している。すなわち，I群は年齢の上昇に伴ってこの群に属する被調査者の割合が増大しているのに対し，V群は逆に減少している。このこと

はI群に高年齢層のものが多く、V群に低年齢層が多いことを意味する。他の群を見ると、IV群はV群にやや近い曲線であり、III群は35歳から44歳の年齢層の前後のものが少なく低年齢層と高年齢層のものが多く「凹型」の曲線をなしている。II群、VI群もIII群に似ているがIII群ほどは顕著でない。

(5) 学歴別 (Fig.VIII-16) では低学歴のものはI群とVI群に多く見られる。他方、高学歴の多くはPOSAには示されなかったVI群に属している。III群、IV群およびV群では中学学歴が他より多い。低学歴層と高学歴層ではほとんど差が見られない。

(6) Table VIII-3は各群の被調査者の出生地および4歳から12歳(言語形成期)の居住経歴である。出生地別の結果と言語形成期別の結果は非常によく似ているので、ここでは後者だけについて見よう。言語形成期を庄内以外で生活した期間が4年未満のものを「庄内グループ」、4年以上のものを「非庄内グループ」と呼ぶことにする。I群、II群で庄内グループが多く、V群、VI群で非庄内グループが多い。他のIII群、IV群はどちらのグループが多いとも言えない。なお、表には示さなかったが、被調査者の両親の出身地別の結果でもTable VIII-3とほとんど差が見られない。

(7) 職業別の結果はTable VIII-9に示しておいた。

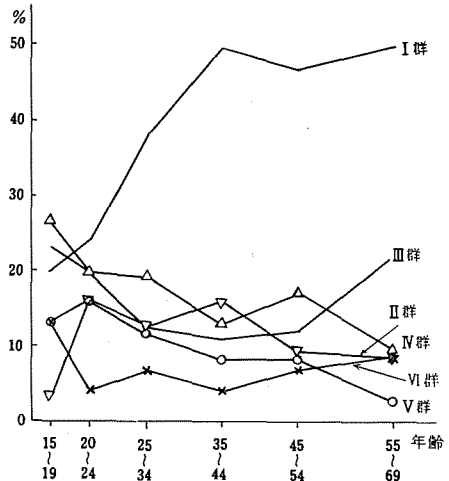


Fig. VIII-15 各群の被調査者の年齢構成(アクセント)

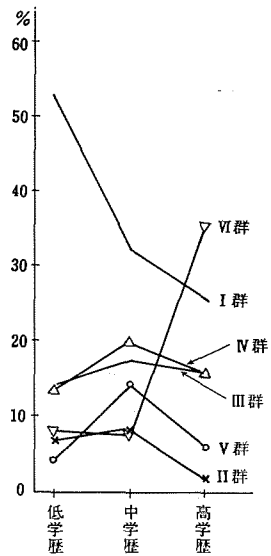


Fig. VIII-16 各群の被調査者の学歴構成(アクセント)

Table VIII-3 各群の被調査者の居住経歴（アクセント）

		I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	計
出生地	庄内	<u>165</u>	<u>31</u>	60	62	33	28	379
	庄内以外	18	1	13	15	9	<u>22</u>	78
4～12歳の時期に庄内地方以外で生活した期間	4年未満	<u>174</u>	<u>31</u>	63	66	34	30	398
	4年以上	9	1	10	11	<u>8</u>	<u>20</u>	59

注 表中の太字はその属性が30%水準以下で理論値より大きいことを示す。

また、下線のあるものは0.5%以下で統計的な差が認められたことを示す。

Table VIII-3～8、11～16まで同じ。

(8) 次に被調査者の関心の方向が鶴岡や庄内地方に向いているか、他に向いているか（Table VIII-4）を見よう。

Table VIII-4 各群の被調査者の全国志向・地域志向（アクセント）

		I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	計
301 住みたいところ	庄内	<u>90</u>	<u>18</u>	34	28	10	21	201
	庄内以外	93	14	39	<u>49</u>	<u>32</u>	29	256
305 ニュースの関心	庄内の報道	<u>66</u>	8	18	<u>31</u>	11	11	145
	全国の報道 その他	117	24	<u>55</u>	46	31	<u>39</u>	312
313 関心のある選挙	県政・市政	<u>141</u>	18	39	44	18	27	287
	国政その他	42	14	<u>34</u>	<u>33</u>	<u>24</u>	<u>23</u>	170

どこに住みたいと思うか、との問いに鶴岡や庄内地方がいいと答えるものはI群、II群に多く、他の地方に住みたいと答えるものはIV群、V群に多い。ニュースの関心および関心のある選挙ではI群は庄内地方のことを報道したニュースを好み、山形県あるいは鶴岡市の県政・市政に直接かかわりのある地方選挙に関心を抱いている。このことから、I群は地域志向型が優勢であると言える。II群ではニュースや選挙については特にどちらに関心があるとも言えないようである。IV群は庄内地方のニュースに関心を持つ反面、国政レベルの選挙に関心を持つものが多い。その他のIII群、V群、VI群は多かれ少なかれニュースでも選挙でも全国レベルのものに関心を持っていると言える。

(9) 鶴岡での生活や鶴岡弁に対する意見（Table VIII-5）では、II群が鶴岡での伝統的な生活を守るべきであるが、鶴岡弁はできるだけなくした方がいい

とする意見を持つものが多い。VI群で鶴岡の伝統的な生活は守るべきであるとする意見のものが多いほかは他の群では一定の傾向は認められない。

Table VIII-5 各群の被調査者の生活や鶴岡弁に対する意見（アクセント）

		I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	計
308	改変する	145	22	54	62	35	32	350
鶴岡での生活	伝統を守る その他	38	10	19	15	7	18	107
312	できるだけくす	51	12	21	18	11	12	125
鶴岡弁	できるだけ保存 その他	132	20	52	59	31	38	332

(10) 東京との交流について見てみよう (Table VIII-6)。東京との行き来が多いのはVI群であり、東京とのつき合いがないのはII群である。IV群は行き来はしていないが、電話をかけたたり手紙のやり取りをするなどで東京との接触を保っているものが多い。他の群では差は見られない。

Table VIII-6 各群の被調査者の東京との行き来・団体加入（アクセント）

		I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	計
302	行き来している	110	14	40	42	28	40	274
東京の知人や親せきとのつき合い	行き来はしていないが 電話や文通はしている	43	8	19	24	9	5	108
	つき合いなし	30	10	14	11	5	5	75
311	役員をしている	36	9	16	22	18	8	109
団体や組合への参加	団体に入っているが 役員はしていない	68	5	17	18	14	12	134
	団体に入っていない	79	18	40	37	10	30	214

(11) 団体や組合などへの参加の程度 (Table VIII-6) では、II群、III群およびVI群は加入していないものが多い。他方、団体に入っているものはI群、V群に多い。特にV群のものはその団体に役員をした経験を持つものが多く見られる。

(12) 一日当たりのテレビ視聴時間について見てみよう (Table VIII-7)。あまりテレビを見ないもの (150分未満) が多いのはII群、V群、VI群である。他方、一番長く見ているもの (241分以上) はIV群に多い。I群はこれらの中間 (151~240分) がもっとも多い。III群ではテレビ視聴時間については一定の傾

向は認められない。

Table VIII-7 各群の被調査者のテレビ視聴時間（アクセント）

		I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	計
303 一日当たり のテレビ視 聴時間	150分未満	53	14	23	24	18	26	158
	151~240分	81	11	28	22	17	11	170
	241分以上	49	7	22	31	7	13	129

(13) 道きき、旅人に話すことばと各群との関係がTable VIII-8に示されている。道ききは第VI章の9.4で述べたように調査員判定によるものであり、旅人に話すことばは被調査者の内省によるものであった。また、この両者の間ではズレは小さいこともわかっている。IV群、V群およびVI群のもの多くは共通語を使って話している。I群、II群は方言あるいは共通語と方言とが混ざることばで話をするものが多い。III群ではどちらが多いかは明確でない。

Table VIII-8 各群の被調査者の話すことば（アクセント）

		I群	II群	III群	IV群	V群	VI群	計
317 道きき	共通語	39	7	26	38	32	30	172
	混ざ	98	13	31	32	8	16	198
	方言	46	12	16	7	2	4	87
309 旅人に	共通語で話す	97	22	43	56	39	35	292
	方言あるいは混ざることばで話す	86	10	30	21	3	15	165

(14) 以上をまとめて示すとTable VIII-9のようになる。この表から各群を構成する被調査者のイメージがある程度浮かびあがってくるであろう。一つ一つの群ごとに要因の関係をスケッチ風に示してみよう。

(15) I群はアクセントの5項目のすべてに方言の型で反応した、すなわち、アクセントの共通語化がもっとも遅れた被調査者のグループである。この群を構成する被調査者は庄内生まれで庄内育ちのもので、年齢は高く、学歴は低い。したがって、学生は少なく、鶴岡市で商店や工場を営するもの、あるいは一定の職業を持たないもの（パート）が多い。ふだん使うことばは方言あるいは方言と共通語が混ざっており、鶴岡や庄内地方の出来事に関心が強い。しかし、鶴岡での生活のしかたや鶴岡弁に対しては特に顕著な意見は持っていない。

Table VIII-9 アクセントの共通語化のタイプと要因との関係

	I 群	II 群	III 群	IV 群	V 群	VI 群
性	—	女	—	男	—	女
年齢	高年齢	35~44歳 がピーク	低年齢と 高年齢	低年齢	低年齢	低年齢と 高年齢
学歴	低学歴	低・中学歴	中学歴	中学歴	中学歴	高学歴
居住経歴	庄内	庄内	—	—	非庄内	非庄内
職業(多)	商店主 パート	主婦	学生	学生 商店主 パート	学生 パート	給与生活者 学生 パート
II (少)	学生	—	—	—	—	—
関心の方向	地域志向	地域志向	全国志向	全国志向	全国志向	全国志向
鶴岡での生活	—	伝統を守る	—	—	—	伝統を守る
鶴岡弁	—	保存する	—	—	—	—
東京との交流	—	つき合い なし	—	電話や手紙で 接触している	—	行き来 している
団体への参加	加入している	加入して いない	加入して いない	—	役員を している	加入して いない
テレビ視聴時間	ふつう	短い	—	長い	短い	短い
ふだんのことば	混ぜる 方言	方言	—	共通語	共通語	共通語

注. 職業(少)を除いて、各群ごとに多くみられる属性だけを示した。

—は統計的にどの属性が多いとはいえないものである。

(16) これと対照的なのがV群である。V群はアクセントの共通語化がほぼ完成したグループである。年齢は低く、学歴は高校卒程度のものに多い。出生地・言語形成期のどちらも庄内地方以外の土地で過ごしており、職業では学生が多く、パートが少ない。ふだん話すことばは共通語であり、関心の方向は庄内地方よりも全国に向いている。

(17) VI群もV群に似ている。この群は前項のPOSA構造図には描かれなかったグループである。このことが関係しているのか、非庄内グループのもので地元への団体には加入せずに東京としばしば交流しているいわゆる「余所者」の傾向が強い。年齢は低いものと高いものが混ざっているが学歴は高い。職業では給与生活者が56%を占めている。鶴岡にはあまり関心はないが、鶴岡の生活は伝統を守る方がいいとするものが多い。これは鶴岡市に愛着を持っているというよりは余所者としての意見だと見られる。ふだんのことばは当然のことな

がら共通語が多い。

(18) 共通語で頭高のアクセントの「ネコ」「カラス」から共通語化するⅣ群に属するものは男性、低年齢、中学歴のものに多い。POSAに示されなかったⅥ群を除いて見れば、このグループの学歴は高い。居住経歴については鶴岡市で育ったものとの土地で育ったものといった明確な区別はつけにくい。職業ではⅠ群と正反対に学生が多く、商店主やパートが少ない。関心の方向は全国に向いており、東京との交流でも電話や手紙のやり取りをするものが多い。ふだんのことばは共通語を使っている。このグループのものは何故かテレビを見る時間が他よりも長い。

(19) Ⅲ群は二音節の「ハタ」「ネコ」から共通語化するグループである。このグループでもⅥ群を除いて見れば高学歴層が多い。年齢では低年齢層と高年齢層が多い。職業では学生が多いことを除くと特にこれといった特徴は見られない。関心の方向は全国に向いているが、ふだん話すことばは共通語が多いとも方言が多いとも言えない。年齢の低いものと高いものが混ざっているため、これらが相殺し合って、使われることばの性格がはっきりしなくなっているのかも知れない。

(20) 最後にⅡ群であるが、これは「ハタ」「セナカ」の尾高型のアクセントから共通語化が進むグループである。年齢では35歳から44歳前後のものに多い。学歴は低学歴ないしは中学歴であり、庄内育ちのものに多い。東京との交流は少なく、地元での生活を重要視するものが多い。使われることばも方言が多い。職業では主婦がやや多く見られるほかは顕著な傾向はない。性別では女性が多い。

5. 音 声

「場面によることばの使い分け」およびアクセントについてパターン分類を行い、さらにPOSAの手法に基づいて種々の分析を行ってきた。これらは項目

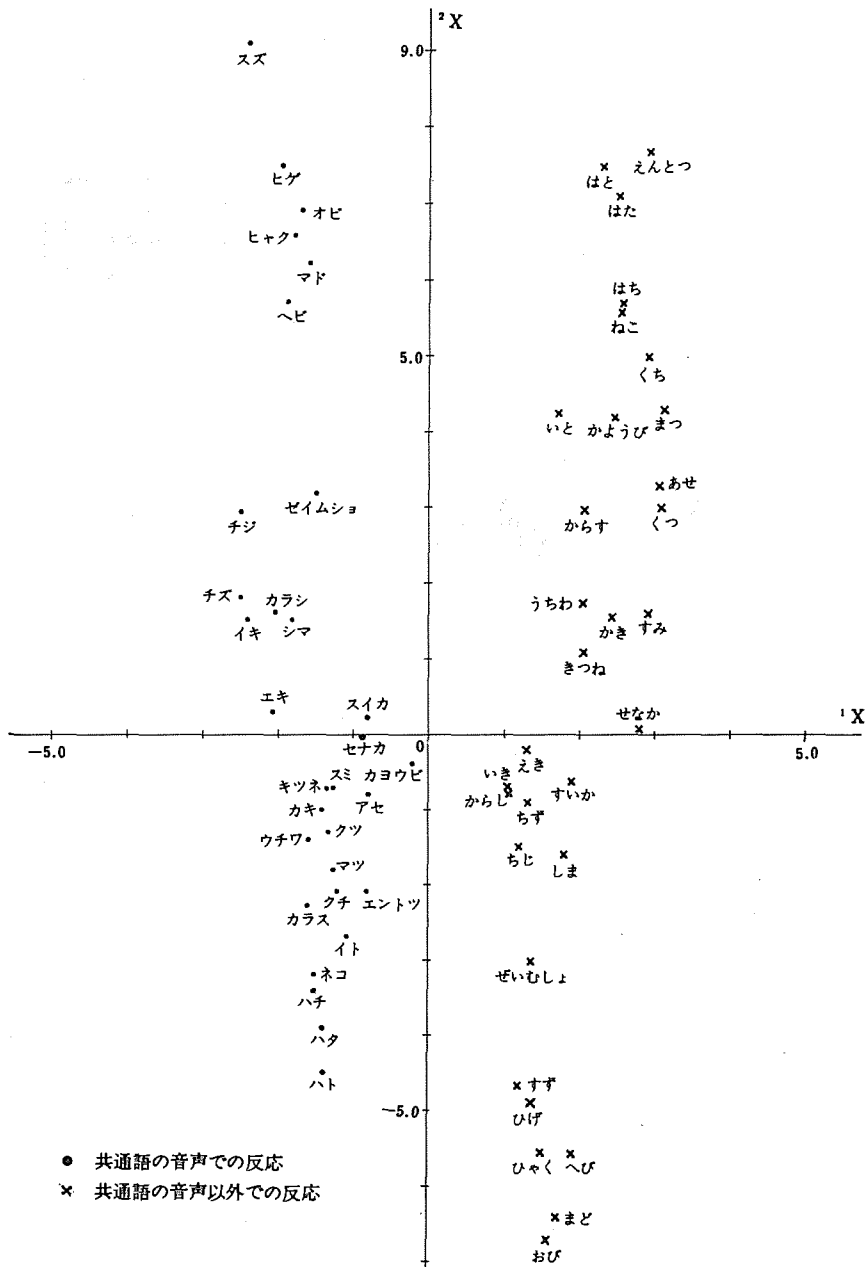


Fig. Ⅷ-18 各音声項目のパターン分類 (第1, 2軸) (前回調査)

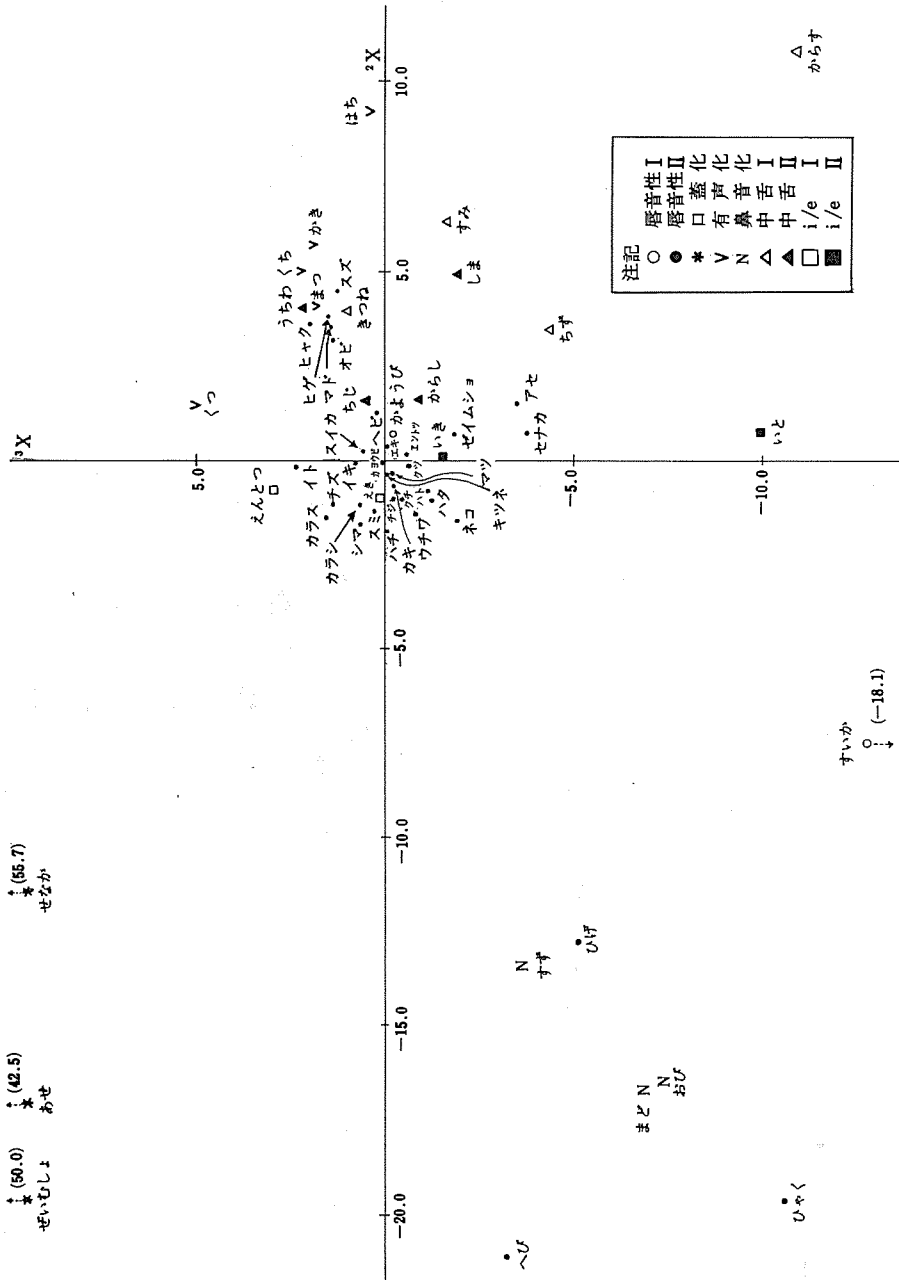


Fig. Ⅷ-19 各音声項目のパターン分類 (第2, 3軸) (今回調査)

† (50.0) ぜいむしよ
 † (42.5) あせ
 † (56.7) せなか

すいか
 † (-18.1)

の数も少なく、その構造も比較的わかりやすいものであった。調査項目数の多い音声について、これと同様の手法で分析してみよう。

5.1 両度の調査のパターン分類の第1軸について

今回調査の31の音声項目にパターン分類を施した結果がFig.VIII-17であり、前回調査のそれがFig.VIII-18である。図はともに第1軸と第2軸とをプロットしたものである。図で・印で示されたカタカナ書きの項目はその項目に対して共通語の音声で反応したものであり、×印のひらがなは方言の音声による反応である。Fig.VIII-17とVIII-18との第1軸を見れば、ともにカタカナの共通語での反応が負の領域に、ひらがなの方言の音声での反応が正の領域に来ている。第1軸は方言と共通語とを区別する軸であると言える。両図全体から見れば、各反応の布置の状態にはかなりの差異が見られる。第2軸以下については、両度の調査を個別に検討しよう。方言での反応を中心に以降の分析を続ける。

5.2 今回調査のパターン分類による結果

今回調査のパターン分類の第2軸以下を図示したものが、Fig.VIII-19（第2軸と第3軸）およびVIII-20（第4軸と第5軸）である。これらの図では第1軸と第2軸とを示したFig.VIII-17同様、共通語の音声による反応を・印のカタカナ書きで記した。他方、方言による反応には音声の特徴を同じくする項目ごとに同じ記号を与え、音声の特徴の相違が視覚的に弁別し得るようにした（各音声の記号はそれぞれの図に注記してある）。これは各軸の解釈を進める上で音声の違いを考慮する必要があると考えられるからである。

第2軸の方言による音声での反応の分布は、

●, N, * / √, △, ▲ (斜線の左側の音声は負領域に、右側の音声は正領域にあることを示す。以下同じ)
(唇音性II)(鼻音化)(口蓋化) (有声化)(中舌I)(中舌II)

に分かれている。負領域の唇音性II・鼻音化・口蓋化の三つの音声の部類が他の音声から特に隔たりが大きいところから、第2軸はこれらの三つの音声の部類と他とを区別する軸であると見られる。音声学的に見れば、これらの音声の方言と共通語との違いは（純粹に）子音の問題であり、第2軸はこれと他とを

区別する軸であると解釈し得るものかも知れない。ここで、正の領域に位置する有声化は表面上は子音の変化に関する項目ではあるが、その子音を挟む前後の母音に規定される面が強いことから唇音性IIなどと分離したと考えられる。第2軸に関しては別の解釈も可能である。すなわち、負の領域の音声は「スイカ」の唇音性Iを含めて室町時代の末ごろまで中央語にあった古音の残存であると言われている。してみると、第2軸は古い日本語の音声で今の共通語では変わったものとそうでないものとを区別する軸であるとも考えることができる。

第3軸では、第2軸で負の領域に分布していた唇音性II・鼻音化・口蓋化の音声の中から口蓋化が分離し、かつ、この音声の部類は他とはいちじるしくかけ離れている。したがって、第3軸は口蓋化と他とを区別する軸であると見られる。

第4軸、第5軸では「カヨウビ」が他からいちじるしく離れている。これは「カヨウビ」が他より共通語化していた（逆に言えば、方言での反応が極端に少ない）ことが原因となっていると思われる。そこでこの項目を除いて考えてみることにしよう。

第4軸の分布は

V, N, ● / その他の音声の部類
(有声化)(鼻音化)(唇音性II)

となっている。負領域の音声の部類は子音の変化によるものであり、正領域のそれは母音の変化によるものと考えられる。また、この軸では第3軸でやや分離傾向を示していた有声化と中舌とがはっきりと分かれている。

第4軸までに分離されなかったいくつかの音声の部類が第5軸で分離している。その一つは中舌のIとIIとである。中舌Iはこの軸の負の領域に、中舌IIは正領域に分かれている。また、有声化では「クチ」「ハチ」などのように有声化する子音に伴う閉じた母音を持つ項目と「ハタ」「ハト」のように開いた母音を持つ項目とが正負の領域にそれぞれ分離している。i/eのI, IIは第5軸までの間ではほとんど近くに位置している（第3軸で正負に分かれていると言えないこともないが、その差は小さい）。i/eでは同じような音声で発音する被調査者が多いと言えよう。なお、第5軸全体の解釈ははっきりはしないが、閉じた母音と開いた母音とを区別する軸であると見ることもできようか。

第1軸から第5軸のそれぞれの意味をまとめて示すと次のようになる。

第1軸：共通語での反応と方言との反応との区別

第2軸：純粋に子音が問題になるものとそうでないものとの区別，あるいは古い日本語の音声の残存とそれ以外の音声との区別

第3軸：口蓋化とそれ以外との区別

第4軸：子音の変化とそれ以外との区別

第5軸：閉じた母音と開いた母音との区別

5.3 前回調査のパターン分類による結果

前回調査のパターン分類の第2軸と第3軸との座標値がFig.VIII-21に，第4軸と第5軸との座標値がFig.VIII-22に示されている。

第2軸は，

●, N / V
(唇音性II)(鼻音化) (有声化)

とに分離している。前者は今回調査の第2軸同様，純粋子音の問題であり，後者は母音間の子音の問題であると見られる。今回調査との差異は，中舌化と口蓋化との分布の違いにあると思われる。すなわち，今回調査ではこの二つの音声の部類は正負両領域にきれいに分離しているが，Fig.VIII-21ではそれらが両軸に混ざり合って分布している。このことから，第2軸については，前回調査時では未分化であった構造が今回調査で分化していると考えられることもできよう。

第3軸は，

○, □, ■ / *, ▲
(唇音性I) (i/e I) (i/e II) (口蓋化)(中舌II)

というように分かれている。前者は発音位置の開きのズレによるものであり，後者は発音位置の後方へのズレによるものと見られる。

第4軸では，

○, *, V, ●, / △, ▲, □, ■
(唇音性I)(口蓋化)(有声化)(唇音性II) (中舌I)(中舌II)(i/e I)(i/e II)

のように分布している。後者は前母音[i]に関するものであるところから，この軸は前母音の音声と他とを区別する軸であると見られる。

第5軸では，

△, □, ■, * / V
(中舌I)(i/e I) (i/e II) (口蓋化) (有声化)

となっている。有声化の中でも閉じた母音を持つ項目は負領域に分布しているところから、この軸は今回調査と同様、閉じた母音と開いた母音とを区別していると考えられる。

両度の調査の分布状況を見ると、いくつか異なる点も見られるが、全体としては似た傾向を示していると言うことができよう。しかし、どちらについての解釈もあくまで一つの仮設的なものであり、他の観点から説明すればより適確に構造を把握し得るものであるかも知れない。

5.4 POSAによる共通語化のタイプ分け

「場面によることばの使い分け」やアクセントと同じように、音声についてもPOSAを描いてみよう。しかし、31の全項目を対象として構造化をはかるのは困難である。構造化を容易にするために、31の音声項目のうちからいくつかの項目を選び出す必要がある。項目抽出の基準としては種々のことが考えられるが、われわれは音声の特徴を基に分析を進めてきたことから、ここでもそれに従うことにする。そこで、項目間のパターン分類の布置状態を考慮し九つの音声の特徴から1項目ずつ計9項目を抽出し、これについてパターン分類を行ってみた。9項目についてのパターン分類と31項目全体のそれとの結果を比較したところ、分布に大きな差異が見られた。その理由を検討したところ、唇音性Iの「カヨウビ」(あるいは「スイカ」)が分布にひずみをもたらしていることが判明した。結局、その唇音性Iを除いて、次の8項目が各音声の代表項目として選ばれた。

- | | | |
|---------------|--------------|---------------|
| 1. アセ(口蓋化) | 2. マド(鼻音化) | 3. ハタ(有声化) |
| 4. ヒャク(唇音性II) | 5. イキ(i/eII) | 6. エントツ(i/eI) |
| 7. スミ(中舌I) | 8. ウチワ(中舌II) | |

これらの8項目についてパターン分類を行った(今回調査の)結果の第1軸と第2軸の座標値がFig.VIII-23に示されている。この図とFig.VIII-17(31項目全体のパターン分類の結果)とを比べると、各項目の布置状態は大体一致していると言える。そこで、この8項目を組にしてパターン分類を行ってみた。それがFig.VIII-24である。図では上記の8項目の前につけられた番号で項目とそ

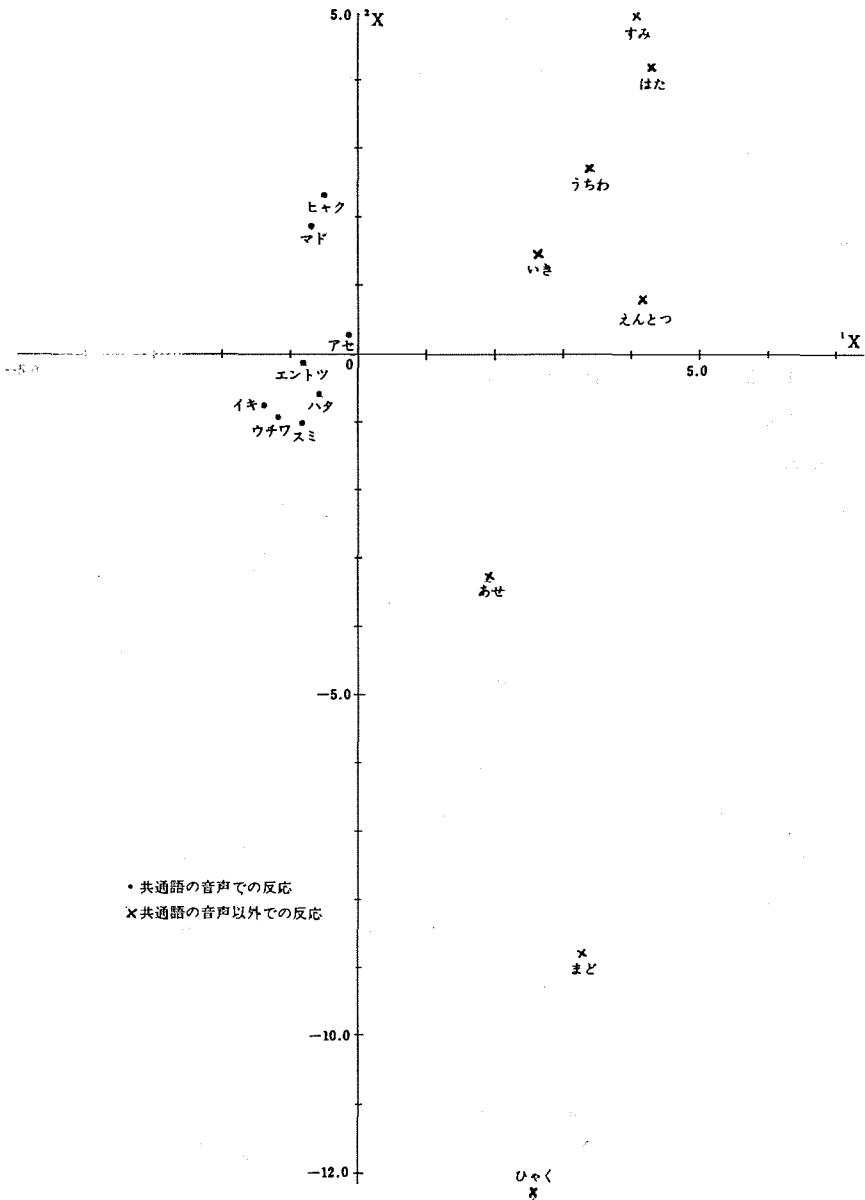
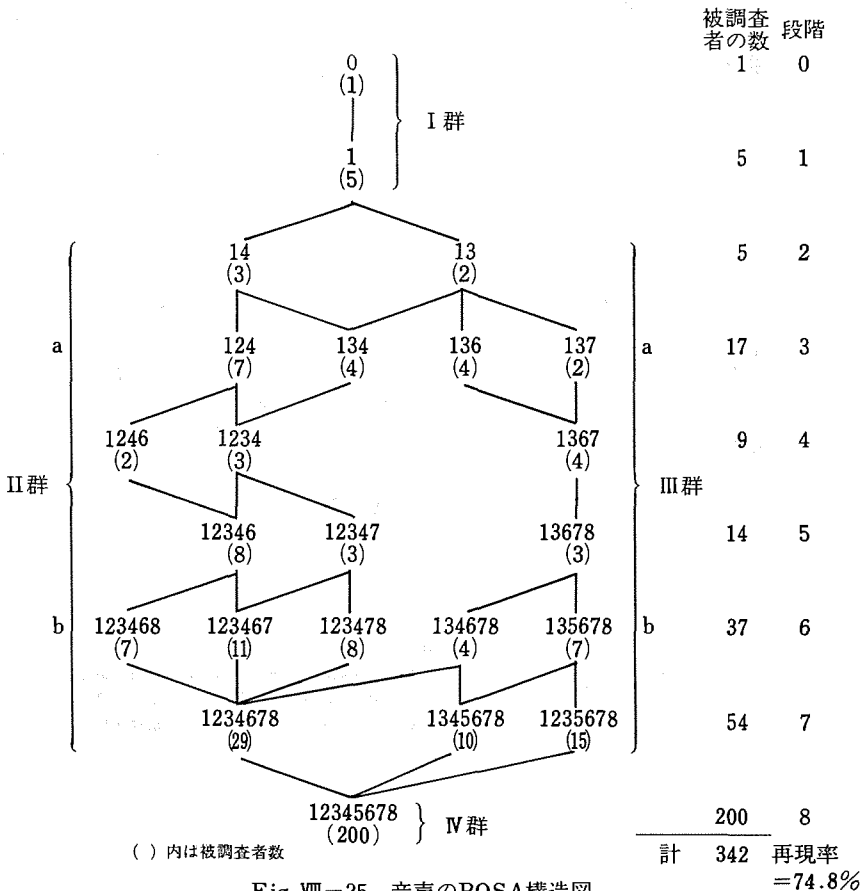


Fig. VIII-23 8項目のパターン分類 (第1, 2軸) (今回調査)

の項目に共通語で反応されたか、方言の音声で反応されたかが記されている。たとえば、図で124とあるのは、項目1、2および4（すなわち、アセ、マド、ヒャク）に共通語の音声で、他の項目には方言の音声で反応したもののパターンを示す。また、0はすべての項目に方言で反応したパターンを表わす。8項目の組みの異なりの総数は80である。これらのうち、以下で述べるPOSAの構造化から除外したパターンについては、図では・印で座標値だけを示した。

Fig. VIII-24のパターンからPOSAの構造図を描いたものがFig. VIII-25である（記号の意味はFig. VIII-24と同じ）。



ちなみに、選択された8項目の全パターンの平均点は、全体で6.53、男性6.34、女性6.67である。この全体の平均点を31点満点に換算すると25.29となるから、31項目のときの平均点25.8と比べるとやや低い。しかし、これは共通語化の程度の高かった唇音性Iを省いたために低くなったもので、この点では、唇音性を除いた全体をよく代表していると言えるであろう。

なお、POSAの分析の対象になったものの平均点は全体で6.94である。拾われなかった25.2%の人の音声得点は低かったのである。

さて、Fig. VIII-25からの主な結果は次のとおりである。

(1) パターンの再現率は74.8%である。先に見た「場面によることばの使い分け」の90.5%やアクセントの83.2%に比べて再現率は低くなっているが、対象とした項目数が多くなっていることを考えれば、この程度の再現率でも満足すべきであろう。

(2) 図の最上段の二つのパターンの関係、すなわち、段階0（すべてに方言の反応）から段階1への移行は、項目1（アセ）だけが共通語化するパターンの一つだけである。このことは、八つの音声では口蓋化(正確には、項目「アセ」と言うべきであるが、音声特徴の部類の名称で示す。以下も同じ。)の共通語化がもっとも早いことを意味している——POSAの対象から除外された唇音性Iの共通語化がこれよりも早いことは言うまでもないことである。

(3) 段階1から2へは二つの経路がある。一つは、口蓋化に次いで唇音性II（ヒャク）が共通語化するものであり、他は有声化（ハタ）が共通語化するものである。

(4) 段階3から7を見ると、共通語化のタイプには大きく二つのものがあることがわかる。すなわち、図の左側を結ぶパターンをとるものと、右側のパターンをとるものとである。

(5) 左側のタイプを詳しく見てみよう。直前の段階からその段階で共通語化した音声だけを示すと、Fig. VIII-26のようになる（音声の左肩の数字は項目番号）。図で四角で囲まれている部分は、同一反応パターンを示すものである。この図から、鼻音化、有声化の音声の部類の共通語化は比較的早く、中舌I, II, i/e Iがこれに続き、最後にi/e IIが共通語化していることがわかる。

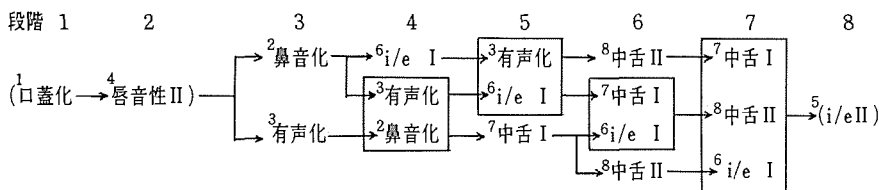


Fig. VIII-26 音声のPOSA構造の部分図(1)

(6) 右側のパターン音声の共通語化の順序はFig.VIII-27のようになる。ここでは左側のパターンで早く共通語化していた唇音性IIや鼻音化が八つの音声のうちでもっとも遅れている。i/e IIはここでも遅い段階で共通語化している。反対にもっとも早いのが中舌 I, i/e Iである。

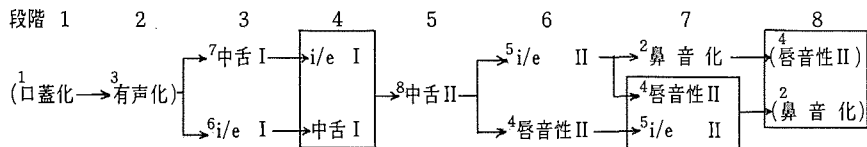


Fig. VIII-27 音声のPOSA構造の部分図(2)

(7) (5)および(6)から、共通語化の経路にはかなり異質な二つのタイプがあると言えよう。

5.5 各タイプの分析

Fig.VIII-25に示したように被調査者を次の五つのグループに分けて、アクセントの場合と同じ方法で分析してみよう。

I群：図の最上段の二つのパターンを持つ被調査者。このグループはほとんどの項目に方言の音声で反応したものであるが、人数が少ない（6人）のであまり詳しい分析は望めない。

II群：図の左側に見られるパターンに属する被調査者のグループ（パターン134はこれに含めた）。

III群：右側のパターンをとる被調査者のグループ。

IV群：最下段のすべてに共通語の音声で反応した被調査者のグループ。

V群：以上のどれにも属さないパターンをとる被調査者のグループ。

なお、II群およびIII群はそれぞれ段階が2から4のもの（aグループ）と5から7のもの（bグループ）とに分けて分析を行うことにする。

各群の属性を示す図表がTable VIII-10～16, Fig. VIII-28～29に示されている。表の見方はそれぞれTable VIII-2～8と同じである。

Table VIII-10 各群の被調査者の構成（音声）

	I 群	II 群		III 群		IV 群	V 群	計
		a	b	a	b			
男	4(2.7)	7(8.5)	28(29.5)	7(5.4)	25(17.4)	82(89.3)	51(51.3)	204
女	2(3.3)	12(10.5)	38(36.5)	5(6.6)	14(21.6)	118(110.7)	64(63.7)	253
全体	6	19	66	12	39	200	115	457

(1) I群からV群の全体の被調査者の割合は、それぞれ1.3%、18.6%、11.2%、43.8%および25.2%である。すべてに共通語の音声で反応したIV群が半数近くを占めている。

(2) I群とIV群とを除くII群、III群、V群について8項目の得点の平均を見ると、

V群(5.30) < II群(5.56), III群(5.76) (V群 < III群)
 となる。POSAから省かれたV群の得点が低いことに注目される。

(3) 性別の構成ではIII群（特にIII b）で男性が多く、IV群で女性が多いほかに目立った特徴は見られない（Fig. VIII-10）。

(4) Fig. VIII-28は年齢別の群構成である。IV群は若い年齢層が圧倒的に多く、年齢が上昇するにつれて構成比率が減っている。V群、II a群、III a群では反対に若い年齢層のものが少なく、高年齢層が多いと言える。II b群は35から44歳の年齢層がもっとも多い。また、III b群は15から24歳のものが皆無であることを除けば、年齢による差は少ない。なお、I群は全体の人数が少ないのでグラフに示さなかったが、この群を構成する被調査者は高年齢層ばかりである。

(5) 学歴別（Fig. VIII-29）の結果は、年齢別の結果とほぼ対応している。すなわち、低年齢層の多いグループは高学歴層が多く、高年齢グループは学歴が低い。これと異なるグループはIII b群であり、25歳以上ではほとんど年齢差が見られないにもかかわらず、高学歴のものが多く。

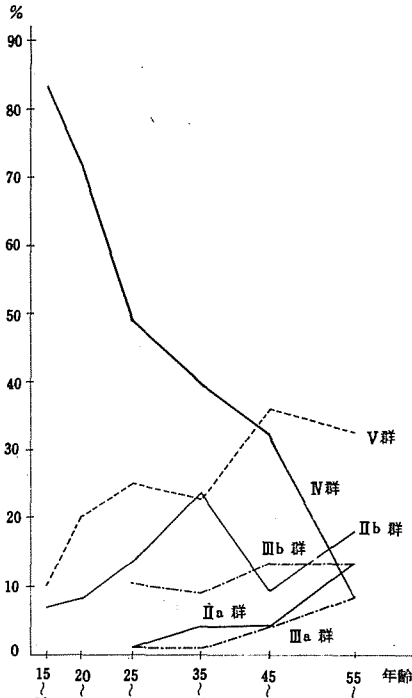


Fig. Ⅷ-28 各群の被調査者の年齢構成 (音声)

(6) 居住経歴 (Table Ⅷ-11) では、非庄内グループの56%がⅣ群に属している。これに次いで多いのがⅡb群である。逆に、庄内グループはⅡa群、Ⅲa群、Ⅴ群に多い。Ⅰ群、Ⅲb群では特に顕著な傾向はないと言える。

Table Ⅷ-11 各群の被調査者の居住経歴 (音声)

		I群	Ⅱ群		Ⅲ群		Ⅳ群	Ⅴ群	計
			a	b	a	b			
出生地	庄内	5	18	51	12	34	156	103	379
	庄内以外	1	1	15	0	5	44	12	78
4~12歳の時期に庄内地方以外で生活した期間	4年未満	5	19	53	12	35	167	107	398
	4年以上	1	0	13	0	4	33	8	59

(7) 職業別の結果は、各タイプと要因との関係をまとめてみる中で示すことにする (Table Ⅷ-17参照)。

(8) 被調査者の興味や関心の方向とタイプとの関係は Table Ⅷ-12に示すと

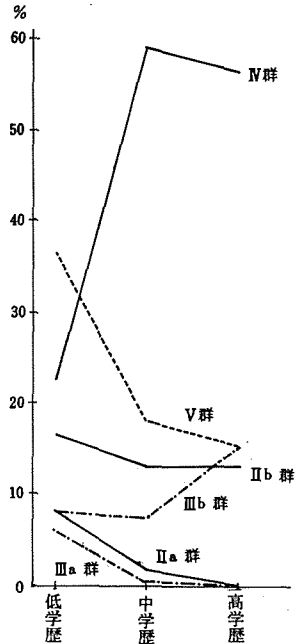


Fig. Ⅷ-29 各群の被調査者の学歴構成 (音声)

おりである。ここでは、全国志向の方が地域志向より多いのはⅣ群だけであり、他は地域志向の方が多いか、あるいは、どちらが優勢だとも言えないものである。

Table Ⅷ-12 各群の被調査者の全国志向・地域志向（音声）

		Ⅰ群	Ⅱ群		Ⅲ群		Ⅳ群	Ⅴ群	計
			a	b	a	b			
301 住みたいところ	庄内	5	<u>17</u>	29	8	16	75	51	201
	庄内以外	1	2	37	4	23	125	64	256
305 ニュースの関心	庄内の報道	2	9	<u>27</u>	5	12	56	34	145
	全国の報道 その他	4	10	39	7	27	144	81	312
313 関心のある選挙	県政・市政	1	<u>17</u>	<u>46</u>	9	26	106	<u>78</u>	283
	国政その他	5	2	20	3	13	<u>94</u>	37	174

(9) 鶴岡での生活や鶴岡弁に対する意見（Table Ⅷ-13）では、Ⅳ群で生活の仕方は改変すべきだが、鶴岡弁はできるだけ保存すべきだとするものが多い。これと対照的な群がⅢb群である。Ⅲb群は伝統的な生活を守るべきであるが、鶴岡弁はなくす方向の意見を持っている。他の群では、伝統的な生活を守るとするものがⅠ群、Ⅲa群に多く（とは言っても、これらの両群の被調査者の数が極端に少ないため断定することはできないが）、鶴岡弁はできるだけ保存すべきであるとする意見で、Ⅱ群が多いほかは差は見られない。

Table Ⅷ-13 各群の被調査者の生活や鶴岡弁に対する意見（音声）

		Ⅰ群	Ⅱ群		Ⅲ群		Ⅳ群	Ⅴ群	計
			a	b	a	b			
308 鶴岡での生活	改変する	3	14	50	5	27	163	88	350
	伝統を守る その他	<u>3</u>	5	16	<u>7</u>	12	37	27	107
312 鶴岡弁	できるだけ なくす	2	<u>8</u>	<u>22</u>	3	14	41	35	125
	できるだけ 保存その他	4	11	44	9	25	159	80	332

(10) 東京との交流（Table Ⅷ-14）では、行き来しているものはⅡaの群に、つき合いがないと答えるものがⅡb群に多い。Ⅰ群、Ⅲb群は行き来はしないが、電話をかけたなり文通しているものが多く見られる。Ⅳ群、Ⅴ群では差は見られない。

Table VIII-14 各群の被調査者の東京との行き来・団体加入（音声）

		I 群	II 群		III 群		IV 群	V 群	計
			a	b	a	b			
302 東京の知人 や親せきと のつき合い	行き来している	2	14	40	7	16	125	70	274
	行き来はしていないが 電話や文通はしている	3	2	9	2	<u>20</u>	46	26	108
	つき合いなし	1	3	<u>17</u>	3	3	29	19	75
311 団体や 組合への 参加	役員をしている	3	2	16	1	12	53	22	109
	団体に入っているが 役員はしていない	0	<u>10</u>	14	2	11	60	37	134
	団体に入っていない	3	7	<u>36</u>	<u>9</u>	16	87	56	214

(1) 団体や組合への参加（Table VIII-14）では，団体に入っていないものは II b 群と III a 群に多い。また，団体に入っているが役員はしたことがないものが II a 群に，役員をしているものが I 群に多い。他の群では目立った傾向は認められない。

(2) テレビ視聴時間の長さ（Table VIII-15）では，III b 群，IV 群に短いものが多い。よくテレビを見ているのは I 群，II a 群，III a 群および V 群である。

Table VIII-15 各群の被調査者のテレビ視聴時間（音声）

		I 群	II 群		III 群		IV 群	V 群	計
			a	b	a	b			
303 一日当たり のテレビ視 聴時間	150 分未満	2	1	19	1	18	<u>85</u>	32	158
	151～240分	1	9	<u>29</u>	3	16	71	41	170
	241 分以上	3	9	18	<u>8</u>	5	44	<u>42</u>	129

(3) 道さき，旅人に話すことば（Table VIII-16）について見ると，テレビ視聴時間の長さとかかなり平行的な関係をなしている。すなわち，視聴時間の短い

Table VIII-16 各群の被調査者の話すことば（音声）

		I 群	II 群		III 群		IV 群	V 群	計
			a	b	a	b			
317 道さき	共通語	1	0	20	2	<u>20</u>	<u>106</u>	23	172
	混ざ	1	8	<u>34</u>	5	18	78	54	198
	方言	4	<u>11</u>	12	<u>5</u>	1	16	<u>38</u>	87
309 旅人に	共通語で話す	2	7	41	6	26	<u>150</u>	60	292
	方言あるいは混 ざることばで話す	4	<u>12</u>	25	6	13	50	<u>55</u>	165

グループは共通語で話すものが多く、長いグループは方言で話すものが多い(共通語化の得点についても同じことが言える)。しかし、この関係は第七章で検討したように、テレビを見る時間の長さは年齢とか職業などの他の変数に支えられているものに過ぎないと考えるべきである。

(14) 以上をまとめて一覧した表がTable VIII-17である。一つ一つの群の特性を追ってみよう。

Table VIII-17 音声の共通語化のタイプと要因との関係

	I 群		II 群		III 群		IV 群	V 群
	—	—	a	b	a	b	女	—
性	—	—	—	—	—	男	女	—
年齢	高年齢	高年齢	25～34歳 がピーク	高年齢	—	—	低年齢	高年齢
学歴	低学歴	低学歴	—	低学歴	高学歴	高学歴	高学歴	低学歴
居住経歴	—	庄内	非庄内	庄内	—	非庄内	庄内	庄内
職業(多)	—	無職	主バ 婦ト	無職	給与生活者	学生	商店主	—
〃(少)	—	—	学 生	—	無職、学生	商店主職	学生	—
関心の方向	地域志向	地域志向	地域志向	地域志向	—	全国志向	地域志向	—
鶴岡での生活	伝統を守る	—	—	伝統を守る	伝統を守る	変化する	—	—
鶴岡弁	—	なくす	なくす	—	なくす	保存する	—	—
団体への参加	役員を している	加している	加していない	加している	—	—	—	—
テレビ視聴時間	長い	長い	ふつう	長い	短い	短い	長い	長い
ふだんのことば	方言	方言	混ざる	方言	共通語	共通語	共通語	方言

(15) すべての項目に共通語の音声で反応したIV群は、低年齢・高学歴のものが多く、居住経歴でも庄内地方以外で生活したものが多い。年齢ないしは学歴と関係していることではあるが、職業では学生が多く、商店主・工場経営者あるいは無職が少ない。関心の方向は庄内地方よりはむしろ全国に向いており、鶴岡での生活は変化した方がいいと考えている。しかし、鶴岡弁はできるだけ保存したいとする意見が強い。ふだんのことばは共通語を使うものが多い。役員をしているかどうかは特に目立つ要因ではない。

(16) これと対照的な群はI群、II a群、III a群である。共通語化が遅れているこれらの群は高年齢・低学歴・庄内育ちが多く、志向は地域志向型であり、伝統的な鶴岡の生活を守りたいと考えている。鶴岡弁に対しては、II a群でなくすという意見が強いほかは顕著な傾向は見られない。職業は無職が多い。

(17) II b 群は25歳から34歳の年齢層がもっとも多い。学歴では特にこれといった特徴は見られない。職業別では主婦、パートが多く、学生が少ない。居住経歴では非庄内グループが多いにもかかわらず、地域志向型のものが多い。また、鶴岡弁はなくすことに賛成しているが、本人のふだんのことばは共通語と方言とを混ぜて使っている。団体や組合には加入していない人々が多い。

(18) III b 群は15歳から24歳のものは皆無である。また、25歳以上のものではどの年齢層が多いという傾向は見られない。居住経歴、興味や関心の方向でも特徴はない。しかし、学歴は高いものが多い。職業では給与生活者が多く、無職、学生が少ない。一般的にふだん共通語で話しており、鶴岡弁はなくす方向の意見に賛成している。他方、生活のしかたは鶴岡での伝統に従う方がいいと考えてもいる。

(19) 最後のV群（これはPOSAに描かれなかったグループであるが）は高年齢、低学歴、庄内育ちのものが多い。これらの属性を同時に備えている人々の共通語化はアクセントや場面による共通語化を見ても低いことが予想される。音声の場合でも共通語化の程度の低いI群、II a 群、III a 群にこの傾向の被調査者が多い。このV群の場合も、ふだんのことばは方言を使うものも多く、また、8項目の共通語化の得点は5.30でII群およびIII群よりも低い。職業別では商店主・工場経営者が多く、学生は少ない。関心の対象が鶴岡や庄内地方にあるという点を除けば他の変数では目立った特徴は見られない。

第Ⅸ章 パネル調査の結果

1. 今回調査から見たパネル調査の被調査者

第IV章の3.2で述べたような被調査者によってパネル調査が行われたのであるが、パネル調査の結果を述べる前に、まずその被調査者がどのような共通語化の程度を示しているかを、継続調査の今回の被調査者との音声の部類別の共通語化を示す%で比べてみよう。

パネル調査の被調査者の方が今回調査の点では、継続調査の被調査者よりどの項目でも共通語化が遅れていることに注意しなければならない。これはもちろんその調査の性質上、パネル調査の被調査者が30歳台の半ば以上の高年齢層に固まっていることに関係があるのであるが、以下の調査結果を見る場合、常に念頭に置いておかなければならないことである。

九つの音声の類別を、共通語化している順にあげると、唇音性I、口蓋化、有声化、鼻音化、中舌I、唇音性II、i/e II、i/e I、中舌IIとなり、これを第VI章にあげてある継続調査の今回の順と比べると、その今回の順が前回の順と同じであるとして下線を施してあるものが、ここでもそのまま同じ順であった。今回の継続調査との違いは、鼻音化と唇音性II、i/e IIとi/e Iがそれぞれ入れ違っているだけである。i/eの方はそうは違っていないが、唇音性IIと鼻音化とはあるいは年齢による

Table IX-1 パネル・継続被調査者の音声類別共通語化

調査の種別 音声の類別		継続調査	パネル調査
唇音性	I	98.0	94.4
	II	85.2	61.7
	小計	90.3	74.8
口蓋化		94.2	90.0
有声化		86.8	72.2
鼻音化		80.7	64.5
中舌	I	84.1	63.3
	II	66.9	41.8
	小計	75.5	52.6
i/e	I	77.7	45.3
	II	73.3	46.3
	小計	75.5	45.8

差がこの違いを引き起こしたのかも知れない。たとえば、唇音性IIは高年になると共通語化しにくい、というような。

次に参考のため、Table VI-1~6 にならって、Table IX-2~7 を作ってみよう。

Table IX-2 エキとエントツ

エントツ エキ	e	è ì	計
e	37	2	39
è, ì	21	47	68
計	58	49	107

Table IX-3 イキとイト

イト イキ	i	ì è	計
i	33	3	36
ì, è	30	41	71
計	63	44	107

Table IX-4 エキとイト

イト エキ	i	ì è	計
e	28	11	39
è, ì	8	60	68
計	36	71	107

Table IX-5 エキとイト

イト エキ	i	ì è	計
e	34	5	39
è, ì	29	39	68
計	63	44	107

Table IX-6 イキとエントツ

エントツ イキ	e	è ì	計
i	32	4	36
ì, è	26	45	71
計	58	49	107

Table IX-7 イトとエントツ

エントツ イト	e	è ì	計
i	49	14	63
ì, è	9	35	44
計	58	49	107

この六つの表の共通語化の高い順は、Table VI-1~6 の共通語化の高い順とまったく同じである。

以下いろいろな項目に分けて、パネル調査の結果を見ていくが、継続調査の方との比較も随時行うつもりである。言うまでもないが、パネル調査の今回調査では、調査員は前回の被調査者個人の反応については何も知らないで調査に当たっている。

2. 個々の項目

まず、個々の項目が、パネル調査の被調査者によって、前回調査の場合と今回調査の場合とでどう違っているかの観点から集計してみよう。

2.1 音声の項目

前回調査のときの反応を左に、今回調査での反応を右に、共通語形での答えを「共」、方言語形での答えを「方」で示して、項目ごとに被調査者 107 人に対する%を出すと Table IX-8 のようになる。

Table IX-8 項目別の前回と今回の比較（音声）

音声の特徴	調査項目	方-方	方-共	共-方	共-共	継続調査との比較	
						今回	前回
唇音性 I	カヨウビ	0.0	9.3	0.0	<u>90.7</u>	+	+
	スイカ	8.4	26.2	2.8	<u>62.6</u>	-	-
II	ヘビ	17.8	34.6	4.7	<u>43.0</u>	-	-
	ヒヤク	25.2	<u>30.8</u>	14.0	29.9	-	-
	ヒゲ	<u>48.6</u>	20.6	4.7	26.2	-	-
口蓋化	ゼイムショ	0.9	<u>53.3</u>	1.9	43.9	+	-
	セナカ	3.7	18.7	10.3	<u>67.3</u>	-	+
	アセ	1.9	18.7	11.2	<u>68.2</u>	-	-
有声化	マツ	10.3	20.6	11.2	<u>57.9</u>	-	-
	カキ	17.8	18.7	15.0	<u>48.6</u>	-	+
	クツ	13.1	18.7	9.3	<u>58.9</u>	-	-
	ハト	13.1	19.6	14.0	<u>53.3</u>	-	+
	ハタ	13.1	17.8	12.1	<u>57.0</u>	-	+
	ハチ	22.4	10.3	17.8	<u>49.5</u>	-	+
	クチ	17.8	15.9	19.6	<u>46.7</u>	-	-
	ネコ	16.8	14.0	14.0	<u>55.1</u>	-	+
鼻音化	オビ	26.2	<u>33.6</u>	7.5	32.7	-	-
	マド	20.6	33.6	5.6	<u>40.2</u>	-	-
	スズ	<u>38.3</u>	29.9	8.4	23.4	-	-
中舌 I	キツネ	11.2	21.5	15.0	<u>52.3</u>	-	+
	カラス	18.7	21.5	16.8	<u>43.0</u>	-	+
	スミ	16.8	12.1	19.6	<u>51.4</u>	-	+
	チズ	<u>43.0</u>	23.4	5.6	28.0	-	+
II	シマ	32.7	15.9	15.0	<u>36.4</u>	-	+
	ウチワ	30.8	9.3	21.5	<u>38.3</u>	-	+
	チジ	<u>47.7</u>	17.8	14.0	20.6	-	+
	カラシ	<u>57.0</u>	12.1	14.0	16.8	-	-
i/e I	エントツ	17.8	4.7	28.0	<u>49.5</u>	-	-
	エキ	<u>45.8</u>	9.3	17.8	27.1	-	+
II	イト	22.4	16.8	18.7	<u>42.1</u>	-	-
	イキ	<u>57.0</u>	20.6	9.3	13.1	-	-

Table IX-8 では、「方一方」以下の四つのうち、最大の比率を示したものを四角で囲んでおいた。「方一方」が四角で囲まれているものは、あまり共通語化していないものを示すし、「共一共」が四角で囲まれているものは、共通語化がある程度以上固定したことを示す。また、「方一共」が四角で囲まれた項目は、この20年間に共通語化の進展がいちじるしかった項目である。これらは、第VI章でも述べたところと一致すると思われる。さすがに「共一方」というものが最高という項目はない。

「継続調査との比較」というのは、「方一共」の%と「共一共」の%を足した、今回の共通語化を示す程度と、「共一方」の%と「共一共」の%を足してあらわされる、前回の共通語化の程度とを、今回および前回の継続調査と比較したものである。パネル調査の方が、つまり上で算出したものが継続調査より高いとき+、低いとき-の記号をつけて示した。

パネル調査の被調査者は、前回調査の被調査者のうち、比較的年齢の若いものが生き残っていて今回調査されたものであるから、理論的には、前回との比較では+となり、今回の継続調査の被調査者の年齢層のうち35歳以上の層だけがパネル調査の被調査者であるから、理論的には、今回との比較では-になるはずである。ところが、Table IX-8 によれば、必ずしもそのようにはなっていない。今回との比較では、理論的でないものはわずか2項目であるからあまり問題としないことにしても、前回との比較で、31項目のうち、-が16項目と半数以上出たことは問題である。個々の項目でのそれぞれの事情もあるが、概略的に言うならば、これは、Table IV-5 にも示されているように、パネル調査の被調査者の出身地が、鶴岡（庄内を含む）にいちじるしく偏っているということと関係がある。また、居住経歴についても、鶴岡と固く結びついていたからこそ、パネル調査の被調査者として捕捉されたのである。

項目ごとに見ていくことにしよう。

唇音性Iの項目は、共通語化のほぼ完成した項目であることがこの表からもよくわかる。

唇音性IIの3項目では、共通語化の程度の差を四角のついているところがよく表わしている。また「方一共」の数値が、「ヒャク」のほかのものも比較的

高いことは、この項目の共通語化がこの20年間にいちじるしかったことを示しており、第VI章で述べたことと一致している。

口蓋化も、「方一共」の数値が高く、この20年間に共通語化がいちじるしく進み、ほぼ完成に達したことを示している。「ゼイムショ」がこの中では遅れて共通語化した理由については、第VI章で述べた。要するにこの役所はこの20年の間に非常にポピュラーなものになったのであろう。

有声化は、調査項目が多いにもかかわらず非常に安定していることを第VI章で述べたが、ここでも言い得ると思われる。しかし、その安定の中にも、いろいろの問題があるようである。前回調査の方が今回調査より共通語化が進んでいたものが31項目中8項目(他に前回調査と今回調査がまったく同じもの1項目)あり、そのうちの2項目「ハチ」および「クチ」がここに含まれている。これは、両方ともチで終わり、これは、中舌IIの類で共通語化の比較的遅れているものである。もちろん、これらの語では有声化という面で調査したのであるが、これからの影響から無縁であったとは考えにくい。これは前回調査も同様のはずであるが、このような期待される数値と逆関係が出たのは、調査員の問題への態度や判定が両調査で違いがあったのかも知れない。中舌Iで問題になるものと同じ音声を持った語は、「マツ」と「クツ」である。これらでは今回調査の方が共通語化しているが、継続調査との比較で今回というのが両方とも一になっているのは偶然ではないであろう。ここにはこの一が3項目あるが、他の1項目が上記の「クチ」であることも注意すべきである。なお、「ネコ」は前回調査とまったく同じものである。

ここで、これらが、性・年齢・学歴別にどういう数値を示しているかを、Table IX-9 に示そう。

この表からわかることは、「クチ」「ハチ」が他のものとはいろいろな点で違うということである。まず、「方一方」と「共一共」との差が、小さい。これと関係があらうが、「共一共」の年齢による下降が他のものよりゆるやかである。「方一方」では、70歳以上が、かえって55~69歳の層よりも低く現われている。以上のようなことが、前回より今回の方が共通語化していないという、期待されることとは逆のことを起こしたのであろう。「クツ」でも70歳以上の

Table IX-9 性・年齢・学歴別・有声化項目 (%)

	総計	性		年 齢			学 歴			
		男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高	
ク	方-方	17.8	18.4	17.2	9.4	24.1	11.8	29.0	2.9	0.0
	方-共	15.9	18.4	13.8	15.6	15.5	17.6	19.4	14.3	0.0
	共-方	19.6	20.4	19.0	21.9	15.5	29.4	25.8	8.6	20.0
	共-共	46.7	42.9	50.0	53.1	44.9	41.2	25.8	74.3	80.0
ハ	方-方	22.4	24.5	20.7	12.5	27.6	23.5	32.2	11.4	0.0
	方-共	10.3	16.3	5.2	9.4	10.3	11.8	16.1	2.9	0.0
	共-方	17.8	22.4	13.8	15.6	17.2	23.5	24.2	8.6	10.0
	共-共	49.5	36.7	60.3	62.5	44.9	41.2	27.4	77.1	90.0
ク	方-方	13.1	16.3	10.3	0.0	20.7	11.8	21.0	2.9	0.0
	方-共	18.7	16.3	20.7	12.5	15.5	41.2	24.2	14.3	0.0
	共-方	9.3	10.2	8.6	12.5	5.2	17.6	9.7	8.6	10.0
	共-共	58.9	57.1	60.3	75.0	58.6	29.4	45.2	74.3	90.0
マ	方-方	10.3	12.2	8.6	3.1	8.6	29.4	14.5	5.7	0.0
	方-共	20.6	20.4	20.7	21.9	20.7	17.7	25.8	14.3	10.0
	共-方	11.2	16.3	6.9	6.3	12.1	17.7	14.5	8.6	0.0
	共-共	57.9	51.0	63.8	68.7	58.6	35.2	45.2	71.4	90.0
ネ	方-方	16.8	14.3	19.0	6.2	19.0	29.4	27.4	2.9	0.0
	方-共	14.0	14.3	13.8	12.5	13.8	17.7	16.1	11.4	10.0
	共-方	14.0	22.4	6.9	9.4	12.1	29.4	17.7	11.4	0.0
	共-共	51.1	49.0	60.3	71.9	55.1	23.5	38.7	74.3	90.0
ハ	方-方	13.1	12.2	13.8	9.4	12.1	23.6	17.7	8.6	0.0
	方-共	19.6	20.4	19.0	9.4	25.8	17.6	24.2	14.3	10.0
	共-方	14.0	20.4	8.6	9.4	12.1	29.4	21.0	5.7	0.0
	共-共	53.3	46.9	58.6	71.8	50.0	29.4	37.1	71.4	90.0
ハ	方-方	13.1	16.3	10.3	9.4	13.8	17.6	17.7	8.6	0.0
	方-共	17.8	10.2	24.1	6.3	20.7	29.4	21.0	14.3	10.0
	共-方	12.1	18.4	6.9	3.1	13.8	23.6	19.4	2.9	0.0
	共-共	57.0	55.1	58.6	81.2	51.7	29.4	41.9	74.3	90.0
カ	方-方	17.8	22.4	13.8	9.4	19.0	29.4	24.2	11.4	0.0
	方-共	18.7	14.3	22.4	9.4	20.7	29.4	24.2	14.3	0.0
	共-方	15.0	18.4	12.1	18.7	8.6	29.4	17.7	8.6	20.0
	共-共	48.6	44.9	51.7	62.5	51.7	11.8	33.9	65.7	80.0

「方-方」では「クチ」「ハチ」と同じ傾向にある。なお、低学歴層で、「クチ」「ハチ」は「方-方」の方が「共-共」より多いのもいちじるしい特徴と

思われる。その他のところでは、この特徴は見られない。

次に再び Table IX-8 に帰って、鼻音化のところを見る。ここでは「方一共」のところこそろって高いのが注目される。すなわち、共通語化が急テンポで進行中であることを示す。今は有声化にやや共通語化で劣っているが、このテンポで進行すれば間もなく追いつくであろう。「共一方」という逆行型が少ないのもこの特色である。なお、継続調査の前回との比較ではすべてがーとなっている。一であるためには、前回で年齢差がそれほどなかったか、居住経歴が非常に関係していたかであったものと思われる。前者であるとは考えにくいので、後者であるとすれば、特に鶴岡という土地でこの鼻音化は急激に衰えつつあることを示すものかも知れない。

中舌は I と II とを一括して考察してみよう。I は共通語の母音 [u]，II は同じく [i] に関するものである。[i] の方が共通語化しにくいことは既に第 VII 章で見えてきたとおりである。このパネル調査でもこのことは明らかである。I は四角のついたものが、「共一共」に多いのに対して、II は「方一方」の数値が高い。I の「チズ」は I の中でこの観点では特異である。これには、ポピュラーな類音語で、方言では同音語で発音されることの多かった「チジ」があり、しかもそれが調査語に選ばれていることと関係があるかも知れない。

I では「スミ」、II では「ウチワ」「カラシ」が、今回の方が前回より共通語化していなかった。そこで、II について Table IX-9 と同じように Table IX-10 を作ってみよう。

Table IX-9 について述べたことは、この Table IX-10 では言えないようである。この中舌 II の場合、共通語化の程度に大きな差があるので、その方がより強くきいているものと思われる。ただし、「シマ」「ウチワ」という比較的共通語化している方では「ウチワ」、共通語化していない「チジ」「カラシ」の方では「カラシ」がそれぞれ「共一共」の年齢による下がりかゆるやかであるという点では Table IX-9 の傾向と同じである、と言うことができる。このような傾向が、調査法や調査員の両調査での差、あるいは被調査者の個人的なユレ（時により発音に差があること）が結果全体への寄与度を高めているのであろう。

Table IX-10 性・年齢・学歴別・中舌II項目 (%)

	総計	性		年 齢			学 歴			
		男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高	
ウ	方-方	30.8	36.7	25.9	31.3	27.6	41.2	46.8	11.4	0.0
	方-共	9.3	8.2	10.3	3.1	13.8	5.9	8.1	11.4	10.0
	共-方	21.5	24.5	19.0	25.0	20.7	17.6	27.4	8.6	30.0
	共-共	38.3	30.6	44.8	40.6	37.9	35.2	17.7	68.6	60.0
カ	方-方	57.0	67.3	48.3	68.7	55.1	41.2	77.4	22.9	50.0
	方-共	12.1	6.1	17.2	12.5	12.1	11.8	4.8	25.7	10.0
	共-方	14.0	12.2	15.5	3.1	13.8	35.2	14.5	17.1	0.0
	共-共	16.8	14.3	19.0	15.6	19.0	11.8	3.2	34.3	40.0
シ	方-方	32.7	28.6	36.2	25.0	37.9	29.4	53.2	2.9	10.0
	方-共	15.9	18.4	13.8	18.7	13.8	17.6	16.1	20.0	0.0
	共-方	15.0	20.4	10.3	9.4	13.8	29.4	16.1	11.4	20.0
	共-共	36.4	32.7	39.7	46.9	34.5	23.5	14.5	65.7	70.0
マ	方-方	47.7	53.1	43.1	37.5	46.6	70.6	71.0	20.0	0.0
	方-共	17.8	16.3	19.0	21.9	17.2	11.8	8.1	28.6	40.0
	共-方	14.0	16.3	12.1	18.7	13.8	5.9	12.9	17.1	10.0
	共-共	20.6	14.3	25.9	21.9	5.9	11.8	8.1	34.3	50.0

i/e は、共通語でIが [e] , IIが [i] のものをあわらす。Iの方が共通語化の程度が高い。上の中舌IIとともに、鶴岡方言の問題点は、共通語の [e] [w] よりも、 [i] にあることがはっきりしている。

Iの「エントツ」、IIの「イト」がより共通語化しており、Iの「エキ」、IIの「イキ」が共通語化の程度は低い。i/eについては、継続調査の前回との比較も「エキ」を除いては一であるし、パネル調査で、前回より今回が共通語化の進んだのは「イキ」だけであとの三つは逆転している。すなわち、これらは非常に不安定である。特に大幅に今回が前回より落ちたのは「エントツ」であって、継続調査でもその傾向があったことは第VI章で述べたとおりである。そのようになった理由を考えるために、Table IX-9~10と同じようにTable IX-11を作ってみた。

「エントツ」の「共-共」の年齢による下がり方が、他の三つよりもいちじるしいが、これは大した違いではない。すなわち、「エントツ」の今回の落ち込みは、年を取った方が大量に「共-方」となったことによって起こったもので

Table IX-11 性・年齢・学歴別・i/e項目 (%)

		総計	性		年 齢			学 歴		
			男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高
エ ン ト ツ	方-方	17.8	14.3	20.7	9.4	19.0	29.4	24.2	5.7	20.0
	方-共	4.7	6.1	3.4	3.1	5.2	5.9	6.5	2.9	0.0
	共-方	28.0	38.8	19.0	18.7	31.0	35.2	35.5	20.0	10.0
	共-共	49.5	40.8	56.9	68.7	44.9	29.4	33.9	71.4	70.0
エ キ	方-方	45.8	53.1	39.7	37.5	46.6	58.8	59.7	22.9	40.0
	方-共	9.3	6.1	12.1	12.5	8.6	5.9	12.9	5.7	0.0
	共-方	17.8	18.4	17.2	12.5	20.7	17.6	14.5	20.0	30.0
	共-共	27.1	22.4	31.0	37.5	24.1	17.6	12.9	51.4	30.0
イ ト	方-方	22.4	30.6	15.5	21.9	19.0	35.3	25.8	17.1	20.0
	方-共	16.8	18.4	15.5	18.7	15.5	17.6	21.0	11.4	10.0
	共-方	18.7	16.3	20.7	9.4	20.7	29.4	19.4	17.1	20.0
	共-共	42.1	34.7	48.3	50.0	44.9	17.6	33.9	54.3	50.0
イ キ	方-方	57.0	67.3	48.3	43.7	58.6	76.5	72.6	34.3	40.0
	方-共	20.6	14.3	25.9	25.0	19.0	17.6	12.9	31.4	30.0
	共-方	9.3	12.2	6.9	9.4	10.3	5.9	6.5	11.4	20.0
	共-共	13.1	6.1	19.0	21.9	12.1	0.0	8.1	22.9	10.0

ある。また、この「共-方」は、低学歴の方が多く、高学歴との差は四つのうちでもっともはなばなし。つまり、年齢の高い方、学歴の低い方で今回方言形が多く出たことがおそらく継続調査の方でも同様起こったものであろう。「エントツ」がなぜこのように大きく後退したかの説明はなかなかむずかしい。これだけが今までこの類で飛び抜けて共通語化していたのであるが、今回他のものと上述の関係で割に均整な形でまとまったのである。調査員に多少その傾向が無意識にもせよあったのかも知れない。Table IX-2~7を見ると、Table IX-7の「エントツ」と「イト」とが、共通語的発音のところに落ちた人が他の組み合わせよりもはるかに高いことにもこれがあらわれている。「イト」や「エントツ」には類音語の組み合わせが調査語にはもちろん、その他にもないことも混乱を避けさせているのであろう。「イト」には「干支」というものも考えられるが、これはそう日常的な語ではないから、實際上区別に苦勞したということはないであろう。

2.2 アクセントの項目

音声の項目と同様に、前回調査との比較をしてみよう。

Talbe IX-12 項目別の前回と今回の比較（アクセント）

調査項目	方一方	方一共	共一方	共一共	継続調査との比較	
					今回	前回
ネ コ	72.9	15.0	2.8	9.3	—	—
ハ タ	74.8	15.0	6.5	3.7	—	0
カ ラ ス	84.1	4.7	4.7	6.5	—	+
ウ チ ワ	84.1	5.6	8.4	1.9	—	+
セ ナ カ	85.0	6.5	6.5	1.9	—	—

一見して明らかかなように、アクセントは共通語化が非常に遅れている。「方一方」のところが非常に大きいので、他のところが少なくなるのであるが、「方一共」つまり20年間に共通語化した人の数はそんなに多くない。「ネコ」「ハタ」が一番多くて15%であるが、この15%より低いのは音声の項目31のうち8項目に過ぎない。今回調査の結果によれば、「ネコ」および「カラス」がそれぞれ2、3音節の語の中で一番高い数値が出ている。これは、第VII章でも述べたように頭高の語であるからであろう。パネル調査の前回の結果も同じ傾向であった。

今回と前回との比較では「ネコ」「ハタ」が共通語化が進んだ。これも既に述べたことであるが、2音節の方が共通語を習得しやすく、より安定していると言えるであろう。これに対して、3音節の「カラス」「セナカ」は今回と前回との結果が同じであり、「ウチワ」は今回の方がかえって方言化している。このようなところにも3音節語アクセントの鶴岡での不安定さが現われているのであろう。前回に比べて今回は語、つまり項目によるばらつきが大きくなっている。これは、共通語化への道を歩き始めたことを示すのではあるまいか。前回は一様に方言的であって、いわば項目別に見たとき平野型であって、高原型という到着点への歩みを始めたところである。

継続調査との比較をすると、今回とは全部一で、予期される結果が出ている。しかし、前回との比較では、－が2項目、＋が2項目、0（差なし）が1項目と大変乱れている。これもアクセントがまだ非常に不安定であることを示すも

のと見てよかろう。

ここで、性・年齢・学歴別に見てみよう。

Table IX-13 性・年齢・学歴別・アクセント項目(%)

	総計	性		年 齢			学 歴			
		男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高	
ネ	方一方	72.9	75.5	70.7	68.7	72.4	82.4	83.9	57.1	60.0
	方一共	15.0	14.3	15.5	12.5	19.0	5.9	11.3	20.0	20.0
	共一方	2.8	2.0	3.4	3.1	0.0	11.8	3.2	2.9	0.0
コ	共一共	9.3	8.2	10.3	15.6	8.6	0.0	1.6	20.0	20.0
ハ	方一方	74.8	67.3	81.0	62.5	75.9	94.1	77.4	68.6	80.0
	方一共	15.0	22.4	8.6	18.7	15.5	5.9	17.7	14.3	0.0
	共一方	6.5	6.1	6.9	12.5	5.2	0.0	3.2	14.3	0.0
タ	共一共	3.7	4.1	3.4	6.2	3.4	0.0	1.6	2.9	20.0
カ	方一方	84.1	81.6	86.2	78.1	84.5	94.1	93.5	71.4	70.0
	方一共	4.7	8.2	1.7	6.2	5.2	0.0	3.2	5.7	10.0
	共一方	4.7	6.1	3.4	9.4	1.7	5.9	3.2	8.6	0.0
ラス	共一共	6.5	4.1	8.6	6.2	8.6	0.0	0.0	14.3	20.0
ウ	方一方	84.1	81.6	86.2	78.1	87.9	82.4	95.2	71.4	60.0
	方一共	5.6	8.2	3.4	9.4	6.2	5.9	1.6	11.4	10.0
	共一方	8.4	8.2	8.6	9.4	12.5	11.9	3.2	11.4	30.0
ワ	共一共	1.9	2.0	1.7	3.1	3.1	0.0	0.0	5.7	0.0
セ	方一方	85.0	87.8	82.8	78.1	86.2	94.1	88.7	80.0	80.0
	方一共	6.5	4.1	8.6	9.4	5.2	5.9	8.1	5.7	0.0
	共一方	6.5	6.1	6.9	9.4	6.9	0.0	3.2	11.4	10.0
ナ	共一共	1.9	2.0	1.7	3.1	1.7	0.0	0.0	2.9	10.0

今回の方が共通語化の点で低かった「ウチワ」では年齢による差がそれほど大きく出なかったし、その曲線も乱れている。これは、今まで述べた傾向と一致している。「ウチワ」は音声の方でも今回の方が共通語化していなかったことに注意すべきである。とはいえ、音声で前回と今回とが同じであった「ネコ」はアクセントでは一番共通語化がこの20年間に進んだのであるし、アクセントで同じであった「カラス」「セナカ」は音声では共通語化が進んだのであるから、音声の共通語化とアクセントの共通語化との間に強い相関があるとは言えないであろう。

2.3 文法の項目

次は文法に関する項目を見てみよう。

Table IX-14 項目別の前回と今回の比較（文法）

					継続調査との比較	
	方一方	方一共	共一方	共一共	今回	前回
～シナイデ	24.3	8.4	16.8	50.5	—	+
ミ ニ	29.0	11.2	23.4	36.4	+	+
ツヨカッタ	28.0	12.1	22.4	37.4	+	+
～ タ チ	39.3	7.5	23.4	29.9	—	+
～ カ ラ	38.3	11.2	23.4	27.1	+	+
～ケレドモ	59.8	11.2	15.0	14.0	—	—
オ キ ロ	76.6	3.7	13.1	6.5	—	—
～ナラ(バ)	62.6	4.7	20.6	12.1	+	+

すべて、今回の方が共通語化を表わす指標の点で下がったことに注目すべきである。継続調査の方では「～シナイデ」だけが今回の方が共通語化したのであったが、パネル調査の方はこれも方言化した方に入る。

男女差の大きいものは「ツヨカッタ」である。Table VI-19で示したように、継続調査の方でもこの項目は、男女で共通語形と方言語形とどっちが多かったかが逆転している。パネル調査では、前回は女性の方が差がないものの、そしてまた男女とも共通語形の方が多かったものの、今回は、男は共通語形が多く、女は方言語形が多かった。この問題は、方言の出る可能性のあるところが2か所ある点で他の問題と違っている点も考慮すべきであろう。

「方一方」「共一共」の両方とも男性より女性が多かったのは、「～カラ」と「～ナラ(バ)」であった。これは男性の方が不安定であることを示すものである。逆のものはなかった。また、語彙の項目では男性より女性の方がすべての項目で共通語化しているが、文法の項目では、「～シナイデ」「ツヨカッタ」「オキロ」で男性の方が共通語化しているのが注目される。方言社会では「オキロ」は乱暴なことばで、「オキレ」の方がいいことばということを考える人があるようである。

このTable IX-15の年齢・学歴の点で、「方一方」「共一共」が期待した

Table IX-15 性・年齢・学歴別・文法項目 (%)

	総計	性		年 齢			学 歴			
		男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高	
シナイデ	方一方	24.3	22.4	25.9	18.7	27.6	23.5	35.5	5.7	20.0
	方一共	8.4	10.2	6.9	12.5	1.7	23.5	12.9	2.9	0.0
	共一方	16.8	12.2	20.7	15.6	19.0	11.8	17.7	20.0	0.0
	共一共	50.5	55.1	46.6	53.1	51.7	41.2	33.9	71.4	80.0
ミ	方一方	29.0	22.4	34.5	21.9	29.3	41.2	37.1	20.0	10.0
	方一共	11.2	12.2	10.3	3.1	17.2	5.9	12.9	11.4	0.0
	共一方	23.4	30.6	17.2	37.5	15.5	23.5	27.4	11.4	40.0
	共一共	36.4	34.7	37.9	37.5	37.9	47.1	22.6	57.1	50.0
ツヨカッタ	方一方	28.0	16.3	37.9	28.1	29.3	23.5	35.5	22.9	0.0
	方一共	12.1	14.3	10.3	18.7	10.3	5.9	14.5	8.6	10.0
	共一方	22.4	22.4	22.4	18.7	24.1	23.5	25.8	14.3	30.0
	共一共	37.4	46.9	29.3	34.4	36.2	47.1	24.2	54.3	60.0
タチ	方一方	39.3	42.9	36.2	43.7	34.5	47.1	51.6	25.7	10.0
	方一共	7.5	6.1	8.6	6.2	6.9	11.8	8.1	8.6	0.0
	共一方	23.4	24.5	22.4	28.1	20.7	23.5	21.0	20.0	50.0
	共一共	29.9	26.5	32.8	21.9	37.6	17.6	19.4	45.7	40.0
カラ	方一方	38.3	32.7	43.1	40.6	39.7	29.4	46.8	31.4	10.0
	方一共	11.2	12.2	10.3	6.2	10.3	23.5	12.9	11.4	0.0
	共一方	23.4	30.6	17.2	28.1	22.4	17.6	27.4	11.4	40.0
	共一共	27.1	24.5	29.3	25.0	27.6	29.4	12.9	45.7	50.0
ケレドモ	方一方	59.8	63.3	56.9	65.6	56.9	58.8	74.2	40.0	40.0
	方一共	11.2	14.3	8.6	9.4	10.3	17.6	6.5	20.0	10.0
	共一方	15.0	12.2	17.2	9.4	19.0	11.8	14.5	11.4	30.0
	共一共	14.0	10.2	17.2	15.6	13.8	11.8	4.8	28.6	20.0
オキロ	方一方	76.7	69.4	82.8	78.1	79.3	64.7	82.3	74.3	50.0
	方一共	3.7	6.1	1.7	0.0	6.9	0.0	4.8	2.9	0.0
	共一方	13.1	10.2	15.5	18.7	8.6	17.6	9.7	14.3	30.0
	共一共	6.5	14.3	0.0	3.1	5.2	17.6	3.2	8.6	20.0
ナラ(バ)	方一方	62.6	57.1	67.2	53.1	63.8	76.5	71.0	51.4	50.0
	方一共	4.7	6.1	3.4	0.0	5.2	11.8	4.8	2.9	10.0
	共一方	20.6	28.6	13.8	37.5	15.5	5.9	22.6	17.1	20.0
	共一共	12.1	8.2	15.5	9.4	15.5	5.9	1.6	28.6	20.0

傾向になったものに○印、それと逆傾向になったものに×印をつけたのが、次の Table IX-16 である。

年齢の方は「共-共」に、
 学歴の方は「方-方」にと、
 違う方にそれぞれの区別がはっきり出たことが注目される。

Table IX-16 理論的傾向の有無（文法）

	年 齢		学 歴	
	方-方	共-共	方-方	共-共
～シナイデ		○		○
ミ ニ	○		○	
ツヨカッタ		○	○	○
～ タ チ			○	
～ カ ラ	×	○	○	○
～ケレドモ		○		
オ キ ロ		○	○	○
～ナラ(バ)	○		○	

方が前回より共通語化の点で低くなったのである。なお、この理論的傾向の有無では、語彙の項目よりも強いようである。

ここで、この文法の項目ですべてがかえって方言化した理由について考えてみよう。第VI章で述べた調査法の違いのほか、これも第VI章で述べたことであるが、まず第一に、この20年間に調査員のようなよそから来たものに会うことにそれほど緊張感のなくなったことがあげられよう。それ故、方言も出やすい雰囲気になるのである。第二に、それともちろん関係があるが、被調査者の調査員に対するサービス精神が高まったのではないかと想像される。言うまでもなくこの2点は、文法の項目の質問を受けているときに限らないものである。しかし、これは、発音やアクセントには及び難いものである。これらは意識して一般市民がそう変えることのできるものではない。語彙については、これが言語構造の各部門中もっとも変わりやすいものなので、このような気持ちになっても、もう変化が完了してしまって思い出せない場合がありそうである。そこで、まだ思い出せるほどのものについては、前回より方言語形が多く出たであろう。これに対して文法の項目は、それほど変化が早くないものであるけれども、教育その他で知識としての共通語形が割に浸透しているから、前回の調査ではその知識の面が強く現われ、今回はそれが押えられたと考えることができる。以上のようなことから、この報告書では、発音を重視して、これに焦

点を当てて記述しているのである。

2.4 語彙の項目

両度の調査で、項目の一致している6語について、音声・アクセントと同じように整理してみよう。

Table IX-17 項目別の前回と今回の比較（語彙）

調査項目	方一方	方一共	共一方	共一共	継続調査との比較	
					今回	前回
い つ も	3.7	12.1	12.1	72.0	—	—
る す ば ん	7.5	15.9	2.8	73.8	+	+
はずかしい	0.9	6.5	8.4	84.1	—	+
おどろいた	20.6	20.6	18.7	40.2	—	—
も う	17.8	8.4	35.5	38.3	+	+
いらっしゃい	41.1	14.0	26.2	18.7	+	不明

パネル調査の結果では、「いつも」は今回も前回と変わらなかった。代表的な方言語形は「トース」である。「るすばん」は大幅に今回が共通語形が多くなった。この代表的な方言語形は「ヨスリ」であり、これは今回非常に減った。「はずかしい」は、パネル調査ではわずかに今回共通語形が減ったのであるが、継続調査の方では共通語形が増えている。これは両調査の被調査者の年齢構成と関係があるであろう。これは、次のTable IX-15で見ることができよう。代表的方言語形は「ショースー」である。「おどろいた」は全体としては共通語化している。代表的方言語形は二つあって一つは「オボゲタ」、一つは「ハトモタ」であるが、今回は前回に比べると、前者は今回減ったのに対して、後者は今回多少増えている。「もう」、「いらっしゃい」は、今回非常に共通語形が減った。代表的方言語形としてはそれぞれ、「アト」、「ゴザへ」であるが、これらがなぜこのように増えたかについての解釈はなかなかむずかしいところである。なお、「いらっしゃい」の今回は集計法が違うので比較できない。

「るすばん」「おどろいた」といった、今回の方が共通語化の程度の上だった項目では、年齢が上がるにつれて「共一共」の%が下がる傾向がはっきり認

められるが、その他のものはこの傾向が必ずしもはっきりしない。いわば不安定である。今回の方が共通語化で下がった「はずかしい」「もう」「いらっしやい」では、学歴による動きも理論的にはいはず、不安定であることが注目される。

Table IX-18 性・年齢・学歴別・語彙項目 (%)

		総計	性		年 齢			学 歴		
			男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高
い つ も	方-方	3.7	4.1	3.4	0.0	5.2	5.9	4.8	0.0	10.0
	方-共	12.1	12.2	12.1	12.5	12.1	11.8	12.9	14.3	0.0
	共-方	12.1	14.3	10.3	15.6	13.8	0.0	16.1	8.6	0.0
	共-共	72.0	69.4	74.1	71.9	69.0	82.4	66.1	77.1	90.0
る す ば ん	方-方	7.5	6.1	8.6	3.1	10.3	5.9	12.9	0.0	0.0
	方-共	15.9	14.3	17.2	15.6	12.1	29.4	22.6	5.7	10.0
	共-方	2.8	6.1	0.0	3.1	3.4	0.0	3.1	2.9	0.0
	共-共	73.8	73.5	74.1	78.1	74.1	64.7	61.3	91.4	90.0
は ず か し い	方-方	0.9	2.0	0.0	3.1	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0
	方-共	6.5	6.1	6.9	6.2	5.2	11.8	11.3	0.0	0.0
	共-方	8.4	12.2	5.2	6.2	10.3	5.9	9.7	5.7	10.0
	共-共	84.1	79.6	87.9	84.4	84.5	82.4	77.4	94.3	90.0
お ど ろ い た	方-方	20.6	24.5	17.2	9.4	24.1	29.4	25.8	11.4	20.0
	方-共	20.6	16.3	24.1	18.7	17.2	35.2	25.8	17.1	0.0
	共-方	18.7	22.4	15.5	21.9	19.0	11.8	16.1	25.7	10.0
	共-共	40.2	36.7	43.1	50.0	39.7	23.5	32.3	45.7	70.0
も う	方-方	17.8	20.4	15.5	21.9	17.2	11.8	22.6	14.3	0.0
	方-共	8.4	6.1	10.3	9.4	8.6	5.9	11.3	2.9	10.0
	共-方	35.5	36.7	34.5	28.1	37.9	41.2	40.3	22.9	50.0
	共-共	38.3	36.7	39.7	40.6	36.2	41.2	25.8	60.0	40.0
い ら っ し や い	方-方	41.1	38.8	43.1	28.1	48.3	41.2	51.6	28.6	20.0
	方-共	14.0	22.4	6.9	15.6	13.8	11.8	12.9	5.7	50.0
	共-方	26.2	26.5	25.9	28.1	27.6	17.6	24.2	31.4	20.0
	共-共	18.7	12.2	24.1	28.1	10.3	29.4	11.3	34.3	10.0

大きく共通語化した「るすばん」と、大きく方言化した「もう」「いらっし

ゃい」とについて考えてみよう。後者がTable IX-15で安定した数値を見せていないことについては上に述べた。「るすばん」の「ヨスリ」に対して、「もう」の「アト」、「いらっしゃい」の「ゴザへ」は割に共通語形に近いかまたは共通語形そのものであると言えないであろうか。「おどろいた」で、共通語形や共通語と語形上一致点のない「オボゲタ」が今回減って、「ハトモタ」は共通語の「ハッと思った」と通ずるところがあって今回増えているとも考えられる。このことが、むしろ強く影響しているのであって、質問の方法が違ったものもあるがそれはあまり強くは影響していないのではないかと思う。また、どうしてこの一定のものが今回増える傾向にあったのかの理由については、「文法の項目」のところで述べる。

なお、語彙に関係するが、新語はその性質上、前回と同じ問題を質問していないので、パネル調査の本質的なものからは外れる。ここではそれについては述べないことにする。

3. 項目ごとに合計した結果

音声、アクセント、語彙、文法について、それぞれ合計点を出して、性・年齢・学歴別に見てみる。

3.1 音声

パネル調査の被調査者、107人のまず、全体の比較をしよう。31点満点である。

Table IX-19 音声得点の比較
(全体)

Table IX-19では5%水準で両度の調査には有意差がある。これだけ共通語化したとい

	前回調査	今回調査
平均点	17.5	20.0
標準偏差	8.24	7.56

うことができる。

性別に見ると、次のTable IX-20のようになる。

女性の今回の共通語化がいちじるしい。そのために、これと女性の前回、男

Table IX-20 音声得点の比較(性別)

		前回調査	今回調査
男	平均点	16.9	18.3
	標準偏差	8.48	7.48
女	平均点	18.1	21.5
	標準偏差	7.99	7.31

性の今回との間に5%水準で有意差が生じ、その他の間には有意差がない。少なくともパネル調査では、女性のこの20年間の共通語化が進んだことは明らかである。

年齢別に見るとTable IX-21のようになる。見出しとなっている年齢は今回のものである。

Table IX-21 音声得点の比較(年齢別)

		前回調査	今回調査
35~54	平均点	19.9	22.9
	標準偏差	6.97	7.02
55~69	平均点	17.2	20.0
	標準偏差	8.60	7.08
70~	平均点	14.1	14.6
	標準偏差	7.76	7.15

今回調査では、55~69歳の層と70歳以上の層との間に1%水準で有意差があるが、55~69歳の層と35~54歳の層との間には差は見られない。前回との比較では、70歳以上はほとんど共通語化は進まないことは、第七章で述べたこととほとんど同じ傾向と言える。しかし、全体として、前回よりも差が開いてきた傾向がある。

学歴別の結果は次のとおりであるが、これについては前回の結果について問題がある。すなわち、前回の調査当時の学歴と、現在の学歴の二つの考え方である。これはここで両方出してみる。このように学歴が2種類出たのは、被調査者のうち、前回調査のあとで教育を終えて、学歴の段階が上がったものがあるからである。

Table IX-22 音声得点の比較(学歴別)

		前回調査		今回調査
		当時の学歴	現在の学歴	
低	平均点	14.0	13.6	16.4
	標準偏差	7.32	7.36	6.19
中	平均点	22.7	22.5	25.2
	標準偏差	6.50	6.63	6.90
高	平均点	25.4	24.4	24.5
	標準偏差	3.93	3.26	3.75

人数は、前回調査当時の学歴では低学歴65人、中学歴37人、高学歴5人であり、現在の学歴では既に述べたように、低学歴62人、中学歴35人、高学歴10人である。今回調査では、低学歴層と中学歴層との間に1%水

準の明らかな有意差があるのに対して、高学歴層は、中学歴層よりかえって共

通語化の程度において逆転している。前回調査当時の学歴でも、低学歴層と中学歴層との間では上と同じことが言えるが、高学歴層は中学歴層よりも高く、有意差はないながら論理的になっている。これは学歴の中味に問題があろう。第V章で述べたように学歴の高度化とともに質的な低下もあったのかも知れない。昔は高学歴層の人々は非常なエリートであったのである。当時の高学歴層の共通語化の方が、現在の高学歴層よりも高いことはこれを物語っているようである。これは、ごくわずかの差であるが、前回調査の当時の学歴と現在の学歴とで、差の一番出たのは高学歴層であるということにも示されている。現在の学歴で前回は集計した結果が、今回調査とあまり変わらない点にも注目すべきである。

3.2 アクセント

アクセントは5題出題されており、満点は5点である。

あまり共通語化が進んでいるとは言えない。前回と今回との間の差はない。継続調査の今回調査と比べると大変低い。パネル調査の被調査者の年齢が高いところから来たものであろう。これについては Table IX

Table IX-23 アクセント得点の比較(全体)

	前回調査	今回調査
平均点	0.5	0.7
標準偏差	1.24	1.06

—25で明らかである。

性別に見ると次のようである。

Table IX-24 アクセント得点の比較(性別)

		前回調査	今回調査
男	平均点	0.5	0.8
	標準偏差	1.21	1.13
女	平均点	0.6	0.6
	標準偏差	1.26	0.96

Table IX-25 アクセント得点の比較(年齢別)

		前回調査	今回調査
35~54	平均点	0.8	0.9
	標準偏差	1.45	0.64
55~69	平均点	0.4	0.7
	標準偏差	1.21	0.42
70~	平均点	0.3	0.2
	標準偏差	0.75	0.42

男性が今回はかなり上がったことが注目されるが、その理由はよくはわからない。

70歳以上の層は、前回も今回も大変低い。55~69歳の層では、Fig.VII-7の継続調査の今回のものとそうは変わらない。ただ、この層は前回と比べて有意

の差をもって点が上がったとは言い得る。今回は散らばりの程度が低くなったことが注目される。

高学歴層で、今回の方が共通語化の遅れていることについては音声のところで述べた。しかし、前回の調査も、現在の学歴で見たところは、今回調査と同じなのは注目してもいい事実であろう。

この点については、Table IX-22のところでも述べた。

Table IX-26 アクセント得点の比較 (学歴別)

		前 回 調 査		今回調査
		当時の学歴	現在の学歴	
低	平均点	0.2	0.2	0.5
	標準偏差	0.76	0.78	0.69
中	平均点	1.0	0.9	1.0
	標準偏差	1.54	1.43	1.30
高	平均点	1.4	1.1	1.1
	標準偏差	1.96	1.97	1.37

3.3 文 法

文法の項目は八つなので、8点満点となる。

1%水準の有意差をもって今回の方が共通語化の点で低くなっている。この理由については、第VI章やこの章で既に述べた。

今回調査では、男性と女性との間に有意の差はない。前回調査との比較では平均的に今回の点が下がったのが注目される。下がった率から言うと女性の方が高いが、大きな差はなく、同じように下がったと言うべきである。

今回調査で隣との有意差はないが若い方がかえて方言的であるという傾向のあることは、この章の2.4で説明したことの反映であろうかと思われる。語彙のところではこれが理論的にいかなかったのは、この文法でこのようになる理由と、発音やア

Table IX-27 文法得点の比較 (全体)

	前回調査	今回調査
平均点	3.7	2.8
標準偏差	2.48	2.41

Table IX-28 文法得点の比較(性別)

		前回調査	今回調査
男	平均点	3.9	3.0
	標準偏差	2.41	2.34
女	平均点	3.6	2.7
	標準偏差	2.53	2.45

Table IX-29 文法得点の比較 (年齢別)

		前回調査	今回調査
35~54	平均点	3.9	2.6
	標準偏差	2.40	2.06
55~69	平均点	3.7	2.9
	標準偏差	2.39	2.48
70~	平均点	3.4	3.0
	標準偏差	2.89	2.70

クセントで若い方が共通語化する理由とがここで混在したためではなからうか。前回調査との比較でも、やはり若い方が下がり方がいちじるしく、前回では若いほど共通語化していたのであるが、今回は若いほど共通語化していないのである。音声・アクセント・文法のそれぞれの得点について、年齢との関係をFig. IX-1に示す。この図では%に換算してある。

Table IX-34のところの説明した傾向が真に強固であれば、低学歴層の共通語化の方が高くなりそうであるがそうになっていない。このことは、学歴の比較的高い方により強く現われることを示すものであるかも知れないが、いずれにせよ、あまり強い傾向ではないことを示しているようである。Fig. IX-2にFig. IX-1と同じようなものを現在の学歴別によって

作ってみた。年齢別のところでは文法だけが違った傾向を示していたが、ここでは基本的に変っていない。

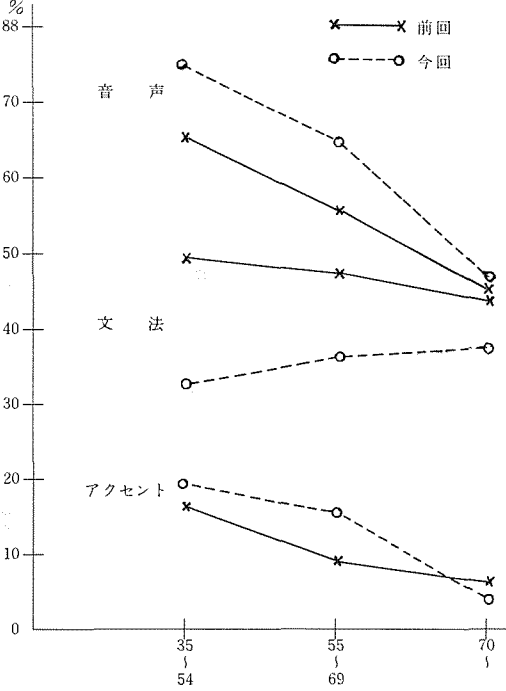


Fig. IX-1 年齢別の音声・アクセント・文法得点の動き

Table IX-30 文法得点の比較 (学歴別)

	前回調査		今回調査
	当時の学歴	現在の学歴	
低	平均点	2.9	2.0
	標準偏差	2.14	1.88
中	平均点	4.8	4.1
	標準偏差	2.49	2.60
高	平均点	6.0	3.7
	標準偏差	2.10	2.41

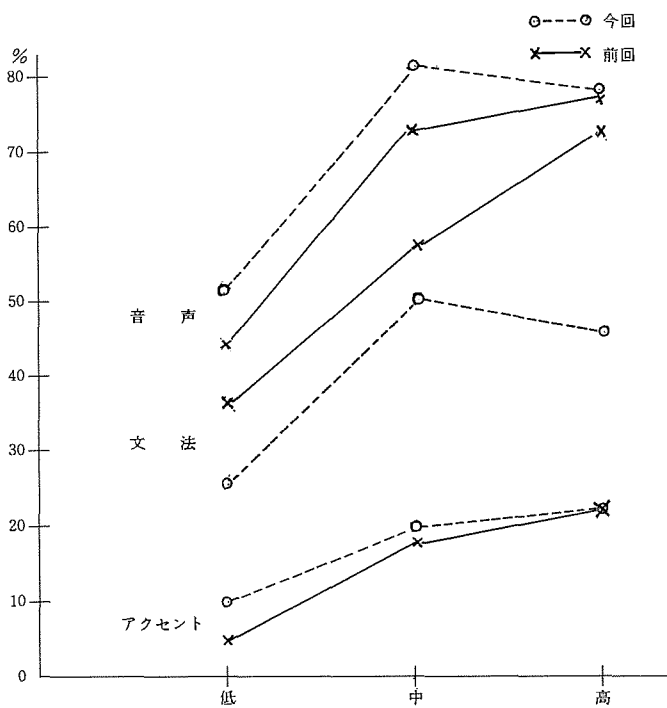


Fig. IX-2 学歴別の音声・アクセント・文法得点の動き

3.4 語彙

ここも、音声・アクセントと同様にまとめてみる。満点は6点である。

文法ほどではないが、わずかに落ちている。普通と同じように共通語化する面と、方言的なものを好んで出す傾向とがからみ合っているものであろう。

今回調査では男女の間に有意差はない。前回調査はまったく同じであるから、男性の方が共通語化への反対と出たことになる。男性の方に共通語化に反する傾向がより強く働いたのであろう。

Table IX-31 語彙得点の比較 (全体)

	前回調査	今回調査
平均点	4.3	4.0
標準偏差	1.47	1.34

Table IX-32 語彙得点の比較(性別)

		前回調査	今回調査
男	平均点	4.3	3.9
	標準偏差	1.38	1.34
女	平均点	4.3	4.2
	標準偏差	1.56	1.35

今回調査では、55～69歳の層のところに落ち込みがあるが、これについてはよくはわからない。前回調査の方が合理的な傾向が現われているようである。あるいは老人層の方が余計な一般の傾向への反対化傾向などが無いのであるかも知れない。

今回調査では、中学歴層と高学歴層との間にはほとんど差がない。低学歴層と中学歴層との間には5%水準で有意の差がある。

ここで、問題がその性質上、両度の調査で違う

し、問題数も違うので、厳密な比較はできないが、参考のため、新語について、全体および性別の比較をしてみよう。問題数は前回5、今回3である。

平均点の()内は100点満点に換算したものである。今回の方が問題はむずかしかったのであろうか。性差は統計的に有意ではあるが、その差がちぢまったことは注目すべきである。女性の相対的向上によるものであろう。

3.5 文法+語彙

以上、3.3の文法、3.4の語彙を合計したものについても集計したので、これをここに述べよう。新語は言うまでもないが考えない。

Table IX-33 語彙得点の比較(年齢別)

		前回調査	今回調査
35～54	平均点	4.6	4.3
	標準偏差	1.46	1.31
55～69	平均点	4.3	3.8
	標準偏差	1.33	1.43
70～	平均点	4.0	4.3
	標準偏差	1.88	1.02

Table IX-34 語彙の比較(学歴別)

		前回調査		今回調査
		当時の学歴	現在の学歴	
低	平均点	3.9	3.8	3.7
	標準偏差	1.55	1.57	1.40
中	平均点	4.9	5.0	4.5
	標準偏差	1.09	1.10	1.18
高	平均点	5.2	4.8	4.6
	標準偏差	0.75	0.87	1.02

Table IX-35 新語得点の比較
(全体・性別)

		前回調査	今回調査
全体	平均点	3.3 (66.0)	1.8 (60.0)
	標準偏差	1.69	0.97
男	平均点	3.9 (78.0)	2.0 (66.7)
	標準偏差	1.49	0.89
女	平均点	2.9 (58.0)	1.6 (53.3)
	標準偏差	1.71	0.99

5%水準で、前回と今回とは有意の差がある。いろいろな理由があって今回の方が共通語化していないと言うわけである。

文法と語彙とを足したところは、Table IX-28とTable IX-32とを足したものと同じわけであるが、男の方が下がりかはなはだしく、結局、男女の共通語化の程度がまったく同じとなったのである。

年齢別、学歴別に見ると、Table IX-38~39となる。

Table IX-38 文法得点+語彙得点の比較(年齢別)

		前回調査	今回調査
35~54	平均点	8.5	6.9
	標準偏差	3.36	2.92
55~69	平均点	8.0	6.8
	標準偏差	3.21	3.50
70~	平均点	7.4	7.3
	標準偏差	4.44	3.46

Table IX-39 文法得点+語彙得点の比較(学歴別)

		前回調査		今回調査
		当時の学歴	現在の学歴	
低	平均点	6.8	6.7	5.7
	標準偏差	3.04	3.06	3.80
中	平均点	9.8	9.6	8.6
	標準偏差	3.32	3.46	3.43
高	平均点	11.2	10.6	8.3
	標準偏差	2.79	2.29	2.97

Table IX-36 文法得点+語彙得点の比較(全体)

	前回調査	今回調査
平均点	8.0	6.9
標準偏差	3.56	3.34

Table IX-37 文法得点+語彙得点の比較(性別)

		前回調査	今回調査
男	平均点	8.2	6.9
	標準偏差	3.16	3.30
女	平均点	7.9	6.9
	標準偏差	3.75	3.37

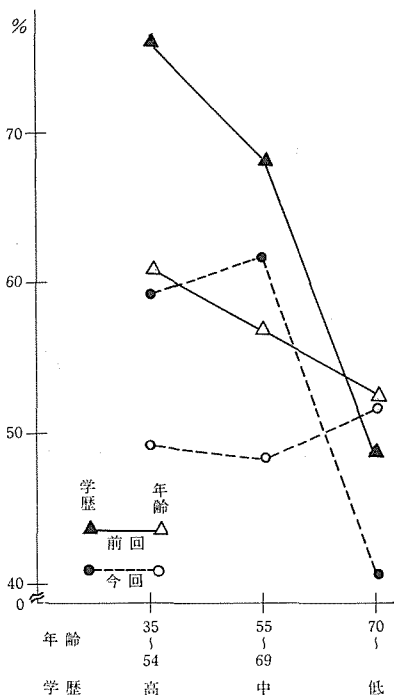


Fig. IX-3 年齢・学歴別の文法得点+語彙得点の動き

このTable IX-38~39を図にしたのが、Fig. IX-3である。一見して学歴の

方が要因としてきていることがわかる。今回の年齢と学歴とはまったく別の働き方をしていることがこの図で明らかである。年齢が若ければ若いほど、既に述べたリラックスとサービス精神との影響が強いようである。高年齢層にはほとんどその影響は見られない。学歴では高学歴にはその傾向は強いが、中・低学歴層の間にはあまり差がない。

4. 各項目の総点による比較

次に、音声・アクセント・文法のそれぞれの合計点を、各人について前回と今回を比較したものを集計し

Table IX-40 音声得点の段階別比較(全体・性別)

たものについて見てみよう。たとえば音声では、31項目あるので、得点は0点から31点まで理論的には分布するはずで、それを前回と今回との相関表にすると大変大きな表となるので、ここではこの31点を適当にまとめて、6段階として集計する、というようなことをしている。音声、アクセント、文法の三つに分けて述べよう。

前回の段階	今回の段階	全体			前回の段階	今回の段階	全体		
		男	女	全体			男	女	
1	1	0	0	0	4	1	0	0	0
1	2	2	1	1	4	2	3	2	1
1	3	0	0	0	4	3	4	3	1
1	4	0	0	0	4	4	6	1	5
1	5	1	1	0	4	5	9	5	4
1	6	0	0	0	4	6	2	0	2
2	1	0	0	0	5	1	0	0	0
2	2	2	0	2	5	2	1	1	0
2	3	7	4	3	5	3	3	1	2
2	4	4	2	2	5	4	4	3	1
2	5	2	1	1	5	5	12	5	7
2	6	0	0	0	5	6	9	3	6
3	1	0	0	0	6	1	0	0	0
3	2	2	2	0	6	2	0	0	0
3	3	4	2	2	6	3	0	0	0
3	4	10	5	5	6	4	1	1	0
3	5	0	0	0	6	5	3	2	1
3	6	4	1	3	6	6	12	3	9

4.1 音声

音声の得点によって、次の6段階に分けた。音声得点0～2を段階1、3～8を段階

2, 9~14を段階3, 15~20を段階4, 21~26を段階5, 27~31を段階6とし、
て、前回との比較を全体および性別にまとめると、Table IX-40 のよ
くなる。
Table IX-41 上がったか下がったか(音声) (性別)

今回が、前回と比べてどうか、という観点から、Table IX-40をまとめ直して	全体	男	女
前回より上がった	50 (46.7)	23 (46.9)	27 (46.6)
前回と同じ	36 (33.6)	11 (22.4)	25 (43.1)
前回より下がった	21 (19.6)	15 (30.6)	6 (10.3)

みるとTable IX-41のようになる。()内は%。

女性の方が共通語化が進んだ、とこ
は言えるであろう。しかし、「前回より
上がった」だけではほとんど男女同じである。

2段階以上上下のあったものは、まず、
2段階以上上がったのは男性5人、女性8
人、2段階以上下がったのは男性5人、女
性3人でこの点からも、女性の音声の共通
語化が進んだことを示している。

次に、年齢別に同様にしてみよう (Table
XI-42)。ここ以下では、合計が0となる
ものは表では省略することにする。

これを前回と比較して今回上がったか下
がったかで整理するとTable IX-43 のよ
くなる。

Table IX-43 上がったか下がったか
(音声) (年齢別)

	35~54	55~69	70~
前回より 上がった	14 (43.7)	29 (50.0)	7 (41.2)
前回と 同じ	11 (34.4)	20 (34.5)	5 (29.4)
前回より 下がった	7 (21.9)	9 (15.5)	5 (29.4)

Table IX-42 音声得点の段階
別比較(年齢別)

前回の段階	今回の段階	35~54	55~69	70~
1	2		1	1
1	5	1		
2	2		1	1
2	3		6	1
2	4		2	2
2	5	1	1	
3	2	1	1	
3	3	1	1	2
3	4	1	8	1
3	6	1	3	
4	2		1	2
4	3	1	2	1
4	4	2	3	1
4	5	4	5	
4	6	1		1
5	2	1		
5	3		2	1
5	4	3	1	
5	5	3	8	1
5	6	5	3	1
6	4			1
6	5	1	2	
6	6	5	7	

ここでは、55～69歳の層が一番上がったようである。2段階以上の移動は35～54歳で4人上がり1人下がり、55～69歳で6人上がり3人下がり、70歳以上で3人上がり4人下がった。この2段階を考慮に入れば、若い方が上がったという傾向は認められよう。

職務内容別に上がったか下がったかをまとめると次のようになる。

Table IX-44 上がったか下がったか (音声) (職務内容別)

	主婦・ 無職	専門的 技術的	管理的	事務	販売	農・林・漁	運輸・ 通信	技能 工保 単純労働者 サービス	安 サービ ス業
前回より 上がった	23	1	2	4	13	1		4	2
前回と 同じ	18	9	1		4	1		2	1
前回より 下がった	10	1	2	1	4			3	
計	51	11	5	5	21	2	0	9	3

販売業者の上がりが目につく。

Table IX-45
音声得点の段階別
比較 (学歴別)

学歴が高くなるにつれて下の方に分布しているさまが Table IX-45 によくあらわれている。

前 回 の 段 階	今 回 の 段 階	学歴別		
		低	中	高
1	2	2		
1	5	1		
2	2	2		
2	3	7		
2	4	3	1	
2	5	2		
3	2	2		
3	3	4		
3	4	8	2	
3	6	2	2	
4	2	2	1	
4	3	3	1	
4	4	5	1	
4	5	4	4	1
4	6	1	1	
5	2		1	
5	3	3		
5	4	3		1
5	5	5	1	6
5	6	1	8	
6	4	1		
6	5		3	
6	6	1	9	2

Table IX-46 上がったか下がったか
(音声) (学歴別)

	低	中	高
前回より上がった	31 (50.0)	18 (51.4)	1 (10.0)
前回と同じ	17 (27.4)	11 (31.4)	8 (80.0)
前回より下がった	14 (22.6)	6 (17.1)	1 (10.0)

2段階上がったのは低学歴で9人、中学歴で4人、2段階下がったのは低学歴で6人、中学歴で2人。Table IX-46とこの2段階の移動の数字を通じて言うことは、低、中、高とだんだん点数が安定している、ということである。

次に、出生地による分類をしてみよう。庄内は鶴岡以外の庄内、山形県は鶴岡・庄内以外の山形県、東北地方は山形県以外の東北地方である。

Table IX-47 音声得点の段階別比較 (出生地別)

前回の段階	今回の段階	鶴岡	庄内	山形県	東北地方	その他	計
1	2	2	(3.2)				
1	5				1		} 3 (2.8)
2	2	2					
2	3	4	} 9 (14.3)	3	} 6 (18.7)		} 15 (14.0)
2	4	2		2			
2	5	1		1			
3	2	1		1			
3	3	3	} 10 (15.9)	1	} 9 (28.1)	1	} 20 (18.7)
3	4	2		7			
3	6	4					
4	2	1		1			
4	3	3	} 13 (20.6)	1	} 10 (31.3)		} 24 (22.4)
4	4	4		2			
4	5	5		4			
4	6		2				
5	2	1					
5	3	2		1			
5	4	3	} 21 (33.3)	1	} 6 (18.7)		} 29 (27.1)
5	5	6		4			
5	6	9		1		1	
6	4			1			
6	5	3	} 8 (12.7)		} 2		} 16 (15.0)
6	6	5		1		(3.1)	
計		63	32	4	2	6	107

前回調査の段階別集計はTable IX-47に出ているので、ここで今回調査の段階別の表をTable IX-48に作ってみた。

Table IX-48 今回の段階別分布 (音声) (出生地別)

段階	鶴岡	庄内	山形県	東北地方	その他	計
2	7 (11.1)	2 (6.2)	1			10 (9.3)
3	12 (19.0)	6 (18.7)				18 (16.8)
4	11 (17.5)	12 (37.5)	1	1		25 (23.4)
5	15 (23.8)	9 (28.1)	1	1	1	27 (25.2)
6	18 (28.6)	3 (9.4)	1		5	27 (25.2)

上がったか下がったかの観点からTable IX-47を整理するとTable IX-49のようになる。

Table IX-49 上がったか下がったか (音声) (出生地別)

	鶴岡	庄内	山形県	東北地方	その他
前回より上がった	29 (46.0)	19 (59.4)		2	
前回と同じ	20 (31.7)	8 (25.0)	1		6
前回より下がった	14 (22.2)	5 (15.6)	2		

4～12歳の居住経歴によって、上がったか下がったかを見てみよう。「庄内以外で一部」というのは、この期間中に全期間でなく一部庄内地方以外で住んでいたものである。

Table IX-50 上がったか下がったか (音声) (居住経歴別)

	ずっと庄内	庄内以外で一部	ずっと庄内以外
前回より上がった	47	1	2
前回と同じ	28	1	7
前回より下がった	18	1	2

ずっと庄内が圧倒的なので、別に言うことはない。

4.2 アクセント

音声と同じように、新しい段階に分けた。アクセント点0を段階1, 1～2を段階2, 3～5を段階3とした。まず、全体と性別の表をTable IX-51に示そう。

Table IX-51

アクセント得点の段階別比較(全体・性別)

前段階	今段階	全体	男	女
1	1	55	23	32
1	2	28	16	12
1	3	2	1	1
2	1	7	3	4
2	2	3	0	3
2	3	1	1	0
3	1	2	2	0
3	2	6	2	4
3	3	3	1	2

これを上がったか下がったかの観点から整理するとTable IX-52のようになる。

Table IX-52 上がったか下がったか (アクセント) (全体・性別)

	全体	男	女
前回より上がった	31 (29.0)	18 (36.7)	13 (22.4)
前回と同じ	61 (57.0)	24 (49.0)	37 (63.8)
前回より下がった	15 (14.0)	7 (14.3)	8 (13.8)

女性の方が安定しているのに対して、男性は少し上がったと言えよう。2段階移動したのはTable IX-51 からわかるように、上がったのが男女各1人、下がったのが男性2人であった。音声に比べれば、全体として共通語化に向かって進んだ割合ははるかに低い。

年齢別で見よう (Table IX-53~54)。

Table IX-53 アクセント得点の段階別比較(年齢別)

前回の段階	今回の段階	35~54	55~69	70~
1	1	14	30	11
1	2	8	17	3
1	3	1	1	
2	1	2	4	1
2	2	1	1	1
2	3	1		
3	1	1		1
3	2	3	3	
3	3	1	2	

Table IX-54 上がったか下がったか(アクセント)(年齢別)

	35~54	55~69	70~
前回より上がった	10 (31.3)	18 (31.0)	3 (17.6)
前回と同じ	16 (50.0)	33 (56.9)	12 (70.6)
前回より下がった	6 (18.7)	7 (12.1)	2 (11.8)

Table IX-54によると、年齢が高くなるとともに安定するという傾向にあることがうかがわれる。安定ということばはいいが、別の言い方をすれば、アクセントは年齢が高くなれば変わらないということである。

職務内容別に上がったか下がったかだけを集計してみよう。

Table IX-55 上がったか下がったか(アクセント)(職務内容別)

	主婦・無職	専門的・技術的	管理的	事務	販売	農・林・漁	運輸・通信	技能労働者	保安サービス	工業
前回より上がった	11	4	1	2	8	1		3		1
前回と同じ	33	5	3	2	10	1		5		2
前回より下がった	7	2	1	1	3			1		

専門的・技術的と販売とが前回より共通語化したことになる。前者は音声では必ずしもそうならなかったものである。

学歴別に次に見よう (Table IX-56~57)。

Table IX-56

アクセント得点の段階別比較 (学歴別)

前回の段階	今回の段階	アクセント得点		
		低	中	高
1	1	37	14	4
1	2	20	5	3
1	3		2	
2	1	3	3	1
2	2		3	
2	3		1	
3	1	1	1	
3	2	1	5	
3	3		1	2

Table IX-57 上がったか下がったか(アクセント)(学歴別)

	低	中	高
前回より上がった	20 (32.3)	8 (22.9)	3 (30.0)
前回と同じ	37 (59.7)	18 (51.4)	6 (60.0)
前回より下がった	5 (8.1)	9 (25.7)	1 (10.0)

出生地別と居住経歴別も、上がったか下がったかだけからまとめる。

Table IX-58 上がったか下がったか(アクセント) (出生地別)

	鶴岡	庄内	山形県	東北地方	その他
前回より上がった	18 (28.6)	9 (28.1)	1	1	2
前回と同じ	36 (57.1)	20 (62.5)	1	1	3
前回より下がった	9 (14.3)	3 (9.4)	2		1

Table IX-59 上がったか下がったか(アクセント) (居住経歴別)

	ずっと庄内	庄内以外で一部	ずっと庄内以外
前回より上がった	28		3
前回と同じ	54	3	4
前回より下がった	11		4

4.3 文法

音声・アクセントと同じように、新しい段階を次のように分けた。文法点0～1を段階1, 2～3を段階2, 4～6を段階3, 7～8を段階4, 全体と性別の表をTable IX-60として示す。

Table IX-60 文法得点の段階別比較(全体・性別)

前回の段階	今回の段階	全体			前回の段階	今回の段階	全体		
		全体	男	女			全体	男	女
1	1	20	8	12	3	1	11	5	6
1	2	4	2	2	3	2	11	7	4
1	3	2	1	1	3	3	7	4	3
1	4	0	0	0	3	4	3	2	1
2	1	12	4	8	4	1	1	1	0
2	2	5	1	4	4	2	5	1	4
2	3	10	6	4	4	3	5	4	1
2	4	1	0	1	4	4	10	3	7

これを上がったか下がったかの観点から整理するとTable IX-61 のようになる。

Table IX-61 上がったか下がったか (文法)
(全体・性別)

上がった音声、全体として大きくは変わらなかったアクセントに対して、この文法では下がりが目につく。2

	全 体	男	女
前回より上がった	20 (18.7)	11 (22.4)	9 (15.5)
前 回 と 同 じ	42 (39.3)	16 (32.7)	26 (44.9)
前回より下がった	45 (42.1)	22 (44.9)	23 (39.7)

段階上がったのは男性1人、女性2人、2段階下がったのは、男性7人、女性10人であった。これらを考え合わせると、性差はそれほどないと言えよう。

年齢別を次に見よう (Table IX-62~63)。

Table IX-62
文法得点の段階別比較 (年齢別)

前回の段階	今回の段階	35~54	55~69	70~
1	1	3	11	6
1	2	2	1	1
1	3		2	
2	1	7	5	
2	2	2	3	
2	3	3	6	1
2	4			1
3	1	3	5	3
3	2		9	
3	3	2	5	
3	4		1	2
4	1	1		
4	2	2	2	1
4	3	3	1	1
4	4	2	7	1

Table IX-63 上がったか下がったか
(文法) (年齢別)

	35~54	55~69	70~
前回より上がった	5 (15.6)	10 (17.2)	5 (29.4)
前 回 と 同 じ	9 (28.1)	26 (44.9)	7 (41.2)
前回より下がった	18 (56.3)	22 (37.9)	5 (29.4)

年齢の下がるほど、前回より下がり方言化したさまがよく現われている。これは、第VI章以下でたびたび述べたことである。

学歴別では前回の段階および今回の段階でのまとめを加えて、Table IX-65~67 のようになっている。

Table IX-64 上がったか下がったか (文法) (職務内容別)

	主婦・無職	専門的・技術的	管理的	事務	販売	農・林・漁	運輸・通信	技能単純労働者	工保安サービス業
前回より上がった	7	3	3		4			2	1
前 回 と 同 じ	24	1	1	2	9	2		3	
前回より下がった	20	7	1	3	8			4	2

Table IX-65 文法得点の段階別比較 (学歴別)

前回の段階	今回の段階	低	中	高	計
1	1	16	4		} 26 (24.3)
1	2	3	1	5 (14.3)	
1	3	2			
2	1	8	3	1 (10.0)	} 28 (26.2)
2	2	2	3	10 (28.6)	
2	3	7	3		
2	4		1		
3	1	9	2		} 32 (29.9)
3	2	5	2	4	
3	3	5	2	5 (50.0)	
3	4		2	1	
4	1			1	} 21 (19.6)
4	2	3	2	4 (40.0)	
4	3	2	2	1	
4	4		8	2	

Table IX-66 今回の段階別分布 (文法) (学歴別)

今回の段階	低	中	高	計
1	33 (53.2)	9 (25.7)	2 (20.0)	44 (41.1)
2	13 (21.0)	8 (22.9)	4 (40.0)	25 (23.4)
3	16 (25.8)	7 (20.0)	1 (10.0)	24 (22.4)
4		11 (31.4)	3 (30.0)	14 (13.1)

Table IX-67 上がったか下がったか (文法) (学歴別)

	低	中	高
前回より上がった	12 (19.4)	7 (20.0)	1 (10.0)
前回と同じ	23 (37.1)	17 (48.6)	2 (20.0)
前回より下がった	27 (43.5)	11 (31.4)	7 (70.0)

学歴による上がったり下がったりの一定の傾向はないようである。しかし、学歴の高い方が段階が高いことはTable IX-65~67に見ることができる。

出生地別・居住経歴別に上がったか下がったかをTable IX-68~69に示しておいた。

Table IX-68 上がったか下がったか (文法) (出生地別)

	鶴岡	庄内	山形県	東北地方	その他
前回より上がった	12 (19.0)	7 (21.9)		1	
前回と同じ	25 (39.7)	11 (34.4)	1		5
前回より下がった	26 (41.3)	14 (43.7)	3	1	1

Table IX-69 上がったか下がったか (文法) (居住経歴別)

	ずっと庄内	庄内以外で一部	ずっと庄内以外
前回より上がった	19		1
前回と同じ	34	1	7
前回より下がった	40	2	3

5. 個人ごとの追跡調査

各個人がたとえば音声で31項目のうち、「方一方」が何項目であったか、「方一共」が何項目であったかを数えると、その個人が音声でどのような動きを示しているかが明らかとなる。「方一方」の数が多ければ、前回も今回も方言的発音をする傾向が強かったことになる。こうして各個人の前回と今回の動きを捉えて、107人分を合計してみる、という集計を試みた。ここではその結果について、言語のそれぞれの面に分けてあげてみる。社会的な要因としては、性・年齢・学歴について集計した。

5.1 音声

「方一方」が7項目以上、
「方一共」が2項目以上、
「共一方」が4項目以上、
「共一共」が6項目以上を示した人を抜き出して、そ

Table IX-70 個人ごとの比較 (音声)

	性		年齢			学歴		
	男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高
方一方	8	6	1	11	2	14		
方一共	6	7	3	7	3	9	4	
共一方	8	3	2	4	5	8	3	
共一共	4	10	6	8		1	11	2

れぞれ性・年齢・学歴別に整理するとTable IX-70のようになる。これらの項目数を決めたのは、大体それぞれが15人内外となるのを目安としたのである。

性別では、「共一共」が女性に多い。年齢別では「共一方」は年齢の高い方に傾き、「共一共」は若い方に傾いている。「共一方」で年齢の高い方に傾いたのはあるいは、調査員が老人に会うと方言形の方につける心理になったのかも知れない。地域全体が20年の間に共通語化したのであるから、「共一方」のようなのは例外的となるはずである。学歴別では、「方一方」が低学歴に集中し、「方一共」「共一方」が中間的で、「共一共」がもっとも学歴が高いことは常識と一致する。共通語化についての学歴の力の大きさがここでは現われていると言えよう。第七章の結論と違うのはパネル調査には若い層が欠けているからであろうか。

以上の四つのどれにも入らなかった被調査者は107人中57人であった。

5.2 アクセント

アクセントでは調査項目が五つであり、また非常に方言の方に傾いているので、「方一方」で2項目以下という人を抜き出して集計するに止めた。共通語化している人が拾われたことになる。結果はTable IX-71に示す。

Table IX-71 個人ごとの比較 (アクセント)

	性		年 齢			学 歴		
	男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高
方一方が2項目以下	7	8	7	7	1	2	11	2

性差はないが、年齢別では若い方に傾いている。同じ7人でも、35~54歳の層の21.9%、55~69歳の層の12.1%にそれぞれ当たすることに注意しなければならない。学歴も低の3.2%、中の31.4%、高の20.0%であって、やはり高い方に少し傾いていると言ふべきである。年齢別と学歴別に関しては、音声の「共一共」と同じ傾向にあることになる。

なお、集計はしなかったが「方一共」が5項目中4、3であった被調査者がそれぞれ1人いた。前者は、男性・35~39歳・中学歴、後者は女性・60~64歳・中学歴であった。また、「共一方」が5項目中3であったものが3人いた。そ

れぞれ男性・50～54歳・中学歴，男性・45～49歳・中学歴，男性・75～79歳・中学歴であった。この3人がともに男性・中学歴というのが何を意味するかはわからない。「共一共」が5項目中5，4であったものがそれぞれ1人ずつあり，男性・55～59歳・中学歴と女性・45～49歳・高学歴の人であったが，この2人はもちろん上のTable IX-71に含まれている。

5.3 文法

文法では8項目中，「方一方」で7項目以上，「方一共」で2項目以上，「共一方」で4項目以上，「共一共」で6項目以上のところに線を引いた。文法の項目はあまり共通語化しなかったものであり，それ故，上のように2項目以上として辛うじて15人に近い線が出たものである。もし，3項目以上とすると，8人しか出てこない。結果は次の表のようである。

Table IX-72 個人ごとの比較 (文法)

	性		年 齢			学 歴		
	男	女	35～54	55～69	70～	低	中	高
方一方	6	9	2	9	4	12	3	
方一共	10	6	4	8	4	11	4	1
共一方	7	8	5	7	3	9	4	2
共一共	5	8	2	8	3	1	10	2

性差はここでは出ていない。年齢別では「方一方」「共一共」と固定したものが大体同じであって，「方一共」「共一方」のように浮動したものがそれよりも少し若い方に傾いている。これは文法の項目がかえって方言化した理由の考察（第VI章やこの章で既に述べた）とも関係していると思われる。学歴別でもこれらは，「方一方」とはちょっと違っていて，一部の低学歴の人に一面では普通に，あるいは素直に行動して共通語化した人がいると同時に，よその人とのコミュニケーションになれて，リラックスするとともに，サービス精神によって方言をわざと出す人がいることを示しているのではあるまいか。

「方一共」が5項目あった人が1人あった(男性・65～69歳・低学歴)が，この人は他は音声で4項目が「方一共」であったに過ぎない。言語のすべての面で共通語化したわけではない。また「共一方」が6項目あった人が2人あった(男

性・50～54歳・低学歴，男性・50～54歳・高学歴）が，第1の人はアクセント1項目，語彙2項目，第2の人は発音8項目，語彙2項目がそれぞれ「共一方」であった。

5.4 語彙

語彙では6項目中，「方一方」「方一共」「共一方」とも3項目以上，「共一共」は5項目以上という線を設けた。「方一共」「共一方」は8人とやや少ないが，2項目以上とすると非常に多くなる（前者で13人増，後方で17人増）ので3項目とした。「共一共」は27人と多いのであるが，もし6項目だけとすると5人になってしまうので，5項目以上としたのである。結果は，Table IX-73に示すとおりである。

Table IX-73 個人ごとの比較（語彙）

	性		年 齢			学 歴			
	男	女	35～54	55～69	70～	低	中	高	
性では「共一共」が こども女性の方が多い。									
差は大きくはないもの	方一方	7	5	3	7	2	11	1	
もあったが，発音以下	方一共	4	4	3	2	3	7	1	
の各項ですべて女性の	共一方	6	2	4	3	1	4	4	
方が多かったのも，女	共一共	8	19	9	13	5	8	17	2

性の方が共通語化の安定度が高いと言えるかも知れない。この語彙の項では年齢には一定の傾向がないようである。「共一方」が一番若い方に傾いてはいるが，文法とともにある事実を反映しているのかも知れない。Table IX-73 では下の方に行くにつれて学歴が高くなる傾向があるようで，これは文法とほぼ同じである。「方一方」「共一共」に限るならば，音声・文法・語彙ともすべてその傾向にあるといってい。この三つのうちでは，このように見たときは，学歴が一番要因としてきているようである。

「方一共」「共一方」で5項目というのが1人ずつあった。「方一共」は女性・50～54歳・低学歴で，他では音声7項目，文法2項目が「方一共」で，それぞれ上の集計にかからない程度である。また「共一方」は男性・60～64歳・低学歴で，他では文法1項目が「共一方」であるに過ぎない。

5.5 個人により一定の傾向があるか

以上のように、「方一共」「共一方」については、どこかの項目でこれらの強い傾向のあったものについて、他ではどうであったかを見てみたが、これらについてはそのような傾向が言語の全体について見られることはない、という結論に到達した。このような強い傾向でなくても、Table IX-70~73のすべてに「方一共」で、あるいは「共一方」で顔を出す被調査者はいなかったのである。もう少し詳しく見るならば、「方一共」で、音声と文法と重なるもの3人、音声と語彙と重なるものなし、文法と語彙と重なるもの2人であり、「共一方」で、音声と文法と重なるもの2人、音声と語彙と重なるものなし、文法と語彙と重なるもの3人であった。音声と語彙とはこれらの点では同じ傾向にない、と言えるであろう。

以上のように20年間で移動したものについては一定の傾向があるわけではないことがわかったが、固定した「方一方」や「共一共」についてはどうであろうか。

まず、「方一方」では、音声・文法・語彙の三つに上の「方一方」が多いグループに入ったのは1人であった。あと11人が二つで「方一方」の多いグループに入っている。

このすべて「方一方」だった人は、女性、明治42年生まれ、鶴岡の小学校卒、無職、居住経歴はずっと鶴岡、両親・配偶者とも鶴岡出身、住んでみたいところは鶴岡、テレビは3時間半~4時間見る、鶴岡のニュースが好き、全国紙1紙を毎日見、問308、312では非改変、鶴岡弁は重苦しいし好ききらいはどちらとも言えないが、東京弁は軽快で好きだと答え、4場面すべてで方言を話す、団体はすべて非加入、社会党支持、収入は200~250万、調査員番号は6で、その判定では、方言を話すとなっている。

この1人を加えて、二つ以上で「方一方」の多かったグループ12人について集計をするとTable IX-74のようになる。

年齢のところの()内は、同年齢層の総数に対する%である。ここでは男女同数

Table IX-74 「方一方」の多い人

性	年 齢			学 歴				
	男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高
6	6		1(3.1)	7(10.3)	4(23.5)	11	1	

と出たが、三つすべて「方一方」であったのは女性で、高年齢・低学歴という第Ⅷ章で見たPOSAによる共通語化しにくいものがここにも現われているようである。

次に「共一共」では、上の三つにアクセントを加えたすべてで「共一共」（正確に言えばアクセントでは「方一方」の少なかったもの）であったものは5人であった。四つのうち、一つでTable IX-69~72の「共一共」に入らず、他の三つで入ったものは6人であった。これらの人について、Table IX-73と同じような表を作ってみよう。

Table IX-75 「共一共」の多い人

	性		年 齢			学 歴		
	男	女	35~54	55~69	70~	低	中	高
「共一共」が四つ	1	4	2	3			3	2
「共一共」が三つ	2	4	1	4	1	1	5	
計	3	8	3 (9.4)	7 (12.1)	1 (5.9)	1	8	2

女性の方が固定的共通語化が多いようである。「共一共」が四つと三つとで年齢では四つの方が若い方に傾き、学歴では同じく四つの方が高い方に傾いていることは、理論的である。

「共一共」が四つであった5人について、「方一方」が多かった1人と同じようにもう少し細かく見ることにしよう(Table IX-76)

一見して気をつくことは、既に述べたことを別にすれば、出生地が鶴岡以外であることである。1人鶴岡で生まれているがいわゆる言語形成期は北海道で過ごしている。父・母・配偶者が3人とも鶴岡または庄内という人はいない。鶴岡弁については「保存」という意見が多い。006の1人を除いては鶴岡として収入の多い方である。

5.6 調査員について

上の「共一共」の多かった被調査者に対する調査員中、調査員6が2人を相手としているけれども、この調査員6は「方一方」の多かった1人の調査員でもあるから、この調査員が特に共通語的だとは言えないであろう。かえって下に述べるようにやや方言的ではないかと思われるのであるが、この場合、前回

Table IX-76 「共一共」が四つの人について

被調査者番号	916	929	961	975	006
調査員番号	5	0	6	1	6
性	男	女	女	女	女
生 年	大正終わり	大正はじめ	大正終わり	大正はじめ	明治終わり
学 歴	旧中卒	旧高专卒	旧高女中退	旧高女卒	旧高女卒
出 生 地	九 州	台 湾	名古屋	鶴 岡 (言語形成期 北海道)	新 潟
本人の職業	会社役員	薬 局	医師の妻	社会施 設の長	無 職
父の出生地	鶴 岡	三 重	岐 阜	庄 内	新 潟
母の出生地	鶴 岡	三 重	鳥 取	鶴 岡	新 潟
配偶者の出生地	朝 鮮	酒 田	鶴 岡	東 京	鶴 岡
住みたいところ	鶴 岡	志摩半島	鶴 岡	東 京 神奈川	鶴 岡
テレビ視聴時間 (時間)	1~1.5	3.5~4	4~	2.5~3	3.5~4
問 308	伝 統	伝 統	改 変	改 変	改 変
問 312	保 存	改 変	保 存	保 存	保 存
鶴岡弁好きか	どちらとも いえない	きらい	どちらとも いえない	好 き	きらい
東京弁好きか	きらい	好 き	好 き	好 き	好 き
団 体 加 入	非加入	1 団体役員	2 団体	非加入	1 団体
4 場面の使い分け	近所の人と だけ方言	全部共通語	家族と隣近所 の人と方言	市民・旅人 と共通語	すべて 共通語
支 持 政 党	自民党	自民党	な し	自民党	な し
収 入	250万~	200~250万	250万~	150~200万	90~110万
調査員の判定	正しい 共通語	関西なまり の共通語	共通語だが どことなく 違う	正しい 共通語	共通語だが どことなく 違う

調査とは調査員は違うのが原則であるから、調査員誤差は考えられない。

ただ、「方一共」「共一方」では、今回の調査員の傾向で変わることもあり得るので、この点を最後に吟味してみよう。

音声の「方一共」が15項目以上であった7人の被調査者に対する調査員は1, 4, 5, 6, 7-2人, 9であって、逆に「共一方」が12項目以上であった8人の被調査者に面接した調査員は, 0, 2, 6-4人, 8-2人となっている。この「共一方」で、調査員6が4人も出しているのは多少問題である。ただ調査員6は「共一共」の多かった被調査者5人中2人を受け持ったのであるから、すべて方言に曲げるということはないはずである。しかしやはり問題は残るので今後この点からの分析と対策が必要であろう。ここで気のつくのは、調査員のうち、東北地方で言語形成期を過ごしたものとそうでないものとに分けた場合、「方一共」では前者が調べた被調査者2人に対して、「共一方」では同じく7人と、ある偏りがあることである。それぞれの母語へ引きつけて聞きとる傾向があるというか、または一方だけに焦点を当てると、東北出身者は東北方言にきびしい眼を向けていて容易にそのことばを共通語と認めない傾向がある、とも言えそうである。

なお上で、アクセント、文法、語彙に関して「方一共」「共一方」の傾向がいちじるしいとして指摘した被調査者を調査した調査員を調べると次のようになる。アクセントでは「方一共」が調査員2, 6, 「共一方」が調査員1, 2, 6。2と6とが両方に顔を出していることは、ここでは調査員誤差は音声よりも少ないであろうということを示す。文法では「方一共」が調査員0, 「共一方」が調査員3, 6である。ここでまた調査員6が出たことに注意しておきたい。語彙では「方一共」が調査員3, 「共一方」が調査員7であった。

以上のすべてのものに、「共一共」が三つ、「方一方」が二つのものを加えて、今回が共であるか方であるかによって調査員ごとに被調査者数を出すと、Table IX-77のようになる。

Table IX-77 調査員による被調査者分類

調査員	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
共通語的	2	3	3	1	1	2	5	3		2
方言的	3	1	3	3		1	9	3	2	

やはり調査員6が方言的に多少傾いている。しかし、前に見てきたよりは傾きは大きくない。調査員0, 1, 6, 8は東北地方で言語形成期を過ごしている。この点からまとめ、先に述べた疑問について答えを出してみよう (Table IX-78)。

Table IX-78 調査員の出身地別の結果

	東北出身	非東北出身	計
共通語的	10	12	22
方言的	15	10	25
計	25	22	47

このTable IX-78を χ^2 検定をすると、 $\chi^2=0.994$ であり $0.50 > p > 0.30$ となり、有意差はないと言える。すなわち、調査員の出身地別による結果のゆがみはないものと考えてよかろう。

ここで、継続調査の方の今回調査の、音声の調査員別得点をTable IX-79に見てみよう。

Table IX-79 調査員別音声得点

調査員	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
平均点	24.9	27.7	25.7	26.58	22.1	26.60	25.3	25.2	25.6	28.0
その順位	9	2	5	4	10	3	7	8	6	1
中央値	28.7	29.57	27.9	29.3	23.9	28.2	28.5	26.9	29.50	29.9
その順位	8	3	7	4	10	6	5	9	2	1
被調査者数	49	33	42	50	42	52	50	47	46	46

被調査者はランダムに割り当てられたのではないから、この表だけで云々することはできないが、少なくとも調査員6やあるいは東北出身の調査員が方言について辛い点をつけたとは言えないようであり、前に述べた疑いはほとんど消してもいいのではないかと思われる。

第Ⅹ章 ま と め

1. 調査の結論

調査の結果については、第Ⅵ～Ⅸ章に述べてあり、概要を第Ⅲ、Ⅳ章に述べたので、ここには詳しくは述べないことにする。

調査は共通語化という点を捉えるため企画され実施された。共通語化を捉えるためには、あるモノサシ、あるいは指標を設けなければならない。前回調査では音声得点が指標として使われた。今回調査でも、音声得点を主な指標とし、これにアクセント得点を二次的な指標として使った。文法や語彙は指標としては今回も使うことができなかった。これを安定したモノサシとして使うための調査方法の開発は今後の問題であろう。

文法や語彙に関して言えば、今回はかえって前回よりも方言的になった。この理由はいろいろあるが、一つには、被調査者が調査員のような東京から来た者にあまり固くならず接するようになってきたため、無理に共通語を出すこともなくなったことのアラわれであろう。そして、そのことと関係があるが、そのために“方言”を聞きに来たよそのものに対して、いわばサービス精神から、方言を聞かせてやれと考えたものもあろう。このような心理的な要因によって容易に変えられるのが、文法や語彙が指標となりにくい理由である。それらに比べると、音声やアクセントはこのような心理的な要因では動かされにくいので、共通語化の指標とするのに便利である。

その指標とした音声、アクセントについて言えば、前回に比べて今回は共通語化した。しかし、音声に比べてアクセントの共通語化は遅い。音声の共通語化は急速に進んでいるから、もし次の20年後に同じような調査をしてもそれほどおもしろくないかも知れない。

音声の共通語化は速やかに進展したとは言っても、音声の類別によってその速度に遅速がある。これは速度だけではおそらくなく、もちろん共通語化の完成の時期も違うであろうし、また、今から確かめようはないが、共通語化へ

の歩みの開始時期も違ったであろう。

これらの共通語化に寄与する社会的な要因として、前回調査では大きく居住経歴をあげていた。しかし、今回調査では音声にはこれはあまりきいていない。今回もアクセント・文法などはまだきいていると言ってよい。また、学歴も前回ではきいていたけれども、今回は前回ほどはきいていない。今は、年齢が要因としてもっともきいている。こうして見ると、強くきく要因として、居住経歴→学歴→年齢、というふうに、共通語化の進むとともに移ってきているのではないかと思われる。前回調査の時期は、音声の面で言えば、居住経歴→学歴の過渡期にちょうど当たっていたのではないか、と思われる。そして、今回調査は、学歴→年齢の、中間よりは学歴寄りの時期に当たっていたのではなからうか。アクセントや文法は（文法は指標として安定したものではないが）学歴がまだきいているのも、これらの共通語化の程度がまだ低いからであろう。

年齢と共通語化との関係については既に説明したが、もう一度ここで考えてみよう。Fig VI-13には、三つの線だけが示されているが、理論的に考えれば、この三つの線の下に、一番上の線と平行な線の時代があったはずである。すなわち、老いも若きもすべて方言を使っていた時代である。次の時代には、社会的な活動の一番激しい青年後期あるいは壮年前期の人の共通語化が進み、それより上下に年齢が隔たるに従って共通語化が遅れるという、いわゆる「凸型」の時代が来る。おそらく前回調査はこの時代に当たっていたのである。次いで、この中間の高い波が若い方に向かって文字どおり波及していく。そして若いほど（といっても調査した一番若いのは15歳であるが）共通語化が進むようになって、いわゆる「下降型」になる。アクセントは共通語化が遅れているが、凸型をなすピークが前回の音声よりも若い方に寄っているから、点数は必ずしも高くはないものの、共通語化の段階としては、前回の音声よりも進んでいるであろう。凸型から下降型への一段階にあるわけである。これに対して、今回の音声は、下降型になってしまって、一部は共通語化の完成に近くなって、一番上の線の「高原型」と言ってもいい域に達している。全体として、下降型と高原型の中間ぐらいにあるとも言えよう。

凸型は上に書いたように、社会的な活動と関係があるようである。そのよう

な活動をする層は高学歴の人が多くであろう。したがって、凸型の時代には学歴がきいてくる、ということになる。これが前回調査のころである。学歴がきかなくなったのは、学歴が一般に高くなったことも関係があるようである。これはパネル調査にも現われている。ふつう、マス・コミュニケーションは利用が高ければ高いほど共通語化が進むものと考えられているが、今回調査では、テレビの視聴時間の長いほど共通語化していないという結果が出ている。テレビのように普及率が高くなると、これは要因としてはあまり働かず、むしろそれにかかわる要因の方が強くきいてくるのであろう。このテレビの例では、テレビをよく見るのはどういう人であるか、年齢は、学歴は、などというテレビ以外の要因からの影響による解釈が可能である。

前回調査と今回調査とを比較してみると、34歳ぐらまでは、ことばは変わり得るという結果が出る。これはいわゆる「言語形成期」という考え方とは対立するようである。大体、もし「言語形成期」にその人の一生の言語が決定してしまうものであれば、前回調査で凸型が見られたことと矛盾するのではないか、と思われる。したがって、「言語形成期」をそう固い、動きのとれないものとは考えるべきではないのであろう。

パネル調査の結果では、凸型や下降型、特に凸型のは、「動き」つまり前回は共通語で今回が方言、あるいはその逆の型を示すものの率が高いようである。そのような型のは不安定である、と言えよう。これは、アクセントによく現われている。

鶴岡方言の音声としては、共通語の母音 [i] に当たるものに共通語化が遅れているようである。したがって、この方言で問題とすべきものはこの音で、もし共通語化を進めたいと思うなら、この音の教育が大切であろう。

パネル調査の結果の安定度の強かったのは、高学歴、高年齢である。つまり、これらの人は変わることが少ないのである。高学歴は共通語的で安定し、高年齢は方言的で安定していることになる。音声の場合、女性は共通語化の非常に進んだもの、共通語または方言で安定しているものを占めている。女性の方がバラエティに富んでいるのであろう。

語彙では急激に忘れられていくものと、根強く残るものと、はっきり分かれ

るようである。

パターン分類やそれに基づくPOSAの分析を施したところでは、今まで、漠然と、全体の傾向で共通語化しているものから順次共通語化が進むものと考えていたのが誤りであることがはっきりと出てきた。もちろん、地域社会全体としてはそのような姿をとっているが個人ごとにしたときは大いに違っている。

たとえば、音声では、共通語化を始めるのに、鼻音化、有声化の項目から発し、中舌 I, II, i/e I がこれに続き、最後に i/e II が共通語化する路線が一つで、もう一つは、中舌 I, i/e I の項目から始まり、i/e II を経て、最後に唇音性 II や鼻音化が共通語化するものである。アクセントでは、主なものに二つあり、一つは、セナカ→ハタ→ネコ→カラス→ウチワの順に共通語化するものであり、他の一つは、ネコ→カラス→ウチワ→ハタ→セナカの順に共通語化するものである。これを見てわかるように、このような路線は相当逆に近いような道を通る。この経路は、今回の分析によって明らかとなったことである。

また、この動きは、項目ごとの順序だけでなく、共通語化する移行タイプにも違いがあることが明らかとなった。場面によることばの使い分けの分析でわかったことであるが、一定の順でまず、方言と共通語の混ざった状況にすべての場面がなり、そのあとまた先の順で混ざったものから共通語化が一つずつ進むというタイプが一つある。また、一定の順で、まず最初の項目が方言から混ざったものに移り、次に共通語化して、このようにして一つの項目が完成してから次の項目が混ざったものに移り始めるというタイプがある。音声やアクセントでは、方言的か共通語的かの二つに各反応をすべて分けてしまっているが、もし別の方法をとって、方言と共通語との中間というようなものを認めて、各反応を三つのどれかにつけることにしたら、これらについても同じようなことが出たのではないかと思われる。

パターン分類に基づく言語分析はまだ始まったばかりであるが、既にこのような新しい知見に到達した。今後の応用の道は広いと思われる。

2. 調査への反省

以上で、結果のごく大ざっぱな記述を終わるが、調査をふり返ってみて、いくつかの反省がある。

(1) 調査の間隔が20年というのは長すぎた。この間調査しなかったために、いくつかの重要な事実を捉えることができなかつたのではなからうか。たとえば、音声の共通語化への道で、凸型から下降型への移行を観察できなかった。少なくとも5年間隔ぐらいで調査すべきであった。これからの下降型から高原型への移行状況を掴むための調査はおこたりたくないものである。

(2) 個人についてもっとケーススタディ的な調査をするべきであった。パネル調査ではやや不徹底であつて、キメの細かい分析には不十分であつた。

(3) 被調査者のサンプリングに当たつて、若い方を半分にしたのはよくなかつた。調査の能率を考へてのことであつたが、社会的に移動の多い、またこれから多くなる層の被調査者が少ないために追跡して調査すべき対象が少なくなつてしまつた。次年度の岡崎市の敬語調査ではこれはやめて、次の追跡調査に備へることにした。

(4) 言語体系記述のための調査が不十分であつたので、結果の解釈に当たつて知識不足の感があつた。

(5) 音声・アクセントのほかにも、文法・語彙について安定した尺度を作るよう努力したが、成功しなかつた。前回調査とこの点は同様で、将来の調査のための基準とは今回調査もなりにくいであろう。この点で新しい試みをするべきであつた。

(6) 調査項目をもつと言語体系を掴むよう数多くすべきであつた。特にアクセントはそうにすることが可能であつたらう。この点では、文法・語彙も基本的に同じである。

(7) 今回の調査が前回調査の追跡を主な目的としたため、調査項目が前回の

ままとなりすぎたようである。もっと積極的に新しい言語項目を取り入れるべきであった。これは(5)~(6)に関係する。

(8) (5)~(7)で言えることは、サンプリングの若い層を半分としたこととともに、調査の能率を考えすぎたようである。調査のときには多少苦勞があっても、実りは比較にならないほど豊かになるものであることを考えるべきである。

(9) 言語変化についての心理的要因は結局今回もうまく掴むことができなかった。

(10) 調査員の均一性は、今回の場合それほど悪かったとは思わないが、調査員の訓練にもう少し時間をかけるべきであった。今回は調査員の年齢差が相当あったが、こういう点も将来は均質化すべきであろう。

(11) パターン分類などの分析手法を取ることに決定したのは実際の調査後であったので、そのための調査のデザインをしていない。このようなデザインをすれば、いろいろ新しい結果が出たであろう。音声やアクセントについては、今までの知見に加えるものを出せたと考える。

(12) 一般論として言えることであるが、整理を電子計算機によったため、被調査者の反応をすべてコード化しなければならなかった。それ故、当座必要なデータ以外、分析の途中で知りたくなかったことが、なかなか組み込めなかった。メリットの多い電子計算機による集計のデメリットであろう。

(13) 以上のいろいろなことは調査費が潤沢であればすべて解決とはいかなくても、ある程度実施はできたであろう。今回は直接調査費は、科学研究費の100万円を主体としたもので、前回調査と比較して相対的に減ったという感じであった。どうしても本調査中心となり、事前の準備調査、事後の整理・分析への予算の配分が不足であった。

3. 将来の調査へ

現代の日本では、経済の高度成長、マス・メディアの急速な発達、生活空間

の拡大など社会構造がいちじるしく変化している。このような社会の変容のもとで、地方都市の言語生活がどのように変化したかについてわれわれは見てきた。

しかし、実際はこのような社会の変容は、大都市およびその周辺都市において特に顕著にあらわれるものである。また、このようなところの人口上・産業上の国全体に対するウエイトは相当上がってきている。それ故この大都市およびその周辺住民の言語生活の実態を知らずして、国民の言語生活の実態はわからない。ところが、今まではこのようなところでの言語に関する社会調査は行われていなかった。調査の実施は、鶴岡市でも20年間の都市化のために前回と比べるとむずかしくなった。大都会では一層むずかしいであろう。被調査者と面接できないケースがだんだん多くなってきた。

都市化がいちじるしくなるとともに、人口の移動率も高くなる。人口が移動するということは、ある地域で違った言語体系や言語意識を持つ人が接触するということである。相互に受け合う影響は強いし、これが都会の言語生活なのであろう。こういう点で通常の小都市とは違っており、上記のむずかしさにもかかわらず大都市での調査は今後是非とも着手すべきものである。この観点からの調査をわれわれは今企画している。

都市化社会では、コミュニティが崩壊したと言われる。家族や近隣地域集団のいわゆるゲマインシャフトの生活に及ぼす影響力は相対的に低下し、その代わり職場集団の果たす役割がその分増大した。職場集団はゲゼルシャフトの代表的なものである。このように考えると、ゲゼルシャフトにおける言語生活は調査すべき対象であろう。

家族を除けば、今のゲマインシャフトで身分的な上下関係は崩壊し、上下関係が重要な要素をなしているのは職場集団である。そこで、ゲゼルシャフトにおける敬語の実態調査が大切になってくる。敬語については、昭和46年度のこの鶴岡市での共通語化に関する調査につづいて、昭和47年度に岡崎市でやはり20年後の同一企画による調査を実施し、この報告書を書き上げたあとすぐ整理・集計・分析に取りかかるはずである。しかし、これは、鶴岡市よりは大きい中都市とはいえ、大都市ではなく、また地域社会における敬語使用の実態を掴むこ

とを主目的とした調査であった。われわれは観点を換えて、ゲゼルシャフトにおける調査の企画をも立てている。

ゲマインシャフトの崩壊で、今までの情報伝達経路、コミュニケーション過程、あるいはコミュニケーション・ネットワークは大いに変貌したであろう。こういうネットワークについての研究もしなければならない。

ところで、以上のような調査をするに当たって無視できないのは、いわゆる団地社会である。これは新しい都市の縮図とも言えるであろう。団地は新しい地域近隣社会である。新しい団地などで、その住民のいろいろの経歴を長期的に観察することによってコミュニケーション・ネットワークの発生や変容の様子を知ることができるであろう。

共通語化の研究も、敬語使用の研究もある個人について言えば、2種類以上の言語の使い分けの問題である。このような一つの言語の中での2重言語生活の研究のほかに、日本と外国との関係が深くなるにつれて、いろいろと日本語と外国語との2重言語生活が問題になってくるであろう。たとえば、日本にいる外国人がどのような言語生活をしているか、あるいはその逆はどうか、など。このような各言語の間の力関係を調査すれば、世界の各言語の、構造的、あるいは「深層的」な分析からはわからない特質が浮かび出てくるであろう。われわれもいつかはこのような調査に進むべきであろう。

言語自身の分析からは出てこない面が、それが社会とかかわって運用される面に出てくるはずで、そこに主眼を置く調査・研究が当然成立する。体系的特質も、パターン分類などでできるとわれわれは考える。たとえば音声学的研究が大量的社会調査によって成立する日は近いであろう。

以上のような、社会言語学的な研究は、今までもこれから、すべて共同研究で行われる。このように大量の被調査者について調査することは、もちろん個人の研究者ではできない。大学では、組織・人員・予算の関係から、真の共同研究は成り立ちにくいのではないかと思う。

この点で、国立国語研究所における研究の一つの特色として、共同研究による言語生活の社会調査があげられる。ここに、第二次世界大戦後の日本の国語研究が戦前のそれと大いに異なっている点がある。「八丈島」「白河」「鶴岡」

の共通語化を主とした言語生活の調査が、研究所が創設されて比較的早い時期に行われた。つづいて「上野」「岡崎」における敬語使用の実態調査、「北海道」の共通語成立過程の調査が、より広い言語生活の実態調査が「長岡」「松江」で行われた。最後の松江調査は、昭和38年度であり、しばらく途絶えていたものが、この報告書で述べた「今回調査」で復活したのである。上にも述べたように、つづいて「岡崎」でも「前回調査」の追試が行われた。このような一連の言語生活の社会調査により、国立国語研究所の果たした寄与は大きかった。特に、約20年の間隔を置いた、「鶴岡」や「岡崎」の、前と同一規格による継続調査やパネル調査は、大学などではできにくいものではなかろうか。

われわれは、このような25年間の社会言語学的調査研究の伝統の上に立って、上に述べたようなこれからの研究課題に取り組んでいきたいと考えている。言語学自身の発達もいちじるしかったが、行動計量的な考え方の進歩は最近目覚ましいものがある。これらの言語学自身以外の新しい方法をも積極的に言語研究の面に取り入れていきたい。

付 表

	人数	301. 住みたいところ				303. テレビ視聴時間				304. ラジオ聴取時間		
		鶴岡 庄内	東北 地方	その 他	なし D.K.	0～ 60分	61～ 150分	151～ 240分	241分 以上	0～ 30分	31～ 60分	61～ 150分
全体	457	44.0	5.3	47.9	2.8	9.8	24.7	37.2	28.2	67.8	12.3	9.6
男	204	33.3	5.4	59.8	1.5	14.7	23.0	37.7	24.5	67.6	11.8	9.8
女	253	52.6	5.1	38.3	4.0	5.9	26.1	36.8	31.2	68.0	12.6	9.5
15～19歳	60	40.0	0.0	56.7	3.3	13.3	20.0	50.0	16.7	33.3	26.7	26.7
20～24歳	50	24.0	4.0	68.0	4.0	8.0	24.0	48.0	20.0	56.0	16.0	16.0
25～34歳	88	39.8	11.4	45.5	3.4	9.1	28.4	31.8	30.7	69.3	9.1	5.7
35～44歳	101	44.6	6.9	45.5	3.0	14.9	32.7	30.7	21.8	75.2	8.9	7.9
45～54歳	75	54.7	2.7	41.3	1.3	10.7	21.3	33.3	34.7	70.7	10.7	6.7
55～69歳	83	53.0	3.6	41.0	2.4	2.4	18.1	38.6	41.0	86.7	8.4	2.4
低学歴	189	56.1	4.8	36.0	3.2	5.8	19.5	36.0	38.6	76.2	5.8	7.4
中学歴	217	38.7	6.5	52.1	2.8	11.1	25.8	40.1	23.0	59.0	17.5	12.9
高学歴	51	21.6	2.0	74.5	2.0	19.6	39.2	29.4	11.8	74.5	13.7	3.9

	151～241分 240分以上		306. 毎日、新聞を読むか				305. ニュースの関心		
	毎日 読む	ときど き読む	読ま ない	N.A.	鶴岡 庄内	東京 全国	ど い そ ち え の ら い も 他		
全体	3.5	6.8	75.3	17.9	6.6	0.2	31.7	56.7	11.6
男	2.5	8.3	90.7	6.9	2.5	0.0	28.4	65.2	6.4
女	4.3	5.5	62.8	26.9	9.9	0.4	34.4	49.8	15.8
15～19歳	6.7	6.7	63.6	26.7	10.0	0.0	33.3	63.3	3.3
20～24歳	4.0	8.0	80.0	20.0	0.0	0.0	32.0	64.0	4.0
25～34歳	5.7	10.2	78.4	15.9	5.7	0.0	29.5	55.7	14.8
35～44歳	1.0	6.9	77.2	14.9	6.9	1.0	34.7	53.5	11.9
45～54歳	2.7	9.3	84.0	14.7	1.3	0.0	28.0	58.7	13.3
55～69歳	2.4	0.0	67.5	19.3	13.3	0.0	32.5	50.6	16.9
低学歴	5.3	5.3	60.8	24.9	13.8	0.5	41.8	47.1	11.1
中学歴	2.8	7.8	83.9	14.3	1.8	0.0	26.7	60.4	12.9
高学歴	0.0	7.8	92.2	7.8	0.0	0.0	15.7	76.5	7.8

	307.購読新聞			311.団体への参加			313.関心のある選挙	
	全国紙 中心	地方紙 中心	その他 D. K.	役員をし ている	加入してい るが役員は していない	加入して いない	衆議院 参議院	知事 県会
全体	60.6	31.5	7.9	23.9	29.3	46.8	31.1	7.9
男	63.2	32.4	4.4	34.3	27.9	37.7	46.6	8.3
女	58.5	30.8	10.7	15.4	30.4	54.2	18.6	7.5
15～19歳	60.0	26.7	13.3	40.0	26.7	33.3	50.0	3.3
20～24歳	72.0	28.0	0.0	16.0	32.0	52.0	40.0	12.0
25～34歳	50.0	43.2	6.8	18.2	22.7	59.1	25.0	12.5
35～44歳	63.4	27.7	8.9	23.8	27.7	48.5	27.7	9.9
45～54歳	78.7	20.0	1.3	21.3	38.7	40.0	33.3	2.7
55～69歳	45.8	39.8	14.5	25.3	30.1	44.6	20.5	6.0
低学歴	49.7	34.4	15.9	16.9	33.3	49.7	19.0	4.2
中学歴	65.4	31.8	2.8	28.1	27.2	44.7	35.0	10.1
高学歴	80.4	19.6	0.0	31.4	23.5	45.0	58.8	11.8

				314.支持政党						
	市長	市会	その他 N. A.	自民党	社会党	共産党	民社党	公明党	その他	支持政 党なし N. A.
全体	28.0	26.9	6.1	26.0	21.9	3.9	3.5	2.0	2.6	40.0
男	24.5	19.1	1.5	29.9	22.5	4.9	6.9	0.5	2.0	33.4
女	30.8	33.2	9.9	22.9	21.3	3.2	0.8	3.2	3.2	45.4
15～19歳	33.3	0.0	13.3	13.3	20.0	10.0	0.0	0.0	3.3	53.3
20～24歳	36.0	8.0	4.0	20.0	16.0	0.0	8.0	4.0	0.0	52.0
25～34歳	25.0	33.0	4.5	19.3	22.7	8.0	4.5	0.0	3.4	42.0
35～44歳	24.8	36.6	1.0	25.7	32.7	2.0	3.0	2.0	4.0	30.7
45～54歳	20.0	37.3	6.7	29.3	18.7	0.0	4.0	4.0	2.7	41.3
55～69歳	33.7	30.1	9.6	43.4	15.7	3.6	2.4	2.4	1.2	31.3
低学歴	28.6	39.2	9.0	28.6	25.4	2.1	0.5	3.1	2.1	38.1
中学歴	29.0	21.2	4.6	23.5	19.8	6.0	3.7	1.4	2.8	42.9
高学歴	21.6	5.9	2.0	27.5	17.6	2.0	13.7	0.0	3.9	35.3

	年齢×テレビ視聴時間と音声得点の関係 (今回調査)								
	150分未満			151～240分			241分以上		
	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差
全体	158	27.1	4.98	170	25.6	6.06	129	23.8	6.86
15～19歳	20	29.7	2.24	30	29.9	1.65	10	30.0	1.10
20～24歳	16	30.1	1.05	24	29.6	2.25	10	27.6	4.45
25～34歳	33	27.6	3.88	28	28.9	2.03	27	27.2	4.87
35～44歳	48	27.4	3.63	31	24.1	6.55	22	24.2	6.87
45～54歳	24	26.3	5.15	25	24.7	6.05	26	22.7	6.88
55～69歳	17	20.7	7.13	32	19.7	6.39	34	18.9	5.95

音 声 (今回調査)

	217 <u>カ</u> ヨウビ		216 <u>スイカ</u>			208 <u>ヘ</u> ビ		218 <u>ヒ</u> ャク		
	k	k ^w	k	g ^w , k ^w	kaN, gaN	x	F	ç	F	その他
全体	99.1	0.9	96.9	1.3	1.8	94.3	5.7	84.2	15.5	0.2
男	99.5	0.5	95.6	2.5	2.0	92.6	7.4	78.9	21.1	0.0
女	98.8	1.2	98.0	0.4	1.6	95.7	4.3	88.5	11.1	0.4
15～19歳	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0
20～24歳	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0
25～34歳	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	96.6	3.4	92.0	8.0	0.0
35～44歳	99.0	1.0	94.1	2.0	4.0	94.1	5.9	91.1	8.9	0.0
45～54歳	98.7	1.3	94.7	1.3	4.0	93.3	6.7	66.7	33.3	0.0
55～69歳	97.6	2.4	95.2	3.6	1.2	85.5	14.5	62.7	36.1	1.2
低学歴	97.9	2.1	93.7	2.1	4.2	92.1	7.9	75.1	24.3	0.5
中学歴	100.0	0.0	99.1	0.9	0.0	95.4	4.6	92.2	7.8	0.0
高学歴	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	98.0	2.0	84.3	15.7	0.0

	202 ヒゲ			219 ゼイムシヨ			203 セナカ			204 アセ	
	ㄥ	F	その他	dz	ḷ	D.K.	s	ś,ç	その他	s	ś,ç
全体	77.0	21.0	2.0	96.5	3.1	0.4	93.7	6.1	0.2	92.3	7.4
男	71.6	26.5	2.0	97.5	2.5	0.0	94.1	5.4	0.5	92.2	7.4
女	81.4	16.6	2.0	95.7	3.6	0.8	93.3	6.7	0.0	92.5	7.5
15~19歳	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	96.7	3.3	0.0	93.3	6.7
20~24歳	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	92.0	8.0	0.0	92.0	8.0
25~34歳	89.8	5.7	4.5	100.0	0.0	0.0	98.9	1.1	0.0	96.6	3.4
35~44歳	81.2	15.8	3.0	98.0	2.0	0.0	92.1	7.9	0.0	92.1	7.9
45~54歳	58.7	41.3	0.0	94.7	5.3	0.0	93.3	5.3	1.3	92.0	6.7
55~69歳	44.6	53.0	2.4	88.0	9.6	2.4	89.2	10.8	0.0	88.0	12.0
低学歴	59.8	36.0	4.2	93.1	5.8	1.1	90.5	9.0	0.5	92.1	7.4
中学歴	90.8	9.2	0.0	98.6	1.4	0.0	94.9	4.1	0.0	91.7	8.3
高学歴	82.4	15.7	2.0	100.0	0.0	0.0	96.1	3.9	0.0	96.1	3.9

	215 マツ			214 カキ			213 クツ				206 ハト
	その他	ts	z	k	g	その他	ts	z	tsi	tʃi	t
全体	0.2	92.1	7.9	89.7	10.1	0.2	89.1	8.5	1.1	1.3	88.4
男	0.5	89.7	10.3	85.8	14.2	0.0	85.8	11.3	1.5	1.5	87.7
女	0.0	94.1	5.9	92.9	6.7	0.4	91.7	6.3	0.8	1.2	88.9
15~19歳	0.0	100.0	0.0	93.3	6.7	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	96.7
20~24歳	0.0	100.0	0.0	96.0	4.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	92.0
25~34歳	0.0	95.5	4.5	95.5	4.5	0.0	93.1	5.7	1.1	0.0	93.2
35~44歳	0.0	90.1	9.9	92.1	7.9	0.0	85.1	10.9	1.0	3.0	90.1
45~54歳	1.3	93.3	6.7	88.0	10.7	1.3	85.3	10.7	1.3	2.7	86.7
55~69歳	0.0	79.5	20.5	75.9	24.1	0.0	78.3	18.1	2.4	1.2	74.7
低学歴	0.5	84.7	15.3	82.0	17.5	0.5	81.5	14.8	1.6	2.1	79.4
中学歴	0.0	97.2	2.8	95.9	4.1	0.0	93.5	4.6	0.9	0.9	95.4
高学歴	0.0	98.0	2.0	92.2	7.8	0.0	98.0	2.0	0.0	0.0	92.2

	210 ハタ				205 ハチ				201 クチ		
	d	t	d	記入 もれ	tʃ	z	tsttt	その他	tʃ	z	zttt
全体	11.6	87.1	12.7	0.2	82.9	9.8	0.9	6.3	82.7	9.8	0.2
男	12.3	86.3	13.2	0.5	81.9	10.3	0.5	7.4	82.4	11.3	0.5
女	11.1	87.7	12.3	0.0	83.8	9.5	1.2	5.5	83.0	8.7	0.0
15～19歳	3.3	96.7	3.3	0.0	93.3	6.7	0.0	0.0	96.7	3.3	0.0
20～24歳	8.0	92.0	8.0	0.0	88.0	4.0	0.0	8.0	92.0	4.0	0.0
25～34歳	6.8	93.2	5.7	1.2	89.8	6.8	0.0	3.4	90.9	3.4	0.0
35～44歳	9.9	86.1	13.9	0.0	84.2	9.9	0.0	5.9	80.2	9.9	1.0
45～54歳	13.3	85.3	14.7	0.0	84.0	9.3	0.0	6.7	81.3	13.3	0.0
55～69歳	25.3	73.5	26.5	0.0	62.7	19.3	4.8	13.3	62.7	21.7	0.0
低学歴	20.6	78.8	21.2	0.0	72.0	16.4	2.1	9.5	69.8	16.9	0.0
中学歴	4.6	92.2	7.8	0.0	89.9	6.0	0.0	4.1	91.2	5.5	0.5
高学歴	7.8	96.1	2.0	2.0	94.1	2.0	0.0	3.9	94.1	2.0	0.0

	207 ネコ		212 オビ			209 マド		211 スズ			
	tsttt	その他	k	g	b	～b	その他	d	～d	dz	～z
全体	1.1	6.1	82.3	17.7	83.8	15.8	0.4	82.5	17.5	74.8	25.2
男	1.0	4.9	79.4	20.6	81.9	18.1	0.0	76.0	24.0	75.0	25.0
女	1.2	7.1	84.6	15.4	85.4	13.8	0.8	87.7	12.3	74.7	25.3
15～19歳	0.0	0.0	93.3	6.7	96.7	0.0	3.3	100.0	0.0	96.7	3.3
20～24歳	0.0	4.0	88.0	12.0	96.0	4.0	0.0	100.0	0.0	88.0	12.0
25～34歳	1.1	4.5	87.5	12.5	93.2	6.8	0.0	86.4	13.6	84.1	15.9
35～44歳	0.0	8.9	82.2	17.8	87.1	12.9	0.0	92.1	7.9	75.2	24.8
45～54歳	1.3	4.0	85.3	14.7	78.7	21.3	0.0	69.3	30.7	70.7	29.3
55～69歳	3.6	12.0	62.7	37.3	57.8	42.2	0.0	55.4	44.6	44.6	55.4
低学歴	2.1	11.1	72.5	27.5	74.6	25.4	0.0	76.2	23.8	65.1	34.9
中学歴	0.5	2.3	89.4	10.6	90.3	8.8	0.9	89.9	10.1	81.1	18.9
高学歴	0.0	3.9	88.2	11.8	90.2	9.8	0.0	86.3	13.7	84.3	15.7

	230 キツネ					228 カラス			227 スミ			225
	tsu	zu	zi	tsi	stu	su	si	ʃi	su	si	ʃi	dzu
全体	89.7	1.1	6.8	2.2	0.2	87.3	12.5	0.2	82.9	16.8	0.2	75.5
男	90.2	0.0	6.4	2.9	0.5	87.7	12.3	0.0	81.4	18.1	0.5	73.5
女	89.3	2.0	7.1	1.6	0.0	87.0	12.6	0.4	84.2	15.8	0.0	77.1
15～19歳	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	96.7	3.3	0.0	96.7	3.3	0.0	93.3
20～24歳	96.0	0.0	4.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
25～34歳	94.3	1.1	4.5	0.0	0.0	95.5	4.5	0.0	93.2	6.8	0.0	83.0
35～44歳	94.1	0.0	4.0	2.0	0.0	85.1	14.9	0.0	80.2	19.8	0.0	71.3
45～54歳	86.7	0.0	9.3	4.0	0.0	82.7	16.0	1.3	73.3	25.3	1.3	72.0
55～69歳	71.1	4.8	16.9	6.0	1.2	71.1	28.9	0.0	63.9	36.1	0.0	48.2
低学歴	81.0	1.6	13.2	3.7	0.5	75.1	24.3	0.5	65.6	33.9	0.5	56.1
中学歴	95.4	0.9	2.8	0.9	0.0	95.9	4.1	0.0	94.9	5.1	0.0	88.0
高学歴	98.0	0.0	0.0	2.0	0.0	96.1	3.9	0.0	96.1	3.9	0.0	94.1

	チズ		226 シマ			224 チジ				229 カラシ		
	zi	zi	ʃi	si	その他	dzi	zi	zst	D.K.	ʃi	si	stu
全体	24.3	0.2	74.4	25.2	0.4	62.1	37.2	0.2	0.4	56.9	36.8	3.1
男	26.0	0.5	77.5	22.1	0.5	60.8	39.2	0.0	0.0	50.5	41.7	2.9
女	22.9	0.0	71.9	27.7	0.4	63.2	35.6	0.4	0.8	62.1	32.8	3.2
15～19歳	6.7	0.0	86.7	11.3	0.0	90.0	10.0	0.0	0.0	83.3	13.3	0.0
20～24歳	0.0	0.0	88.0	12.0	0.0	84.0	16.0	0.0	0.0	76.0	24.0	0.0
25～34歳	15.9	1.1	83.0	17.0	0.0	73.9	26.1	0.0	0.0	62.5	31.8	2.3
35～44歳	28.7	0.0	75.2	24.8	1.0	55.4	44.6	0.0	0.0	49.5	45.5	3.0
45～54歳	28.0	0.0	76.0	24.0	0.0	57.3	42.7	0.0	0.0	57.3	32.0	4.0
55～69歳	51.8	0.0	45.8	53.0	1.2	28.9	67.5	1.2	2.4	28.9	60.2	7.2
低学歴	43.9	0.0	56.6	42.9	0.5	38.1	60.3	0.5	1.1	39.2	50.8	4.8
中学歴	12.0	0.0	86.2	13.4	0.5	77.4	22.6	0.0	0.0	68.7	27.2	2.3
高学歴	3.9	2.0	90.2	9.8	0.0	86.3	13.7	0.0	0.0	72.5	25.5	0.0

	231		ウチワ								223 エントツ	
	su	その他	ɸi	dʒi	zɪ	zɯ	tʃɯ	tʃi	tsu	その他	e	è
全体	2.6	0.7	73.7	0.4	13.8	0.7	1.5	0.4	1.3	8.1	83.4	16.6
男	4.9	0.0	77.0	0.0	12.3	0.5	0.5	0.0	2.0	7.8	80.9	19.1
女	0.8	1.2	71.1	0.8	15.0	0.8	2.4	0.8	0.8	8.3	85.4	14.6
15~19歳	3.3	0.0	96.7	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
20~24歳	0.0	0.0	88.0	0.0	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	100.0	0.0
25~34歳	1.1	2.3	84.1	0.0	4.5	0.0	1.1	0.0	2.3	7.9	90.9	9.1
35~44歳	2.0	0.0	66.3	0.0	17.8	1.0	1.0	2.0	2.0	9.9	89.1	10.9
45~54歳	6.7	0.0	70.7	0.0	17.3	0.0	1.3	0.0	0.0	10.7	78.7	21.3
55~69歳	2.4	1.2	49.4	2.4	26.5	2.4	4.8	0.0	2.4	12.0	50.6	49.4
低学歴	4.2	1.1	50.8	1.1	27.5	0.5	3.7	0.5	1.6	14.3	70.9	29.1
中学歴	1.4	0.5	90.3	0.0	4.1	0.9	0.0	0.5	0.9	3.2	92.6	7.4
高学歴	2.0	0.0	88.2	0.0	3.9	0.0	0.0	0.0	2.0	5.9	90.2	9.8

	221 エキ			222 イト			220 イキ		
	e	è	i	i	è	i	i	è	i
全体	72.0	26.3	1.8	80.7	7.2	12.0	80.7	7.2	12.0
男	66.7	31.9	1.5	79.4	6.4	14.2	79.4	6.4	14.2
女	76.3	21.7	2.0	81.8	7.9	10.3	81.8	7.9	10.3
15~19歳	100.0	0.0	0.0	96.7	0.0	3.3	96.7	0.0	3.3
20~24歳	96.0	4.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
25~34歳	84.1	15.9	0.0	92.0	4.5	3.4	77.3	12.5	10.2
35~44歳	73.3	24.8	2.0	84.2	8.9	6.9	59.4	13.9	26.7
45~54歳	64.0	34.7	1.3	72.0	8.0	20.0	61.3	10.7	28.0
55~69歳	30.1	63.9	6.0	49.4	16.9	33.7	30.1	27.7	42.2
低学歴	54.5	41.8	3.7	63.0	13.8	23.3	46.6	21.7	31.7
中学歴	84.3	15.2	0.5	93.5	2.3	4.1	78.8	7.4	13.8
高学歴	84.3	15.7	0.0	92.2	3.9	3.9	82.4	5.9	11.8

音 声 (前回調査)

	人数	217 カヨウビ			216 スイカ			208 へビ		218 ヒャク	
		k	k ^w	その他	k	g ^w ,k ^w	kaN,gaN	x	F	ç	F
全体	577	92.5	6.9	0.5	70.4	14.0	15.6	49.7	50.3	45.8	54.2
男	243	88.9	11.1	0.0	69.5	17.3	13.2	42.8	57.2	39.5	60.5
女	334	95.2	3.9	0.9	71.0	14.0	15.6	54.8	45.2	50.3	49.7
15～19歳	98	100.0	0.0	0.0	71.4	14.3	14.3	67.3	32.7	59.2	40.8
20～24歳	64	100.0	0.0	0.0	84.4	3.1	12.5	56.3	43.8	62.5	37.5
25～34歳	130	95.4	4.6	0.0	73.8	12.3	13.8	66.9	33.1	56.2	43.8
35～44歳	118	91.5	8.5	0.0	72.9	16.1	11.0	50.0	50.0	52.5	47.5
45～54歳	84	88.1	11.9	0.0	66.7	20.2	13.1	26.2	73.8	25.0	75.0
55～69歳	83	79.5	16.9	3.6	53.0	15.7	31.3	20.5	79.5	12.0	88.0
低学歴	383	91.9	7.3	0.8	63.2	15.7	21.1	43.9	56.1	38.4	61.6
中学歴	169	95.3	4.7	0.0	84.0	11.2	4.7	59.8	40.2	57.4	42.6
高学歴	25	84.0	16.0	0.0	88.0	8.0	4.0	72.0	28.0	80.0	20.0

	202 ヒゲ			219 ゼイムショ			203 セナカ			204 アセ	
	ç	F	その他	dz	z	その他	s	š,ç	その他	s	š,ç
全体	39.7	59.8	0.5	48.5	51.1	0.3	75.9	23.6	0.5	79.9	19.6
男	30.9	68.7	0.4	50.2	49.8	0.0	73.3	26.3	0.4	77.4	22.2
女	46.1	53.3	0.6	47.3	52.1	0.6	77.8	21.6	0.6	81.7	17.7
15～19歳	57.1	42.9	0.0	51.0	49.0	0.0	87.8	12.2	0.0	83.7	16.3
20～24歳	56.3	43.8	0.0	62.5	37.5	0.0	81.3	18.8	0.0	87.5	12.5
25～34歳	53.1	46.9	0.0	53.1	46.2	0.8	87.7	12.3	0.0	87.7	11.5
35～44歳	34.7	65.3	0.0	54.2	45.8	0.0	79.7	19.5	0.8	84.7	15.3
44～54歳	22.6	76.2	1.2	29.8	70.2	0.0	65.5	34.5	0.0	73.8	26.2
55～69歳	9.6	88.0	2.4	38.6	60.2	1.2	44.6	53.0	2.4	56.6	41.0
低学歴	32.6	66.8	0.5	42.3	57.2	0.5	70.2	29.5	0.3	74.2	25.1
中学歴	51.5	47.9	0.6	57.4	42.6	0.0	85.8	13.0	1.2	91.1	8.9
高学歴	68.0	32.0	0.0	84.0	16.0	0.0	96.0	4.0	0.0	92.0	8.0

		215 マヅ			214 カキ			213 クヅ			206	
その他		ts	z	その他	k	g	N.A.	ts	z	tʃi	t	
全体	0.5	70.9	28.4	0.7	63.1	36.7	0.2	69.5	28.4	2.1	62.6	
男	0.4	65.8	32.5	1.6	60.9	39.1	0.0	63.8	33.3	2.9	56.0	
女	0.6	74.6	25.5	0.7	64.7	35.0	0.3	73.7	24.9	1.5	67.4	
15~19歳	0.0	75.5	20.4	4.1	57.1	42.9	0.0	77.6	20.4	2.0	59.2	
20~24歳	0.0	78.1	21.9	0.0	71.9	28.1	0.0	81.3	18.8	0.0	71.9	
25~34歳	0.8	83.1	16.9	0.0	77.7	21.5	0.8	82.3	16.9	0.8	73.8	
35~44歳	0.0	77.1	22.9	0.0	70.3	29.7	0.0	72.0	25.4	2.5	71.2	
45~54歳	0.0	58.3	41.7	0.0	47.6	52.4	0.0	56.0	42.9	1.2	53.6	
55~69歳	2.4	44.6	55.4	0.0	45.8	54.2	0.0	41.0	53.0	6.0	38.6	
低学歴	0.8	63.2	36.3	0.5	55.9	44.1	0.0	61.4	36.8	1.8	58.0	
中学歴	0.0	87.0	11.8	1.2	76.9	22.5	0.6	85.8	11.2	3.0	70.4	
高学歴	0.0	80.0	20.0	0.0	80.0	20.0	0.0	84.0	16.0	0.0	80.0	

		210 ハト		205 ハチ			201 クチ			207 ネコ		
d		t	d	N.A.	t	z	その他	tʃ	z	その他	k	g
全体	37.4	64.6	35.0	0.3	62.9	36.7	0.3	70.5	28.4	1.0	64.0	36.0
男	44.0	62.1	37.9	0.0	56.8	42.4	0.8	66.7	32.1	1.2	61.3	38.7
女	32.6	66.5	32.9	0.6	67.4	32.6	0.0	73.4	25.7	0.9	65.9	34.1
15~19歳	40.8	61.2	38.8	0.0	63.3	36.7	0.0	73.5	22.4	4.1	63.3	36.7
20~24歳	28.1	81.3	18.8	0.0	68.8	31.3	0.0	84.4	15.6	0.0	75.0	25.0
25~34歳	26.2	75.4	24.6	0.0	80.0	19.2	0.8	83.1	16.2	0.8	79.2	20.8
35~44歳	28.8	75.4	24.6	0.0	69.5	30.5	0.0	68.6	31.4	0.0	68.6	31.4
45~54歳	46.4	51.2	47.6	1.2	48.8	50.0	1.2	57.1	42.9	0.0	54.8	45.2
55~69歳	61.4	37.3	61.4	1.2	36.1	63.9	0.0	53.0	45.8	1.2	34.9	65.1
低学歴	42.0	58.2	41.3	0.5	54.0	45.4	0.5	63.4	35.0	1.6	56.9	43.1
中学歴	29.6	76.9	23.1	0.0	80.5	19.5	0.0	84.6	15.4	0.0	77.5	22.5
高学歴	20.0	80.0	20.0	0.0	80.0	20.0	0.0	84.0	16.0	0.0	80.0	20.0

	212 オビ			209 マド			211 スズ			230 キツネ	
	b	~b	その他	d	~d	その他	dz	~z	その他	tsuu	ztt
全体	49.0	50.6	0.3	50.6	48.9	0.5	34.1	65.3	0.5	60.7	39.3
男	48.6	51.0	0.4	49.8	49.8	0.4	34.2	65.0	0.8	61.7	38.3
女	49.4	50.3	0.3	51.2	48.2	0.6	34.1	65.6	0.3	59.9	40.1
15~19歳	59.2	40.8	0.0	53.1	46.9	0.0	36.7	61.2	2.0	55.1	44.9
20~24歳	53.1	46.9	0.0	53.1	46.9	0.0	46.9	53.1	0.0	68.8	31.3
25~34歳	64.6	34.6	0.8	63.1	36.2	0.8	43.1	56.2	0.3	72.3	27.7
35~44歳	40.7	59.3	0.0	51.7	47.5	0.8	36.4	63.6	0.0	70.3	29.7
44~54歳	35.7	63.1	1.2	40.5	58.3	1.2	14.2	85.7	0.0	42.9	57.1
55~69歳	34.9	65.1	0.0	34.9	65.1	0.0	24.1	75.9	0.0	47.0	53.0
低学歴	42.0	57.4	0.5	45.2	54.6	0.3	24.0	76.0	0.0	52.5	47.5
中学歴	62.1	37.9	0.0	59.2	39.6	1.2	52.1	46.2	1.8	75.7	24.3
高学歴	68.0	32.0	0.0	76.0	24.0	0.0	68.0	32.0	0.0	84.0	16.0

	228 カラス			227 スミ		225 チズ			226 シマ			224
	suu	si	fi	suu	si	dzuu	zi	zi	fi	si	N.A.	d3i
全体	56.2	43.2	6.9	69.5	30.5	33.4	66.4	0.2	51.1	48.0	0.9	32.9
男	54.3	45.7	0.0	64.6	35.4	31.7	68.3	0.0	51.4	48.6	0.0	32.1
女	57.9	41.3	12.0	73.1	26.9	34.7	65.0	0.3	50.9	47.6	1.5	33.5
15~19歳	59.2	40.8	0.0	77.6	22.4	34.7	65.3	0.0	46.9	49.0	4.1	30.6
20~24歳	56.3	40.6	3.1	81.3	18.8	37.5	62.5	0.0	65.6	34.4	0.0	46.9
25~34歳	67.7	32.3	0.0	76.9	23.1	50.0	50.0	0.0	62.3	37.7	0.0	43.8
35~44歳	60.2	39.0	0.8	74.6	25.4	39.0	61.0	0.0	55.9	44.1	0.0	38.1
45~54歳	42.9	57.1	0.0	56.0	44.0	16.7	83.3	0.0	41.7	58.3	0.0	15.5
55~69歳	42.2	56.6	1.2	45.8	54.2	12.0	86.7	1.2	30.1	68.7	1.2	18.1
低学歴	52.5	46.5	1.0	62.9	37.1	22.2	77.5	0.3	40.5	58.2	1.3	20.9
中学歴	61.5	38.5	0.0	83.4	16.6	54.4	45.6	0.0	70.4	29.6	0.0	57.4
高学歴	76.0	24.0	0.0	76.0	24.0	64.0	36.0	0.0	84.0	16.0	0.0	52.0

	チジ		229 カラシ				231 ウチワ			223 エントツ		
	zi	N.A.	fi	si	sst	その他	tji	zi	tsi	e	é	i
全体	64.5	2.6	33.8	65.0	0.3	0.9	56.3	43.3	0.3	78.2	0.7	20.6
男	66.3	1.6	30.5	68.3	0.0	1.2	53.1	46.1	0.8	75.3	0.4	23.0
女	63.2	3.3	36.2	62.6	0.6	0.6	58.7	41.3	0.0	80.2	0.9	18.9
15～19歳	63.3	6.1	26.5	73.5	0.0	0.0	53.1	46.9	0.0	91.8	0.0	8.2
20～24歳	53.1	0.0	43.8	53.1	3.1	0.0	65.6	34.4	0.0	90.6	0.0	9.4
25～34歳	54.6	1.5	42.3	56.2	0.0	1.5	73.1	26.9	0.0	83.8	1.5	14.6
35～44歳	59.3	2.5	35.6	61.9	0.0	2.5	64.4	34.7	0.8	85.6	0.0	14.4
45～54歳	84.5	0.0	22.6	77.4	0.0	0.0	32.1	66.7	1.2	63.1	1.2	33.3
55～69歳	77.1	4.8	30.1	69.9	0.0	0.0	39.8	60.2	0.0	48.2	1.2	49.4
低学歴	76.5	2.6	26.1	72.8	0.5	0.5	44.9	54.8	0.3	73.6	1.0	24.5
中学歴	40.2	2.4	47.3	52.1	0.0	0.6	78.7	20.7	0.6	88.2	0.0	11.8
高学歴	44.0	4.0	60.0	32.0	0.0	8.0	80.0	20.0	0.0	80.0	0.0	20.0







	N.A. 記入 もれ	221 エキ			222 イト			220 イキ			
		e	é	i	i	é	i	i	é	i	N.A.
全体	0.5	38.6	0.9	60.5	61.2	0.9	38.0	30.3	0.5	68.3	0.9
男	1.2	34.2	1.2	64.6	53.5	0.8	45.7	28.4	0.0	70.4	1.2
女	0.0	41.7	0.6	57.5	66.8	0.9	32.3	31.7	0.9	66.8	0.6
15～19歳	0.0	42.9	2.0	55.1	67.3	2.0	30.6	42.9	0.0	55.1	2.0
20～24歳	0.0	50.0	0.0	50.0	62.5	3.1	34.4	34.4	3.1	62.5	0.0
25～34歳	0.0	51.5	0.8	47.7	65.4	0.8	33.8	37.7	0.8	61.5	0.0
35～44歳	0.0	46.6	0.8	52.5	70.3	0.0	29.7	29.7	0.0	68.6	1.7
45～54歳	2.4	17.9	0.0	82.1	53.6	0.0	46.4	16.7	0.0	82.1	1.2
55～69歳	1.2	14.5	1.2	84.3	41.0	0.0	59.0	15.7	0.0	84.3	0.0
低学歴	0.8	31.3	0.5	68.1	57.7	0.8	41.5	24.5	0.8	74.2	0.5
中学歴	0.0	53.8	1.8	44.4	67.5	1.2	31.4	40.8	0.0	57.4	1.8
高学歴	0.0	48.0	0.0	52.0	72.0	0.0	28.0	48.0	0.0	52.0	0.0








アクセント (今回調査)

	人数	207 ネコ			210 ハタ		228 カラス					203
		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
全体	457	37.0	62.1	0.9	31.3	68.7	24.7	74.0	0.4	0.2	0.7	21.2
男	204	42.2	56.4	1.5	30.9	69.1	24.5	74.0	0.0	0.5	1.0	16.7
女	253	32.8	66.8	0.4	31.6	68.4	24.9	73.9	0.8	0.0	0.4	24.9
15～19歳	60	46.7	53.3	0.0	46.7	53.3	36.7	60.0	3.3	0.0	0.0	23.3
20～24歳	50	56.0	44.0	0.0	44.0	56.0	48.0	52.0	0.0	0.0	0.0	24.0
25～34歳	88	35.2	64.8	0.0	28.4	71.6	29.5	69.3	0.0	0.0	1.1	26.1
35～44歳	101	35.6	63.4	1.0	24.8	75.2	20.8	78.2	0.0	0.0	1.0	18.8
45～54歳	75	29.3	69.3	1.3	24.0	76.0	18.7	78.7	0.0	1.3	1.3	21.3
55～69歳	83	28.9	68.7	2.4	30.1	69.9	7.2	92.8	0.0	0.0	0.0	15.7
低学歴	189	27.5	71.4	1.1	25.4	74.6	11.1	87.3	1.1	0.0	0.5	13.2
中学歴	217	44.7	55.3	0.0	36.4	63.6	32.7	66.4	0.0	0.0	0.9	25.8
高学歴	51	39.2	56.9	3.9	31.4	68.6	41.2	56.9	0.0	2.0	0.0	31.4

	セナカ				231 ウチワ								
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
全体	77.0	0.2	1.3	0.2	13.8	78.3	2.2	0.4	0.7	3.5	0.9	0.2	記入もれ
男	81.9	0.5	1.0	0.0	15.2	75.5	2.0	0.5	1.0	5.4	0.5	0.0	
女	73.1	0.0	1.6	0.4	12.6	80.6	2.4	0.4	0.4	2.0	1.2	0.4	
15～19歳	73.3	0.0	3.3	0.0	13.3	76.7	3.3	0.0	3.3	3.3	0.0	0.0	
20～24歳	76.0	0.0	0.0	0.0	28.0	64.0	0.0	0.0	0.0	8.0	0.0	0.0	
25～34歳	70.5	0.0	3.4	0.0	13.6	71.5	5.7	1.1	0.0	5.7	2.3	0.0	
35～44歳	78.2	1.0	1.0	1.0	13.9	79.2	2.0	0.0	0.0	2.0	2.0	1.0	
45～54歳	78.7	0.0	0.0	0.0	13.3	82.7	1.3	1.3	1.3	0.0	0.0	0.0	
55～69歳	84.3	0.0	0.0	0.0	6.0	90.4	0.0	0.0	0.0	3.6	0.0	0.0	
低学歴	85.7	0.5	0.0	0.5	6.3	88.4	2.1	0.0	0.0	1.6	0.5	0.5	
中学歴	71.9	0.0	2.3	0.0	19.4	71.4	1.8	0.9	1.4	3.7	1.4	0.0	
高学歴	66.7	0.0	2.0	0.0	17.6	68.6	3.9	0.0	0.0	9.8	0.0	0.0	

アクセント (前回調査)

	人数	207 ネコ				210 ハタ			228
					記入もれ			記入もれ	
全体	577	12.3	87.3	0.2	0.2	10.2	87.2	2.6	9.2
男	243	10.3	88.9	0.4	0.4	12.3	85.2	2.5	9.5
女	334	13.8	86.2	0.0	0.0	8.7	88.6	2.7	9.0
15～19歳	98	10.2	89.8	0.0	0.0	6.1	93.9	0.0	4.1
20～24歳	64	12.5	87.5	0.0	0.0	15.6	81.3	3.1	12.5
25～34歳	130	14.6	84.6	0.8	0.0	15.4	82.3	2.3	13.8
35～44歳	118	16.1	83.9	0.0	0.0	11.9	87.3	0.8	11.0
45～54歳	84	8.3	91.7	0.0	0.0	3.6	92.9	3.6	3.6
55～69歳	83	9.6	89.2	0.0	1.2	7.3	85.5	7.3	8.4
低学歴	383	7.6	92.2	0.0	0.3	6.0	91.4	2.6	5.2
中学歴	169	19.5	79.9	0.6	0.0	17.2	80.5	2.4	16.6
高学歴	25	36.0	64.0	0.0	0.0	28.0	68.0	4.0	20.0

	203 クラス			231 セナカ			ウチワ		
			記入もれ			記入もれ			
全体	89.8	0.7	0.3	9.0	90.6	0.3	7.1	87.2	5.7
男	88.5	1.6	0.4	8.2	91.4	0.4	5.3	86.4	8.2
女	90.7	0.0	0.3	9.6	90.1	0.3	8.4	87.7	3.9
15～19歳	95.9	0.0	0.0	2.0	98.0	0.0	4.1	93.9	2.0
20～24歳	87.5	0.0	0.0	6.3	93.8	0.0	9.4	84.4	6.3
25～34歳	83.8	2.3	0.0	13.1	86.9	0.0	9.2	88.5	5.4
35～44歳	88.1	0.8	0.0	12.7	86.4	0.8	8.5	87.3	4.2
45～54歳	95.2	0.0	1.2	9.5	90.5	0.0	6.0	84.5	9.5
55～69歳	90.4	0.0	1.2	7.2	91.6	1.2	4.8	86.7	8.4
低学歴	94.0	0.3	0.5	5.2	94.5	0.3	3.4	91.9	4.7
中学歴	82.2	1.2	0.0	14.8	84.6	0.6	13.6	79.3	7.1
高学歴	76.0	4.0	0.0	28.0	72.0	0.0	20.0	68.0	12.0

性, 年齢, 学歴別の音声得点の分布 (今回調査)

得点	全体	性		年 齢						学 歴		
		男	女	15~19	20~24	25~34	35~44	45~54	55~69	低	中	高
4	1	0	1					1		1		
5	3	2	1						3	3		
6	2	2	0				1		1	2		
7	0	0	0									
8	1	1	0						1	1		
9	4	2	2				1	1	2	4		
10	3	2	1					1	2	2		1
11	7	2	5			1	1	1	4	6	1	
12	2	1	1			1			1	2		
13	3	1	2				2		1	3		
14	5	3	2				2	2	1	4	1	
15	9	5	4					4	5	7	2	
16	7	4	3				2	1	4	5	2	
17	4	0	4						4	4		
18	11	6	5			1	2	3	5	10	1	
19	10	5	5			1	2	2	5	8	1	1
20	16	7	9		2	1	6	2	5	8	8	
21	11	7	4			1	2	2	6	8	1	2
22	10	4	6				4	2	4	7	2	1
23	15	8	7		2	4	5	1	3	7	8	
24	20	12	8	2		2	4	7	5	12	6	2
25	20	7	13	2	2	4	4	4	4	11	8	1
26	19	8	11			3	6	5	5	11	7	1
27	23	6	17	2		7	7	5	2	11	10	2
28	36	25	11	6	4	11	7	6	2	9	20	7
29	35	13	22		8	11	6	5	5	7	22	6
30	61	26	35	16	4	19	14	6	2	15	42	4
31	119	45	74	32	28	21	23	14	1	21	75	23
人数	457	204	253	60	50	88	101	75	83	189	217	51
平均	25.8	25.2	26.2	29.9	29.4	27.9	25.7	24.5	19.5	22.3	28.2	28.4
標準偏差	6.10	6.35	5.85	1.80	2.76	3.85	5.66	6.29	6.51	6.94	3.83	3.98

性、年齢、学歴別の音声得点の分布（前回調査）

得点	全体	性		年 齢						学 歴		
		男	女	15~19	20~24	25~34	35~44	45~54	55~69	低	中	高
0	8	3	5			1		3	4	6	2	
1	7	3	4			1	1	1	4	7		
2	11	6	5	2		1		3	5	11		
3	8	2	6				1	2	5	8		
4	17	10	7	6		1	3	3	4	14	2	1
5	8	7	1	2	2		2	1	1	6	2	
6	10	5	5				3	3	4	8	1	1
7	17	9	8	2	4	1	4	4	2	17		
8	14	6	8		2	2	2	4	4	13	1	
9	19	11	8	2	2	4	5	5	1	16	3	
10	25	11	14	2	2	3	2	9	7	18	6	1
11	19	8	11	2		2	6	3	6	15	4	
12	11	6	5	2		2	2	1	4	9	2	
13	12	5	7			2	1	3	6	11		1
14	12	7	5	4		2	4	1	1	7	5	
15	19	9	10	4	6	1	3	4	1	14	5	
16	25	11	14	4	2	7	5	3	4	20	5	
17	18	3	15	4	2	4	4	2	2	11	7	
18	29	12	17	6	4	3	7	6	3	22	6	1
19	30	11	19	10	2	6	3	4	5	20	10	
20	18	8	10			8	7	3		12	5	1
21	29	9	20	6		14	5	4		21	7	1
22	20	8	12	4	2	7	5	1	1	14	5	1
23	19	6	13	6	2	7	1	2	1	12	6	1
24	29	8	21	2	8	7	9	1	2	13	13	3
25	25	13	12	8	6	5	3	2	1	11	13	1
26	16	6	10	2	4	4	5	1		11	4	1
27	16	7	9	4		8	3	1		6	8	2
28	18	9	9	6		8	1	1	2	6	12	
29	14	6	8	4	2	4	2	2		4	8	2
30	27	8	19	2	6	8	10		1	14	11	2
31	27	10	17	2	6	7	9	1	2	6	16	5
人数	577	243	334	98	64	130	118	84	83	383	169	25
平均	17.7	16.7	18.4	18.9	20.6	21.1	18.9	13.4	11.2	15.5	21.7	23.5
標準偏差	8.67	8.30	8.50	7.61	7.89	6.96	8.26	7.71	8.02	8.18	7.33	7.72

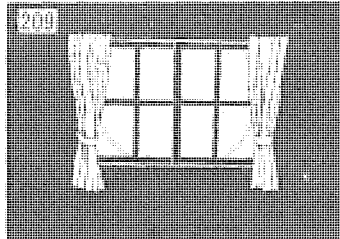
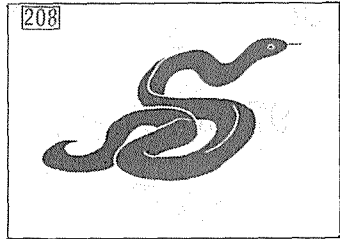
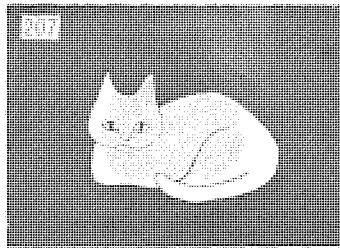
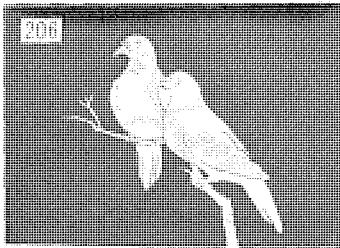
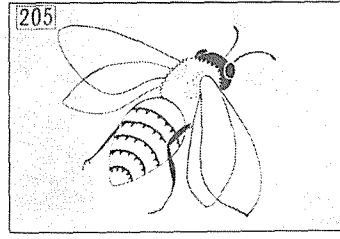
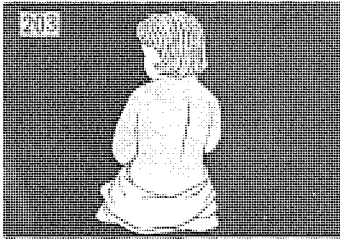
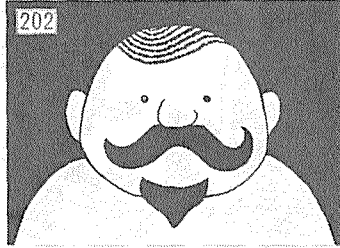
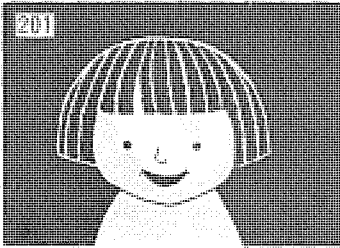
性，年齢，学歴別のアクセント得点の分布（今回調査）

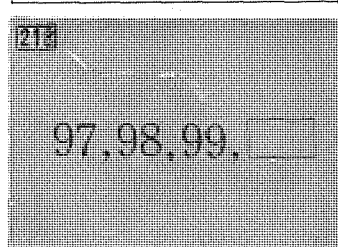
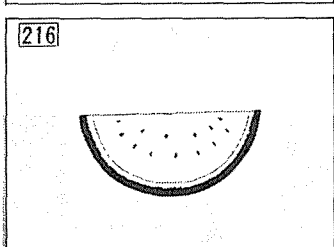
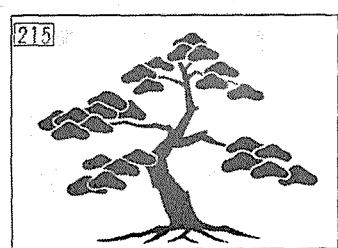
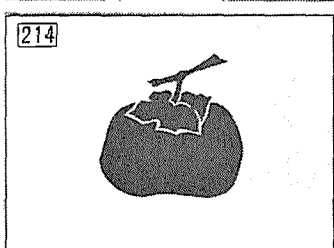
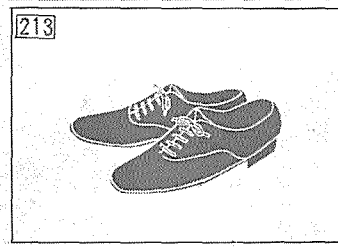
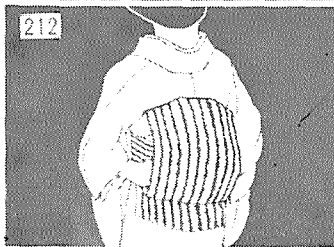
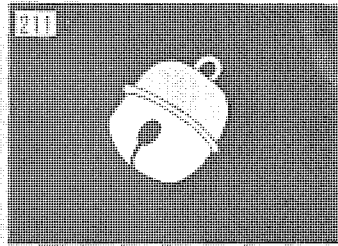
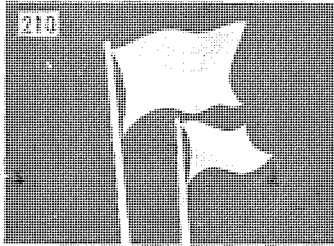
得点	全体	性		年 齢						学 歴		
		男	女	15~19	20~24	25~34	35~44	45~54	55~69	低	中	高
0	183	82	101	12	12	33	50	35	41	101	68	14
1	118	52	66	12	12	23	18	21	22	43	61	14
2	66	30	36	8	4	19	15	8	12	30	28	8
3	42	16	26	10	12	0	8	5	5	6	27	9
4	31	16	15	8	6	3	7	2	3	8	18	5
5	17	8	9	0	4	3	3	4	0	1	15	1
人数	457	204	253	60	50	88	101	75	83	189	217	51
平均	1.28	1.29	1.27	1.67	2.00	1.33	1.14	1.07	0.88	0.84	1.59	1.61
標準偏差	1.43	1.45	1.41	1.32	1.62	1.47	1.43	1.39	1.09	1.12	1.57	1.40

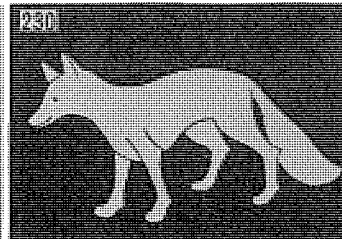
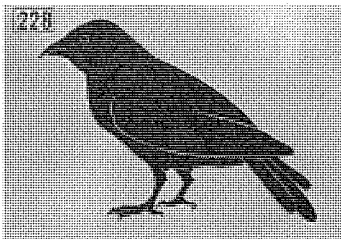
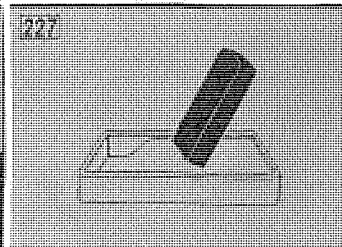
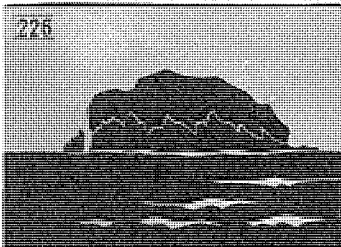
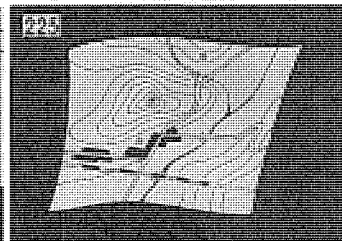
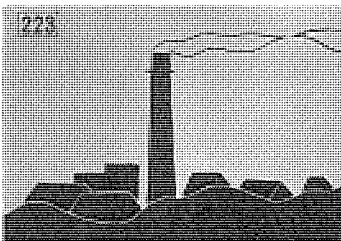
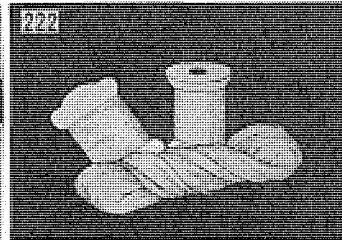
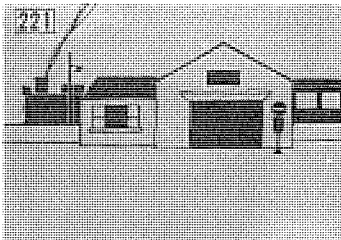
性，年齢，学歴別のアクセント得点の分布（前回調査）

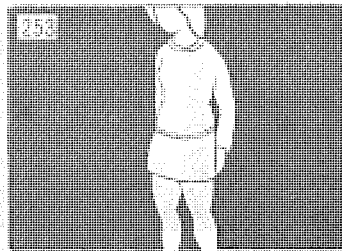
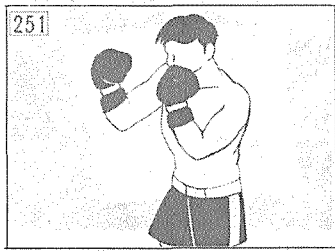
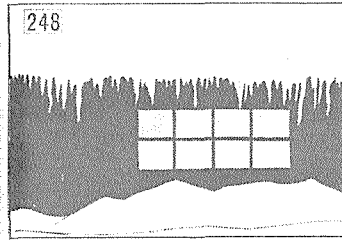
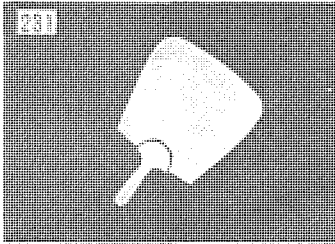
得点	全体	性		年 齢						学 歴		
		男	女	15~19	20~24	25~34	35~44	45~54	55~69	低	中	高
0	450	189	261	84	44	92	89	73	68	325	111	14
1	63	28	35	8	12	17	14	4	8	35	27	1
2	19	10	9	2	4	6	2	2	3	10	5	4
3	20	7	13	2	2	7	5	3	1	6	11	3
4	10	3	7	2	0	4	2	1	1	3	7	0
5	15	6	9	0	2	4	6	1	2	4	8	3
人数	577	243	334	98	64	130	118	84	83	383	169	25
平均	0.48	0.46	0.49	0.27	0.56	0.66	0.59	0.31	0.37	0.27	0.82	1.32
標準偏差	1.12	1.07	1.15	0.78	1.09	1.27	1.33	0.93	1.00	0.81	1.43	1.74

刺 激 図









索

引

1. この索引は、本文を理解するために必要と思われる項目を五十音順に並べたものである。
2. 「」で囲んだ項目は、調査における被調査者の反応語形を示す。
3. 本文中の記述と索引に登録された形とが一致しないものも少なくない。
4. 数字はページ数を示し、ゴシック体の数字はその項目の定義がのっていることを示す。
5. ～は、そのページ以下にその項目についての説明あるいは記述があることを示す。
6. →は、その右の項目を(も)見よ、ということを示す。
7. ↔は、その項目と反対の意味の項目であることを示す。

アクセント	38, 64～,
78～, 85～, 96, 97, 98, 99, 129～, 181～, 199～, 250～, 259～, 269～	
アクセント得点	81～, 165, 170～, 204～, 211, 269
アクセント得点の差異 →アクセント得点	82, 170～
アクセント得点の分布 →アクセント得点	170～
アクセントの共通語化に影響する要因 →アクセント, 共通語化の要因	82～, 172～, 181
「アゲル・ヤル」	153～
「アト」	67, 150
「アナタ・キミ」	138～
意識と行動とのズレ	161
一人称複数の語尾	138
1回で調査できた者	49
1回で調査不能とわかった者 →調査不能者	49
一貫して共通語的 ↔一貫して方言的	99
一貫して方言的 ↔一貫して共通語的	99

「イツモ」	66, 146~, 225~
i と e	78, 96, 119~, 121, 242, 248
i と e I	63, 117, 118, 122, 123, 126, 223, 231, 248
i と e II	63, 117, 118, 122, 123, 126, 223, 231, 248
「イラッシャイ」	66, 147~, 255~
得られた被調査者	54
「エントツ」の今回調査での落ち込み	248~
「~オ」	138~
凹 型	87
応答の語	66, 136
岡崎市の調査	40, 292~
「オキレ」	65, 136, 252
「オキロ」	65, 136, 252~
「オドロイタ・ビックリシタ」	150, 255~
「オドロク」	66
「オボゲル」	66, 150
「オめー」	138~
音 声	38, 63~, 77~, 87~, 95~, 97, 98, 99, 116~, 165~, 172~, 217~, 243~, 257~, 265~, 274~
音声項目の主な結果	117~
音声調査項目の類別 → 音声の特徴	39
音声得点	81~, 165, 196, 265
音声得点の差異 → 音声得点	82, 165~
音声得点の分布 → 音声得点	165~
音声の共通語化に影響する要因 → 音声, 共通語化の要因	82~, 172~, 180~
音声の共通語形と鶴岡方言形との対応	119
音声の差異と共通語化の程度	117~
音声の特徴 → 音声	39, 77, 117, 221, 241
階 層	41, 178
「書いたのか」	144
各群の特徴 → 各タイプの分析	198~, 210~, 237~
格助詞	139~

各タイプの分析	196, 210~, 232~
各要因の比較 →共通語化の要因	180~
学歴	110
学歴による共通語化の差異 →学歴別の結果	127~, 132~
学歴の区分	93, 116
学歴別の結果	127~, 132~, 169~, 172, 198, 212, 233, 245~, 251, 252~, 258~, 260, 261~, 263, 264, 267, 271, 273, 275, 276, 277, 286~
下降型	78, 123~, 286, 289
「~ガタ」	65, 138
「~カラ」	66, 140~, 252~
代わりサンプル	50
「カゑ」	67
「キミ」 →「アナタ・キミ」	
共時態 →共時的	73
共時的 ↔通時的	24
共時的調査 →共時的	25
共通語化した人	99~
共通語化点	63~, 193
共通語化の指標	74~, 165
共通語化の順	63~, 77, 117, 130, 188, 194~, 241, 288
共通語化のタイプ	85~, 196~, 209~, 227~, 288
共通語化の要因	61, 68~, 172, 286
興味や関心の方向	175
居住経歴	107, 198, 234, 247, 269
居住経歴別の結果	271, 274, 286
拒否	56~
車の普及	112
「クレル」	153
「~ケ」	143
敬語	40, 143~
敬語の段階	146, 179
経済階層 →階層	178
継続調査	25, 52, 115, 241~, 293

継続調査との比較	244～
継続調査の調査不能者 →継続調査, 調査不能者	55～
経年的調査	25
「ケレドモ」	66, 140, 252～
ケンカ	57
言語形成期	82, 169, 198, 212, 287
言語形成期の居住地 →言語形成期, 居住経歴	172～
言語状況の通時の変化 →通時的	24
言語生活の24時間調査	62
現地調査の進行	47～
語彙	40, 66～, 79～, 96～, 100, 146～, 255～, 262～, 277～
語彙得点	184
語彙に及ぼす要因の比較 →語彙	184～
口蓋化	63, 78, 95, 117, 118, 119, 120, 121, 124～, 127～, 221, 223, 224, 231, 245
合計得点による分析	81～
高原型	78, 250, 286, 289
合成指標→合計得点による分析	187
交通	110～
行動空間	38, 111～, 168, 176～
項目ごとに合計した結果	97～
項目相互の類似の程度	187
「コーデ」	152～
御家禄ことば	145
5項目を組みにした場合のパターンの分布 →パターン分類, パターン分類による結果	204～
個々の項目ごとの結果	77～
個々の項目の比較	95～
「ゴザへ」	66, 148
個人ごとの追跡調査	99～, 274～
個人としての比較 →比較	24～
個人により一定の傾向があるか	100
「～コト」	138～

コミュニケーション	42, 110~
今回調査のパターン分類 →パターン分類	199~, 221~
「~サ」	140
サービス精神	96, 97, 135, 254, 265, 276
再現率 →パターンの再現率	
「~サケ」	66, 141
差替サンプル	50~
「サね(-)」	65
「サねグデ」	136~
「サワグ」	67
サンプリング	44~, 47, 289~
サンプリング調査 →サンプリング	24
サンプルの差替え	50~
子音の口蓋化の有無 →口蓋化	38
子音の唇音性の有無 →唇音性 I, 唇音性 II	38
子音の前の鼻音性の有無 →鼻音化	38
子音の有声・無声 →有声化	38
「シガ」	154
時間を隔てての動的な調査 →通時的	24
士族のことば	40, 145
質問ごとの中心的問題	38~
「シナイデ」	136~, 252~
指標	165, 285, 289
市民の協力	48
社会構造の変化	103~
社会構造を捉えるための指標	103
社会調査	25
社会的態度	40~
社会の変化	23
集計作業	74, 133
重相関係数	69
受験	57

出生地別の結果	157, 267~, 271, 274
準備調査	47
障 害	55
「乗車拒否」	155~
庄内グループ ↔非庄内グループ	64, 173, 212, 234
蒸 発	56~
「ショースー」	67, 150
職 業	108, 198
職業別の結果	174~, 212
職務内容別の結果 →職業別の結果	267, 270, 272
助動詞	142~
白河市の調査 (昭和24年)	61
唇音性 I	63, 78, 117, 118, 119, 120, 124~, 127, 128, 231, 244
唇音性 II	63, 117, 118, 119, 121, 123, 124, 128, 221, 231, 232, 241, 244~
新 語	67~, 80~, 155~, 263~
人口構成の変化	105~
人口の変化	105
新語得点の比較	263
新語の理解を決定する要因 →新語	68
新 聞	111
心理的な要因	69, 285
「ズイブン」	67
ズーズー弁	120
数量化理論 →パターン分類	75, 188
「~スケ」	66, 141
「スナイ」	65
「スぬ(-)」	65
「スワル」	67
「ズンデネ」	67
生活様式に対する意見 →鶴岡での生活に対する意見	157
性による共通語化の差異 →性別の結果	123, 130~
性別の結果	51~, 57, 166~, 171, 196, 211, 233, 245~, 251, 252~, 257~, 259, 260, 262, 263, 264, 265, 269, 271, 275, 276, 277

接続助詞	140～
狭いエ	39
前回調査	24, 52, 53
前回調査と今回調査との違い(パネル調査)	242～
前回調査の結果 → 前回調査	64～
前回調査のパターン分類 → パターン分類	224～
前回調査のパターン分類による結果 → パターン分類による結果	202～
前回調査票との比較	42～
前回と比較して、今回上がったか、下がったか	266～
前回の調査の概要	63～
全国志向 ↔ 地域志向	175, 213, 235
葬儀	57
大都市における言語生活	23, 291～
「～ダカス」	65
「～タチ」	65, 252
達成率	51
「～ダノ」	65
「～ダバ」	65, 141
旅人に話すことば	179, 215, 236
多変量解析	75～, 187
「ダメダ」	67
「～タラ(バ)」	65, 141
段階別比較	265, 269, 271
団体や組合への参加	176, 214, 236
地域志向 ↔ 全国志向	175, 213, 235
地域社会としての比較 → 比較	24～
地域社会とのかかわり	41
中学生の上級学校進学状況	110
中舌	95, 119～, 121, 123, 124, 223, 224, 247
中舌Ⅰ	63, 118, 125, 231, 245, 247
中舌的なイ	39
中舌Ⅱ	63, 77～, 117, 118, 123, 126, 231, 245, 247

調査員 1 人日当たりの被調査者数	53
調査員間のずれ	69
調査員について	279～, 290
調査員別音声得点	282
調査員別・調査日別の調査状況	52
調査員別の結果	57
調査協力依頼	47
調査項目による共通語化の差異	120～, 129～
調査時間	52
調査終了数	48
調査全体からの判定	41, 179
調査対象	44
調査地域	45～
調査に対する反省	289～
調査の趣旨目的の周知	48
調査の進行状況	48
調査費	26, 290
調査日ごとの不能者 → 調査不能者	55
調査票	27～
調査票による面接調査法 → 面接調査法	25
調査票の説明 → 調査票	37～
調査不能者	44, 48, 54～
調査法上の問題	134
「ついえケ」	66
通時的 ↔ 共時的	24
通時的調査 → 通時的	25
通時的変化 → 通時的	24
つぎたし	38
「強い」の連用形	143
「ツヨカッタ」	66, 252～
「ツララ」	154～
鶴岡アクセント ↔ 東京アクセント	64
鶴岡市の調査(前回) → 前回調査	62, 292～

鶴岡での生活に対する意見	176, 198, 213~, 235
鶴岡への帰属意識	40
鶴岡弁・東京弁に対するイメージ	81, 158~
鶴岡弁に対する意見	81, 157~, 176, 198, 213, 235
鶴岡方言の問題点	248
ていねいさの程度 →敬語の段階	146
出稼	57
「~デラ」	65
テレビ	42, 111, 168, 177~, 214, 236
転居	55~
転勤	55~
転出	55~
伝統保持か, 改変か	41
転入・転出	107~
電話	42, 112
同一年齢集団の20年間の共通語化の程度	82, 168, 171~
東京アクセント ↔鶴岡アクセント	64
東京との交流	111~, 176, 214, 235
東京との結びつき	40
東京弁に対するイメージ →鶴岡弁・東京弁に対するイメージ	
統計データのソース	103
動詞の活用	136~
「トース」	66, 146~
「~トコ」	138~
都市化社会	291
凸型	78, 124, 130~, 286~, 289
「~ドモ」(「わたし <u>た</u> ち」)	65
「~ドモ」(「行く <u>け</u> れども」)	66, 140
ナゾナゾ式の質問	38, 150
「~ナラ」	65, 140~, 252~
「~ニ」	140
日常基本語彙	66, 67

二人称	138～
人称代名詞	138～
「ネマル」	67
年齢と共通語化との関係 →年齢別の結果	286
年齢と共通語化の差異 →年齢別の結果	123～, 130
年齢による差 →年齢別の結果	78
年齢の区分	116
年齢別人口構成	105～
年齢別の結果	52～, 57, 123～, 130～, 166～, 171, 197, 211, 233～, 245～, 251, 252～, 258, 259～, 263, 264, 266, 270, 272, 275, 275, 276, 277, 286～
配偶者の出身地 →両親・配偶者の出身地	
「ハイッテクネヘン」	66, 148
「～ハケ」	66, 141
「ハズカシイ」	67, 151～, 255～
パターンの再現率	193, 208～, 231～
パターン分類	75～, 84～, 188, 190～, 290
パターン分類の類量化 →パターン分類	75～
「ハトモタ」	66, 150
パネル調査	25, 45, 52, 54, 91, 241～, 293
パネル調査の結果 →パネル調査	95～
パネル調査の実施 →パネル調査	92
パネル調査の調査不能者 →パネル調査, →調査不能者	58
パネル調査の被調査者 →パネル調査	91～, 241～
浜 萩	67
場面中心的共通語化	195～
場面によることばの使い分け	81, 84～, 160, 189
場面平均的共通語化	195
POSA	76～, 188, 193～
POSAによる分析 →POSA	193～, 208～
鼻音化	63, 95, 118, 119, 120, 121, 124, 125, 128, 221, 231, 241, 247
比較	24～
非庄内グループ ↔庄内グループ	64, 173, 212, 234

被調査者特性	93～
被調査者の態度	41, 53, 134
被調査者番号	51
被調査者ひとり当たりの訪問回数	48～
「ビックリシタ」	150
100点満点としたときの共通語化点 → 共通語化点	63～
病 気	56～
標準語的なイ	39
標準語的なウ	39
標準語的なエ	39
広め, ゆるめのイ	39
フェイスシート	38, 40～
不 在	57
部分尺度解析 → POSA	76～, 188
文 法	40, 65～, 79, 96, 97, 98～, 135～, 252～, 260～, 271～, 276～
文法・語彙項目の問題点	133～
文法と語彙に及ぼす要因 → 文法, 語彙	84
文法得点	182～, 271～
文法に及ぼす要因の比較 → 文法	182～
文法の項目の方言化 → 方言化	254
文法+語彙	263～
文法や語彙が指標となりにくい理由	285
平板型	78, 123～
平野型	78, 250
方言化	79, 96, 98～, 134, 250, 276
方言か共通語か	41
方言化した人 → 方言化	99～
方言的特徴	63～
方言的なイ	39
方言や共通語に対する意識	41
「ボクシング」	155
「ホコル」	67
母集団	44

本調査	47
本調査の実施 →本調査	48～
翻訳式の質問	150
前舌のイ	39
マスコミュニケーションとの接触	41, 287
「ミサ」 → 「～サ」	65
道さき	160～, 179, 215, 236
「ミニ」 → 「～ニ」	65, 252
「ミニスカート」	156
面接調査法	25
「モー」	67, 149～, 255～
物差し →指標	76～, 194, 285
「～ヤ」	65
「ヤジャガね」	67
「～ヤラ」	65
「ヤル」 → 「アゲル・ヤル」	
有声化	63, 95, 118, 119, 120, 121, 124, 125, 223, 231, 245
「ヨスリ」	67, 147
予備調査	47
予備のサンプル	49
4場面を組みにした場合のパターンの分布 →パターン分類	191～
ラジオ	111
両親・配偶者の出身地	172～
両度の調査項目の関係	115
旅行	111～
旅行の日数 →旅行	176
「ルスイ」	67
「ルspan」	67, 147～, 255～
「～を」 → 「～オ」	

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	700円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	600円
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	品切れ
7	入門期の言語能力	〃	200円
8	談話語の実態	〃	品切れ
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学年の読み書き能力	〃	400円
15	明治初期の新聞の用語	〃	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型(1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	550円
21	現代雑誌九十種の用語用字(1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円

22	現代雑誌九十種の用語用字(2) —漢字表—	秀英出版刊	1,000円
23	話しことばの文型(2) —独話資料による研究—	〃	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	350円
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) —分析—	〃	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 —北海道における親子三代のことば—	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本語地図(1)	大蔵省印刷局	品切れ
30-2	日本語地図(2)	〃	〃
30-3	日本語地図(3)	〃	〃
30-4	日本語地図(4)	〃	8,000円
30-5	日本語地図(5)	〃	9,000円
30-6	日本語地図(6)	〃	
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(II) —新聞の用語用字調査の処理組織—	〃	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(II)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(III)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 —松江24時間調査資料から—	〃	900円

42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	秀英出版刊	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	600円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	〃	700円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	1,000円
51	電子計算機による国語研究(Ⅵ)	〃	1,000円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	〃	品切れ
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	秀英出版刊	300円
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	品切れ
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	500円
9	牛店 雑誌 安愚楽鍋用語索引	〃	〃

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英社出版	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	750円
3	ことばの研究 第3集	〃	800円
4	ことばの研究 第4集	〃	1,300円
5	ことばの研究 第5集	〃	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和 24 年度	品切れ	13	昭和 36 年度	160円
2	昭和 25 年度	〃	14	昭和 37 年度	160円
3	昭和 26 年度	160円	15	昭和 38 年度	250円
4	昭和 27 年度	品切れ	16	昭和 39 年度	品切れ
5	昭和 28 年度	240円	17	昭和 40 年度	250円
6	昭和 29 年度	200円	18	昭和 41 年度	300円
7	昭和 30 年度	品切れ	19	昭和 42 年度	300円
8	昭和 31 年度	220円	20	昭和 43 年度	350円
9	昭和 32 年度	200円	21	昭和 44 年度	400円
10	昭和 33 年度	品切れ	22	昭和 45 年度	400円
11	昭和 34 年度	〃	23	昭和 46 年度	450円
12	昭和 35 年度	350円	24	昭和 47 年度	450円

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 39 年版	980円
昭和 30 年版	〃	昭和 40 年版	1,100円
昭和 31 年版	〃	昭和 41 年版	1,100円
昭和 32 年版	〃	昭和 42 年版	1,100円
昭和 33 年版	〃	昭和 43 年版	品切れ
昭和 34 年版	〃	昭和 44 年版	1,500円
昭和 35 年版	550円	昭和 45 年版	1,500円
昭和 36 年版	800円	昭和 46 年版	2,000円
昭和 37 年版	品切れ	昭和 47 年版	2,200円
昭和 38 年版	〃	昭和 48 年版	2,700円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

昭和49年 3月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14
電話 東京(900) 3111 (代表)

UDC 301 : 809.56-087

NDC 3 6 1.3

本書の市販品発行所
東京都新宿区納戸町40 電話(260) 5281
株式会社 秀英出版

LANGUAGE SURVEY IN TURUOKA CITY, YAMAGATA PREF.

— After 20 Years from the Preceding Survey —

Forword

Chapter I Aims and Execution of the Survey

Chapter II Outline of the Preceding Survey

Chapter III Outline of the Longitudinal Research

Chapter IV Outline of the Panel Research

Chapter V Transition of the Social Structure

Chapter VI Results of the Longitudinal Research I

— Individual Groups of Items —

Chapter VII Results of the Longitudinal Research II

— Analysis by Total Marks —

Chapter VIII Results of the Longitudinal Research III

— Analysis by Quantification

of Response Pattern —

Chapter IX Results of the Panel Research

Chapter X Conclusion

Appendix

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
NISIGAOKA, KITA, TOKYO

1974